
理解不能な彼女の純愛

継那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理解不能な彼女の純愛

【Nコード】

N3153I

【作者名】

継那

【あらすじ】

「私達付き合いました」

そんな命令のような言葉から全て始まった。

決定権が全て向こうにあるような、そんな口調で彼女は言った。

「言葉が足りないかしら？ 私達、恋人としてお付き合いしましょう

う

放課後の屋上、この日、この場所は俺の運命の分岐点だったようだ。

それを俺が知るのは後のお話。

冒頭

運命のその日は普通に訪れた。

限りなく普通に今まで通りを装って俺に忍び寄っていた。

何時も通りの時間に起きて、片方しか親がおらず。職業は、と聞かれるとあまり答えたくない職業の父親は家に滅多にいないので、俺は朝御飯を用意し、食べて学校へ向かう。

高校に入学して一年と一ヶ月、家から徒歩30分、自転車15分、そんな距離にある山城高等学校というなんのおもしろみのない、一応、進学校に通う。

何時も通り、本当につまんないくらい何時も通りに自宅、普通の一軒家からチャリを出して何時も通りに学校に向かう。

遅刻もしないし、早くも着かない、そんな可もなく不可もなくな時間に学校に着く。俺の人生を体現してるようで虚しくもなるが、仕方ない。

一年通って飽きてきた、よく見る古い校舎、別に私立のピカピカに興味はないが、変化がないのも寂しいものである。

自分が変わればいいって?.....一年通って分かった事は、俺はここで変わろうと思ってないということかな。

言ってて意味不明、つまり色々言い訳にして逃げて、楽しい世界にしようなんて考えてないってこと、今ある幸せを精一杯幸せと感じるのが賢いと悟った。

……これも言い訳だって気付いてない訳じゃない。きっと俺からは変わらない。世界が変わってくれなきゃ。

今日は何だか暗い事ばかり考えてしまっ。『あの日』だからかな。

当たり障りなく皆に朝の挨拶をしながら自分の席を目指す。

その道中、一人の女子と目が合う。

名前はなんだったかな？

香里美々（こおりみみ）だったかな？

あだ名は『氷の女王』、漫画やゲームですぐに耳にしそうな名前だが、本当にあだ名そのまんまのキャラだ。名前に関しては俺もあまり言えないが、この女は誰とも話をしない、関わらない。冷たい人間、それが周囲の人間が香里に付けたレッテル。

そしてこの女、異常なまでに頭が良い、IQが……250とか300とか、確かめようがないので定かではないが、テストはどの教科もほとんど満点を取る異常者、この勉強において周りがライバルの進学校ではそれが拍車をかけて彼女を孤独にした。

目が合ったのを流して、俺は自分の席に座って一限目の用意を始める。

冒頭 2

その日の授業は何事もなく全部終了した。

運命が動き出すのはほんのちよつと偶然、ほんのちよつとの好奇心から、それが俺を大きく変えた。

きっかけは先生からの呼び出しなんてとても色気のない事だった。

「藤宮、お前最近成績が下がり気味だぞ。課題を出してやるからやっておけ、お前の為になる」

頭部の黒が後退し始め、肌を見せ出し、尚且腹も出ている中年現国教師の言っことを流しながら、夕飯をどうするか考えていた。

「はあ、ありがとうございます」

「お、おお、丁度いい。解けない問題があれば香里に聞くといい。いいか香里？」

中年教師の視線が俺の後ろに移り、振り返ると香里美々、彼女がいた。

つまんなそうに、人を確りと見る事はなく、自分も含めて全てを客観視したような目、本当に冷たい。

「はい、藤宮君さえよければ」

香里の声を聞いたのはこれが初めてだったかもしれない。低かった

し、小さかったが思った他綺麗な声を聞いた。

「藤宮、よかったな。これでお前も安泰だ」

そう言つて高笑いをする中年教師、そう、成績が教師の評価の基本だよな。

成績のあまり良くない俺は、真面目に授業を受けてない劣等生、点数を取っている香里は真面目な優等生、こんな構図なんだろう。

俺だつて授業はちゃんと受けている。なんて主張した所で皆そうだし、結果を出せてない俺の主張は通らないだろう。

幾等か教師と話した後、職員室を後にした。

後は夕飯の献立を考えながらスーパーに寄つて帰宅するだけ、

「藤宮君」

と言つた所で名前を呼ばれた。

階段の前、一階の職員室からそのまま昇降口へ向かう途中で通つた階段の前、そこで香里美々に声を掛けられた。

後で言えば運命の最終分岐点はここだったろう。

「少し話したいことがあります。時間、頂けないかな？」

この後に待ち構える運命なんて、これっぽっちも知らない俺は呑気にスーパ一のタイムサービスについて考えて、

「まあ、少しくらいなら、大丈夫」

重大な選択肢を何も考えず返答していた。

冒頭 3

屋上、話したいことがあると言って香里に付いてきたらこんな場所に来ていた。

人気はなく、夕方の赤に染まる町が綺麗でまるでこれから告白され、青春のページ……なんてくだらないことは考えなかった。

ふじみやとつや
「藤宮藤谷君」

名前を呼ばれた。あの香里美々に名前を呼ばれたのは新鮮だが、フルネームで呼ぶのは是非とも勘弁して頂きたい。

この名前には嫌な思い出しかない。偶然が重なってこんな名前になったのだが、それはまたのお話に。

「面白い名前よね。差し詰めあだ名『藤藤』ね」

ん？なんかおかしい。さっきまでの先生に対しての優等生面でも、周りに対しての氷の女王の面でもない。なんか、嫌味な感じの雰囲気漂い出している。

「まあ、私も小学生の頃は『パンの耳』やら『ロバの耳』なんて呼ばれてたっけね。どうでもいいけど」

心底どうでもいい！

「用件は？　そんなくだらないことを話すんなら帰るぞ？」

そこで香里はニヤリと、本当に嫌な笑いかたをしてみせた。

「くだらないこと？ 貴方にとってなんならくだらないのかしら？ いつも、無気力に日々を過ごしていて楽しい？」

流石に苛々してくる。話すのは初めてでほとんど初対面のような人間に、なぜここまで言われるか。それに今日はあまり何かを考えたくないのに。

「それは俺の勝手だ。そろそろ帰る」

そう言つて踵を返し、屋上の扉へと歩いていく。

「私もね。つまらないの、貴方と私はね、きつと同じ人種、だからとても興味が沸くの、胸がね、高鳴るの、だからね」

一々もったいをつける様に途切れ途切れに言う香里、俺はこれを見無視して行くべきだったか、その話を最後まで聞くべきだったか、答えは分からない。

「私達付き合いましょう」

こんな衝撃的な発言を聞く事になるとは、予想なんて出来るわけなかった。

「はい？ 君、何言ってる？」

振り返つて大真面目な顔してる異常者に対して、惜し気もなく皮肉った。

「あら？　言葉が足りないかしら、私達、恋人としてお付きあいしましょう」

そう言って、彼女は不敵に笑った。

冒頭 4

「意味わかんない。何ほぼ初対面の人間にそんなこと言うわけ？
馬鹿にしてんのか？」

「あら、ようやく感情的になったわね。貴方のそんな所も見たかったのよ。でもね、藤宮君、私は本当に貴方の事が好きよ」

意味わかんない。本気で理解不能、まだ逆なら分かる。この進学校で常に成績トップ、この場では本気で認めたくないが、可愛い綺麗なと言ったら綺麗な美人で通るルックスの香里、それに憧れた俺が告白するならまだしも、何も取り柄なく、勉強も香里に取ってはそこの石ころと変わらない俺が好き？

悪戯以外に思い当たらない。だが、俺にそんなことしてもメリットがない。金があるわけでもなし、顔が良いわけでもない（こう言うと悪くはないとフォローされる程度）俺を好きになる理由がない。

「まあ、急で信じらんないでしょうけど本気、今まで貴方に憧れた………と言つのは語弊があるわね。貴方に興味が出て、調べて、見ていく内に側に居て欲しくなった………かな」

楽しそうに、嬉しそうにそんなことを香里は言った。

「俺は君の事知らない、興味ない。だから――」

「だから興味を持ってほしい。持たなければそれまで、それでいい。だから、お友達から始めましょ」

そこで素直に、嫌味なく笑った。その笑った香里を見て、胸が高鳴ってしまったのは腹立たしい事実だ。

「貴方は私の持っていないものを持っている。憧れ、語弊なんてないわね。私は貴方に憧れも抱いている。自分よりも弱いものに対して手を差しのべる優しさ、無気力無関心の癖して、老人や子供が困っていると助けてしまう貴方」

「それは、別に俺も『助けられた側』だから、力を貸したいだけだ。お人好しとよく言われる」

「ええ、知ってるわ。家族の話くらいはね。でも、そんな所が好きなんだよ」

家族の事、知ってやがるのか。色々思うところはあるが、別段隠していることじゃないし、腹は立たない。

「んで、お人好しを見越して、お友達から？」

「ええ、最初の告白で成功したらしたでよかったけどね」

「本当に意味わかんねえ」

「意味はこれから示していくわ。これからよろしくね、藤谷君」

ゆっくり歩いてきて、握手を求めるように手を差し出された。

俺はきつとこの日はどうかしていた。その手を取って小さく握りかえってしまった。

その時小さくて綺麗な手だな。なんて思う余裕があったのだから。

冒頭 5

「……………はあ」

溜め息。

何度目になるかな。溜め息しか出ない。

あの後、スーパーに寄って夕飯の材料を購入し、夕方を通り過ぎて藍色になった空を眺めながら歩いていた。

「溜め息、何回つくの？　せつかく恋人が出来たと言っのに」

「誰が恋人だ？……………そして誰のせいだ、誰の……………てか、なんでついてくるんだ!？」

買い物袋を男である俺が持つて、それを女性が連れ添って歩く姿は、学生服でなければ……………嫌だ、冗談でもこんなこと思いたくない。

「まるで夫婦のようね、私達」

「言っんじゃねえよ！　俺の心読めんのか!？」

「あら、流石に心は読めないわ。ただ思った事を口にしただけよ」
不味い、さっきからこんな調子でこいつのペースだ。主導権を取りたいわけじゃないが、良いようにされるのは嫌だ。

「本当にどこまでついてくるつもりだ？」

再度尋ねてみる。

香里は口を開いて、『なんてこと言ってるの?』と言いたげな態とらしく驚愕の表情をしている。

「家まではついて来るなよ。今日は…………都合が悪い、なんだつたら送るから、もう暗いし」

「嬉しい発言ではあるけれど、それは却下ね。貴方のお父さんにも会いたいし、今日は御両親の命日なんでしょ?」

「なぜ知ってる……………と言うのは聞かない方が良さそうだな」

「ええ、貴方の事は大体調べがついてるわ」
平然と返答しやがった。

今更ながら思い出した事がある。言い訳をさせてほしい、本当に頭がパンクするほどだったんだ。この香里美々の告白は、だから、だから…………チャリを学校に忘れてきたなんて間抜けをしでかすんだ。

家の前で気付くのもまた間抜けな話だ。

「……………ドジね」

やれやれといった感じで、両手の掌を上に向け態とらしく首を振る香里美々。

「一々動作がムカつく。てか、本当に家までついて来やがったな」

「それは、貴方の反応が可愛いからつい、ね」

頬を赤らめて、嬉しそうにそんな事を言う姿はシチュエーションが違えばもっと喜ばしい筈なのだが、こいつの意図を知っているとそんな風には思えるわけもなかった。

「藤谷！ 帰ったか！ 今日は鍋だぞーっ！」

ドアを開ける前に勢いよくドアが開け放たれ、髪の毛ボサボサで髭もフサフサの山から帰ってきたような野人が現れた。

「今日はボタン鍋だ！ さっさと食うぞ、もう出来上がる」

うん断言する、この男、藤宮宗二（父親）は山から帰ってきた。

冒頭 6

藤宮宗二について少し説明する。

俺の父親であり、保護者、そしてこれはとても言いたくないのだが、職業は冒険家………冗談じゃなく冒険家だ。

詳細は知った事ではないが、家にはほとんど居らず、世界中を飛び回っている。でも、金は毎月振り込まれるし、俺の事は考えてくれている。両親の命日はどんな状況でも必ず帰ってきて、一緒に食事を取る。

両親は俺の子供の頃に交通事故で二人とも亡くなっただけ、あまりその辺は覚えてないのだが、二人の親友だった今の父親は施設に預けられる筈だった俺を引き取ってくれた。

世界中を飛び回って家にいないと言っても、それは最近の事で、中学卒業まで夜には帰ってくる仕事をして俺を育ててくれた。感謝している分、今は自分の好きな事をたくさんやってほしいと俺は思っていたりする。恥ずかしいから面と向かっては絶対に言えないが。

「そうかそうか、藤谷に彼女が出来たか、それにこんな可愛い子とは、流石は俺の息子じゃないか」

そう言って高笑いする父親、

「あら、嬉しいです、可愛いだなんて」

そう言っただけらしく上品に笑うこんちくしょう。

「……………」

一人鍋をつつく俺。

こんな構図が藤宮家の居間では展開されていた。

うん、わかってた。父親が取り込まれるのはわかっていたことさ。

「藤谷さん」

「なんですかこんちくしょう」

「はい、あーん」

まあ、この台詞を見て貰えば今がどんな状況かわわらずもがなだろう。

「……………」

無論俺はそれを無視して食事を続ける訳だが。

「藤谷、折角彼女がそんな嬉しいシチュエーションを作ってくれてる無視とは……………父さん悲しいぞ」

「ええい、泣き真似をするな、いい年こいたおっさんが」

「いや、いいんですお父様、これは藤谷さんのプレイですから無問題です」

そう言つて箸に肉を挟んだまま微笑む変態さん。

「マジで疲れた。俺もう寝るよ」

そう言つて二階にある自分の部屋に向かうことにする。そして背中に声をかけられた。

「藤谷、もうあまり気にする事じゃないぞ。自分達のせいで息子が沈んでたら浮かばれない。お前は優しい、それは俺もお前の両親もわかつてる。それだけはお前もわかつておけ」

「ああ」

振り返る事なく部屋に向かった。

本当に口下手だな、父さんは。

冒頭 7

「いやもう読めてたよ、読めてたけどさ。あえて突っ込みを入れなかったんだよ分かる？俺の痛いくらいな純情分かる？」

「貴方が一体何の話をしてるのかなわからない。あのキャラ疲れるわね、あまりやりたくないものだわ」

「なんでやつぱり部屋までついてくるんだ！？それと大してキャラ変わってねえよ！」

ムツとした顔した香里は俺の横を通り過ぎてベッドに横たわって布団を被った。

「いやいやいやいや、意味わかんない。気分害したのは俺で、若い健全な男子の部屋のベッドでいきなり寝だす君の頭がわからない！」

「うつさい、別に襲っても問題ないわ、合意だし」

布団の中から返答してくる常識不足さん。

泣きそうに、いやむしろもう涙は頬を流れてるかもしれないが、机に備え付けの椅子に座って鞆から今日渡された課題を取り出す。

一応少し位はやっておいた方がいいだろう、小テストが近いし。

もそりと布団から、自称恋人が這い出てくる、補足としてはあくまで自称、これからも自称だ。

「あら、感心ね。無理矢理押し付けられた課題を律儀のその日の夜に始めるなんて」

そう言っただの後ろまで移動してきた。そういや、頭いいんだなこいつ、やることなすこと滅茶苦茶過ぎて忘れてたよそんな設定。

「お前、やっぱり頭いいんだよな。IQ凄いらしいし」

椅子を反転させ、香里と向かいあうような形にする。

「はて、IQなんて測った事ないわよ。それはデマでしょう、後、頭が良いと言ってもただ記憶力に自信があるだけ、そりゃ教科書丸暗記すればテストの問題なんて間違えない」

「後半は十分すげえよ！」

「あら、見直した？ それとも惚れ直した？」

「素直に記憶力は凄いと思うが、惚れてもないものを惚れ直す事はない」

そう言っただの香里は口を尖らせ、こっちへ体を近付けてきた。

女性特有の優しい匂いがあまりに近くに寄ってきたので、少したじろいってしまったが、何とか気合いで持ち直す。

「なんだよ？」

なんか悔しいが声が少し上擦ってしまいが、何とか香里を睨みつけ強がってみる。

「ここ、間違えてる。教科書見ながら間違うなんて器用な事するわね。それとこの程度で挙動がおかしくなるなんて、女性経験なしは大変ね」

「う、うるさいな。お前はあんのかよ?」

「ないわ、男性は貴方にしか生涯興味ないもの」

……………そう言つて微笑んだ姿はちよつと可愛いと思つてしまった。

冒頭 8

あの後出された課題を不本意ではあるが、香里に手伝ってもらい、夜も遅くなったので香里を送る事にした。

あいつの力を借りたのは不本意、送るのは友達だから、それと課題の恩だ。そこんとこ勘違いしないように。

「本当に貴方はツンデレね。こうやって腕を組んで送ってくれるなんて」

「うるさい、腕は組んでないし、流星に夜の一人歩きはさせたくない。なんかあつたら寝覚めが悪い」

「はいはい、ツンデレツンデレ」

一発ぶん殴っていいだろうか？もちろんグーで。

そろそろ梅雨で夏も近いせいか少し暑い。そんなことを思っていると香里が呟いた。

「でも、夢みたい。こうやって貴方と一緒に並んで歩けるなんて」

「そりゃ安い夢だね。俺はまだ疑ってるぞ、これから高価な壺とか売られるんじゃないかと」

「あら、浄水器しか取り扱ってないわ。残念」

「やっぱり目的はそっちかよ!？」

「嘘よ。そうね、私が貴方に恋した理由をちゃんと行ってなかったわね」

「聞いてない、なんか勝手に俺を評価してそれで恋したとか理解不能な事は言ってた」

俺がそう言つと香里は辺りをキョロキョロと見回す。

「少し、寄つてかない？」

そう言つて指差した先は小さな公園だった。

「こう言つてよく本なんかにあるシチュよね？ どっちかが飲み物買つてきて……………」

公園の中のベンチに二人で腰掛けている。香里は楽しそうに手を合わせ合掌のような仕草をしながら笑っている。

よく思い出すとたまにそういう仕草をしていた。「あら」と合掌の仕草は癖かな、なんだか妙な所ばかり見てしまふな、香里美々。

「分かったから、さつさと本題」

「せっかち、少しは会話楽しませなさいよ。友達なんでしょ？」

「友達だから言いたい事を遠慮なく言ってる」

俺がそう言つと香里は「にまあ」と本当に音が出たんじゃないかと言つぐらい気味悪く笑つた。

「……………なんだよ？」

次の香里の発言がいつまで経つてもこないし、気味悪く笑い続けるので、たまらず聞いてみる。

「別に、な〜ん〜でも〜」

「ムカつく、一回で良いから頬をつねっていいか？」

「さつさと話を始めましょうかね」

「無視すんなよ！」

「うつさいわね」

だから、気分を害してんのは俺だ。そう言つとまた回り道してしまうので、俺はここで大人になる。

「さて、いい加減話せよ」

「そうね、聞いてほしいわ。香里美々の初恋の話」

冒頭 9

「貴方、私を助けた事あるの、覚えてる？」

香里美々の初恋話とやらが始まったのだが、こうして並んで座って話してるわけなんだが、話す時は見つめあうような形になるわけだ、意外に恥ずかしいな。

やっぱり香里は美人の部類に入るといって、認めたくない事実を再確認してしまうし、長い綺麗な髪が街灯に反射して綺麗だなど。二回綺麗だと言ったが、髪だからな、香里は綺麗だが………そう、外見はよくても内面がよくない、よって俺は香里に別になんも思わない、うん、そうだ。

「藤谷、聞いてるの？」

「えっ？ あ、ああ、助けた記憶がない。あと、別に俺は趣味人助けとかじゃないぞ」

「そう言っで、困ってる人がいたら助けちゃう。貴方のそんな所に憧れてます。それと、高校入学して一ヶ月、五月十六日の放課後、体調不良で階段から落ちそうになった私を受け止めて、十五段下まで私をかばって抱き合う形で落ちていったの覚えてない？」

長いっ！

つか、記憶力の良いのは本当らしいな、細かすぎる。

「まあ、言われてみればそんなこともあったな。それってお前だっ

たっけ？」

「ええ、間違いなく、本当に私は当たり前で助けられたのね。お礼言ったら走って消えちゃうし。まあ、それが理由の一つ、それで貴方に深く興味が出て色々調べたの、それで男性に免疫の薄い私はメロメロになっちゃったのね、きつと」

きつとかよっ！

さつきから、話が遠回りしそうだから突っ込みを心の中に閉まってるのだが、そろそろ溢れそうだ。

「そりゃまた。難儀な事で」

「責任取って欲しいわ。これだけ私の心にスペースを取ったのだから、私の貴方への欲求を貴方は発散しなくてはならない！」

急に立ち上がったかと思ったら、人指し指で名の通りに、尚且逆転の弁護士みたいに俺を指さした。

「お前の欲求とやらが何によって発散されるか分からんが、友達にならなってるんだから良いだろ？ 普通はあんな支離滅裂に告白されたらダッシュで逃げるぞ」

「……………色々言いたい事はあるけど今はそれでよしとするわ。それがきっかけで私の初恋は始まり、今日のあの職員室でのきっかけで貴方に接触するのを我慢出来なくなつたと覚えておいて」

「分かったよ。あくまで友達だからな、忘れるな。そら、帰るぞ」

「だから、今はそれでよしなの。今はね」

そう言って香里が不敵に笑うのを俺は見なかった事にした。

一話 1

「おはよう藤谷、朝が来たわ。貴方と私の新しい朝が！ そう、二人のラブラブロマンスが始ま……………」

「らねえよ！」

…………… 現在状況確認、おーけー、整理、おっけえ、報告。

朝、家、部屋、布団、そして今のは夢だ。

状況整理をした後に精神を落ち着かせ、とりあえず額の汗を腕で拭いた。

「あら、おはよう藤谷」

「…………… 人が『ああ、悪夢を見て飛び起きると汗は大量にかいてるし、息もあがった状態で起きるんだ』って事を確認してる時になんで貴様はここにいる？」

そう、起きたらなんと制服姿、別に制服姿以外は見たことないが、香里美々その人がいた。

「うーん」

と態とらしく腕を組んで考える仕草を取る。

「簡単に説明すると、朝起きたら四時で、居てもたってもいられず藤谷に会いたい！」

って気持ちが抑えきれなくなつて、気付いたらスキップしながら藤谷の家の前まで来ていて、今か今かと藤谷が出てくるのを待ってたら突然黒猫が前を横切つて『うわっ、なんか今日は悪いことあるのかな？』

なんて考えてたらカラスが……」

「なげえよ！ 難しいよ！ お前の気持ちの描写いらねえよ！ その年齢でスキップすんなよ！ どうせ家の前にいたら俺の父親が出てきて中に入れたんだろ！？」

悪夢のせいで荒くなつてた息を整えたのだが、また整えるはめになるとは、しかも同じ理由。

「正解、でも、私としてはこれが手に入ったのが凄く大きいかな」

香里は何か金属片らしきものを指で摘んでそれを揺らしている。

その金属片にとっても見覚えがある。折角止まってきた汗がまた出てきた、言うまでもなく同じ理由だ。

「まさか……いや、それが何かは解つたが、お前、それ渡された時に何言われた？」

「簡単な推理よね。それに貴方はお父様をよく理解してるわ、うん素晴らしい。そう、私ね、お父様に『これから当分家を空けるから藤谷の事をよろしくたのむよ』って言われちゃった。きゃは」

両手を頬に当てて『はずかし〜い〜』とか言ってる人がいるんだが、俺は目の前が真っ暗になっていくためよく見えなくなっていた。

「まあ、私も独り暮らしだし、食事は二人で取った方が手っ取り早いし、楽だし良いことづくめ。部屋も一つ空いてるから使っているって言われた」

あつ、なんか更に危ないこと言ってる気がする。

でも、もう何も見えないし見たくないし、知ったこっちゃないや、あははは。

一話 2

「もう、藤谷が二度寝なんかするからギリギリじゃない」

本当にいい加減にしてほしいくらい態とらしくプリプリと怒る香里、ふざけた擬音つけても美人がやると絵になるから嫌だ。

あれは夢だと思い込んだ俺は、そのまま自分を自分の都合の良いように気絶させた。言うまでもなく現実で並んで登校という形になっているのが、なんとも嘆かわしいことが。

香里の顔をもう一度ちゃんと見てみる。横顔でもやはり整っている、俺の主観も入るがやはり美形だよな。美形は何やつても、何を着ても得だな。なんて思ってみた。

「でも、藤谷は顔は良いと思うよ？ クラスの女子からの人気も高いし、ツンデレ属性、クラスお人好しだし」

意味の分からない分類をされたがそれは無視しよう。

なぜ学校に俺はチャリを忘れてしまったのか、昨日の俺を殴りつけて職員室に行かないようにしたい。そんな事ばかりがカウボーイの投げ縄の様に頭の上をグルグル回っている。

「あら、なんか藤谷がよくないこと考えてる。それにさっきから黙りっぱなし」

頬を膨らませている女子生徒その一さん。

どうやらこの人は予測で俺の心を読めるようだ。ああ、泣きそうだが、黙ってるのに会話が成立するのだから。

「私、その……………トイレ行くから」

そう言い残して上履きに履き替えて、スタスタと歩き去ってしまった。

俺達の教室は二階なわけで、態々一階のトイレになぜ向かうのか？とか考えていたが、考えても仕方ないので教室に向かうことにする。

「なあなあ、今日お前が氷の女王と登校したって聞いたが本当か？」

ドアを開けたら黒板消しのトラップの様にクラスメイトA（上林森^{かみはやしも}次^{りっく}あだ名「木だらけ」が生えてきた。

「鞆くらい置かせろ」

と言って自分の席に向かう。後ろからついてくる男は『なあなあ、無視すんなよ』とピーチクパーチク騒いでいる。

席に座って、机の横に鞆をかけると周りの雰囲気がおかしいことに気付いた。周囲の人間がこちらに意識を向けている。

予測するにあの氷の女王は親しい人間をつくらなかった、それに学校の中ではそれなりに有名な人だ。その親しい人間が気になるのだから、そして一年からの付き合いで俺と中の良い木だらけに白羽の矢

がたつたと。

「なあ、フジフジいどうなんだよ？」

「ん？ ああ、俺は」

そう言おうとして、低い透き通る氷の声に遮られた。

一話3

「昨日は先生からのお仕事手伝ってもらって悪いわね。お礼が言いたいからって態々君の通学路で待ち伏せるなんて真似してごめんなさい。改めてありがとう」

やけに説明的なセリフ、俺の思考は少しずつ違う方向へシフトしていった。

この人は誰だ？今背中を向けて自分の席に戻ろうとしている、あの綺麗な長い髪の後ろ姿は誰だ？

違っていた。仕草も、声も、表情も、雰囲気も全ておかしい。

「なあんだ！いつものフジフジの人助け癖か」

声を態と張り上げる上林、それを受けて周りの緊張が緩和していく。つまり報告をしたってことだろう。

俺の読みは正しかったらしい、今の香里の発言と上林の発言で歯車が噛み合ったのだろう。全て昨日と一緒元通りと言うことだろう。

腹が立った。

とてもとても腹が立った。

天邪鬼なわけではないが、このまま香里を放っておけない、いや、放っておいてやらない。

いつもの意地悪な言動の仕返しだ。そうこれは受けた分をやり返すだけ、決して好意からではない、好意があつたとしてもそれは友人への好意だ。

気付いたら香里へと歩を進めているこの体にはなんの罪もない。罪は香里美々、それにしかない。周りの連中なんて知ったことか、香里に歩いていく俺にまた視線が集まる。そんなことも知ったことか。

「おい美々、今日は起こしてくれてありがとう。今日の晩飯はお前の当番としよう腕が見たい。明日は俺が作る、だから帰りは買い物だ。いいな？」

言ってみると意外とスラスラ言えるものだ。

周囲の空気が氷りつくのを感じる。香里なんて目を見開いて酷く間拔けな表情、隣のクラスだろうが、遠くの話声がよく聞こえるくらい教室が静まりかえっている。

「な、な、藤谷……………」

「異論は認めん。料理の腕に自信がないのなら手伝うが？」

なるほど、怒りすぎると逆に冷静になる。実践して解った、意外と本当の事らしい。

「……………なんで？」

周りの空気がどうやら溶けたらしい、ざわざわと会話を始めた。端端に俺達の名前が聞こえる辺り予想は簡単だ。

「俺とお前は友達だ。友達にケンカもしてないのに他人行儀にされる趣味はない」

「お、お弁当、作って……きたからお昼に食べて……それで腕を見て」

うつ向きながら顔を真つ赤にさせている香里。これが見れただけ仕返しは十分かと思われたが、俺の心は満足しないらしい。

「なら、昼は一緒だな」

「ひゃっ……はい……」

一話 4

そんなこんなで昼休み。

俺と香里は学食に来ていた。教室じゃ香里が嫌だと言うので、弁当を食べるといって態々学食までやってきた。

いつも通りの香里ならそんな我儘聞いてやらないが、朝のあの一件の後からどうもしおらしいので調子が狂う。

「……………ここで」

まだしおらしいのが継続してる香里さん、入口から入って右手の人があまり寄り付かない席を取った。

券売機は遠いし、カウンターも遠いし、日当たりも微妙に悪い。そりゃ夏場でもない限り人なんか寄り付かない。

「いつまでそのキャラのつもりだ？ いい加減気色悪い」

俺はその隣へ腰掛ける。

「結構貴方は言いたい放題言うわね」

「いつものお返しだ」

……………昨日会ったばかりな筈なのに、こいつのキャラが濃すぎて往年の付き合いのようになってる。『いつもの』って用法はおかしい筈なんだがな。まあ、仕方ない、友達である以上は無理に突っぱ

ねることもよくないし。

「私はマゾだからそこまで問題はないんだけどね……………」

そう言っつていつの間にやら購入したらしい、イチゴ牛乳のパックをストローで飲みだした。

「俺には飲み物ないのか？」

「私は気が利く彼女ですから」

カンと金属音ともに円柱型の何かが差し出された。どうやら缶のようだ。ラベルを見ると何だが……………

「おしるこじゃないか！！ しかも温かいの、つか、何がマゾだよ。立派なサドだよ貴様は！」

大声を出してしまつて周囲の人間の視線がこっちに集まる。謝りながら、小さくなった。

「分かつたわ、ならどうぞ…………… ちょっと恥ずかしいけど」

次は自分の飲みかけのイチゴ牛乳のパックを差し出してきた。『ちよつと恥ずかしいけど』の部分はご丁寧に頬を染めて上目使いで。

「茶でも買ってくる」

「嘘よ、はい、緑茶で良いわよね？」

鞆の中からスツとコンビ二何かでよく見掛ける緑茶のペットボトル

が出てくる。それに続いて弁当が二つと箸が二本出てくる。

「……………本当に今までの問答はなんだったんだ？」

「……………デモンストレーション」

「なんのだなんの？」

「あら、時間が大分経ってしまったわね。さあ、食べてくれるかしら」

誰のせいだ！？と叫びたかったが、これを言ってしまうとやっぱり時間が無駄に経過するので、俺は更に大人になる。

「頂きます」

俺は弁当を開いて手をあわせた。

「大人になったわね」

一話 5

香里の弁当はとてもシンプルだった。特に捻りもなく、よく聞くおかずの代表、卵焼きに、ミートボール、焼き鮭、ご飯にはふりかけ、でも、これじゃあ料理の腕は見きれない。そこはやはり夜を楽しみにさせてもらおう。

「ね、ねえ藤谷、そういえば、さ」

「なんだ？ 歯切れが悪いな」

いつもはいらんことやいらんことをズバズバと言う癖に、今は何かを遠慮してるようだ。

「あの、さ、さっきさ、名前で……………」

「あ、ああ、そっぴや名前で呼んだな。あれは周りの人間に対してのアピールみたいなものだ。気にするな」

「気にしない気にしない、気にしないからさ、その、やっぱり名前で呼んで欲しいわね」

いつもの俺を小馬鹿にする態度はどこへやら、なんだかモジモジして、小動物のようで少し可愛いと思ってしまったことは内緒だ。

「……………これからの態度次第だな。先ずは今日の晩飯だ。弁当だけじゃ分らんからな、晩飯によっては考えてやる」

「約束よ？」

「ああ」

香里は俺の見えないところで小さくガッツポーズしていた。まあ、俺に見えていたのだが。

昼休みも後少し、香里はお手洗いへ、俺は先に教室に戻った。

「お、おいフジフジ！ お前氷の女王とどという関係なんだよ？」

教室に入るなり詰め寄ってきて、俺の両肩を押さえ付けてきたのは木だらけだ。こいつなりに俺が浮かないように心配してくれているのだろう。

「だから、友達だと言っている。たしかにあいつは変わっているが、悪いやつじゃない。皆もあまり誤解してやらないでほしい」

「フジフジ考え直せって、あいつは普通じゃない、もっと普通の女の子をだな」

「いい加減にしておけ、木だらけ」

「フジフジ顔は悪くないし、親切で評判なんだからさ、モテてんだよ？ 勿体ねーって、あんなよく分かんないと付き合ってちゃ」

我慢の限界だ。簡単に言っちゃえば、プチンと何かが切れた。後は

感情に身を任せる。

俺は木だらけの頭を手で鷲掴みにする。アイアンクローってやつだ。体はそれなりに鍛えてるし、握力には結構自信ある。

「いただだだだだだっ！！！！」

「やめろって藤宮！」

男子の何人かが俺を押さえ付けた。木だらけを無理矢理引き剥がされ、身動きが取れなくなった。

それにタイミングも悪かった様だ。香里と次の時間の生活指導もやっている地理の教師が一緒に入ってきてしまった。

一話 6

俺は生徒指導室に来ていた。

品行方正な人間ばかりが集う進学校だ。友達同士のじゃれあいとして片付けてくれればとも思ったが、上手くはいかないもんだ。

部屋の真ん中で正座させられて、例の地理教師の説教を受けている。

態々自習にしてまで説教とはご苦労なこった。

「藤宮！ お前は分かっているのか？ 暴力はな、下等な人間が取る行為だ。お前はそんな下等な人間だったのか？」

「いえ、感情的に成過ぎました。すみません」

「じゃあ、放課後までここにいて、これを仕上げる。先生は後でまた来る」

そう言つて地理教師は退室した。残されたのは、俺と反省文の用紙と鉛筆と消ゴム、それと虚しさだった。

間違つた事をしたとは思わない。しかし、正解ではないだろう。でも、皆は香里を誤解している。

いや、俺の行為のせいで余計に皆との溝が深まつたな。俺は香里も皆の輪に入つてほしいのか？ うん、そうだな、あいつは悪い人間じゃない、皆もそれが分かればきっと、

「とりあえず反省文仕上げなきゃな」

ただでさえ成績よくなかったのに、更に悪くなりそうだな。

そんな時、一つしかない生徒指導室の扉が開いた。

「藤宮藤谷、やってるかな？」

凜とした空気、長くもなく短くもなく肩で整えられた髪の毛、背はあまり高くないが雰囲気と眼鏡が少し大人びて見える女性が入ってくる。女性と言ってもこの学校の一生徒なのだが。

「生徒会長？」

そう、生徒会長である。三年生で、今は……授業中の筈だが。

「ううん、選択してなくてね。今日はもう帰りなんだよ」

「あの、俺は口に出してましたか？」

「表情見れば解ります。なんたって生徒会長ですからね」

特に隠す事もないのだが、木だらけ曰く『人助け癖』というやつで、よく生徒会の仕事を手伝っていたりする。頼まれると断れない性分のためよく良いように使われる。

「それで？ 会長は何しに？ 笑いにですか？」

「ううん、褒めてやりにな。女の子の為に悪名を被ったみたいだからね。でも、詰めが甘すぎる。ちゃんと作戦立てなきゃ」

会長はそう言ってピッと右手の人指し指を立てた。これは会長の癖だ。何かを教えたり、お願いしたり、本音で喋るときは必ずやる癖だ。

「ええ、失敗したと思います。無茶もしました。でも、あのままが良かったとは思えません」

「うん、ボクもそう思う。君は優しいからね」

会長は優しく笑った。

一話 7

「俺はどうすれば良かったんでしょうか」

「ん、誰にも聞いていないように聞いてほしいって感じの質問だね。とりあえず、椅子に座ろうか、ボクも座りたいし」

生徒指導室の中には長い大きな机一つと椅子が、生徒用と教師用の二つ、後は黒板があるだけの小さな部屋。

「いいんですか？ 正座してなくて？」

「ん？ うん、いくらなんでも正座なんて古いよ。それにそれをやらせ過ぎても学校側には問題になっちゃうしね」

優しく微笑んだ会長は人指し指を立てた。

「はい、じゃあ」

二人で机を挟んで対面するように座った。外からは体育の声だろうか、掛け声が聞こえてくる。周りの教室からも教師の声しか聞こえてこない。そんな中会長はゆっくりと口を開いた。

「藤宮、君はどうしたい？ その女の子にどうなってほしい？」

一つだって年上は年上か、諭すように、なだめるように、笑顔で相談に乗ってくれる。思わず寄りかかってしまいたくなるが、それは俺の力で香里の事を解決出来ない気がする。

「俺は、子供っぽいかもしれませんが、皆が楽しくワイワイ笑って暮らしてほしいんです。それが何より幸せだって、俺はそれを家族から学んだから」

「君が言つと説得力あるね。うん、ボクもね、君のその持論を参考に生徒会長なんて大層な事をやらせてもらってる。君を尊敬してるんだよ」

反論しようとしたが、会長は真剣な目で人指し指を立てていた。本心から言ってくれているらしい。頭の中がグチャグチャだった、何も上手いことが考え付かない。

友達に何もしてやれない。やっぱり、俺を救ってくれた父親のようなヒーローには俺はなれないのだろうか。

「君は難しく考えすぎだよ。君とその女の子は友達になったんだろう？　なら、君が知っているその子の良いところを周りに教えてやればいい。後は簡単さ」

会長の笑顔を見てると本当にそうなんじゃないかと思えてくるから不思議だ。包容力、会長の包容力に甘えきつてしまいそうになっている俺をなんとか振り切り、思考を張り巡らせる。

まだ付き合いが浅くて香里の事はよく分からないけど、何かきつかけがあれば、きっと皆と仲良くやれるはずだ。確証はないが、自信はある。

「何か浮かんだかな？　ボクも君には笑っていてほしいからね。応援するよ」

「会長ありがとうございます！ 上手くいったらお礼しますから」
会長の手を取り、優しく握った。やっぱり女性だ、とても華奢だった。

一話 7・5

後一つ、後一つで今日の授業は全て終了する。

本当にさっきは驚いた。教室に戻ってみれば何やら騒然とした雰囲気、藤谷が先生に押さえ付けられて連れて行かれた時は、身体中の力が抜けて倒れてしまいそうだった。

生徒指導室、少しだけ、少しだけ見に行こう。次の授業が始まるまでの十分間、姿を見て戻って来よう。

そう決めた美々は教室から出て一つ階を降りる。たしかこの階に生徒指導室はある筈だ。

「うん、香里……………美々さんだね？」

目の前、一人の女子生徒が立っていた。休憩中の生徒のお喋りがとても遠くに感じられる。そんな喧騒の一つ下の廊下で私達は対峙していた。

「ボクの事、知ってるよね？」

眼鏡の奥の瞳がゆっくり動くのが分かる。美々を値踏みするような視線、実際値踏みされているのだろう。藤谷の事を調べる上で何度も出てくる女子生徒、この学校で藤谷と最も接点を持つのはこの生徒会長だろう。

「ええ、何の用かも大体検討がつきます」

「そつか、なら、話は早いね。受け取ってくれるかな？　ボクの宣戦布告」

生徒会長は優しく微笑んで、右手の人差し指を立てた。

その優しい微笑みの下のドロドロとした感情を隠せていなかった。

「先に宣戦布告したのは私です」

そう、先に宣戦布告したのは私、彼女が藤宮藤谷に特別な感情を持っているのは知っている。むしろ気付いてないのは本人の藤谷くらいなものだろう。あれだけ用事を生徒会役員でもない一生徒に押し付ける会長の寄行は言うまでもない、好意からだ。

「うふふ、そうだね。ボクも驚いたよ、あの鈍感にどうやって近付くかと思えばストレートだもん。でも、鈍感には一番効果的だったかもね、ボクも失敗したよ」

会長はそう言って自嘲気味に笑った。

どうやら会長も私の事に気付いていたようだ。隠れていたわけではないが、やはり藤谷の事を見ていたから私は視界に入ったのだろう。

「なら、私達はライバルというわけでいいんですか？」

「うん、そう思ってくれて差し支えないよ。ボクも彼を渡したくないからね。またね」

流石は眼鏡美人と称されるだけはある。人懐っこく笑う姿は同性の私も少し可愛いと思ってしまった。

チャイムと同時に私達は振り返り、私は教室へと戻っていった。

「藤谷君、彼の当たり前に救われて、ボク達は彼に惹かれてしまった。罪だなあ、彼も」

『藤谷君』一人の時だけ使う呼び方、いつか本当に呼んでみたいな。

一話 8

やっと放課後。

反省文もちゃんと仕上げ、しっかり上林には謝り、藤谷は解放された。

いつもより帰りが遅くなってしまった。歩くペースを少し上げてスパーへ向かう。

校門で見知った顔に出会した。寂しそうに背中を校門に預けて下を向いている。

心配もかけたみたいだし、多分俺の事を待ってるんだろうから声をかけてやることにする。

「香里さんや、何方をお待ちですか？」

「貴方よ」

即答ですか。

「なんで怒ってる表情なんだ？」

「どこかの誰かさんが思ったよりもアホで馬鹿で驚いてるのよ」

まあ多分俺の事を言ってるんだろうが、全然驚いてる顔じゃない。

「私の事なんていいじゃない。昨日今日押し付けられるように友達

になった人間なんて、なんで……そんな人間の為に……」

泣いていた。感情がぶつけられる。一直線に香里美々の感情がぶつけられる。

だから、俺はこれを受け止めて答えを返してやらなきゃいけない。

「本当に計ったようにちょうどいい所に来たな木だらけよ」

俺達が居るのは校門、帰りの学生が通るのは必然なわけで、それでも恐ろしいくらいタイミングよく上林達、俺のクラスの面々が歩いてきた。

「フジフジ……」

先頭を歩いていた木だらけはばつが悪そうに視線をそらした。まださっきの一件が尾を引いてるようだ。

「また謝るが、さっきは悪かったよ上林。でもさ、よく知らないで香里の事を悪く言うのはよくない。まあ、さっきのお詫びも含め俺が奢るから飯でも食っていかないか？ もちろん皆で」

上林含め六人くらいならなんとかなるだろう。もちろん金銭面で。

上林以外の周りの人間が少し盛り上がる。上林もそれに対して小さく笑って返した。

「そうだな……俺も悪かったよフジフジ。今日は俺とフジフジが出すから遊んで帰ろう。香里さんも是非に……ってなんで泣いてんの？」

「まさか、藤宮君が泣かしたの!？」

とグループの女子、

「う、ううん、藤宮君じゃなくて私が勝手に……………」

と涙を拭いながら香里、

「フジフジは鈍感だからねえ。の割に綺麗どころにモテんだよね」

そう上林が言うと皆笑いだした。

今日は手痛い出費だったが、香里の事を考えると安いもんだろう。

ただきつかけが必要だったんだあいつには。

二話 1

濃密な時間を過ごしていたと自分でも思う。夏も着実に近付いているのだが、それでもまだ梅雨に入っただけ。

「こら藤宮藤谷、ボーツとしてるのは感心しないな。ボクのお願ひ、聞いてくれたんじゃないのかな？」

「あつ、すいません。ちよつと耽つちやつて」

今日は生徒会長に頼まれて、週末にある体育祭の実行委員の手伝いをしている。

力作業位なら文字通り力になれると思って、生徒会長の頼みを聞く事にした。

「はあ、人手が足りないから助かつてるのに、やる気がないんなら止めてもらっちゃおうかなあ」

「いや、すいません本当に。会長にはお礼をしようと思ってましたし、ちゃんとやりますよ」

何故二人きりで委員会を開いてるのかよく分からないのだが、『人手がないから』でさっき片づけられてしまったし。

なんか知らんが会長が頬を膨らましてるし、怒ってるんだよね？なんか可愛くてそういう仕草に見えてきた。

「お礼の為だつて言うんならもういいよ。準備の時に少し人手が借

りただけなんだし」

「…………じゃあ、なんで態々お昼休みに生徒会室に集まったんです？」

あつ、今度は仕草じゃなくて本当に怒ってる。ってそれはまずいな。

「もう出ていけ！ 馬鹿！」

顔を真っ赤にした会長にそのまま押しきられて、生徒会室をつまみ出されてしまった。

振り返ると勢いよく扉が閉まる。本当に怒ってるし、なんかしたか俺？

「まあ、昼食に戻るか」

「馬鹿………… 馬鹿馬鹿、ボクの馬鹿」

ボクは自分でも気付かないうちに自分の鞆の端を握りしめていた。中には二つ、いつも使ってる弁当箱と少し大きめの弁当箱が入っていた。

「あら、会長の話はもういいの？」

教室に戻ると冷やかなお言葉を頂いた。またなんでこいつも怒ってるのだろうか。厄日だよ、今日は。

香里の周りには女子が二人と、後ついでに上林が座っていた。席をくつつけて、皆でお弁当をひろげている。俺もそのくつつけられた席の一つに座り、香里からいつものように弁当を受け取る。

最近は香里に弁当を作って貰うのと、このメンバーで食事するのはいつもの事になっていた。

少しずつ香里も周りと馴染んでいってるようでとてもいい兆候だった。まさかこんな簡単に上手くいくとは、まあ、香里の人間性も大きく影響してるのだが。

二話 2

「藤宮君、また香里さんのお弁当なの？ 関白な旦那さんを持つと大変だね」

そんな不穏な事を仰りやがったのはいつものメンバーの一人、名をくらしな倉科遥子ようこと言う。

「みーみんはフジちゃんのそんな所も好きなんだよね？」

意味の分からないあだ名を言いながら溜め息混じりに言ったのは、しのやまれん篠山蓮れんこの娘がつけるニツクネームは特異で『聞く分には面白いが、つけられるとちょっと』ってな感じの評価を受けている。

あくまで補足だが、みーみんと言うのは美々からきているらしい。俺は言われるまで何を言っただんなのか解らなかった。

「あら、藤谷は家だと優しいわ。料理は一人ではやらせてくれないしね。朝は弱いからお弁当と朝御飯だけは私に頼りつきりだけど」

女子二人が「うわぁ」と漏らしているなか、上林は通称木だけは頷きながら俺の肩を二度パンパンと叩いた。

「なんだよ？ 良いだろ別に友達なんだから」

「藤宮君、いい加減友達じゃ通らないよ。これ以上やったら君は只の悪い人だ」

恐ろしくなるくらい真面目な顔で倉科に注意された。篠山は両手を

広げてやれやれと首を振っている。最近俺の価値観全否定だ。

食後の体育はあまり推奨出来ないと思う。食べた後に運動するのは体にもよくない。だからと言って昼寝の授業を作れなんてどこかの漫画のような事は言わないが。

しかも午後の残り時間は、学年での体育祭予行練習となっていた。今は女子の百メートル走、予行と言ってもこの辺はちゃんと走るらしい。この後には男子の二百メートル走が控えてる位だからな。

不意にバンバンと音が出るくらい肩を叩かれた。

「いた、痛いぞ木だらけ、なんだよ？」

「お、おままま、あれ、あれを見ろ！」

そう言つて上林が指差した先は……………

「何って香里が走ってるだけじゃないか……………」

なんだってんだよそれが。

「お前の目は節穴きやー！！」

肩を思いきり掴まれて、裏声を張り上げられてしまった。

「おみゃーにはあの乳が、あの乳が見えないのか!？」

そう言われてからもう一度香里を試みる。

香里が一步踏む事に連動する半球体、ジャージを脱いで体操服になっ
ている香里のそれは……………俺は気恥ずかしくなって目を背けた。

「凄いものを持っていると思ってたが、まさかあれほどは……………」

そう言っ
て拳を握り締めている上林、となぜかその他多数、涙まで流して
る奴もいる

二話 3

藤谷だって健全な男子、興味がないわけじゃない。だが、香里に対して何か弱味を持つのはとても気が引けた。

「まさかあれをフジフジが好きにしていると思うと………うっ！」

なんで泣き出してるんだよ。好きにしてねえよ。と突っ込みたかったが、男子の番が来てしまった為流れた。

「みーみんセクハラだねそれ」

それと言って私の胸を指差す篠山、

「うん、それはやりすぎだよ、同い年とは思えない」

と倉科も続く。

「あら、そうかな。倉科さんだって結構スタイル良いと思うけど」

「いやいや、少し嫌味に聞こえるよそれ。と言うか、それで落ちない藤宮君って何者？ まさか………」

「いえそれはない。藤谷の部屋で確認したけど、結構普通よ、藤谷の趣味は」

すかさずフォローをいれておく。実際私も同じ心配をして部屋をあさってみたが、結構普通な方の趣味だと思う。

「んじゃフジちゃんはなんでみーみんなに手を出さないんだろ？ 今度体操服で迫ってみたら？」

「そうね、少し検討する必要があるわね」

「うわっ！」

なんか今もの凄く寒気がしたぞ。

予行と言っただけあってか、座ってるだけで思った他、体感時間は早かった。

これまた最近いつも通りなのだが、香里とスーパーに寄って夕飯の買い物をして帰路についていた。

「藤谷？ 会長とは最近どうなの？」

「その質問、何回か受けてるが、何もないぞ。体育祭の力仕事を頼

まれてるくらいだし」

一体何が聞きたいんだこいつは？

俺と会長、考えてみればいつからの付き合いだったかな。気付いたら色々頼まれるようになったな。今月に入ってから呼び出し多いし。

まあ、任期ももうすぐ終りだし、張り切っているのだろう。

うちの学校は特殊で、年度の終りに役員を引き継ぐのではなく、夏休み前に役員選挙がある。普通ではないよな、これは、他をあまり体験してないから知らないが。

「そう、なら良かった……………」

香里は少し視線を外す、無意識なのだろうが最近ここらに来ると決まって一点に目が行っている。

香里の視線を追うと先には女の子にも人気の雑貨屋、その店頭にはエプロンが飾ってあった。

毎度ここを通る度にチラリと香里はエプロンを見ていた。可愛らしい女の子用のフリルの付いた水色のエプロン。

最近世話になってばかりだし、あれぐらいならいいかもな。

そんなことを思いながら夕暮れを見上げた。

二話 4

「おはよう藤谷」

カーテンを開かれ、入ってくる燦々とした朝の日光を浴びる。目がまだちゃんと開かないが、きっと目の前にいるだろう香里美々は満面の笑みで見下ろしてるだろう。

「朝御飯出来てるから、後、着替はここに置いておくからね」

藤谷はそこでもうやく半身起こす。階段を降りていく音だけが聞こえてくる。頭が少しずつ働き始め、頭を数回掻くころにはしっかり起動する。

「……………もうなんか奥さんと言うよりお母さん……………」

ガタッ！

扉が勢いよく開かれる。そこから髪を一本にまとめて、ポニーテールというやつか、制服姿の香里美々とエンカウントした。

「誰？ 誰がいい奥さんだって？」

態とらしく、本当に態とらしくキョロキョロと辺りを見回し、ニコニコと言うかももう既にニヤニヤと笑っている人になっていた。

普通に、自然に笑えば可愛いのだが。

と言うのは調子に乗るので絶対に言わず。

「ええい、都合のいい部分だけ聞くな。それと……………日曜位ゆつくり寝させてくださいっ!!」

そのままベッドにリターンした。

香里美々の押し掛けが始まってから、それは日曜も続き、毎回毎日何故か制服なのはもう突っ込む気にもなれない。

「朝御飯冷める、朝からお味噌汁作る献身的な女子高生なんていないよ、一家に一人どう？」

「可愛く言っな！ それとついでに言ってる事が長い！」

突っ込んでしまった以上脳が完璧に覚醒してしまった。これもやつの遊び半分策略半分なんだろうな、ってタチワルイ……………

観念して朝御飯の席についた。あじのひらきに宣言通り味噌汁、具もしっかりしてがる。それと藤谷の好きな甘い卵焼き、ちよつと前にこれが好きだと言ったら毎回出てくるようになった。

しかも藤谷が口に入れる瞬間を観察していて、少しずつ好みにあってきている。むしろ、好みの水準を高くしてくれたぐらい良くできている。まあ、面と向かつては言わないが。

「休日くらい俺を忘れて遊んでこいよ。誘われるだろ倉科とか篠山とかに」

「ええ、誘われるわね。でも、手のかかる彼氏がと言つと『ああ、なら仕方ない』と返ってくるわ」

「……………もういいよ」

黙って箸を進める事にした。でも本当に、毎朝手の込んだ物を作る。少し位はやっぱり感謝しないとな。

「そう思つなら、お出掛けしましょう」

「もう俺には心の中というのはないんだな」

二話 5

「ね、ね、ってばあ」

ゆさゆさと揺らされる。朝食後ベッドにリターンした藤谷は、ポニテールの追撃を受けていた。

「疲れた眠い、休日くらい少し寝かせろ」

鉄の意思で寝ることにした藤谷は揺るがない。目を開かずともわかる、香里は態とらしく頬を膨らましてるだろう。

「そっちがその気なら」

その不機嫌そうな言葉を最後に香里が俺を起こそうとすることはなかった。

代わりに布団に潜り込んできた。いや、ここで慌てては思う壺だろう。だからここは冷静に、クールに無視だ。

「……………んふふ」

仰向けで寝ていた俺の肩を枕にして、覆い被さるように体重を預けてくる。思った三倍くらい軽い、女の子体重をこんな形で感じるなんて早々ないだろう。なんて余裕も束の間。

俺の上で香里が小さく、揺れるように動き出した。

「……………ふふ」

ちょうど藤谷の胸の上、柔らかくて、質量のある物体が香里の任意で形を変えている。

五秒後、

「……………ぐすん」

俺は部屋の片隅で泣いていた。体育座りをしながら自分の弱さにうちひしがれ泣いていた。

「やっぱり藤谷には有効ね」

「き、貴様……………」

「本棚の本を全部取るとあら不思議、でっかい胸の女の子が出てきます」

瞬間、この部屋の空気が完璧に氷ついた。正確には部屋ではなく藤谷だが。香里美々の呟き、いや、藤谷に対する冷凍ビームのような言葉の力によって藤谷は動けなかった。

「再確認してみようかしら？」

口で半月を作る氷の女王様、冷や汗が止まらない藤宮藤谷、パワーバランスは決した。

「お出掛けですね。どこへなりとも行きましょうとも！」

なかばヤケになりながらも、いくつかあるブツの引っ越しを心に決

めた藤宮藤谷、高校二年の六月の出来事だった。

「いえい」

対して勝利のブイサインがよく似合う香里さんであった。

「そして」

なぜ外で待ち合わせるんだ？一緒に出ればいいだろ、準備があると言って先に出ていきやが……って。

藤宮藤谷は止まった。

家から最寄りの駅前改札付近である一点を見つめ凍てついた。

「ごめんなさい、待たせてしまったわね」

そう言つて柔らかく表情を崩す女性、藤谷は水飲み鳥の様に首を下にするしか出来なかった。

そこまで大袈裟に言うことでもないが香里美々は私服だった。準備と言つのも予測すれば簡単に分かることだったが、予想以上で言葉にならない。

「行きましょう」

二話 6

電車に揺られている。休日でも比較的空いてる時間だ、二人ならんで座っても周りは空いてるぐらいだし。

そして、さっきから藤谷は愕然としていた。言うまでもなく、隣の少女の格好である。

これで、実は珍妙珍奇な格好をしていて、それで愕然としている。だったら笑えるのだが、そうではない、全くない。

服の事なんてこれっぽっちも知識がないので分からないのだが、香里の黒を基調とした服、語彙が乏しくて申し訳なくなるぐらいに似合っている。遠目でドレスに見えた位、ああ冗談で言えたら良かった位に綺麗で悔しい。

夏も近い事からか、胸元も結構出っていて少し目のやり場に困る。何時もより露出が多いせい、寧ろ多い成果スタイルの良さが一層際立っている。

「……………ねえ藤谷」

「なんだ？」

珍しく遠慮がちに聞いてくる香里、なんだかそれがしおらしく見えてしまつて不覚にもちよつと心を揺さぶられた。

「……………その、格好なんだけど……………どうかな？」

いつもだつたら皮肉やら何やらで受け流せるんだが、藤谷も香里の変貌振りに少しやられていたようだ。

「その、似合っていると思うぞ。でも、その、えと、胸の所は……あんまり」

しどろもどろ。もうどろどろ。一ミリも上手く言葉が紡げない。

「に、似合ってるかな？」

なんで上目使いで不安気に聞いてくるんだ。

「似合ってるって、格好でここまで変わるなんてって驚いてんだよ」

勢いで言ったが言い終えて、耳の先まで熱くなった。絶対に顔も耳も真っ赤だ。

「……本当に？」

「しつこいぞ、お前の事を手放して褒めるなんて早々ないんだから、素直に受け取れ」

「これ、ね。死んだお母さんのお気に入りなんだ。ちょっと胸がゆるいから少し出ちゃうんだけど、でも初めてのデートだから無理して着ちゃった」

右手で服をギュッと掴みながら、少し瞳に曇を乗せた香里の表情と仕草は本気で卑怯だと思った。

「ほれ、これ上から羽尾っておけよ。あんまし肌見せんな」

重ね着してたシャツを一枚渡す。大きなお世話だろうなあと思いつつ、確信しつつ出した手は引っ込めなかった。

「うん、いつかもっと似合う女性になるね」

そう言って香里は藤谷のシャツを受け取り上に羽尾った。前のボタンを留めて、優しく笑った。

綺麗な奴は何を着ても、どんな着こなしても似合うから嫌だ。

「えへ、藤谷の匂いがする」

変態チックなセリフだが、可愛く見えてしまった。

二話 7

「デートとまで豪語してたのに、良いのかこんな場所で」

「あら、所帯染みたデートはお嫌い？ 最終的には夕飯の材料買つて家でご飯、という計画なんだけど」

電車に揺られ、思い出の服を出して、そんな前振りをした結果が駅前の百貨店、しかも生活雑貨、日用品を取り扱っている店だ。

「いや、お前が良いなら良いんだが」

カエルの顔をしたミトンを手にはめてにらめっこしてみる。意味もなくむなしくなった。

次は牛のミトン、どこかで見て、どこかへ消えてしまった芸人の様になった。更にむなしくなった。

「なに遊んでんのよ。貴方の家の食器を新調しようとしてるんだから」

見下す様に香里さんはこちらを見ている。ミトンを返して香里の後に付いて行った。

「食器つて、お前の茶碗とかか？」

「うん、いい加減お客様用も味気無いから。後、私が何枚か欲しいの、使いたい大きさの皿なかったりするから」

皿になんて藤宮家はてんで無頓着だったりする。『だったり』なんて使わなくても無頓着だ。職業冒険家なんてアバウトな職業の男が大黒柱の家だ、最悪大きな葉っぱを代用しかねない状況で育つてきた藤谷ももちろんその辺は全く気にしない。流石に葉っぱは使いたくないが。

でも、あれを反面教師にもしてるからそこまで酷い常識は持ち合わせていない……筈である。

人指し指を唇に当てながら香里は皿を物色している。手が空いた藤谷は適当に歩いて、気付けば茶碗のコーナー着いた。食器コーナーにいる時点で大した距離ではないのだが、目に入ってしまった。

半目でボーッと眺めてみる。

「選んでくれるの？」

「ぬわっ！」

後ろから急に声をかけられて、慌てて棚にぶつかりそうになった。もしもを想像したらゾツとして、冷や汗が吹き出る。

「別に茶碗なんてなんでもいいだろ。お客様用だって茶碗は茶碗だし」

「む、選んで、決定」

命令文。そう言われると反抗したくなるのが人間である。ましてや、今日の外出も本意では無いわけだし。

「…………女教師…………ちな…………放課後…………授業…………」

「よし、君に似合う茶碗を選ぼうじゃないか。うん、この猫がプリントされたのなんだろうか！？　すぐキュートでプリティでバイオレンスじゃないか」

香里美々の言葉のバイオレンスを受けたので、反抗なんて出来ない藤宮藤谷であった。まさか、このネタ事ある事に使われるのだろうか。

二話 8

結局こうなる。

藤谷の前に行くのは買いたい物も買えて、満足そう歩いている香里、藤谷はと言えば荷物持ち、以上。

「茶碗と皿の代金後で言えよ払うから」

「良いわよ、お世話しながらお世話になってるんだからこれくらい」
そついや送る度に思っていたのだが、とても立派なマンションに住んでいるこの娘はもしかしなくてもお嬢様か？

まあ、見た目だけ見れば小綺麗だしお嬢様には見える。

「そついうのはよくない。ちゃんと払うからな」

「あら、強情ね。でも私も譲らないわ、譲ってやらない」

香里はいつも通りの意地の悪い笑みを見せる。流石に藤谷も引き下がってはいられない。

「なら、茶碗だけでも、贈り物として」

「ひゃっ……………うん」

少しかかったつもりだったが、相変わらずこう言った言葉には弱いらしい（人の事は言えないが）耳まで真っ赤にしている。

「んで、次はどこに行く？」

「特にない。だから、適当に見て回らない？」

「了解」

その後は茶碗の袋を持ちたいと言ってきた香里に茶碗の入った紙袋を渡し、百貨店をグルグルと回ってみた。

今更思った事だが、香里の趣味については何も知らないんだよな俺は。だから、音楽を聴いてみたり、アクセサリーショップを冷やかしたりで、香里美々に対する新発見は大分あった。

「さて、日も暮れたし、夕飯の材料買って帰りましょうか？」

「別に食事を取って帰ってもいいんだぞ？」

いつもの田舎町よりは少し都会に出てきたわけだ。食事処には困らない。

「貴方と外食も魅力的だけど、その、えと、お茶碗使いたいのに」

愛しそうに茶碗の紙袋を抱き締める香里にこれ以上何も言えなかった藤谷だった。

それから来た道を逆戻して、途中のスーパーで買い物、あつという間に休日は終わろうとしていた。

鼻唄混じりで茶碗を開けて眺めている香里、この隙に藤谷は行動を起こす。

父親の部屋の押し入れの中、これまた紙袋を取り出した。態々父親の部屋に隠して良かった。俺のブツは簡単にバレてしまったしな。

台所に戻って、香里に向かって紙袋を差し出した。

「その、いつも世話んなってるから、贈り物だ」

キョトン、本当にそんな擬音が聞こえてくる表情をしている。静かに受け取って、その中身を取り出した。

綺麗に折り畳まれていた布が、展がっていき、姿を現す。香里は口を開いた。

「これって……」

そう、いつも香里が眺めていたエプロンだった。

「大した物じゃないが、良ければ使ってくれ」

「……………ううん、ううん……………」

香里は首を振った、長い黒髪が一緒になって揺れる。そこで藤谷は言葉を失った。

香里が泣いていた。

「な、なんで泣くんだよ!？」

いつもの香里なら……………あれ?いつもの香里ってどんなだったけ?

少しずつ香里は変わった。いや、多分仲良くなって素になってくれるんだと思う。『いつもの』きつと俺の『いつもの』は香里の仮面、思ったより香里美々は女の子なんだなと俺も考えを改めるようになった。

「……………」

そつと、壊れ物を扱う様に香里の頭を撫でてやる。

「本当に、ツンデレなんだから」

そう言つて涙を目尻に溜めたまま笑つた香里は今日一番可愛かった。

三話

私、香里美々の朝は早い。

起床後は目を覚ますためにまず洗顔、歯を磨き、髪を整える。

手早く着替え、鞆を持って出発する。

いつからだろうか？この私以外いない家に『行つてきます』『ただいま』を言わなくなつたのは？

一応、保護者には父親と言うものがいるのだが、居ないのとなんら変わらない、数カ月一回帰ってくるかこないかなのだから。

しんみりして少し遅れてしまった。そう思って美々は歩調を速めた。

毎朝藤谷の寝顔を見て、それから朝食の支度、それが済んだら寝顔をもう一度見る。

この日課、客観視すると家政婦さんとなんら変わらないが、ただ愛情という感情は凄い、愛情を力とし、糧とし、行動は喜びに変えられるのだから。

歩きながら小さなあくびをする。藤谷には隠しているが、美々は本当は朝に弱い。だが、これは知られてはならない。

何故ならそれを藤谷が知つたらきつと、朝先に起きて美々が到着する頃にはすっかり朝食の準備を終えているか、『無理するな、ちゃんと真つ直ぐに学校へ行け』と言われかねない。

一番手っ取り早いのは、あの家の二階、藤谷の隣の部屋が物置になつていたのでそこに寝泊まりすることだ。実際一度提案したが、絶対に駄目との事、でもまだ諦めてない美々であつた。

「おはよう、香里さん」

「えっ？」

不意に声をかけられた。この声には聞き覚えがある。あまり知り合いの少ない美々に名前を呼んで声をかけてくる相手など消去法で簡単に行き着く。

「おはようございます会長」

右手の人指し指を立てた眼鏡の麗人、顔は笑っているが、敵意が痛いぐらい突き刺さってくる。

「ねえ、少し時間をくれないかな？」

「すみません、先を急ぐので」

藤谷に会うために折角早起してるのに、この後に待つてる幸せを前にお預けなんてごめん被る。

そう言つて隣を通り抜けた。

「藤谷君ならいないよ」

その声に美々は振り返る。眼鏡の麗人は相変わらず無邪気に見える

笑みを顔に張り付けていた。

「どういう……」

そこでポケットの携帯電話が振動していることに気付いた。

開いて確認すると藤谷から、会長を見ると掌を上に向けて何かを差し出すように『どうぞ』と言った。

美々は電話に出る。

「すまん、急に会長が体育祭の準備で力を貸してほしい。今どこだ？」

「えっ？ 向かってる………最中」

「そうか、すまない」

「ううん、気にしないで、私も急用が出来たから。でも何かお詫びはしてね、デート一回とか」

「……………わかった。検討する」

互いに『それじゃあ』と言って終話ボタンを押す。

「これで時間、くれるね？」

美々は無言で頷いた。

三話 2

無言のまま会長の後について、到着したのは学校、しかも生徒会室だった。

四つの業務机設置されており、少し離れて窓際にもう一つ業務机がある。離れてるのは会長ので、後は他の役員のだろう。

「悪いね、茶も出せなくて」

そう言つて会長は窓際の机に鞆を置いて、備え付けの椅子に座つた。

「適当に座つてよ」

そう言われて美々は四つの机の備え付けの椅子を取つて、会長と対面するように椅子を設置し、それに座る。

「何の用事ですか？ こんな回りくどい呼び方をして、それ相應の理由はあるんですよね？」

意識してるわけではないが、会長と話そうとするとどうにも攻撃的になつてしまう。

お互い様かと思つてたが、向こうは無垢に笑つて応対してくる。

「うん、本当に態々ごめんね。でも、改めて聞くよ？ 藤谷君の事、本気で好きかい？」

会長は笑つて人差し指を立てた。

「はい、もちろんです」

美々はそれに即答する。

会長はその答えを受け取って、少し黙った。

沈黙が流れる。外からは体育祭の準備の為だろう威勢のいい声が響いてくる。

会長は目を瞑って、空を仰ぎ始めた。

「会長？ 貴方はどうなんですか？」

返事は返ってこない。少し間があいてから、会長はゆっくり目を開けこつちを見る。

「わかんない」

「えっ？」

美々は会長の言葉を疑った。そして、レンズの向こうの瞳が陰のを見逃せなかった。

「ねえ、香里さん、藤谷君と一度だけで良いからデートしてもいいかな？」

「別にそれは私の許可なんかいらないんじゃないですか。大事なのは藤谷の………」

「うん、わかってる、わかってるよ。でもね、私は藤谷君を誘えるか……わからないんだ」

つまり、美々が協力して藤谷を誘って欲しいんだろう。会長は何かを迷ってるし、ワカラナクなってる。きっと『分からない』『解らない』『判らない』んだ。

だって今『ボク』じゃなくて、『私』だったから。

「誘えますよ。それに藤谷は来てくれます、私達が好きになったのはそんな人でしょう？」

ちよつと穏やかな気持ちだった。会長の考えや迷いが美々には少しワカル気がしたからだ。

「香里さん、ごめんね、私こんがらがっちゃって、意味わかんないよね？ でも、少しだけ、少しだけ待って欲しいんだ」

レンズの向こうの瞳は遂に涙を流してしまふ。

会長は鏡、立ち位置がちよつと違うだけ、私がいやって泣いていた可能性もあった。少し優位に立ってるからワカルだけ、相手は恋敵と分かっていても無視は出来なかった。

三話 3

あつという間に体育祭を終え、その振り替えて当てられた休日がやってきた。

この休日、藤谷に対し珍しい人から誘いが掛っていた。何を隠そう眼鏡の可愛い女の子で通ってるらしい、生徒会長さんだ。

弟の誕生日が近いらしく、プレゼントをしたいそうなんだが、男の意見を聞きたいらしい。

これを香里に話すと『まるでベタベタな漫画とかの遠回しなデートのお誘いみたい』なんて返してきやがった。どうしても少し素直に色々を受け取れんかな、あの娘は。

待ち合わせ場所は駅の改札、少し移動したいらしい。まあ、都会には近いが、近いだけのこの近辺では買い物も完璧にいかんだろう。

少し早めに出た。待ち合わせの十時の二十分前、まあ、予想通りとかやっぱりというか、会長はちょこんと立っていた。それに小走りで駆け寄る。

「すみません、会長、待ちましたか？」

「い、いや、ボクもつい十分前くらいに着いたんだ。休みにすまないね」

「いえいえ、会長にはお世話になってますから」

会長を頭から足まで見てしまう。

見てしまうくらい似合った格好、香里は綺麗で目を奪われたが、会長はお人形のように見ていたいと思った。

「じ、じろじろ見るのはよくないよ藤谷君、後、外で会長と呼ぶのはやめてほしいな」

「すみません、か……………先輩？」

会長改め、先輩は難しい顔をして、溜め息を吐いた。そしていつも通り人指し指を立てて微笑んだ。

「さあ、行こうか」

「はい」

振り替え休日、世の中は平日、通勤の時間帯を過ぎた今は人の流れはまばらだった。

まさか女の子と二人でまた、この百貨店に訪れるとは全く思いもしなかった。

事前に先輩の弟さんの情報は仕入れている。だから、ある程度は目

星をつけていた。小学校五年、好きなスポーツはサッカー、どちらかと言えば外で遊ぶ派、でもゲームも好き。典型的過ぎて教科書に載りそうな少年だ。

「うーん、ボクはゲームとかあまりしないからな。あんまりわからないや」

「俺もそんなにはしませんよ。香里は結構やるみたいですが」

「えっ！？ ……へ、へえ、そうなんだ。香里さん結構勉強してるイメージあつたよ」

香里と先輩は気付けば友達になっていた。だから、共通の友人として名前を出したんだが、あんなに驚かれるとは思わなかった。何だか言葉も震えてるし、ケンカでもしたのか。「だから、サッカーボールなんてどうですか？ 無難過ぎてつまらないかもしれませんが、シンプルなのも良いと思って」

何故か知らんが、少し気まづくなった空気を飛ばす様に少し大袈裟に手振りも加えて言う。

「そうね、うん、いい案だ」

三話 4

「なんだか思ってたより早く決まりましたね」

スポーツ用品店に赴き、店員に聞きながらプレゼントを決めるに至った。

だが、先ほどから先輩の様子がおかしい。話しかければ生返事、黙ってばかりでどこか見つめてる。

「ね、ねえ藤谷君、お礼にお昼ご馳走するよ。よく友達と行くお店なんだけどいいかな？」

「そうですね、そろそろお昼ですもんね。まあ、ご馳走はされません。割り勘です」

ちょっと恥ずかしいが場を盛り上げるために、先輩の真似をして人差し指を立てて笑ってみた。

「まだまだ指の角度が甘いよ。そんなんじゃ免許はあげられないな」

あつ、免許いるんだこれ。

香里美々は掃除をしていた。

掃除とは部屋を綺麗にして、そこに住みやすくすること、その場所は例の藤谷の隣の部屋の物置であった。

文句は言われるだろうが、お父様からの許可は頂いた。さっき、南の方から私の携帯に電話があつて、許可を得た。まさか私の携帯にかかってくるとは思わなかった、藤谷曰く『あの人は予想という枠に入らない』というのを思ったより早く実感した。

ふと手を止めた。藤谷は今頃会長とデート、会長は優しい人だ、見方によっては藤谷よりずっと優しい、そして純真、だからこそ私は藤谷の事を好きではならない。

それは突然だった。そんな驚く程でもなかったが、急だししょうがない。

スクリーンの中では二人の男女が泣きながら抱き合っている。そう、映画を観ていた。

遡ること三十分。

食事を終え、じゃんけんに負けて奢ってもらってしまった藤谷は、少し肩を落としてつつ先輩と並んで歩いていた。

「あつ、そうだ。藤谷君藤谷君」

「はい？　なんですか？」

「ボクね、観たい映画があるんだ。ちょっと前に公開したやつ。一緒に観ない？　なんだったら奢るよ」

人指し指を立てて楽しそうに笑っている。先輩の人指し指も更に連動して楽しそうに揺れていた。

両手の人指し指が揺れている。コンボが発生していた。

「ええ、昼ご馳走なってますからね。断りませんよ、後、むしろ俺が奢ります」

それに、こんな楽しそうに笑う先輩の頼みを断れそうにはなかった。

まあ、まさかそれが恋愛ものの映画だとは思わなかった。ほぼ同時に上映しだした有名なアクション映画の三作目だと思った藤谷のミスだ。

隣を見ると先輩も涙を流していた。眼鏡を外し、ハンカチで拭っては掛け直す。ちよつと忙しそうだった。

「ああ、いい話だったね。ボク涙が止まらなかったよ」

そう言う先輩の目元は、発言通りに腫れていた。

「先輩は恋愛映画好きなんですか？」

「うん、小説とか、漫画とか、読むもの恋愛ものだらけだよ。見掛けによらないとか言わないでね」

「え、ええ」

その逆で全く見掛け通りだとか思ってたなり。

「今日は色々ありがとね。大分我儘言っちゃったし」

「いえいえ、いつも世話になってますし、これぐらい」

「だって荷物持ちしてもらってる」

「サッカーボールと映画のパンフ持っただけで感謝されるなら、後三セットくらい持ちますよ」

先輩は俺の言葉を冗談と取ったらしく、小さく笑っていた。

でも、少し、ほんの少しだけその笑いに陰があった気がした。

「今日は本当にありがとう」

先輩は笑っている。藤谷もいつも世話になっている先輩にお礼が出来たようで満足だった。

「もうすぐ暗くなるし送らなくていいんですか？」

「駅からそんな遠くないし、明るい所しか歩かないから大丈夫だよ。それにボク意外と強いんだよ」

そう言って先輩は細腕で力こぶを作って見せる。全然出ないが。

「それならいいんですけど……本当に気を付けて帰ってくださいよ」

「もう、心配性だね。大丈夫だよ、それじゃあバイバイ」

「はい、また」

肩までで大きく手を振られたので、肘くらいまでで振り返した。

「また、か」

私は馬鹿だ。本当に馬鹿で、どうしようもない。

分かってた、分かってたんだ。私じゃ駄目なんだって、私は藤谷君が好きな分、だから駄目なんだって。

香里美々、彼女という時の藤谷君はとても幸せそうだった。楽しそうに笑って、素直に香里さんと付き合っていた。

私の時はどうだろう、彼の本音をどれだけ聞けただろう？彼の我儘どれだけ聞けただろう？私というときの彼は自然じゃない、私じゃ駄目なんだ。

私は藤谷君が好き、いつも味方でいてくれて、いつも助けてくれた、そんな藤宮藤谷君が大好きだ。

香里さんというときの幸せそうな藤谷君が一番好き、あの笑顔と優しさが一番好き、今日一日で実感した。

だからこそ『バイバイ』だ。さよなら。

三話 5

振り替え休日を終え、いつも通りの毎日が戻ってくる。

「おはよう、藤谷」

「……………ん……………ああ」

なんだかいつもより頭が重い、意識もはっきりしない。時計に目をやる。

やっぱりだ、いつもより三十分も早い。

「やっぱりお泊まりするとドキドキして寝れないね。昨日一杯寝てなかったら寝坊してたよ」

全く持っていていつも通りに笑うエプロン姿の寄生人、昨日帰ったら部屋の片付け完了してやがるし、父親は一体なにを考えているのか全くわからなかった。

「ああ、なら朝の用意はまだか？ 手伝うぞ」

まだしっかり働かない頭を必死に動かし、体を起こして無理矢理立ち上がる。

「あら、もう終わってるわ。後は藤谷が着替えるだけ」

ならもう少し寝かせてくれてもいいじゃないか。

と、言いたくなかったが、朝を用意してもらってるのにそこまで強くは言えない。

なんでこの朝が当たり前になってるんだろ。次に父親が帰ってきたら、文句言ってやる。

「それじゃ下に行ってるから」

「ああ、すぐに行く」

いつもより三十分早いと言うことは、出るのも三十分早くなるわけで、学校に着くのも当然三十分早い。

「おはよう香里さん、藤谷君」

「おはようございます会ちよ……………え？」

靴を履き替え、階段を上がっている途中声をかけられ、上を見上げるとそこには会長がいた。

正確には、髪がショートカットになっていて、眼鏡がなくなり、見た目が大きく変わった会長だったが。

「やあ、似合ってるかな？ 昨日あの後に切りに行って、コンタク

トは前から用意してあつたんだが」

いやに説明的だが、藤谷は驚いていてそれどころではない。

「藤谷、少しお手洗いに行ってくるわ。行きましよう会長」

驚いて固まっている藤谷を置いて二人は行ってしまった。

なんであんな大きく変わったのかな、夏が近いからか、受験が近いからか、全く藤谷にはわからなかった。

「いいんですか会長？」

「ん？ うん、なんか今はスッキリしてるよ」

廊下、ちょっと早いため周りには人はいない。

「そうですか、私だって自信はありません。藤谷が受け入れてくれるかなんて……………」

「うん、でも人と人ってそういうものだよね。ボクはそれから逃げた臆病者、でも、藤谷君を幸せに出来ないならボクが取っちゃうから」

「はい、会長が悔しくて泣いちゃうくらい幸せになりますよ」

「うん、ボクと君は友達だよ。香里さん、いや、美々」

会長はそう言って人指し指を立てて眩しいくらいに笑った。

「はい……いや、うん、舞」

黒崎舞、香里美々にとって初めて心から友達と呼べる人である。

藤谷もちろん別、なんて誰にしてるか分からない言い訳を美々は心の中でしていた。

四話

学生の本文は、名の通り学業である。

夏休みが目前に迫った七月、夏休みだと浮かれる前にテストがあったり……

一応進学校なんてけつたいな物に通ってる男の子、藤宮藤谷君の場合、

「……………」

汗が止まらない。目が霞んで倒れたい。だが、倒れたら終わる。

今日、HRでテスト範囲のプリントを配られた。そして放課後の図書室で教科書を開いて範囲を確認してみる。

一言で簡単に言おう。

「俺、本当にこの授業受けたのか……？」

全く理解できない。進学校のレベルがいけないのか、藤谷は中学生まで成績が良かった自分を呪った。

「……………今なら香里美々、お安くなってますよ」

タイムマシンで過去に行って、中学生の自分を殴りつけて、正しい道を模索するように諭し、今の状況が好転したらなあ……………と現実逃避旅行に出掛けてる最中に声をかけられた気がする。

気がするだけだから気にせず旅行を満喫しよう………

「今なら、香里先生が優しく教えてあ・げ・る」

図書室の机に突っ伏して、両手を頭に添うように伸ばし、世界から隔絶していたが、髪を少しかきあげられ、耳元で囁かれればこそばゆさで流石に飛び起きる。

「だあー！ オーケーわかった。要求を聞こうじゃないか。俺が夏休みをエンジョイして、尚且進級に響かない策があるならな！」

あれ？見上げてみると二人いる。元眼鏡の会長と態とらしい人香里さん。

口元で人指し指を立てて『お静かにだよ』とか言ってる会長は、恐ろしく仕草が似合うな。まあ、見慣れてるからだろうが。

「と！　　いうわけで、私香里美々さんと」

「黒崎舞ちゃんが」

「「家庭教師をしちやいますー！」「」

デンツ！

ちなみにこの『デンツ！』は二人で口に出して言ってます。

「会長はいいんですか？　受験もあるんだし」

「ボクなら問題ないよ。それに復習にもなって一石二鳥、一挙両得、一網打尽だよ」

意味わからんがいいや。

香里は……………そうだ、こいつ頭の病気がって位頭が良いんだった。

「あつ、藤谷君、ボク達を呼ぶときはちゃんと『せ・ん・せ・い』
とつけるんだゾ」

なんか会長が崩壊していつてるのだけは、心が痛いくらい理解した。

「報酬は、夏休みに最近出来たりぞーとすばに私達を連れて行くこと」

なんでりぞーとすばが平仮名かはさておいて、結構値が張る気がするな三人分は、だが、背に腹は……

「お願いします。先生」

四話 2

なんだ……なんだってこうなるんだ……？

只今藤谷の部屋、藤谷は机に向かって黙々と勉強中、件の先生達はと言うと……

下で夕食を作ってる。二人して、

「片方くらい残ってくれても……でも、やらなければ、期間は一週間、負けられない戦がそこには」

「藤谷君、現実逃避はよくないな。ちゃんと勉強しましょ」

耳元で喋られたので驚いて椅子から落ちそうになる。その反動で頭がぶつかり、衝撃が走る。

「すみません会長、大丈夫ですか？」

「いたた……あつ、藤谷君違うよ。舞先生だよ、えと、舞ちゃん先生でも可だよ」

舞ちゃん先生とやらはなつかしの眼鏡を装備しなおしている。一月経たない位だが、とても懐かしく感じる。

「さて、どんな感じ………？」

舞先生は机の上の問題集（香里作）を覗き込んでくる。シャンプーの匂いだろつか、香里とはまた違った女の子の匂いがする。

「……………藤谷君、ええと……………この数学は本気……………だよね？」

問題集を持ち上げて舞先生は目を細めて、頼むから嘘であってくれ
って顔でこつちを見ている。

その表情に俺は目を背ける事しか出来なかった。

「藤谷君、先生達、これから出来るだけこの家にお泊まりします。
良いですね？」

「いや、流石にそれは不味いんじゃ……………」

「この答えより不味くありません！」

一蹴、むしろコンビネーションでボコボコにされた気分だ。

「あら、どうしたの？　なんだか騒がしい」

「美々、はいこれ見て」

問題集が香里の元に渡る。いつの間に呼び方親密になったんだろう。
とか思っていると香里が初めて見る苦い顔した。

「うん、藤谷、二つだねこれは。来年やり直すか、私達を泊めてみ
つちりやるか。どっちがいい？」

「どうぞ泊まってよろしくしてください」

「国語も必要ね」

もう俺は常識とか、男女のなんちゃとか一ミリも言ってはられないらしい。

たしかに最近は大作RPGに嵌って、勉強と言う二文字から遠い生活をしていたがまさかここまで非難されるとは、どうやらやるしかないようだ。

その夜、藤谷の部屋の隣、香里美々の部屋（仮）では、先生二人の祝勝会が行われていた。

「藤谷君にはちょっと悪いことしちゃったかな？」

「でも、成績が不味いのは本当みたいだし」

「流石にあんな泣きそうな顔されたら、良心が痛んだよ」

「うう、それはそうだけど、舞考案でしょ。お泊まりラブラブ大作戦」

ちよつと狭いが、二つ布団を敷いて、並んで寝ている。

ちよつと後ろめたいので二人で枕を抱き締めながら、寄り添ってう

つ伏せでの祝勝会。

「そうだけど……でも、泣きそうな藤谷君可愛かったな」

「なんか危ない発言が……諦めたんじゃないの？」

「うーん、美々がちゃんとやらないと話が変わるかな。でも、今は応援するよ」

「うん、頑張る……」

その日の談義はそこで終わった。明日から勉強会兼『お泊まりラブラブ大作戦』が始動するのであった。

四話 3

「ね、ねえ藤谷……なんにもそこまでしなくてもいいんじゃないかしら………」

香里が言い辛そうに困った声をあげる。藤谷は一睨みし、半目で教科書に目を戻す。

『藤谷の夏休みを救う会』と名前が決まってから三日経った。もうテストまで日がない。一刻の猶予もなかった。

そう、それはお昼を食べているときだって例外ではない。戦場では気を抜いたやつから死んでいく。

「……………ここは戦場じゃないよ？」

いつもより香里が優しく声をかけてくるが、それに惑わされ、油断すれば、協力してくれている二人に申し訳が立たん。

口に出してないのに返答されるのはきつと俺の知力が低いからだ、そうに違いない。もっと知識を深め知力を上げねば。

それから授業は人一倍取り組み、いや、一倍では足りんと判断してさらに三倍頑張る。もちろん鉢巻きは赤だ、赤の鉢巻きだ。

藤谷が図書室で勉強を進めてる頃、生徒会室、またの名を『ラブラブ大作戦緊急会議室』では、

「藤谷が冷たくなっちゃった……………」

香里美々はだれていた。大昔に流行った力の抜けたパンダくらいだれていた。

「藤谷君はたしかにのめり込むタイプだったけど、まさかあそこまでは」と

『うーん』とか言いながら、人指し指を立てて困った顔をする舞。

「側にいても全然こっち見てくれないし、多分横に水着で立ってたって気付かないよ。あれじゃ」

「まあでも、きっと美々にのめり込んだら、あんな感じでラブラブだよ？　楽しそうじゃない？」

舞はそう言いながら、生徒会の仕事としてプリントに何か書き込んでいる。なんだか適当に流されてる気分だ。

「そうになったら嬉しいけどさあ……………」

適当な誰かの机に顎を乗せ、目を瞑っていた。

「しょうがない、なら作戦プランAで行きましょうか」

「作戦？　なに」

大した事はないだろうと思い、適当に返事をする。

「夜這いとか、お風呂に乱入するとか、後は……………」

「なっ！！」

驚いた拍子に思い切り顎を打った。涙目で爆弾発言を平然と言った人間を睨みつける。

「うふふ、美々って意外と純情だね。洗濯の時藤谷君のシャツを抱き締めちゃう位だもんね」

「見てたの！？」

舞は驚いた表情で口を手を当てた。どうやら鎌をかけられたらしい。

洗濯もやろうとするのだが、大体藤谷止められるから、したことはないとほぼ同義なのだが、一度だけあったりする。

四話 4

その夜、藤宮藤谷は勉学に励み、知識を積み、知力を上げ、夏休みをエンジョイしてバケーションしてプレイしてやる気満々だった。

つまり、机に向かって努力している。

「うーん、ボクはそろそろ帰るね。あんまり遅くなると流石に怒られるし」

ショートカットの眼鏡の女性は部屋の壁に掛けてある時計を見てそう言った。

やっぱりコンタクトでいるのは外だけであって、基本は眼鏡らしい。眼鏡が似合ってるので何も言うことはないが。

「じゃあ送りますよ」

「だゝめ、勉強してなさい。ボクは意外と強いから大丈夫だよ」

舞先生はそう言ってそそくさと部屋から出ていく。

部屋に一人取り残された藤谷は、しばらく時計の秒針の音を聞き、風呂にでも入って少しさっぱりしようと考え付き行動に移す。

「ちょっと風呂に入ってくるから」

一応隣の部屋に声をかけておく。後から誤って入ってこられないた

めの確認である、いなければ先に入ってる可能性も考慮できるし。

「うん、了解」

扉越しに返事が返ってくる。食事が終わってから香里は部屋に引き込もって出てこない。

勉強でもしてるのだろうか、流石に天才少女といえどテスト前は勉強するだろうしな。

階段を降りて、風呂場に行き、洗面台と一緒になってる脱衣場でパツと服を脱ぎ、洗濯機の中へそれを放り込んで、風呂場に入る。

「うー……………」

香里美々は思案していた。悩んでいた、考えていた、ドキドキしていた。

洗面所の扉の前、ドアノブに手を伸ばしたまま固まっている。

この一枚、さらに一枚向こうに藤谷がいる。いつもの様に冗談混じりで『折角だから背中を流してあげる』なんて言って入って……………

…入って……………どうすればいいんだろ？

舞にそのかされてここまで来たが、藤谷とどんな結果に陥りたいんだ？

「藤谷に一杯意識させるんだったら……………」

『脱げばいいよ』なんて眼鏡の年上ボーイッシュは言ってたが、いくらなんでもそれは恥ずかしすぎる。

これ以上考えても無駄と判断し、半回転して部屋に戻っていく。

「ラブラブ大作戦……………失敗の予感」

ボソッと呟いて、頭は藤谷の問題集をどんな感じにするか考えていた。

四話 5

最近は少し暑くなってきたな、と思い快適な勉強空間を作るためクーラーをつけて、今夜もさあ勉強開始だ。

今日は流石に会長も家で勉強するらしく来ていない。まあ、あの天才少女大先生はいつでもどーり家に来て、今はいつでもどーり晩御飯の支度をしている。

今日はちょっと遅れてるようで中々呼びに来ない。それでも藤谷はペンを動かすのを止めない。

書いて、口に出すことが一番記憶が出来るらしい。それを繰り返して英語の単語を覚えていく。

更に三十分が経過した。流石に気になって、腹も減ったので階下に降りる事にする。階段の途中、電気をつけずに降りたら何か黒い物体が転がってる事に気付いた。

最初は何か香里が置いたのかと思ったが、一段、二段と近付いて行くにつれてそれが何なのか見えてくる。三段目には駆け降りて、踏み外しそうになりながらも側に寄った。

「お、おい！ 香里どうした!？」

「あら、えへへ、ごめんごめん。少しご飯遅くなっちゃって……」

目の焦点が確りと定まってない。少し頭が揺れている、息も荒い。

直ぐに手を額に当てる。

「……………嘘だろ、凄いい熱じゃないか」

「大した事ないよ。ちゃんとご飯は出来たし……………問題ない問題ない、ご飯終わったら勉強しよ？」

喋るのも辛いのか、なんだかゆっくりだし、変な発音になってる。

とりあえず藤谷は冷静に香里を抱き上げ、部屋に運ぶ事にする。

香里が使ってる部屋、端に布団と香里の鞆二つしか香里が使ってる物がない部屋、鞆には着替とかその他が入ってるらしいが、着替は後だ。

香里をその辺に寝かして、布団を敷いてそこに寝かせる。

「ちょっと待ってろ、薬とか持ってくるから」

「藤谷のだっこ、嬉しくて何も言えなかっただけだから……………大丈夫だから、ご飯にしよ？」

立ち上がる前に腕を掴まれ、泣きそうな顔でそんな事を言われる。

「……………駄目だ。少し待ってろ」

尚も香里は手を離してはくれない。いやいやと首を振った。

「お願い……………だから、大丈夫だから……………」

「何が大丈夫だよっ！！………悪い、怒鳴って………いいから休んでろ」

驚いた香里は手を離して、藤谷から目を反らした。

部屋を出て、藤谷は自責で一杯だった。グルグル回るのは最近香里のだ。どこかにこの症状を表に出してる事はあつたろうか？多分最近調子が悪かったんだ、無理してたんだ。それであんなに酷くなつたんだ。

どれもこれも憶測でしかないが、今は自分が情けなくて仕方ない。腹が立つ、自分の事ばかり考えて、香里をなんだと思ってるんだ。家事をやってくれるからってだらけて………

握る拳が痛かった。こんな痛みで香里が治るならいくらでも耐えてやれる。だが、そんなことをしても変わらない、だから今は香里の事だけを考えよう。

四話 6

あれから香里に常備してあった風邪薬を飲ませ、氷枕を用意して、舞先輩にメールを飛ばした。

明日に来てくれるらしい。着替とかもあるし、女性の手が必要だったからそう判断した。テスト前だが快く返答してくれて、とても助かる。会ったら、もう一度お礼を言おう。

香里は食欲がないらしく、何も食べたくないと言って、薬を飲んだら寝てしまった。

「美味しいじゃん……………」

藤谷も一段落して、ようやく夕食にありつく。もう用意は終わっていて、ご飯をよそうだけ。味だっていつも通り、無理して作った筈なのに……………」

「俺本当になにやってんだ……………」

口に出してもちつとも胸は軽くない。重くて重くて苦しい、やがて箸は止まって、そこで今日の食事は終わった。

食器を片付け、何も考えずに粥の用意を開始する。やっぱり何か食べなきゃよくないから、これくらいならきつと食べてくれるかな。

「とうつ…………や？ ご飯終ったんでしょ？ お皿洗うよ？」

バツと後ろを振り返ると、香里が扉の縁に手をかけて、あきらかに無理して立っていた。

「なんでそこまで無理するんだ!？」

コンロの火を止めて、香里に歩み寄って行く。少し声を張り上げたからか、藤谷の表情が怒っているからだろうか、香里は寄れば寄るほど脅えていった。

「約束した……藤谷のお父さんとも、藤谷とも……ご飯作って……お世話して……」

絞り出すように香里は喋る。もう見ていられなかった。藤谷は香里を抱き寄せ、抱き締めた。

「えっ? ええっ?」

香里が腕の中で小刻に暴れる。やがておとなしくなって、胸に頭を預けてきた。

「ごめん……本当にごめん……俺最低だ。これじゃただお前の気持ち利用して、楽しんでただけじゃん……」

香里は小さかった。さっきだって抱き上げて思ったが、香里は軽かった。こんな女の子に負担ばかりかけて、一体俺は何をやっていたのか、頭がパンクしそうだった。

「……いいんだよ……私が勝手に好きになって、勝手にやってるんだから……」

「だから、俺もはつきりさせないとな」

「いや！ 言わないで」

胸を思い切り押され、香里と離れた。香里は息を荒くして、泣きそうな顔をしている。

「言わないで、今は凄く幸せなの、藤谷とこうやって一緒に居れて、これがなくなったら私は……私は……」

そう言っついに香里の涙は溢れた。同時に膝について、壁に寄りかかる。

どうやら、更に無理したから体が悲鳴をあげたらしい、すぐに抱き上げて、部屋に運ぶ事にする。

「悪いな……まだよく整理が出来ないんだ。だから、答え出すの……もうちょっと待ってくれ」

「うん、今はこのお姫様だっこが嬉しいからよしとする」

寂しげに笑った香里の顔を俺は当分忘れる事が出来ないだろう。同時にそんな顔も綺麗だと思った事も忘れられそうにない。

四話 7

香里は静かに寝息を立てていた。藤谷はそれを見つめながら壁に寄りかかって、物思いに耽っていた。

そして一番見なきゃいけない問題を直視する。

逃げていたのかもしれない、『あいつが勝手に押し掛けてきて迷惑だったんだ』なんて今の俺が言っても誰も信じはしない言い訳をしていた。自分に無理矢理信じさせて。

額に手を当て、頭を抱える。

いつも自分に自信がなかった。あれが出来ると思ってたって口に出すことはなく指されるのを待つ、自分から進んで失敗する恥が怖いから……………

「……………とうや?」

「どうした? 腹が減ったか?」

「ねえ、藤谷はさ、私の事どう思ってる?」

暗いから見えないが、視線を感じる、きっと真剣な眼差しでこちらを見ているだろう。だから、はぐらかすことは出来そうもない、する気もない。

「……………氷の女王なんて仰仰しい名前で呼ばれて、冷たい奴だと思っただけど、少しずつ、打ち解けていくと普通の女の子だって……………」

…… ちょっと純情チックで驚いたけど、って最後の部分は舞先生が言えっ」

「その氷を溶かしたのは貴方だよ」

「なんだか詩人みたいだな」

二人で小さく笑いあった。きっと俺の氷だって、無理矢理お前に溶かされた。恥ずかしいから言っってはやらないが。

「ずっと独りで良いって思ってた。ううん、独りじゃなきゃいけないって思ってたんだ。でも、あの日、貴方に出会ってから私は……
… 暖かい場所に行きたくなっちゃったんだ」

「俺の側は暖かいのか？」

「ううん」

否定、そこは肯定じゃないんだ、と肩透かしを食らってしまった。

「貴方は…… その…… 藤宮藤谷は…… 私の、太陽だから……」

藤宮・S・藤谷、ソーラーでもサンでもオーケー、恥ずかしいから冗談思い浮かべてみるが、全く面白くない。

「な、何か言っ…… 結構恥ずかしいんだから」

尚も黙ってあげることにする。目を瞑って、明日の朝御飯と香里の朝御飯、ついでに舞先輩が来た時に何か食事を用意しようと考えて

いた。

「あら、やってくれるじゃない」

ちよつと懐かしく思う口調になった香里、こういう時は大体藤谷をからかうことを考えていたと記憶している。

布団が捲れる音と、何かがこちらへ這い擦ってくる音、最後に胸の辺りに重みがやってくる。

「あつたかい……………」

「暑くないか？」

流石に夏、片方は熱を出してる位だ、暑くて仕方ない。

「少し汗かいた方がいいかなって……………でも、そしたらお風呂入りたいなあ……………」

その辺は女の子故だろう。香里はなんだかんだで風呂が好きだからな、家の風呂場もいくらか香里カスタムがされてたし。

「とりあえずゆっくり休め、テストが終わったら……………その、日頃の感謝を込めてどこか連れてってやるから……………」

なんだか手が空いたから、香里の頭を撫でていたが、予想を遥かに越えるくらいに髪がサラサラで、長いのに引っ掛からない！とか変な感動していた。

「うん、覚えたよ。二人きりだからね」

五話

「うーみー！ 海だぁー！！」

そうこんな無様で滑稽で、恥ずかしくって、愚かな叫びをあげている男、何を隠そうこの俺、藤宮太陽藤谷じゃなくて、藤宮藤谷である。

何が藤谷をそうさせるか、夏か？否、後ろの人の眩きが全て語ってくれるだろう。

「相当嬉しかったみたいね、赤い点を取らなかったの」

ははっ、何とでも言うがいい、もう藤宮藤谷を止めるものは何もない。

「でも……二人きりって約束……」

「ごめんね、みーみん、フジちゃんが誘うから、てっきりみーみんも皆で行きたいんだと思ってた」

と言いつつ、犬歯を見せながら笑っている篠山蓮はこれでも一応悪いと本当に思ってるらしい。

「まあ、今日は我慢してよ、ね」

そう言って、香里の肩に手を乗せ、親指を立てているのは上林森次、俗称木だらけ。

「セクハラすんな」

その声と共に上林の腕を捻あげ、上林に情けない声をあげさせているのは倉科遥子、実は武道の方の人らしい。

「いやはや、ボクまで来てよかったのかな？ 年上がいたら氣を使つてしまうのではないか？」

特徴のある一人称の女の子、黒崎舞ちゃん、意外にちゃん付けで呼ぶと結構喜ぶらしい（香里談）

「いえ！ 黒崎先輩が来てくれて僕嬉しいッス！」

「ん？ 上林君、君はいい子だね」

「えっ？ 俺いい子？ 俺素晴らしい？ 俺エターナル？ フジフジ」

そんな検討違いで、犬のように喜ぶこの男はその勢いとノリで藤谷に跳びかかってくる。先輩に跳び付かなかったのは、常識的に犯罪者になりたくなかったからだろう。

だが、友情の為に加減などしてやらない、男として正しい道を歩ませるために加減などしてやるもんか。ここで藤谷自身自分のテンションがおかしいことに気付いていない。

左足を前に突きだし、砂浜を確りと捉える、腰を一本の棒にし、捻る。捻った腰を戻しながら、その運動から放たれる藤谷の右拳は一直線に上林、分類木だらけの頬を打ち抜く。種族木だらけは真逆へと打ち返えされるのだった。

「舞、今名前で呼ばれたから嬉しかっただけでしょ」

「うん、ボクあまり名前で呼ばれないからね。だから、今日は皆年上とか気にしないで、気軽に舞ちゃんって呼んでね」

何だかノリが教育番組のお姉さんのようだが、似合って仕方がない。

「藤宮君、磨けば光るかも」

倉科は藤谷の右腕をさすりながらそんなことを呟いていた。

五話 2

一生懸命パラソルとビニールシートを用意した。藤谷と上林、存在木だらけは服を脱いで下に着ていた海水パンツに換装する。

木だらけ、たしかな名前は上林は先程から全く落ち着かない、たまに奇声を発したり、小刻に震えている。

藤谷もあまり人の事は言えない。奇声を発したり、震えたりはしてないが、気にしないようにしてもやっぱり気になる。

最近意識してるせいか、頭にちらつくのは香里の姿、スタイルだけは抜群に郡を抜いてる……………兎も角、兎に角、キョドるぐらいあいつの……………水着姿を楽しみにしてる自分がいる。

「お待たせ」

篠山の無駄に明るい声に反応して男二人、一瞬でそっちに視線を向ける。

……………あれ？

いや、皆の水着はそれぞれ似合ってる。うん、すごく似合ってる、教育番組のお姉さんも篠山も倉科も似合ってる。

でも、香里は……………

「……………何かしら？」

冷たい、反応が夏の暑さに反して冷たい、視線も突き刺さるように冷たい。

「その、えーと、香里さん？ その上から羽織ってるブツはなんでしょうか？」

上林、意味木だらけが藤谷の意思を代弁する。

「……………見て分からない？ パーカーよ」

会話はそこでバツサリと切られた。

香里は無言でビニールシートの上に座り、シートの上に置いてあった緑茶（今さっき藤谷が購入）を喉を鳴らして飲みだす。

多分文句は聞きいれてはくれないだろう。

「フジちゃん、みーみん、やっぱり二人きりがよかったみたいよ。だから、あんな事してるんだよ」

篠山がそつと近付いて耳打ちしてくる。

「藤宮君、でもまだ希望は捨てちゃ駄目だよ。あの下にちゃんと水着着てるみたいだから」

逆の耳に倉科が囁きかけてくる。

「あの下のスイカは一見の価値どころか、必見だよ、藤谷君」

舞先輩が後頭部辺りで更に重ねて囁いてくる。

悪魔達の囁きを受け、藤谷は心を悪魔に売ろうか、売るまいか思案する。もう契約書には藤宮藤まで書いてるが。

そこまで言われると見たい、藤宮藤谷だって年頃の男子だ。興味が無いわけない、むしろ全然ある。

他の女の子達に魅力がないわけじゃない。この間の一件から香里を意識しすぎて、よくわからない方向に意識が走ってるから気になっ
てしまうんだ。

と、言い訳にも似た答えを出す、結果として香里美々の水着姿を見て、一緒に海を楽しみたい、ここに行き着く。

さあ、任務開始だ。

五話 3

とある進学高校に通う黒崎さんからの提案『甘い台詞を囁いて、メモメモにしちゃえ』

某進学高校に通う篠山さんからの発案『あまあまであまゝい事言つて、とろとろに溶かしちゃえ』

普通の進学高校に通う倉科さんからのアドバイス『彼女はあなたに弱いんだし、優しいこと言えばきっと考えを改めてくれるよ』

以上、時間の無駄でした。

藤谷が聞くの一人でよかったじゃんと思っていると、黒崎さんが近付いてきて一枚の紙片を差し出してくる。

「カンペ」

カンニングペーパー？

ふと思う、カンペって実際なんの略なんだ、カンニングペーパーだと思ってるんだけど……………ってなんだこりゃ！？

変な方向に考えをシフトしながら、カンペとやらに目を通す、想像を絶した。

T『やあ、ハニー』

M『なに？』

T『そんなしよげた顔をしないで、俺と夏をエンジョイしようぜ』
ここでも齒を光らせる、ここポイント。

T『ダーリン……………うん、私が間違ってた』

T & M『あっはははは』『海を楽しそうに走り回る二人。』

……………なぜ態々頭文字で名前を隠し、おかしい呼称でよびあつて
るのか。とか、都合良すぎだよ、こんな人が生徒会長やってる学校に通うのやだよ。とか、言ってたらキリがないくらい突っ込みがある。

「先輩、俺の齒は都合よく光りません」

一番言いたい事を言ってやった。

「唇尖らせたって無理な物は無理です」

「フジちゃん！」

この無駄にテンション高くて、すげー馬鹿っぽい事言っし、やってるけど、実はテストの点は香里の次っていう、人生が虚しくなる声の持ち主は。

「はい、カンペスリー」

「一の次は二だよ」

「一個飛ばすくらい凄いの！」

ちょっと危ない会話をしながら、差し出されたカンペを藤谷は、

「まとも？」

「ううん、全く！」

受け取らなかった。

自信満々に、意気揚々と、前歯を出されて笑われては無視するしかない。

「藤宮君」

更に違う方向から、唯一まともな思考と、思いやりを持っている倉科さんが、いや、倉科様がやってきた。

てか、さっきまで皆側にいたのに、なんでやって来るんだ？どこでこのカンペ書いてたんだ？

「海の家じゃない」

ビニールシートに体育座りしながら海を眺め、進学高校に通う香里さんからの眩き。

ちょっと離れてる筈で、こっちの声は聞こえないだろうと思ってたのに、向こうの眩きはばっちり聞こえた。

たしか、疑問はあるが進学高校に通う藤宮藤谷君の嘆き。

「俺、喋ってない」

名前に木ばかりで、名前を忘れ去られた、たしか木だらけの発言。

「俺……………ここにいるよ。そして俺の名前はか……………」

波の音にかき消えた。

五話 4

「行かなくていいの？」

「別に俺がいなくても楽しそうじゃん、木だらけとか特に」

パラソルの下、俺と香里二人仲良く(?)並んで座っている。

相変わらず香里は不機嫌、膝を抱えて海を眺めている。

あの女子三重奏はこっちをいじるのに飽きたらしく海を満喫している。

「藤谷、なんで皆を誘ったの？」

初めて海から視線を外してこっちを見ている。その目は責める感じではなく、疑問、ただ疑問が浮かんではいる。

「いや、まだ夏は始まったばかりだし、二人きりで海なんて何していいか俺にはわからんから」

「あら、なら二人きりの約束はまだなくなってるじゃないし、守る気はあると?」

「ああ、だから今日は楽しんでもらえないか？」

「楽しむというのは強制されるものではないわ」

そう言うと香里はスツと立ち上がりパーカーに手をかけた。

そして座る藤谷に手を差し出す。

「さあ、行きましょう？　楽しませてね」

「あ、ああ。お前凄いの着てたんだな」

黒、布地が少ないソレは陽光に反射して輝いていた。白、そしてソレに包まれる肌は透けるように白い。

「あら、そうかしら、これぐらい普通じゃない？」

「女子の基準はわからんのだが」

一緒に並んで海を目指す、思った他砂も熱くない、裸足で歩けるほどだ。

「でも、貴方はまず一番に言わなきゃいけないことがあると思うわ」

誰かの真似して態とらしく右手の人差し指立てる香里。

言うまでもなく感想を言えということだろう。ここで失敗して、折角岩戸から出てきてくれたのにまた閉ざされては敵わん。

さっきから恥ずかしいから注視しないようにしているが、一言で言えば綺麗だ。そして……やはりその……嫌でも注視してしまうところがある。衣服というシールドから更に解き放たれたソレは、正直言って攻撃力高すぎる。

いつだって香里のソレは自己主張が激しいが、まさか布一枚になっ

ただで………

「さいつてー」

俺の心を読んでか読まずか半目でそんな突っ込みをいれ、小走り
皆の元へと走って行ってしまった。

皆香里に気付いたようで手を振っていた。そのなかで木だらけは口
元を辺りを押さえて倒れた。

まあ、揺れてんだろうなあ、香里のアレが。

少し悟りを開いた藤谷はそれを追走した。

五話 5

一定のリズムで聞こえる機械音、一定のリズムの揺れ、日本人の移動手段の中核とも言える電車。

夕陽が差し込む車内は真っ赤に染まり、なんだか穏やかで、気持ちが安らかに……………ならん。

絶対態とだ、態とやってる。

先ほどから、藤谷は頭の中でそんな嫌味を吐き続けているが、隣に座る女性には届かないだろう。

今の状況を説明したい。

大きく三つに分けて今の状況が形成されている。

いきなりで申し訳ないが、只今香里美々と二人きりである。

他のメンバーは藤谷がシャワーを浴びている間に帰ったそうだ。（悪意しか感じられん）

その二、なぜかその香里さんは眠っている。疲れたらしい、家事も藤谷と分担とはいえ、そのほとんどをやっている。

誤解しないで頂きたいのは、俺もやってないわけではない、まるで言い訳のようなので、これ以上は黙ることにする。

話を戻すが、その睡眠の取り方が問題だ。

時間帯のせい、客があまり少ない車内なので二人は座れているが、なんと、香里は態とらしく藤谷の肩に頭を乗せて寝ているのだ。漫画やゲームみたいな事しやがって、と、藤谷も思っているが、家事とか疲労の原因が自分のため何もできないでいる。

「香里、おい」

「……………んにゅ」

他のお客さんやマナーを考慮して小声で尋ねるが、可愛い反応しか返ってこない。『んにゅ』がちよっと可愛いと違ってしまったのは誰にも秘密だ。

仕方ないから、そのまま電車で揺られていることにする。

忘れたくても忘れられない状況説明最後の一つ。

ロックバンドのドラムのように藤谷の心臓が高鳴っている事だ。

さつきから藤谷に触れている香里の肌の感触、髪の毛の感触、匂いが、受け取れる全ての情報が藤谷の体を攻撃している。女性の感触に攻撃力の計算が適応されるのを藤谷は初めて知った。

「……………み……………み」

別にま行の二番目を二回言ったわけじゃない。人名だ、予てより考えていた事なのだが、いい加減名前と呼んでもいいかなと思っっている。

やってもなんて偉そうな事を言ってるが、香里が名前で呼べと言ってるんだ、それを俺は恥ずかしいから拒否してる。

だが今はその本人も寝ている、これは練習だ、その内気が向いたら呼んでやろうと思うから。

誰かに言い訳しながら、もう止める事にする。相手が寝ていても恥ずかしい。

「……………なあに？」

やっぱり起きてやがった。凄い嫌な笑いかたをしてるに違いない。

「……………遠慮せずに一杯呼んでいいんだよ」

「うるさい、今は肩貸してやるから寝てろ」

「……………はい」

素直な返事と共に香里はまた規則正しい呼吸に戻った。

六話

その日は雨だった。

『その日』なんて以前の話をしてるようだが、本当は今日だから…
…この日？なんか違うなあ、語彙が足りん。

ただ『その日は雨だった』っていうフレーズをかつこつけて使いたかっただけ、他意は全く無い。

藤宮藤谷は宿題をしていた。夏休みである、ホリデーである。この課題というものは勉強に励むというよりもっと深い意味があると常々思う。

休みという言葉を使ったって、課題は存在し、人間には何も無い完全な休みなど無いんだということを学生の内から――

「はいはい、わかったからペンを止めない」

「だから、俺口に出してない」

「出さなくてもわかるよ。大方完全な休みなど無いんだ！　とか思ってたんでしょ？」

「……………」

「図星のようね、涙が流れてないのが不思議な悲しそうな顔」

藤谷の部屋に机を設置し、二人で課題を並べている。香里は勉強す

るのに邪魔という事で、髪を束ねてポニーテールにしている。

実は新鮮な光景というわけではない。料理の時とかにたまにしている、まれに尻尾が二本に分かれる。『どう？ ツインだよ？ 似合うかな』なんて聞いてくるが、美人は嫌だ、なにしてもなにを着てもある程度以上似合うのだから。

「藤谷！ 意識を変な方向に合わせないで、課題を見て」

「いい加減察しろよ。解らないだよ、教えてください可愛い人」

「うにゃっ！」

『可愛い人』冗談で言ったし、どんな反応するかという謎の興味につき動かされて言ったが、結果は、香里は目を見開き、段々目が閉じていくと同時に頬を赤で染めあげた。

「にゅ……」

香里は謎の擬音を尖らせた唇から出した。更になぜか人指し指同士をツンツンとつつきあっていた。

「こ、香里さん？」

「どこ！？ 教えてあげる。本当はあまり為にならないと思ってたけど、しょうがないよね、わからないんだもん」

四角い机の対面に座っていた香里だが、這って移動し、藤谷の隣に移動、肩を触れ合わせながら問題に視線を移動させた。

なんだか最近香里と触れ合う事が多い、藤谷は気付けば心臓を高鳴らせ緊張してるというに、香里は全く気にする素ぶりを見せない。なんだか、自分が馬鹿みたいだし、少し寂しい…………… ような気がする。

「…………… 次の問題って…………… これだよな？」

「あ、ああ」

「藤谷、来年後輩かあ…………… 可愛がつてあげるね」

「ちょっと待ってくれ、見捨てないでくれ！」

六話 2

その日は雨だった。

この格好つけた言葉が指す今日は、決してただ香里に悲しい現実を見せられた日だという事ではなく、重大な変化が訪れたからだ。

そう、こんな格好つけた言葉使って誤魔化さなきゃやってらんない出来事、って滅茶苦茶他意だらけじゃん。

始まりは一本の電話、相手は藤宮宗二、そう、職業冒険家の藤宮藤谷の父親だ。

お昼が過ぎた頃、香里と作ったカレーを食べて食器を洗ってる時に電話がきた。食器を香里に任せ電話に向かった。

「はい、藤宮です」

「もしもし！ 藤谷か！？」

言わなくても声と台詞で誰かは簡単に判別出来る。さっきから後ろで鳴り響く銃声と、誰かの悲鳴が気になって仕方ないが。だが、気にしてはいけない、相手はなんたって藤宮宗二なのだから。

「それ以外に誰が出るんだよ？」

「お前の未来の奥さんがたまに出るじゃないか」

実を言わなくても、半居候状態の香里さんは家事はおろか、電話に

だって出てくれます。凄く助かってるんですが、父親からの電話を勝手に会話して、勝手に切るのはやめて頂きたかったりする。

その時の自称は『未来の奥さん』『貴方の未来の娘』『むしろもう娘』とか謎の自称を言ってから会話するらしい、なぜかその香里美々本人が自慢気に語ってた。藤谷はそれに対してもう何も言わない事にした。

「それで？　今回はどうしたの？」

脱線したら長くなりそうなので、本題を出して貰うことにした。

「ああ、父さんな、まだ帰れそうにないんだ。んで、一人女の子拾ったから、そっちに向かわせた。今日の午後一時位に着くらしいから駅に迎えに行ってくれ」

「はい？」

拾った？拾ったってなんだ？女の子？猫とか犬とかじゃないんだよね。

「孤児らしくてな、なんだか可哀想だからつい、な」

「……………」

つい？ついつてなに？ついで孤児拾うか？……………そういや、俺も似たような境遇だった。

藤谷だってこの男に拾われた。だからと言ってもう一人拾って良い

理由にはならない。

「白い服着た可愛い子だから、後よろしく」

なにか爆発音共に電話はそこで切れた。

既に藤谷の頭は父親の安否という下らない事はシャットアウトされ、白い服着た謎の少女の事ばかり。

「時間は………一時半じゃん」

確信した事は二つ。

一つは自分の父親は日本に居らず、時差というものをちゃんと理解してない。

もう一つは、大遅刻だということ。

六話 3

「なら行きましょうか」

「なぜさつきまで食器を洗っていた人間が既に外行きの服に着替え、尚且事情を理解した上で俺に出発を促してるんだ？」

「説明ありがとう。前に一回電話あった時に聞いたのよ。さつさと迎えに行きましょ、日本にあまり慣れてないようだから」

「はい？ 日本人じゃないの？」

初美々……………じゃなくて、初耳だ。

考えてみれば、あの父親は基本的に日本にいない。それで、どこかの海外で孤児を拾い、こっちに向かわせた。

……………せめて一緒に来る位の常識はないのか。いや、女の子を小動物の様に拾う男に常識を当てはめても虚しいだけだ。なんとそれが自分の父親というのが悲しい現実。

「あら、聞いてなかったの？」

「全く聞いてない。なら、急ぐぞ」

着替えも考えたが、なんとかかなりそうな格好だったので、靴を履いて傘を二組持つて駆け出す。

ちなみに藤谷は運動能力にそこそこ自信がある。それなりに鍛えて

いるし、体育祭ではそれなりの活躍はした。

「なに？ ジツと見つめて、ついに惚れた？」

傘を持ってない空いた左手を頬に当て、態とらしく首を左右に振っている香里さん。

こっちは喋る余裕がないくらいに走っている。並走する香里は顔色一つ変えずに、表情も変えずに簡単に並ばれている。

ここで速度を速めたらきつと藤谷の自信と、香里との人間としての差に絶望してしまいそうなので、そのままのペースで駅を目指した。

途中公園に差し掛かる。中を通り抜けると近道になるので、普段駅に向かうときも使うルートだ。

藤谷は足を止めた。

この近辺では比較的大きいこの公園、晴れていれば子供達が走り回り、老人達は散歩しているだろう場所、噴水広場と言われる場所に一人の女の子立っていた。

真っ白い髪と、白が基調の服装、香里と対になるような白の少女。背の高さも香里と同じくらい。

噴水を眺めていたその少女はゆっくりと振り返り、こちらを見た。やはり目の色、顔付きは日本人のそれとは違う、目的の人を見付けたという確信が不思議と藤谷にはあった。

「ふじみや、とうや？」

少女の口から放たれた旋律は確りと藤谷の耳に届いた。とてつもなく綺麗な声だと思う、透き通り過ぎて雨の音が一瞬消えたくらいだ。

「君が……………」

今更気付いた事は彼女が傘を差していないこと、彼女降り注いで弾ける夏の雨が彼女を綺麗に彩っていたことは当然忘れられそうになり。

六話 4

「とうや！」

「うわっ！」

白の少女は駆け出して、加減のない勢いで藤谷の胸に飛込んできた。雨にずいぶん打たれたのだろう、夏なのに体は冷えていて……柔らかい。

「藤谷」

背筋に液体窒素を流し込まれたような錯覚に陥る声が聞こえてきた。油の切れた機械のように首を向けると眉間に皺が出来た香里さんがいた。

「いや、これは……君だね？ 父さんが言ってたのは」

必死に話を変えようと奮起する藤宮藤谷。

「とうさん？」

人差し指を頬に当て、可愛く首を傾げた。

「そうじが、ここに来たら、とうやがいて、甘えて良いつて、この、写真」

日本語も少し違和感がある程度でとても上手い。その違和感は外見

のせいな気もするくらい。

その子がポケットから取り出した写真を受取る。

「俺と父さんだな、裏には住所か……」

それは藤谷が高校入学の時に撮った写真で、裏には英語と思われる字で住所が書いてある。数字から察するに藤谷の家で間違いないだろう。

「それで、藤宮藤谷さんはいつまでその女の子と引っ付いてるおつもりですか？」

「……………とうやあ」

猫のように胸に頭を擦りつけてくる拾われた白い少女、凍ってしまいそうなくらい冷たい視線を放つ黒い少女、交錯に位置する辛い少年。謎の三角成立である。

雨の中立ち話も生産的じゃないので、家に移動した。道中白い子は傘を差さず、藤谷の腕に捕まったまま家まで移動した。

香里さんの視線が痛かったのは言うまでもない。

「……………」

二人の視線を集めている少女は首を傾げた。

雨に酷く濡れていたので、香里に頼んで風呂にいらしてもらい、服も香里のを借りて今は行儀よく座っている。

「まず……………君の名前は？」

「アイ、藤宮アイだよ」

藤宮の姓は大方父さんが名乗れと言ったのだろう。

「次に、ええとどこで父さん、宗二に会ったの？」

「お家が燃えてなくなっちゃって、泣いてたらそうじが来たの」

あの男は漫画のヒーローか！

「お父さんやお母さんは？」

「いない、アイは一人で暮らしてた。それでお家なくなった」

孤児、まあ、間違いはないようだ。

流石に追い出すわけにもいかんし、住まわせるには……………

「部屋は私と一緒にいいんじゃない？」

口に出さなくても会話出来るのは楽だね。

「そうね」

泣きそうだよ。

「そういえば、なんであの公園にいたのかしら」

「あそこにいればとうやに会える気がしたの」

「気がした？」

と香里、

「うん、とうやが走ってきて、それで温かいお風呂に入れるのが見えたの」

俺と香里は顔を見合わせて首を傾げた。

六話 5

ようやく夏の雨の日が終わろうとしていた。

湯船に身を預け、今日の疲れを湯に溶かすように癒す。ボーツと天井を見ている時に事件は発生した。

「とうやー!」

「とうやー!」

お約束。

風呂場の扉を開けて飛込んでくるアイ、そしてもう一人その真似をしている誰かさん。

「なぜお前は止めないで一緒に入って来ている!」

「とうやー」

「ちょっと似てるのが腹立つ!」

「ちゃんとアイにもタオル巻いたんだからいいじゃない!」

ふん、と態とらしくそっぽを向く香里さん、アイはその間に湯船に入ろうと手を掛けている。

「だから気分害してるのはこっちなんだよ! ってアイ、ちょっと待て、俺は出てくから!」

「やー、とうやも一緒だよ」

「お前実は俺達と同一年だったんだろ！　ちゃんとその辺踏まえてだね……………　って入るな、タオルを取ろうとするな。香里、お前何体洗う準備してんだよ！」

「あら、湯船につかる前に体を洗うのは常識でしょ」

「真顔でお前が常識を語るなあー！！」

藤谷の安らぎの時間は、カオスの空間へと変貌した。

その二分後、藤宮藤谷は自室にて肩で息をしていた。全力で脱出し、上半身裸でへたりこんでいた。

とりあえず着替を済ませ、ベッドに落ちる。

「……………あれ」

どうやらそのまま眠ってしまったようだ。うつ伏せの状態から両手をついて起き上がろうとすると何か柔らかい物に触れた。

「……………」

思考停止。

再試行。

失敗。

強制復帰。

「うわああああっ!!」

更に何かにつまづいて、ベッドから落ちる。

「にゅ……………とうやうるさいよ」

「ええ、大人なんだから静かに寝れないの?」

アイは目元を擦りながら、香里は起こされて不機嫌な顔で二人は起き上がる。

「香里!　なんでお前はアイを止めずにそれに乗っかって行動する

んだ！」

半目でこっちを睨みつけ、香里は少しの間静止する。間を空けて平坦な口調で口を開いた。

「アイが『。』を行動したい』と言った場合、私がそれをしたくなければ反対するけど、藤谷とお風呂及び睡眠はしたかったから賛成しました」

ああ、駄目だ、これは何言っても駄目だ。

「俺はどこで寝ろと？」

「……」

香里がベッドを指差す。

「君達は？」

「……」

再度ベッドを指差す。

「アイ寂しい、だからとうやと寝たい」

枕にしがみついて今にも泣き出しそうなアイの表情は正直卑怯だ。

考えてみれば、ここまで一人で旅して来て、俺を頼ってるんだから邪険にはできない。まだこの少女には謎の部分は多く残ってるが。

「しかし、君も子供じゃないんだから、そのへ……………んわきまえ
……………今日だけだぞ」

「わーい」

二人で声を合わせて喜びやがって、今日はクーラー強めにかけよ。

藤宮藤谷、女の涙にとてつもなく弱い男である。

七話

疲弊、疲労、とにかく疲れていた。藤宮藤谷は疲れきっていた。

「とうや、お風呂入ろ」

悩みの種が扉を開けていらっしやった。アイが来て早くも一週間が経過した。

まだ謎の多い少女だが、生活するには困らない位の情報は得れた。

とにかく甘えてくることだ。つか、度合いがおかしいんだよ、何するにも一緒しようとする。香里だって毎日いるわけではない、泊まるのは週に四日位だ。

毎日いるように錯覚するのは、家に帰って朝になったら既に我が家にいるから………毎日居ると言っても過言じゃないなこれは。

「おふろ」

ゆさゆさ、ゆさゆさ、ガタガタ、ガクガク。

「死ぬわ！ 揺さぶられっ子症候群になるわ！」

「子供しかないよ？ とうやがなるやつじゃない」

気付けば隣に座っている少女（同い年）は、稀にまともな突っ込みをいれてくる。いつもは幼い口調と行動ばかりなのに、いきなりのカウンターに気絶しそうになる。

「おふる」

ガクガク。

「ええいやめんか！ 風呂ぐらい一人で入りなさい。子供じゃないんだから」

何時もならこの辺で『とうやー、一緒におふる』とか言つて割り込んでくる人は今日は家に帰っている。発言が具体的なのは何度も言われてるからである、言わずもがな。

「じゃあ私は子供です」

「なんと言おうと入りません」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！」

ただっこ、漫画なので目にする子供が欲しいものを買って貰えないとする行動、実際目にするのは初めてだが、同い年の少女、国外産なので発育が実はよかったりなんかする少女がやると精神的によくない。

「ぶうー」

ただっこするのに飽きたのか、頬を膨らませてこちらをジッと睨みつけてくる。

「わかったわかった。今日は一緒に寝てやるから風呂は一人で入りなさい」

ぱあっ、今効果音が見えた、後ろに効果音が見えた。それぐらい綺麗に笑うと、嬉しそうに階下へと駆けて行った。

基本的にアイの事は香里に任せていて、風呂も寝るのも一人は嫌がるのを香里は付いていてくれる。

明日辺り感謝の気持ちを込めて朝御飯でも作って待ってようかな。

そんな事を考えながら読みかけの雑誌を拾いあげ、中断していた所から読み出した。

七話 2

「藤宮藤谷」

フルネームで呼ばれた直後に頬を引つ張り上げられた。人間の体を頬だけで引つ張り上げるのは大変よくない。

上がったのは上半身と言っても、頬にかかる負荷は半端じゃない、伊達じゃない、冗談じゃない。

「痛い！ 凄く痛い！」

引つ張り上げられている時は、奇声に近い叫び声をあげて、解放された今はその相手を睨みつけた。

「ぐっもーにん藤谷」

そこには冷たい殺気を放ちながら、笑顔を張り付けた香里さんがいらっしやった。

「その横で藤谷の奇声にも動じずに寝てる子はどちら様？」

笑顔は張り付いたまま、しかし、声からも放たれる殺気からも怒ってるのは明白な事実、下手な事を言えば何されるか。

「いや、その、アイがね、その、ね、ね」

「うん、それで？」

「一緒にお風呂入るって聞かなくてしょうがなかったんだ」

「……………今日、泊まるから、添い寝は断らせない」

「いや、俺が緊張して寝れなく……………」

「答えは聞いてない」

「……………はい」

もそもそと背後で布団が動く。

「おはよ、みみもおはよう」

朝から上機嫌な藤宮アイさんである。寝起きというものは基本この少女には存在せず、常にトップギア、ハイテンションだ。

「おはよう、今日はアイの服を買いに行くわよ。いつまでも私の服と自前の一着じゃ持たないわ」

「ああ、それに関しては俺も考えてた。香里に付き合って欲しいと頼もうとしてたんだよ俺も」

「あら……………」

何を考えたか香里は口に手を当て、なぜだか頬を赤くしている。

「ついに私の苦勞も報われたのね」

「ええい、下手な泣き真似すんな。買い物に付き合ってくれと言っ

「ただ」

「知ってるわよ、それくらい」

「……こいつめ！」

ギリギリと奥歯を噛んでどうにか怒りを抑える。

「でも、その気になったら直ぐに言ってね」

そう言っただけで柔らかな笑顔を浮かべた香里は、久々に態とらしくはなく自然に見えた。

「ねえねえとうや、昨日は暖かったね。とうや寝惚けてギョッてしてきたし」

「藤宮藤谷君、言い残す事は？ 後三秒お祈りの時間をあげるわ」

「えっ！？ それってなにもできな……」

「執行」

まさか完全に覚醒していたのに、そのまま悪い意味の睡眠へと逆戻りするのは全く思わなかった。そう思いながら闇の中へと落ちていった。

七話 3

「ぐ……無茶苦茶しやがって」

頭を押さえながら机の前に腰を下ろす。

四角い形の机に朝食を並べ、四角の全ての辺に皆座って頂きま……
……？

なぜ三人しかいないはずなのに、全て埋まる？

「やあやあ、おはよう藤谷君。久々でボクの事忘れてないよね」

「先輩いつの間に……」

黒崎舞、いつものように人指し指を立てて朗らかに微笑むその人は、
ちゃっかり茶碗にご飯をよそって、鰯のひらきまでおかずにキープ
している。

「それでそれでこの子は誰かな？」

誰、と言われるとどう説明すりゃいいんだ。考えてる間に香里が代
わりに返答した。

「私と藤谷の娘よ。ちょっとした事情でこんな大きくなったの」

「あらまあ、凄いねえ。やるね藤谷君」

アイはアイで空気を読んでか読まずか、パパー、とか言ってるし、

先輩は珍しく親指立てて笑ってるし、スーパーレア位だぞカードゲームの。

「スーパーレアがレアリティ最高位のカードゲームもあるから気を付けて」

「俺の心ってそんなに分かりやすい？　つか、実は俺喋ってる？　言葉にしてる？」

「理由は簡単、あ・な・た・わ・た・しが心で通じあってるから」
一々間を空けて強調すんな、そういう返答を期待してるんじゃない。

「さてさて、話は逸れてしまいましたが、改めて、頂きます」

先輩の音頭で皆声を揃えてから、朝食に箸をつける。先輩は態と聞いたようで、アイの事は事前に香里に聞いていたらしい。

「そういえばさ藤谷君は、アイちゃんはアイなのに、美々は香里って呼ぶのかな？」

「はい舞、座布団だよ。本当に良いところに突っ込みを入れてくれた」

「アイは同じ姓なんだから、アイと呼ぶしかないじゃないですか。香里の方はちゃんと最近はおおりんって可愛く呼んでますし」

後者は遊び心で冗談を言ってみたが、香里の反応はというと、箸を握りしめてワナワナと震え、余波で机も震えている。

「……………藤谷！ギリギリアウト！名前関連だったら藤谷の宿題はもう終わってる」

アウトか、別に残念でもな……………くないな。宿題が終わるのか、いくつか真面目に解けない問題もあるしな。

「藤谷君、仮にも生徒の中でも無駄に一番責任が重い役職の人がいるんだからズルを考えちゃあいけないよ」

お決まりのポーズを取って、目に鋭い光をともしながら偉い人は笑った。

先程から静かなアイは、箸で器用に鰯の小骨を取り除いていた。

七話 4

所は大型のショッピングモール、内部は女性物の服を中心に、他にもアクセサリー類等々販売していて、映画館まで中にある始末。

藤谷は上京したての田舎者の様に辺りをキョロキョロと見回し、感嘆の溜め息をついた。

ここまで駅までの徒歩を入れて一時間弱、活気のある雰囲気には吞まれて疲れもどこへやら。まだその辺子供なんだな自分も、と藤谷はおかしな悟りに辿り着いた。

アルファベットのVの形をしたショッピングモールは、西が衣料関係、東が食料関係、合わさった中心に映画館や家電等が販売されている。

案内を眺めて、更に感嘆の溜め息を吐き出す。

「藤谷、迷子にならないようについてきてね」

平日とはいえ、かなりの人で賑わいを見せていた。中には夏休みを利用して来たと思われる、学生らしき人間もいる。

「ああ、子供じゃあるまいし。それに俺がいなくなつて、目的はアイの日用品なんだから最悪アイにお前がついてて……………くれれば……………」

香里と先輩とアイは並んで歩いていた。うん、その背中について行つてたんだよ、背中を見てたんだ。気付いたら、似たような服を追

い掛けて、知らない人に長々と語って………言われた直後に………
…迷子になって………

マズイ、何がマズイって恥ずかしいのと、香里に何を言われるかわからない。

不幸中の幸いは自分で言った通り、俺がいなくても問題ない事だ。
不幸中の幸いと思ってないと、香里の罵倒の言葉に耐えられそうにない。

「お兄さんさつきからキョロキョロして迷子？」

背後からそんな声が聞こえる。辺りにキョロキョロしてる男性はいない、恐らく自分に声を掛けてきているのだろう。

「ねえってば！ 無視すんなよ」

振り返る。

中学生位の少女がいる。髪を二本に分けて、いつぞやに香里もやっていたツインテールというやつ、とピンクのワンピースが目立つ少女、切長の目がこちらを値踏みするように見つめてくる。

「ふうん、素材は悪くないけど服のセンスダメダメね」

普通に値踏みされていた。

「んで、君何？ 急に声掛けてきて」

逆ナン、なんて言葉を最後に付け加えようとしたが、そんなわけな

いじゃん、みたいな反論が返ってきて、論破されそうなのでやめておく。女性との口論に今まで勝った例がない。

「ん？ 迷子のお兄さんが可哀想だから声かけたの。私ちょうど今暇だから付き合ったあげる」

そう言って少女は頬を吊り上げた。

七話 5

「あのね、知らない人に声をかけちゃ駄目だろ。君はまだ子供なんだから、それに……」

「ああもう！ うっさいうっさい、あたしは子供じゃないっつーの！ 君の二つ下なんだよ」

「二つしただからって……え？ 俺の事知ってるの？」

俺の年齢が分かるって事は知り合いだよな。

だが、生憎藤谷のデータバンクにはこの少女のデータは無かった。この少女に対していくつかの仮説が浮かんでは消えていく。

「黒崎椎子^{くろさきつこ}、君が今日一緒にここに来た失恋女の妹よ」

「黒崎って事は、会長の妹か……失恋？」

「だからそう言ってるでしょ。オウム返しすんな。失恋したって言っても未練たらたらよ。直ぐに会いに行くんだもん」

へへ、と相槌を打ち、先輩を振る奴ってどんな奴なんだろうと考えていた。

先輩と言えば、人望はあるし、世話焼きでよく気が付く人だ。外見だって今は変わったが、可愛い人の部類に入る。既に付き合ってる人でもいたんだろうか、奴とやらは。

見たことない謎の奴に思い馳ている所にとげとげした声が聞こえてくる。

「ボーツとしないでよ。君、迷子で暇でしょ？ 少しあたしに付き合いなよ」

そう言つて椎子は踵を返し、スタスタと人の流れに乗つかつて歩いて行ってしまう。ついて行こうにも、この人の流れに乗るのが難しく、ハンジージャンプを降りるに降りれず、タイミングを計つて人みたいになる。

「早くおいでよ」

催促の声と同時に上手く乗れて、椎子の後を追走する。

「それでさ、お兄さん名前なんていうの？」

「藤宮藤谷、聞いてたんじゃないのか？」

「聞いてたよ。でもさ、名乗ってもない人間に急に名前呼ばれたら嫌じゃん？ そっから良好な人間関係築くの難しいし。名前聞いたのは君を呼ぶ権利を手に入れたかつたみたいな」

言葉使いは良くないし、年上を君呼ばわりするやつだから、悪い評価をしていたが、少し見直す必要があるかもしれない。流石に先輩の血筋ということか、人の話をあまり聞かないで自分のやりたいことを通そうとする所とか。

「一応年上だし藤谷さんとか呼んだ方がいい？」

「好きに呼びなよ。別に年上年下あまり気にしないし」

「んじゃ藤谷君、あたしの事はしいって呼んでいいよ」

「なんか嫌だから椎子と呼ぶ」

「まあ良いけど」

「それで何か椎子は見たいものあるのか？」

「まあ色々と。藤谷君とかね」

七話 6

「つーかアンタ馬鹿でしょ!？」

指を指されて力強く宣言された。と、思ったら肩で息をしだした。

「なんだよ急に」

「はあ？ 何が急よ。迷子の子供がいれば迷子センターに、道がわからない人がいたら教えてあげようとして結局わからなくれあたしに聞いて、老人が荷物持ってたら車まで運んで」

「しょうがないだろ。迷子は放っておけないし、道がわかんないなら教えてあげたいし、老人が荷物持ってたら持つてあげるだろ普通に」

子供に関して昨今物騒だ。こうやって周りの人間が気を付けて、弱い者を守らなきゃいけない。

「なんでそんなに見付けられんの？ こんなに人だらけなのに……
…センターでもついてんの？」

「なんだかんだ文句言っても、手伝ってくれる椎子が優しいやつだ
ってわかったからいいよ」

「なっ、あたしはよくない……………」

ぶつくさ言いながらも迷子センターを覚えてくれたり、道を教えてくれたり、荷物運びを手伝ってくれた。なんだか微笑ましくて自然

と頬が緩む。

その本人である椎子は頬を赤で染めて、そっぽ向いて恥ずかしがってるが。

「とうやー!」

「この声は」

人の喧騒の中でも藤谷の耳に響く、楽器のような綺麗な声が聞こえる。そんな声を持つ知り合いは一人しかいない。

藤谷は声のする方向へ振り向いた。

腹部に衝撃、きゅうしょにあたった。藤谷は大ダメージを受けた、藤谷は駄目になった。

膝について腹部を押さえる。痛いというか気持ち悪い。

恐らく走ってきて、勢いを殺さずに頭突きを放った少女は申し訳なさそうな顔をして藤谷の顔を覗きこんでいる。

「……………アイ、人間には、な。弱点が豊富にあるんだ、だから気を付けてな……………」

「う、うん。ごめんなさい」

「んじゃ、あたしは行くわよ。目的は達成出来たし、じゃーねー」

ようやく苦しみが和らいできて、立ち直った頃、椎子は別れを告げ

て、人混みの中に消えていつてしまった。

目的って、人助けだったのか。そんなわけないよな。

「そっぴゃアイは服決まったのか？」

「うん、綺麗なの一杯だよ。だから、みみ達がお昼にしようって」

そう言われて携帯で時計を確認する。気付けば昼を少し過ぎていた。思ったより時間が経ってたらしい、体内時計はそれなりに自信あったのに。

「あら、迷子センターに行こうと思ってたら会えたわね」

嫌味な笑みを浮かべ香里さん降臨。

七話 7

本当になんなんだろう。自分の事ではないけど、妙に憤る。

たしかに言ってる事は間違ってるけど、人の手は二つしかないのだ。一つは人を助けても一方は自分の為に使うべきだ。本当の人助けとはそういうことだろう。

あれは行き過ぎている。自己満足、捻た見方すると偽善にも見える。

自分には関係ないのだからと言えばそこまで、だが、当事者は姉で、関係ないと言い切れない。

「本当にバツカみたい」

他でもない、アイツ、藤宮藤谷に対して悪態を吐く。

あんな男の為に態々休日使って、朝から姉を尾行までして、結果はこれ、休日の無駄も良いところである。

何で我が姉はあんな男を好きになったのだろう？疑問しか出ない。アイツと会ったのは興味本意、姉の外見を激変させた原因だ気にならないわけがない。

顔を見るだけのつもりだったが、会ったのは失敗だった。顔だけ見ればそれなりに良かったが、内面が普通じゃなかった。

気分転換、転換だ。この苛々と鬱憤とムカムカ力を友達と騒いで忘れる事にする。

早速取り出すは便利なコミュニケーションツール携帯電話、ポケットから取り出した時に異変に気付く。

「うそ……………なんで……………」

ショッピングモールの駅方面の出口へ歩いていたが、驚愕のあまり足を止めてしまう。周囲の人間は苦言を出しながら椎子を避けて歩いていく。川を流れを断つ石の様になっているが、あれはそれも含め自然の美しさとして片付けられるが、今の椎子は平たく言うことだの迷惑でしかない。

少し平静を取り戻した椎子は、塞き止めている石をやめ、道の端に移動する。携帯電話を入れていたポケットに手をつ込み、無駄だと思いが辺りを見回す。

認めたくなかったが落し物をしたのだ、とても大事な物、十字架のストラップ、大事な友人に貰った物、友情の証とも言える物をなくしたのだ。携帯なんかにつけるのが悪いかもしいが、その辺にはちゃんと理由もあって、と誰にしているかわからない言い訳を始めようとした所で我に帰り駆け出した。

あの男に声をかける前に時間を確認した時には確かにあった。なら、きっとあの男と行動していた時に落としたのだ。

速く見付けなければならぬ。大事な友人がどこかに行ってしまうような錯覚に陥りながら懸命に足を動かした。

七話 8

「あー疲れた。あら、誰かと思えば迷子の藤谷ちゃんじゃない、寂しくなかった？」

ちなみに香里のこの嫌味、合流してから三度目である。全く同じ発音と声色とテンションで発してる。リピート攻撃、むしろ口撃、痛くて仕方がない。

「とうやー、服一杯だよ。帰ったら着て見せるね」

そして香里とは反対の隣を歩く白い女の子に密かに安らぎを感じている。もちろん買った荷物は藤谷が全て持っている。多量にあるが、一体父親は香里に幾等渡したのだろう。

アイの服やら何やらの日用品を集めるための費用は、もちろん父親から出ている。それを受け取ったのは何故か香里だ。たしかに服なんかの計算は俺には出来ないから、適所ではあるが。

「お昼は何がいいかなー。折角だから豪勢に行きたいかなあ」

こちらは先輩、パンフを片手に辺りを見回しながら先頭を歩いていた。

凸みたいな形の陣形を取りながら移動していると、先輩の携帯に電話が入ったようで、誰かと話を始めた。

「ねえ藤谷、私もお昼は豪勢に行きたいかな。そうよね、アイ」

「うん、いきたい」

つまり、つまりだ。察したくはないが察するしかない。

「そ、そうだな。お手柔らかに豪勢に行きたいな」

声が震え、裏返し、情けないまで汗が吹き出る。このショッピングモールは基本的に高級思想だ。豪勢の中の豪勢に行かれたら一人分さえ払えるかどうか。

「大丈夫よ。藤谷の財布の中くらい予想はつくわ」

そっか、そろそろ慣れてきた声のない一方通行会話、不公平読心会話でもいいが、つまりはギリギリまで財布の中身は殺されるのだろう。グッバイ、俺の柔らかな女の子達。

「そういう本やDVDが欲しいなら実物を楽しめばいいじゃない。これはパンがなければ、のやつより現実的よ私がいるわけだし」

悔しい、悔しいが香里の体、身体、ボディは………………やめよう。これ以上語ると俺の評価が著しく下がる。

「アイ、日本の美味しい物が食べれるわ。柔らかな女神達の代わりにね」

「ん？ でも、おいしいもの嬉しい」

「ちょっとストップ」

いつの間にか電話を終えたらしい先輩が反転して、俺達を制した。

藤谷は涙目で、札の偉大なる人々に別れを告げていたので、滲んでよく先輩が見えなかったりした。

「妹が来てるらしいんだけど、何だか藤谷に君に用事があるみたい」

なんでだろ、と先輩は頭に疑問府を浮かべ、人指し指を頬に当てるレアな仕草をしていた。

藤谷はその時、ガシツと、肩を掴まれた。振り返ると二本の尻尾を揺らしながら肩で息をする椎子がいた。椎子がいた、と言っても揺れる尻尾を付けた頭しか見えないが。

「ちょっと……はあ……ふう、ストラップ、その十字架のやつなんだけどストラップ知らない!？」

至近距離で必死で、切実な表情をされて、その勢いで一步引いてしまっ

「あ、ああ、これだよな。君が走って行った時に落ちてたよ」

ポケットから銀のストラップ取り出す。言った通り、さっき拾った物だ。よく手入れがされていて大事な物だと思って拾っていた、姉である先輩に話を聞いて、椎子の物でなければショッピングモール内の落し物センターに届ける気でいた。

椎子はそれを引たくるように藤谷の手から奪い取り、抱き締めた。張り詰めていた力が抜けたらしく、膝を折ってしゃがみこんでしまった。

「ちょっとしい、折角拾ってくれてたんだからお礼くらいは言っべきじゃないかな」

珍しく責める口調でしゃがみこむ椎子に対して先輩は言った。

「……………その、えと……………ありがと藤谷君」

「どういたしまして、俺の無駄な視野も役に立っただろ？」

少し晴れやかな気分になり、藤谷は椎子に笑いかけてみる。

立ち上がった椎子は笑い返した。

「まだ終わらないわ。ご飯がまだだもの」

このままフェードアウトして逃げ出す予定だったが、肩をしっかりと捕縛され、身動きが取れない。

「何でもこい、どうせ使いきるなら何でもこい、うおーん」

「さあ行きましょう」

「ほら、君も来いよ。可哀想な俺の奢りだから」

「えっ？」

そう言い残し、藤谷は断頭台へと連れていかれた。

「しい、優しい人でしょ？」

「ま、まあまあね」

姉妹仲良く並んで、断頭台へとついに行った。

八話

「執行」

この抑揚のない、平坦に発音された一言で藤宮藤谷のある夏の朝は始まった。

「ふぐお！」

寝ていたからこんなに大きいリアクションなのか、寝ていたからこそこの程度のリアクションなのかは知らんが、酸素強制排出という藤宮藤谷の人生史上最低の起き方をし……………た事は何回もあった。

うん、意識が覚醒してきた。この起こし方をしたであろう人物に、これまで色々な非道い起こされ方を受けてきた。思い出したくない。

「あら、起きたの？ 偶然この部屋で一番重い物が藤谷の腹部に落ちて、起こす手間が省けて助かったわ。あははは」

藤谷は腹部に乗っていた父からの土産『愛を射る狩人の像』を持ち上げ、適当な位置に戻す。女性の細腕じゃこれを動かすのは重労働だよな、なんて思ったが何を隠そう今更名前を出す、相手は香里美々さんだ。なんかよく解らん物理の理論を持ち出して、移動させただろう。

ここで初めて藤谷は香里の顔を見た。笑顔を張り付け、あははは、と態とらしく笑ってる。一言、なんか知らんが香里さんはマンモス機嫌が悪い。最近ようやく表情の少ない香里の機嫌を押し図れるよ

うになった。

「お、おはよう、愛を射る狩人の像も困ったもんだな。勝手に俺の腹に乗るなんて」

アハハハ、とアメリカンに笑ってみる。

「そうね。愛を射る狩人の像も怒ったんじゃないかしら、夏休み前の約束忘れて八月入って一週間も経った野郎相手に、によほほほによほほほって何だよ。素直に怖いよ、本当になんかすいません。

……… って、約束？

「あ、ああ、あははは、そ、そそそそんな事もありましたねえ………」

人生十六年生きてきて、言葉というものはどうやって出すかなんて頭で考えなくても直ぐに出せるものだと思ってたが、ピンチになると言葉というものは自分のものではなくなるらしい。

「遺言は聞いてあげる。だって貴方が大好きなんだもん」

凄く可愛い笑顔、台詞も聞くだけだととてもなく嬉しいし、声も仕草も申し分ない、まるでゲームやアニメのワンシーンのようだ。状況が、違えば、な。

「いやあ、あの、香里さん？ 今死んじゃうとアイとか悲しんじゃうかなあ………とか？」

「最後の言葉が他の女の子ね、ざんねんねん」

藤宮藤谷、笑顔の死神の手によって、短い人生に幕を下ろした。

八話 2

「執行」

「ふぐお」

本日二度目の酸素強制排出による目覚めを受け、寝覚めは最高に良かった。良くなきゃまた眠らされて、起こされるというドSループが待っている。

「おはようございます香里さん。いやあ、良い天気ツスね。こんな日は出掛けたいなあ、香里さんと二人きりでどこかに行きたいなあーっ!!」

カーテンを開けて、腹が立つくらいの厳しい日光を受けながら、命掛けで香里を早口で巻くし立ててみた。

「あら、アイの事はいいのかしら？」

い、意地悪いよこいつ、よく存じあげてるが。

「い、いやあ、アイも俺達と年変わらんのだから大丈夫さ。今日はどうしても香里さんと出掛けたくてね、そしたら……その残りの宿題なんかも手伝って頂けたら……」

「後に本音が出なかったら高得点だったのに、まあいいわ。楽しかったら手伝ってあげる……と言いたいけど、それで接待みたいな感じになったら嫌だから、手伝ってあげる。だから、自然体でお願い」

「あ、ああ」

『お願い』と言った辺りが妙にしおらしかったので、何だか調子が狂う。

準備するから、と小さな声で言い残して香里は退出、残された藤谷はベッドの上に鎮座する『愛を射る狩人の像』を片付けた。

「えー、やだやだ、アイも一緒にいい！」

予想通りというか、見えてた未来というか、案の定アイはだだをこねた。

「お願いします、留守番してください」

男、いや、漢と書いて『ふじみやとうや』と読んでほしい。その漢が説得の為にしたのは、

「あら、なんで自宅の居間で土下座なんてしてるの？」

熱い血潮燃えたぎる漢に対して、香里さん、もとい氷の女王様は冷やかな言葉で漢の血潮を凍らせた。

「むゝ、しかたないなあ。良い子でお留守番するから、おみやげ忘れないでね」

「ああ、お土産な。任せてくれ」

お土産と言えば子供頃に『おどさん』って読んでたなあ、なんて回想に浸ろうとすると氷の冷たい一言で現実に取り戻される。

「さつさと出ましょ、約束忘れ土下座漢さん」

とてつもなく不名誉な名前をつけられ、そっぴや香里っておかしいくらい記憶力良いんだっただあ……なんて事を思いだしながら、どれくらいこのあだ名で呼ばれるのだろう、とか考えて……

「うっさい長い、さつさと出発」

「ラジャー」

敬礼と共にアイに別れを告げて熱い戦いへと赴くのだった（ただ外が暑いだけ）。

八話 3

「さて、一体どこへ連れて行ってくれるのかしら」

補足だがこの香里の言葉は、俺に対しての疑問ではなく。独り言、呟きである。言うまでもなく俺への嫌味という意味ですが。

藤谷は思考を張り巡らせ、脳を使えるだけ使い、考える。香里が文句を言わず、尚且香里が満足する場所………わからん。

「香里さんはどこか行きたい所ありませんか？」

「あら、誘っておいて場所も決まってるなんて最低ね。貴方が決めるべきだわ。私はそれに従うから」

『従う』なんて低頭な言葉を使ってるが、これは必ず良い所に連れてけという遠回りどころか直線的な命令だろう。

藤谷はそこで言葉に詰まり、一旦静寂。

蝉の鳴き声が藤谷の耳に痛いくらい響きわたる。

「ふう、冗談よ。行きたい場所は決まってるわ。約束のりぞーとすばよ」

「ああ、そっぴやそんな約束あつたな」

やっべ完璧に忘れてた。何故か平仮名のりぞーとすば。

「ちゃんと水着も持ってきてるわ。もちろん貴方の分もね」

そう言つてちよつと大きめの鞆を見せてくる香里、たしかにそれなら水着にタオルぐらいは余裕で入りそうだ。

「それじゃあ行きましょう」

それから電車に揺られ、香里に先導されながら辿り着いたのは、

「……………なあ、香里さんや。ここはどこですかいな？」

「なにつてりぞーとすばよ」

ハッキリとそう言い放つ香里、そのりぞーとすばとやはどう見ても……………

「これさ、ホテルだよな。しかもなんだか格式というか、なんというかその辺のガキが入れるやつではない感じの」

おかしいと思つたんだよ。テストの件の時に聞いたりぞーとすばとやはこんなに遠くないし、随分電車に揺られたし、格式高そうな街並みをスルスルと我がもの顔で歩く香里とかおかしいと思つたんだよ。

「気にしないでいいわ。父がね……この招待券くれたのよ。ペ
アね、出来ればアイも連れてきたかったんだけど」

父、香里はあまり父が好きじゃないらしい。母が死んでから家には
全く帰らず仕事に没頭する父、やっぱり父親なんだから気にはして
るんだろうな。

「アイもちゃんと気にかけてくれてたんだな。んじゃ行くか、と言
つても中は全くわからんから後ろを歩きますが」

「情けないわね。でも任せなさい」

とても男前な台詞を言つて香里は歩き出した。

家族、香里も俺も家族に対して傷があるんだな。いつかは二人とも
向き合えるかな。

八話 4

嘘だろ、夏真っ盛りだぞ？いくらなんでも空きすぎだろ。

普通のりぞーとすばだったら、泳ぐどころかつかるだけと聞いたぞ。

現在、りぞーとすばの室内プールにいる。流石は高級ホテル内部のりぞーとすば、周りにいる人も何だか雰囲気が違う。藤谷は自分が酷く場違いな気がしてならなかった。

というか遅いなあ……………本当に女性の着替というものは……………

「お待たせ」

……………世界は停止した。

「……………何固まってるのよ。そういう時は感想でしょ」

香里は水着だった。簡素に説明するとそれで済むのだが……………

「い、いや、そのマジで似合って……………る」

何言ってるんだ俺、まだしっかりと見てもいないのに、なんか反応で言ってしまった。

というか凝視できない。チラチラ見てしまう。変態じゃないんだから。

「ちゃんと見てよ。結構勇気いるのよこの格好」

香里は頬を染めながら、気恥ずかしそうにしてるが、四文字で表すともじもじ、もじもじしてる。それで香里美々のどこかがとても強調されている。

「いや、本当に似合ってる。だからと言ってあんまり凝視するのは失礼かなあ……………って」

「その褒めてくれるのは嬉しいけど、貴方のためにこの格好してるんだからちゃんと見てほしいな」

なんだキャラ変わってるぞ香里さん、つか可愛いなチクシヨウ。

よく解らない甘ったるい空気に包まれている事に気付くまでこのやりとりは続けられた。

「わ、笑わないでよ!」

「い、いや、笑って……………ぶふないよ」

二人でプールで泳ぐ事にしたのだが、香里が耳まで真っ赤にして文句を言ってるがなんでかと言うと、

「私が泳げないのそんなにおかしい!?!」

そういう訳だ。

それなのに少し深めのプールに入る事を提案した香里は、藤谷の肩に掴まったまま小さくなっていた。

「そろそろ足がつかないんじゃないか？」

「うゝ」

ヤバイ、すつげえ楽しい、泣きそうになってる香里すげえいい。

長方形のプールだが、中心に行けば行くほど深くなるプールだ。藤谷は香里が怖がつてるのを見るのが逆に怖いくらい面白かった。

「もうだめ……」

「こ、こら！ 暴れるな危ない」

足がつかなくなったのだろっ、暴れ出して掴むどころかしがみついてきた。

「……………」

香里は藤谷の首に腕を回し、後ろから抱き締めるような形になる。

気まずくはなく、何だか暖かい空気になる。不思議だった。

八話 5

いつからだろう。香里といると安心する。

いつからだろう。香里の見たことない一面を見るとドキドキする、でもそれがとても心地いい。

いつから、いつから香里といるのが当たり前になってる。それがずっと続くと思っていた。

「二人で来たわりに結構楽しかったな」

二人で室内プールを楽しみ、屋内の窓から見える空が茜色になるまで遊んだ。

「……………そうね、楽しかったわ。うん、とても楽しかった」

先程から香里の様子がおかしい。丁度出ようと話した当たりからか、何だか沈んでるといつか、暗いと言いか、何だかいつもと違う。元々明るくはないが、些細な変化にまで気付ける位は仲は深まったようだ。

何て関心していると香里がロビーで立ち止まった。藤谷はそれに合わせて振り返る。

「どうした？ 何か忘れ物か？」

「ううん、もう忘れ物はないわ。今までありがとうございました。さよなら、藤宮藤谷君」

顔を伏せていた香里がそう言い切って顔を上げる。笑ってた、見たことない笑顔で笑っていた。言ってる事は意味分かんないのに、その笑顔にもドキドキしてる自分がいることに藤谷は混乱していた。

「なに言ってる……」

「美々さん！」

えっ、と間抜けな声をあげて藤谷は振り返って香里の名前を呼んだ男の声を探した。

「待たせちゃったかな」

「いえ、友人に付き合ってもらっていたので全然大丈夫です」

えっ、再度間抜けな声、背が高い眼鏡を掛けた男、爽やかな印象を受ける男と香里が藤谷を挟んで仲良さそうに話してる。

「君が藤宮君か、話は美々さんからよく聞いているよ。美々さんと仲良くしてくれてありがとう、今日も付き合ってもらっちゃったみたいですね」

とても丁寧な姿勢、笑顔も気取っておらず、使いたくない一言を使うとカッコいい。

というか何をコイツは言ってるんだ？まるで香里の保護者か所有者みたいな言い回ししやがって。

藤谷はこの男の発言に対してどんな返答をしたのかよく覚えていなかった。聞きたいことがあった、聞かなきゃいけないことがあった。

「香里、これは……どういう？」

「藤宮君、彼はね、私の婚約者なの」

胸の真ん中辺りに冷たくて硬い物を無理矢理押し込まれたような錯覚に陥った。

一つは『藤宮君』もう一つは『婚約者』この二つのワードが衝撃だけを胸に押し込んでくる。

「こ、こんやく……しゃ？」

口が上手く動かない。香里がなに言ってるのか理解できない。いや、したくない。

「そう、名乗るのが遅くなってすまない、僕は柏原透かしわらとあっていうんだ。藤宮藤谷君だったね、僕の名前、特徴なくて覚えにくいだろ？君みたいに特徴ある名前が羨ましいよ」

一々笑いかたも爽やかで、素敵で頭が狂いそうになる。違うな、理由は別にあるんだ狂いそうになるくらい理解できない理由が。

「……………え、ええ、よくからかわれますよ……………」

自分でも何を言ってるのか分からない、こいつと世間話する気なんてないのに、香里に聞きたいことが沢山あるのに、男、柏原さんは笑って返してくる。

「気を悪くしたのならすまない。いや、僕は本心から羨ましいと思っ
ていてね。別に敬語は使わなくていいよ。年は……………まあ美々
さんと一緒なら五つ位しか……………いや、五つも違うのか、老けたなあ
僕もあはは。でも、敬語はやめてくれよ、年を感じたくはないんだ」

楽しげに話している柏原さん、藤谷の耳にはそのほとんどは届いて
なかった。背後にいる香里がどんな表情してるのか、今一体何でこ
の人と会話しなきゃいけないのか、もう考えるのを止めて逃げ帰
りたかった。

「透さん、そろそろお父さん達が来ますよ。行きましょう」

「あ、ああ、そんな時間か。父さん達がいなければ是非藤宮君を食
事に誘うんだけどな。すまないな、今度また僕のオススメをご馳走
するから」

何切り上げようとしてんだよ！まだ話があるよ！どこに行くんだよ！

口には出せなかった。何故か『はい、さようなら』そんな事を藤谷
の口は紡いでいた。

そして透さんはどこかに歩いていき、それに香里が従う、最後に香
里は振り返った。

「時間切れ、だよ」

寂しげに笑った香里の顔は多分永遠に瞼に焼き付いただろう、目を閉じる度にそれを再認してしまうだろう。

いなくなる、いなくなる、いなくなってしまう香里の背中を見て、もう痛くて苦しくて、どこが痛いのかも苦しいのかも分からなくて、でも最後まで泣けはしなかった。

九話

あの後、香里と別れた後の事は全然覚えていない。

今分かる事はベッドの上に居るって事だけ、それ以外は何にもない、空虚だ。

さつきから香里の顔が渦巻いてる。会った時からの記憶がボロボロと流れ出してる。そして、最後に見た笑顔が出てきた時に記憶の再認は終わる。そこから空虚を感じて、辛くなるとまた香里の顔を思い出す。

叫びたかった、泣きたかった、香里に掴み掛ってどういいうことかと聞きたかった。でも、出来ない。

いつも俺は自分に自信がなかった。今の父親に引き取られた時からだ、怖かったんだ。本当にこの家に居ていいのか、だから父親の真似をした。

『自分が損しても人を助ける』

馬鹿らしかった。損なんてしなくなかった。でも、真似をした。いない子供だと思われなくなかったから、頑張った。

人助けしてる間は皆の中心にいた。人気者だった。そりゃそうだ、損しても助けてくれる奴と理由もなく距離を取る子供なんていない。

それでも自信がなかった。模倣だから、偽物だから、嘘だから、自分じゃなかった。人気者なのは嘘の自分だから、自信なんて持てな

かった。それで今まで生きてきた。そんな俺を香里は好きと言った。
なら、香里が好きなのは…………俺じゃない。

いつの間にか夕食が用意されていた。もちろん用意したのは藤谷だ。
だがよく覚えていない。

「とうや、みみの荷物がなくなってるよ」

「とうや、もう少しでそうじ帰って来るって」

「とうや、どうしたの？」

「うるさいんだよ！！　グダグダグダグダ！　今は！　……
…ごめん」

感情を考えないでぶちまけてしまおうとしていたが、藤谷は無理矢
理自分を冷静にさせた。

アイが泣いていた。

藤谷は頭を掻きむしった。自己嫌悪なんて言葉じゃ今は生温い。自

分を消して欲しいとさえ藤谷は思っていた。

「違うよ、これはとうやの涙だよ。とうやが辛いからアイが泣いてるの」

泣きたかった。藤谷だって泣きたかった。でも泣けない、涙が出ない。

「お前は泣けねえよ。だってまだやる事やってないんだろ」

居間の入口、藤宮宗二、父親が立っていた。

九話 2

「なんだよやることって」

疑問系にはならない、吐き捨てるように言った。

「お嬢ちゃんに振られたんだってな」

「そんなこと話した覚えはないが」

腹が立っている。父親に腹を立てるのはお門違いもいいところだが、感情が荒れるのを抑えられない。

「電話が来てな、今日一緒に家にいなかったら藤谷とは一生道は交わらない、だよ」

相変わらず髭を蓄えまくったその顔は、なんだか怒ってるように見えた。

「ああ、元々身分違いだったんだ。あいつ、すっげえ綺麗なマンシヨン住んでて父親は何かの社長……だったかな。頭だっておかしいくらい良いしさ。俺とは釣り合わねえよ」

「そうかよ。ちょっとアイは外してろ。少し二人で話したい」

まだ涙を止めてなかったアイは、宗二の真剣な声音と表情におされて部屋を出ていった。階段を昇る音が聞こえるから部屋に行ったのだろう。

宗二がズカズカと音を立てて近付いてくる。冒険家、なんて体を使う職業なだけあって、近くで見るとその身体に迫力を感じる。背も藤谷より少し高い。

「藤谷、お前よ。お嬢ちゃんの事どう思ってたんだ。本気で答える」

「どうって、知るかよ。俺が聞きたいね」

「そうかよ!」

左頬に衝撃、壁に体をぶつけた。遅れて頬の痛みが広がっていく。

「なにすんだよ!」

すぐに立ち上がって掴みかかるが、腕を取られて捻り上げられる。そして、投げ捨てるように放され、尻餅をついた。

「どうも思ってたかったのか。面倒見てもらっただけ面倒見てもらって、いなくなったら、はいさよならか?」

「感謝はしてるさ。悪いとも思ってる。好意に乗じて世話してもらった後ろめたさはあったさ!」

惨めだった。言いたくない事まで言っ、見下ろされて、惨め過ぎた。

「そんだけか? お嬢ちゃんと居て思っただけはそんだけか?」

「安心した。香里という時すっごく暖かった」

「じゃあ今は!？」

「……………空っぽだ」

なんか自分が二度と認めたくないと思った感情まで引き出されていた。

「んじゃあ一つしかないな」

「……………」

「欲しい物は手に入れろ。後悔すんじゃねえ」

腕を組んで父親は高笑いした。俺は顔を上げられないでいた。立ち上がれないでいた。

「俺は……………行かない。別に……………欲しくない」

九話 3

「そうか、ならそれでいいさ。なら、ちっと昔話聞いてくれよ」

尻餅ついて立てないでいる藤谷の前に、宗二は上蔵をかいて座った。

「昔な、兄弟つてぐらい仲が良い親友同士の二人がいたんだ。それでな、ある時片方が一人の女性に恋したんだ。すっげえ美人でな、んでもう片方に相談して応援してくれて友達までこぎつけた」

楽しそうに語る父親、藤谷は何か考えようとも思えず相変わらず座ったまま話を聞いていた。

「んでよ、実は相談を受けた男もその女性が好きだったんだ。それを言わないでな、ずっと隠してやがって、そこから笑えるのはその女性はそっちの隠してる男に恋してたんだ」

笑えるだろ、と相槌を求めてくるが、何も反応は出来ない。

「一番笑えるのはよ。知ってたんだよ、二人が好き合ってて、隠してるのも全部知ってたんだよ俺は……………それでもビビって、取られたくなくて、ちっちゃい希望にすがりたくて……………」

鼻をすする音が聞こえる。父親の顔を見ると泣いていた。情けないくらい顔をグシャグシャにして泣いている。

「……………俺って言ってんじゃない」

「ああ、結局馬鹿みたいにその恋をひっかき回して、ようやく降参

したんだよ俺は………んでよ、子供つくってあっさり二人とも死んでやんの……俺は自分を呪ったよ」

「何でだよ、全然悪くないじゃん、父さんはさ」

藤谷がそう言うつとグシャグシャの顔で父親は笑った。

「いや、もっと早くくっついてれば運命ってやつも変わったろうなつてな。それからは後悔しねえように、その子供にとってカッコいい親父でいるようにカッコばっかつけたよ」

「だから、悪くないじゃん………」

気付いたら俺も泣いてた。二人して馬鹿みたいに泣いてた。

「だからよ、後悔しねえんならその選択でいい。でもな後悔するかもしれないなら、やれるだけ今やれ。俺はお前の親父だからな、全力貸すぜ、いや、全力与える。父親は与える物だって親友が昔言ってたからな」

そう言つて豪快に笑った父親の姿は今までで一番カッコ良かった。俺の男としての理想の姿だった。

藤谷は足に力を入れ、手に力を入れて立ち上がった。胸の痛みは消えないけど、軽くなつた気がする。

「俺、俺は欲しいんだ。欲しい物があるんだ親父」

藤谷はそう言つて宗二を見下ろした。

九話 4

そこからは急展開、

「うつしやあ！ 嫁さん取り返しに行くか！」

その一言、むしろ掛け声のような威勢のよさで雄叫びを上げると、親父は俺とアイを小脇に持って外へ出る。

いつも親父が使っててほとんど家にはいない軽自動車に俺達を放り込むと、アクセル全開、とか危険な事を叫びながら車を急発進させた。

「いや待て！ 別に今から行かんでもいいし、どこに行くんだよ！
？ それと、なんでアイまでーっ！ 話を聞け！」

「お嬢ちゃんから聞いた話だと今日を過ぎるとなんか色々とうし
ようないそうだ。だから今日が最後なんだとよ。後、アイ連れてか
なきゃお嬢ちゃんがどこにいるかわからんだろ」

いや、前半は理解したが後半は理解しがたい、なんでアイを連れて
く必要がある。

「アイ！ お嬢ちゃんは今なにやってる？」

「うーん、綺麗なおようふく着て、ごはん食べてるよ」

ばやく藤谷を無視して二人は会話を続ける。藤谷はアイの発言が今
日起きた何よりも理解できないかもしれなかった。

「言い忘れてたな。アイは超能力使えんだぞ！ どうだ凄いだろ」

最後に高笑いを混ぜて、車は更に速度を上げた。

「はい！？ 意味分かんねえー！ー！！」

洗濯機のようにアイと二人で車の後部座席を転がり回った。

さつき、血とか関係なく自分と宗二が似てる、なんて思った事を三百回くらい反省した藤谷だった。

「あっはっは！ 藤宮一家ばくはあーっ！」

「ばくはーっ！」

謎のテンションになってる藤宮一家（一名除く）、除かれた一名事、藤宮藤谷は二度と香里には会えないんじゃないかと悟りを拓いたのだった。

「おら行くぞ！ 突撃だ！」

「離せ！ 離れろ、止まれ！」

宗二はまた脇に二人を抱え、今日藤谷が来ていたホテル入口へと宣言通り突撃するのだった。

ちなみに車はちゃんと駐車場に停めてきている。

「とうや急いで！ みみと誰かがお部屋に入ってた！」

「なんだと！？ こうしちゃいらんないぜ！」

せめてそういうセリフくらいとっておいてくれ……………

やる気満々の親父が入口で止められたのは言うまでもない。

九話 5

私は最低な女だ。だが、娘としては最高なんじゃないかと思ってたりする。

父親の為に御曹司、というのだろうか、それと結婚する。

藤谷の泣きそうな表情が脳裏に焼き付いてしまった。胸がグチャグチャ踏み潰されたように痛む、藤谷の事を考えると少し和らぐ。

だけどそれはしてはいけない。この痛みは罰、でも、贅沢を言えば、本当に藤谷が好きだったってちゃんと聞いたかった。結婚したくないから藤谷を選んだなんて思われたくない。本当に好きだったんだ。ううん、違うよ、好きなんだ。

でも、もう全部終わり、好きな人と居れる幸せな日々は終わった。全部終わり、時間切れ、さよならだ。

冷静になれた藤宮一家（主に藤谷が頑張った）はロビーの隅で目立たないようにこそこそと作戦会議を行っていた。

「それでお嬢ちゃんはどこにいるんだアイ」

「高いところ、33って数字が見えた」

これ一体何階建てなんだ？高いということしかわからん。

「んじゃあエレベーターだな。だが、ガードマンがいるし乗りようがねえな」

「……………あれ、早くも詰み」

やっぱり勢いだけじゃどうにもならなかったんだ。うん、諦めって肝心だよ。ってさっきまでの俺なら言ってたかも知れないが、今は諦めなくなかった、すんごく諦めたくない。

「大丈夫だよとや、あそこのひじょうかいだんってやつを使えば行けるよ」

「でかしたぞアイ！　なら、ここは父に任せろ」

任せろってなんだ、すっげー嫌な予感する。いや、嫌な確証がある。

「というか、アイ凄いな。本当に見えてるのか？」

にわかには超能力なんて信じられんが、あの馬鹿親父にそんな嘘を吐く器量があるとは思えない。

「うん、でもね、あんまり好きじゃない。いじめられるから」

そう言ったアイの顔には陰りがあった。

だけど、今はそんなこと言ってられない。アイには申し訳ないがその力に頼るしかない。

「お前ら！　よおく聞けえい！」

いつの間にかロビーの中心に上半身裸で親父様が立っていた。不思議な口上をしてるが、頭打って死なないかなあ、と結構真面目に藤谷は神に祈った。

「行くよとうや！」

恐ろしく頼りになるアイに先導されて、目立たないように藤谷はそれに従った。

十話

「…………死ぬ、いやマジで死ぬ。本気と書いてマジで死ぬ」

「とうや、急いで！ 速さが足りないよ！」

現在非常階段の……………何階か分からないし、知ったら後悔しそつだから知らない事にする。

一緒に走ってきた筈のアイは平気な顔で前を行ってる。アイの微妙な発言に突っ込む気にもなれない。

「こんなゲームあつたよな。正面から入るか、延々と階段を昇るかっという……………」

「そんなことどうでもいいから急いで、みみが待ってるんだよ」

どうでもいいだど？俺の少年時代の宝を…………マズイふざける余裕もない。

前のアイは以前ペースを変えずに走っているが、藤谷は肺や足と相談しながら手摺に頼るしかなかった。

やべ、本当に今は何階だ。でも知りたくない。

「後十階だよ！」

「やめてえええ、俺の心をへし折らないでええええ！」

「ほらとうや、こっからが頑張り時だよ。へとへとしてる場合じゃない」

「……………いや、辿り着いた喜びにもう少し浸りたい」

「だめ」

その33階の非常階段の扉の前に立っている。ここからはキャラが完璧に男前になったアイ先生曰く、人が監視カメラで見てるそうだからパパッとやらなきゃいけないらしい。

藤谷は深呼吸した。落ち着いて自分の目的を確認して、目を閉じる。

「よし！ 行くぞ！」

「ばくはーっ」

よし、キャラが少し戻った。

扉を開けて小走りで駆けていく。

廊下は赤い絨毯が敷かれていて、ライト一つに至るまで凄く凝っている。自分の存在がやっぱり場違いなのを認識し、それでも、と藤谷は足を動かした。

「部屋はどれだ？」

「そっち、3312だよ」

33階の12個めの部屋か今隣にある扉には『3305』とある。その先のは『3306』よし、香里は近いぞ。

「とうや急いで、来たよ」

この場合何が来たって聞くまでもないだろう。非常階段の扉から人が出てきて小走りで駆けてるんだ。客には絶対に見えまい。

1ずつ数字が増えていく。次、次が目的の部屋だ。

「ここだよ。ああ、急いで開けて、急いで急いで」

アイがバタバタと暴れている。一体中で何が起きてんだ、なんか嫌な予感に刈られながら……………鍵閉まつてるし開くわけないよな。

どうしようか考えているとアイがドンドンと扉を叩き出した。しっかも結構乱暴に。

中で人の動く気配がする。こっちに向かっているようだ。

十話 2

「なんの騒ぎですか一体？」

扉の中から、怪訝な表情の柏原さんが出てきた。最初に会った時より服装が確りとしていた。場所に合わせて着替えたのだろう。

「って藤宮君じゃないか、なぜこんなところへ？ どういうことだい」

驚くのは無理もないだろうホテルで婚約者と寛いでる所にホテルの従業員でもない一般人が訪ねてくるんだから、二人の内一人は髪も服も真つ白な少女だっていうんだから。

「すみません、中に入れてください」

「ええ、ちょ、ちょっと！」

なかば無理矢理押し入る。ズカズカと中に入り、扉を閉める。

「本当にすみません、ちょっと話がしたいんです。貴方と香里と」

困った顔した柏原さんは眼鏡のズレを直しながら、俺の真摯な気持ちを酌んでくれたらしい。

「どうやら真面目な話のようだね、奥に入ってくれ。」

柏原さん促され後に続いて奥へ向かう。

流石に高級ホテルだ。内装にも凝っているし、ただただ広い、恐ろしく綺麗で広い。

着いた奥とは寝室だろう。大きな窓と……ベッドが一つ、意味深過ぎる。

窓から見える街を見下ろす夜景は、自分が飛んでるような錯覚に陥る。窓に近付いてよく見たい、そんなことを思える余裕はまだあるらしい。

「……………藤谷」

ベッドの上、真っ黒なドレスを着たお人形が喋った。えらく綺麗な人形だった。

本当にそれが香里美々だと気付くのにかなりの時間を要した。

「ドレス姿凄い綺麗だな……………香里美々、話を聞いて欲しいんだ」
自分でも驚くくらい素直に言葉が出て香里を褒めていた。その言葉に黒いドレスの人形に血が通ったようだ、少し赤くなった。

「態々ここまで来たんだ話を聞くとよ。藤宮君にはだいぶお世話になったみたいだからね、美々さんが」

柏原さんは会った時と同じ、爽やかに笑ってる。その笑顔がようやくちゃんと見れた。その笑顔にはなんにもない、人間らしさというか匂いというか、なんにもないんだ。

香里の事をまだ所有物扱いしたセリフにその空っぽな笑顔を睨んだ

が、空っぽに心を波立ててもしょうがない、それを流す事にする。

「香里、俺さ、自信がないんだ。自分に自信が全然ないんだ。でも、さ。香里それを好きだって言ってくれた、嘘だらけの見栄だらけの俺を好きだって言ってくれた……………」

中で一番不思議な顔をしてるのはもちろん柏原さん、驚いた表情から考えるような仕草を取っている。

「藤宮藤谷、貴方は私の事をどう思ってる？ 嫌い？ 好き？」

人形のガラス玉のような冷たさに綺麗さと鋭さが同居する視線で見つめてくる。

言うまでもなく『好きだ』でも、香里が求めている言葉はそんなんじゃないと理解してる。ここまで家族の力を借りて無理矢理来たんだ。引くわけにはいかないし、親父との約束だ『絶対に後悔しない』

「俺は、俺はお前が欲しいんだ。誰にも渡したくない。だから、結婚してくれ！」

言い切った。藤谷は満足していた。充足感に溢れていた。

周りなんか見えはしない。絶句と言った感じで周りが黙っているのも見えはしない。

後悔しない選択をしたのが藤谷に取って重要だからだ。これで断られても、すぐには歩き出せなくてもいつか絶対進める筈だ。

「藤谷！」

「うおっ、香里!？」

黒い人形さんが胸に飛込んできた。暖かくて、柔らかい重みが心地好い、そして香水の匂いが凄い、脳の一部が溶けたんじゃないかってくらい良い匂いだ。

「五十点、名前」

「み、美々？」

「大正解」

そう言つて俺の胸に頬擦りしてくる香里、改め美々、なんでこんなつてるのか全く理解できない、脳が追いつかない。

「こ、香里？ これはどういいっ!」

痛い、胸に歯を立てられた。

「名前！ ちゃんと呼ばなきゃ結婚しない……………うっ、でも結婚したい」

「あ、あの、美々さん？ なにが一体……………?」

と柏原さん、当然だろう。なぜか婚約者の友達がホテルの部屋に押し掛けてきて、結婚を申し出たかと思ったら、婚約者がその男の胸に飛込んで胸に頬を擦り付けてんだから。

その言葉でようやく胸から剥がれた美々は、柏原さんに向き直った。

後頭部しか見えないので表情は窺い知れないが、多分嫌な笑い方をしてる、確信がある、なぜか。

「私、この方と結婚しますから。貴方は恋人の元へ戻ったらどうです？」

「な、なんで……それを？」

藤谷の視点からでも見える柏原さんの表情は青ざめている。なにか嫌な点でも突かれたのだろう……… かつて………

「恋人!？」

脳の中で処理をしていった所で、エラーが生じたキーワードを口に出してしまった。

「そう、柏原透さんには恋人がいるの、結婚したい位のね。でも、父親の命令で私と結婚する事になった。まあ、私もその点では一緒かな」

こっちに振り返り、説明をしてくれる香里。

思い切り横腹をつねられる。

訂正、説明をしてくれる美々女王様、以上訂正終了。

「でも、僕達が結婚しないと父達の会社が、社員達が………」

頭を手で押さえ、真剣に、本当に馬鹿みたいに真剣に悩んでる柏原さん、それを見て藤谷はこっそり美々に耳打ちした（ギャグではな

い)。

「やっぱりあの人と結婚した方がいいんじゃないか？ 俺より裕福で、楽な生活出来るぞきつと」

言ってみると、不機嫌な表情の香里、改め改め、美々に再度横腹をつねられる。

「もう絶対貴方以外と結婚しない！ 逃がさないんだから……だから、私も逃がさないで」

向こうの人は何かここから飛び下りちゃうんじゃないかというくらい悩んでるのに、こっちはこっちで頬を朱で染めた美々に目を奪われていた。

「別に、父親達は勝手に手を取り合ってくれば問題ないでしょ？ それで貴方と私は本当に好きな人と一緒になる。これでハッピーエンドじゃない」

冷たくそう言い切る香里さん………すいません、もう俺の腹は限界です。風呂に入るとき赤い花が沢山咲いてそうです。許してください。

「しかし………本当にいいのかい？ 美々さん」

「あら、なんの事ですか？ 私は藤谷と結婚出来れば何の問題もありませんよ。寧ろ、藤谷と結婚出来ないならこっから飛び下りる考えもありましたよ」

今日来てよかった、本当に今日実行してよかった、ありがとう星になった親父、ありがとう本当にありがとう、そしてさようなら。

密かに藤谷は父親に別れを告げ、美々は柏原に別れを告げた。

「そうだよな。父さん達が手を取り合う口実に結婚なんて………しなくていいんだよな。うん、ありがとう美々さん、父達に僕から説明してくるよ」

妙なやる気を見せた柏原さん、そりゃ本当に好きな人の為ならって事だろう。俺だってこんな事してんだから、でも、一つ忘れ物だ。

「柏原さん、ちょっとこっちに来てください」

藤谷はおいでおいでと手で柏原さんと呼ぶ。

「えっ？ なんだい藤谷君」

それに従って柏原さんは歩み寄ってくる。

「恋人居るのにそんな下らない事すんじゃないねえっ！」

藤谷は渾身の力を込めた右拳をお見舞いする。柏原さんは身構えてなかったわけで、眼鏡をどこかに飛ばしながら倒れた。

「柏原さん、次はアンタの番だ。俺は婚約者取っちまったんだから、そしたら仲直りして、友達になりましょう」

急に殴っておいて、意味分かんと思うが、藤谷だって意味があると思ってなかった。でも、自分の大切な人が片手間で、適当に愛されるかもしれない事が許せなかった。単純で、短絡的な、どう表せばいいか分からない真っ直ぐな感情の暴発だ。

「ふふ………そうだね、なら僕の番だっ！！！」

力抜いてる時に奇襲してしまったので、後ろめたさからか藤谷は力を抜いて柏原さんの一撃を受けた。

柏原の右拳を受けて藤谷は無理矢理右を向かされた。もちろん力はそれだけでは止まらず地面から足が引き剥がされ、後は重力に従って倒れる。痛みは後からジワジワ広がる。

「つう………体育会系ではないと思ってたんですが、かなり上手いですね殴るの」

「ふふ、いやいや、すまないね。護身で少し、ね」

爽やかに笑った柏原さんの手を借りて立ち上がる。

「んじゃあ友達ッスね。柏原さん」

「透さ。藤谷」

「いやあ、馬鹿っばいですね、俺達」

「でも、なんかいい気分だよ藤谷」

握手しながら笑いあう。

「うつわあ………意味わからない。ね、アイ………アイ？」

この空気に追い付いていけない美々はげんなりした顔しながら、さ

つきから黙っているアイにはなしかけるが、

「アイ？ 大丈夫か？」

それに気付いた藤谷は、壁に寄りかかっているアイに駆け寄る。

「……………うにゅ？ 大丈夫だよ……………ちょっと疲れたの……………なでなでしてくれたら治るからなでなでして」

「あ、ああ。それぐらいならいくらでも」

アイに言われた通りにする。アイは気持ち良さそうに目を細め、ゴロゴロ言っている。猫みたいというか、猫と何が違うのか。

あれ？後頭部にレーザーのような視線を感じる。痛い、痛い凄く痛いよ。

「あら、お嫁さん前にしてなにしてるのかしら？」

冷たい一言、冷たすぎて痛い、逃げ出したい。

「ああ、そういうわけで俺とアイはこの辺で帰るよ。うん、ご迷惑をおかけしました……………」

藤谷はアイを脇に抱え、頭をペコペコ下げて、少しずつ入口に移動する。

「いや、何を言っているんだい藤谷？」

真面目な透に『何を言っているんだい？』って表情されると結構凹

む。

十話3

何故だ………どうしたらこんな状況になる。

「にゃーん」

「いや、キャラ壊れてるよ香里」

ガブツ！擬音でも分かってくれるだろう美々の行動、まあ詳しくは後で説明する。

「痛い、痛い痛い痛い！！」

………とりあえず状況を順を追って説明しよう。

あの子の透の発言、

「出ていくのは僕だろう。その………恋人とゆっくり話がしたくてね、僕も。ついでに父達に話もしたいしね」

照れくさそうに笑う透、その笑顔はやっぱり爽やかさばかりが目立つが、一番自然で一番カッコいい笑顔だった。

そう言つてさつさと出て行つてしまつた透、その入れ違いになるように俺の携帯が鳴る。

「親父だ……………」

嫌な汗が止まらない。まさか、と悪い考えが……………大群で頭を通つていく。今これを出たら有力なのは警察だろう、なんたつてきつと犯罪者になつてしまつたらうからな。

「も、もしもし……………」

無視するわけにもいかず、観念して電話に出る。

『おう！ 藤谷か？ 首尾はどうだガハハハ』

電話の向こうはとてもうるさい。親父も元からテンション高い男だが妙におかしい、酒でも入つてるような……………向こうの騒ぎも酔っ払い達が騒いでるみたい……………ってあれ？透の声が後ろから聞こえてくる。

『つまりなあ、お嬢ちゃんのお父とその結婚相手の親父は俺の昔からのダチでな。お前生んだ父親の方とも親友だ、だから今回は全部オツケーだ、オツケーオツケー！』

うるせえ、非常にうるさい、煩い、五月のなんとやらだ。

『あつ、そうだ、初夜にはアイはじゃまだろう？ 3405の部屋に寄越せ、こつちで美味しいもの食わしてやる』

「しょ、初夜だにお！？ いや、噛んだ。初夜とはなんだコノヤロ

ウ……」

自分でもなんか意味分からなくなりながら必死に会話を続けようとするが、黒い俊敏な動きをする影に携帯をかすめ取られた。

「はい、お義父様。はい、アイを………はい、連れていきます。今日だけはよろしくお願いします」

頭の方になんか不穏な読み方があった気がするが、申し込んだのは藤谷だ。そんな事を言える立場ではない。

「とうや？ アイ、今日は頑張ったよ。褒めて」

大分良くなったのだろう、いつの間にかぴよこんぴよこん跳び跳ねてるうさぎさんがいる。言葉に従って頭を撫でてやる。

「にゅふう………」

さつきと同じ様に目を細めて、鳴き出している。うん、なんか小動物で例え安いなこの少女は、そんな事を藤谷が思っているとまたもや殺気を感じる。

「藤谷！ 何をやってるのかしら？」

「えっ？ いや、アイには随分世話になったからな。言うことは聞いてやらないと」

「うん、アイいっぱい頑張ったよ」

「うゝ、アイ、今日だけは私に藤谷独り占めさせて、明日からもと言いたいけど」

「ダメ、とうやと私は家族なの。だから、いっぱい甘えていいの！」

たしかに今日は随分俺が甘えたしな。アイがいなかったら100%ここには、今の状況には辿り着かなかったろうしな。

「私も家族になるの！ 一番男女として近い家族に！」

「むゝ！ みみずるい、アイもなる。近い家族とうやと」

なんか睨みあつていがみあつてるし……………

「藤谷もいつまでアイの事撫でてるの！」

「あつ、はいすみません！」

怒鳴られて反射的に手を引つ込める。そのまま手を後ろに休めの姿勢、既に教育は始まってんだな。

「ああ、とうや、なでなで！」

目をウルウルさせて懇願してくるアイ、藤谷の身体力ならぬ心耐力では耐えきれぬわけもなく。

「えへへ」

「笑っていられるのも今の内よアイ、今日ばかりは本気で行かせてもらっわ」

すると、ドタドタと大きな足音がやってくる。ズンズン、ガンガン、

ゴンゴン、足音としてどうかという音を響かせながら現れた大きな影、

「親父……………だ」

「わりいいごはいねがー！」

「きゃあ！　とうや！　とうや……………」

扉が閉まる音とともに静寂、ああ、なんか昔のゲームの様にアイが拐われたんだ、と理解するまでしっかり一分掛った。

「あはは！　勝った！　私の勝ちいええっ？」

「どうした香里？」

ガブ！

「すみません美々」

「にゃーん」

なんというか、やっと二人きりになれたわけで、美々が二人に積極的になりたがってたのは分かるが、もちろん二人になって嬉しいのは藤谷だって同じだ。

まあ、擬音の部分の説明をすると、抱き締める、名前を呼ぶ、胸辺りに歯を立てられる以上、ワカリヤスイネ。

「その、なんだ、愛してる……………美々」

「まさか、藤谷からそんなに気の利いた言葉が聞けるなんて。生きてよかったかも……ううん、よかったな」

二人で笑いあって、そつと唇を重ねた。

十一話

唐突に突然だが香里美々には悩みがある。客観的に見れば些細かもしれないし、一大事かもしれない。

だが、香里美々にとっては一大事、見逃せなんかしない。

無論、香里美々の悩みの種等言うまでもない。まあ、折角だから言っておくと藤宮藤谷だ。彼以外の事柄に持てる力を駆使して事に当たらねば等と思わない。

悩みの種は今美々の手の平にある。長方形で、折り畳み式で、開くと0～9の数字を基本として様々な機能に対応したボタンがある。

直に言えば携帯電話。しかも藤谷の所有物。

これが何故悩みかと言えば、ほら、掛つてきた。

着信音は美々が設定した『怒りの日』だ。これは個別の設定で、相手は一人、メールの場合十秒で終わるがそれを越えた。只今十三秒、電話だ。液晶を確認しても事実是不変わらず、相手は悩みの元凶、諸悪の根源、許せない奴。

「はい、もしもし」

これは観念したというわけではなく、問題解決への前進だ、と誰かに言い訳をして電話に出る。

「あれ？ この声は美々さんかい？ 藤谷はどうしたのかな？」

相変わらず綺麗な発音と爽やかさが同居する声、やっぱりこれも折角だから説明すると柏原透、こないだまで美々の婚約者なんぞをやっていた男、藤谷の親友……らしい。

「藤谷はお風呂に入ってます。それと、美々と呼んでいい男はこの世界でただ一人藤谷だけです。遠慮してください」

「ああ、そうかそうか、すまないね。藤谷と食事に行こうかと思っただけけど食事はまだかな？」

「いえ、まだですが、今日は私の作ったご飯を食べます。必要ありません、さようなら」

「ちょ、ちょっと待ってよ。ならまだなんだね、そしたら皆で行こう」

「恋人と二人で行ってください。きっと喜びます」

「いやあ、この間藤谷を含めて三人で会ったら彼女が藤谷を気に入っちゃってね。是非にって」

いつの間にこの男はそんなことをしてるんだ。

たしかに二日前に藤谷は柏原に会いに行ったが、ああ、そこにいたんだ。

「彼女が藤谷を気に入るなんて貴方にも良いことじゃないのでは？」

「いやいや、そこはしっかりしてるから大丈夫だよ。僕には初めて

の信頼できる友だからね、彼女も大切にしろって。無論、大切にするけどね」

切りたい、この電話切りたい、なんで出ちゃったんだろう。

激しい後悔の念が美々に渦巻いていた。

「兎に角、今日行きません。お二人で楽しんでください」

強制終了。

美々はありもしない頭痛を感じて頭を押さえた。

「なんとかしないとこの状況」

悩みとはこの通り、私達が付き合いだして二日後から始まった。

一日何通も何通も、数は覚えているが、こんな時自分の記憶力が恨めしい。

藤谷も藤谷だ。一々誘われたりしたら出掛けたり、もっと私と居ても良いのに。

アイとだって仲良しなのはいいけど、妻である私の事を気にかけてくれないじゃない。

「私、嫉妬深いのかなあ……………」

突如階下から大きな物音と藤谷の悲鳴にも似た叫びが聞こえてくる。

因みに今更ではあるが、今は藤谷の部屋、更に更に言うとベッドの上にいる。言い訳をすると、悩みを緩和させるために少しリフレッ

シュしてた所、ふ、深い意味はないんだから！

と、トリップから帰ってきた美々は階下へと走り出す。

居間には誰もいない。風呂場か、そう思っただけ移動する。扉が開いていて、慌てて中を覗きこむ。

「や、やあ……………」

「あら、藤宮君、私今からすっごく怒ると思うけど後悔してね是非に！」

「いや、これは、これは違う……………」

現状を只感じたままに解釈すると、アイに藤谷が押し倒されている。頭に血が上るのをたしかに、血の動きを感じる。

「執行！」

私はこの日未亡人になった。

十一話 2

それにしても感慨深いというかなんとというか……………

風呂場の浴槽の中にて藤宮藤谷は思い、考えた。香里と付き合いだして少し経った。少し思い出に浸ってみる。

ちゃんと話すようになったきっかけは、無理矢理な告白、理解不能な行動、考えたら嫌な思考の螺旋に陥りそうになるのでふんわりやんわりやわらかく良いところだけを思い出す。

そついやいつから好きになったんだろう？

難しい疑問である。人を好きになる瞬間は大きく分けて二つあると藤谷は考える。

ゆつくりと思いを育み好きになっていく形と、大きなきっかけをもって好きになるという形、藤谷はもちろん前者……………と言いたいが出会いがアレだし実は後者？いや、理屈じゃないんだ、人を好きになるのは……………無論、ただこの台詞を言ってみただけである。忘れてください。

香里の婚約の件、ご都合的にいきすぎだと私、藤宮太陽藤谷は考える。考えてばっかだな俺は、しかも風呂場で。

整理すると、親父とあの二人、香里と透の父親―ズが友達で何か会社の合併だか資金援助がなんだかの話の為に二人を婚約させた。だが、それを嫌と言われたので、まいつか、で問題解決……………軽っ！

その勢いで美々をよろしくと父親に言われたらしい（俺の親父が）その内やつぱり会いに行くべきだろう。

一番引つ掛かってたのは親父の急な帰国、あれは香里曰く『私は賭けをしたの、布石をいくつか置いて、結果藤谷と結ばれた私の大勝利！ ぶい！』らしい。

一つがホテルでの俺との一日、更に香里曰く『出来るだけドラマチックにしてみました。藤谷が思い立つように』だそうです。もう一つが親父への電話だ。何を言ったのかは知らんが帰国して来たんだからそれなりの事は言ったのだろう。

それで行動を起こした俺の負け、完敗だ。でも、俺は結果恋人が出来たわけだし勝ちと言えば勝ち、大勝利、ぶい。

夏場なのに随分長風呂してしまった。まあ夏も終りだが、いい加減出るか……………キーワード『夏場』『夏の終り』『いい加減』

「しいいいまつつまつつとうわあああつつ！！！」

慌てて風呂から上がる。タオルでバーツと体を素早く速く、ラディカルにグッドにスピードで拭き。

パンツを穿いたところで唐突に目の前の扉が開かれた。

「あれ？」

「あれ？ じゃない！ さつさと出ていきなさい。後は服着るだけだから少し待ってくれ」

藤宮アイ、藤谷の家族にして、白い、純白の頭ふんわりほんわかぽ

わぼわの少女、しかも超能力者、実はこれも親父曰く後数年で消えるらしい。子供の夢だとか、夢が力になって、夢が………うんぬんかんぬんなんとかかんとからしい。つまり理解不能な彼女ツー、言ってみただけです。

「違うよとうや。今のあれ？　は、あれ服着てる一緒に入ろうと思つたのにのあれ？　だよ？」

なんでこんな簡単な問題も解らないの？　馬鹿？　そんな感じで首傾げてる家族にチヨップしてやろうと思つたが藤谷はそこで動けなくなつた。

最初は扉から顔だけを覗かせていたアイだが、扉が開きその全貌が明らかになっていく。真つ白だった。

「ふ、ふふふふう」

「と、とうや？　てれびでみた危ない人みたいになつてる」

「危ないのはお前だあああつ！！　服を着ろ服を！！」

「ばっかだなあ、これからお風呂に入るのにお洋服着てちゃいけないんだよ」

さつきと全く同じ感じを出しながら笑う、いや、全部おかしい、全て、総じて、なにもかも！

「まあいいや、一人ではいろ」

そう言つて近付いてくる白、白、強烈な白の力。自分には恋人どこ

るか妻になる予定の人がいると念仏のように心の中で唱え、釘付けになった目を気合いで閉じる。

「ふにやつ!」

その謎の一言と共に胸に衝撃、目を瞑っていたため、踏ん張りはずかず、藤谷は倒れる。なんとか背中を床にぶつけた位で何にも当たってなかったが、覚悟してない痛みはやっぱり痛い。

「ごめんなさい。とうやのパジャマに引っ掛かっちゃった」

えへへ、と笑うアイ、なんとか平静を保とうと香里の笑顔ばかりを思い出す藤谷、藤谷はこの時予測していた。超能力はないが未来が見えたと言っても過言ではないほど未来が予測できた。

扉付近を見る。やっぱり香里、いい加減香里と呼ぶと機嫌を損ないそうなので美々が立っていた。

「や、やあ……………」

「あら、藤谷君、私今からすっごく怒ると思うけど後悔してね是非に!」

最近女の子の言葉使いだったから久々に聞く香里の…………訂正、美々の冷たい口癖、

「いや、これは、これは違う……………」

そして、痛いくらい冷たい笑顔、

「執行！」

今日で俺は終わった。

十一話3

目を覚ますと藤谷は自室のベッドの上にいた。

蝉の鳴き声がうるさく、夜だった筈なのに太陽光が苛々するぐらい降り注いでいる。

辺りを見回す、やっぱり変わりなく自室のベッドの上、今気付いたが、美々が目の前で正座している。

でもおかしい、目の前なのに美々の顔がよく見えない。なんか霞んでるといのかぼやけてるといのか、それでいてその霞は赤い。

「俺、結構寝ちゃった？」

「ええ、お陰ですんなり終わりましたよ」

うふふ、と口に手を当てて笑う美々、顔はまだよく見えないが体を見間違えるわけがない。特に自己主張の激しいアレとかさ。

「うん？ 一体なにが終わったって？………ってあれ？」

体を起こしてベッドから出ようと考えた。考えたというか行動しようとした、たしかにした。だが、金属音と共に体の動きが制された。

なんで今まで気付かなかったのか、藤谷の手足は鎖で縛られている。手錠とかじゃなくて鎖がグルグルと巻き付いている。手足を動かそうにも金属音を無駄にたてるだけで、体は動かない。

「なんだよ！？　なんだよこれは！」

「え？　それは鎖ですよ。貴方を縛って私だけをミレルヨウニ、ネ」
口元を半月にしながら寄ってくる美々、そこでようやく顔が見えた。
真っ赤だった、塗りたくったように赤い、鮮烈な赤、服も赤い絵の具をぶちまけたようになってる。

「ああ、アイは始末したよ。だって、居ると藤谷が私だけを見てくれないんだもんクヒヒ」

そう言つて不気味に笑つた美々はベッドの縁に腰掛ける。藤谷の頬に手を当て妖艶に微笑む。

「好き、大好き、超好き、貴方が全て好き、他の女の子………ううん、他の生き物に貴方を見せたくない、もちろん触れさせるなんてさせたくもないし、考えたくもない。私のモノワタシダケノ藤谷………ずっと一緒だよ」

最後の宣告と共に唇を寄せてくる美々、藤谷は体も心も言うことが聞かず、ただただ震えることしかできない。

喋ろうにも空気が漏れ出すような音しか出ない。

「はいヤンデレ！」

「きゃあ！」

「あれ？　ここは？　アイはアイは大丈夫か！？　鎖は！？」

「落ち着いて、まず落ち着いて！」

肩を押さえ付けられて、やっと冷静になる藤谷、なんとか頭を動かして状況を整理することにする。

自室のベッドの上、目の前には美々、鎖は……………ないな。

「いや、すまん。凄く嫌な夢見てさ」

「夢じゃ……………ないかもよ？」

そう呟いて美々はいやらしく笑った。藤谷は平衡感覚を失ったらしくグラリと世界が傾く。

「なんてね、アイならあそこにいるじゃない」

パツと表情を変えた美々は舌を出して笑う。藤谷は素直に凄く可愛いと感じた、惚れた弱みというやつだろう。

気を取り直して美々の視線を追って視線の先を見る。真っ白い少女が膝を抱いて小さくなって座っている。しかも隅で、隅の隅、端の端、お化けにしか見えん。

「とうや？　とうやなの？　大丈夫？　ぐちゃってなってどろってなつてぐにむぺってなつたけど大丈夫？」

アイは泣きそうに、つか既に泣きながら聞いてくる。少しずつこちらに近寄り、俺の体を上から下まで目で確認している。

なんか生きた人体では有り得なさそうな擬音が聞こえまくったんだが、本当に俺生きてるのか。

「いや、大丈夫だと……おもうよ。執行！　の時から記憶ないけど、そういやパジャマも着せてくれたんだな」

「ええ、それは私がね。ここまで運ぶのは二人で、やっぱり男なのね、結構重かったわ」

「それはお手数かけました」

そろそろ平常に動き始めた頭で考える。どうやら美々の機嫌はそこまで悪いわけではないらしい。

あれ？　なんか忘れてる気がする。風呂場で何かを思い出したよな。

「ああああっ！　み、美々さん」

「なによ？」

あれ？　さっきまで怒ってなかったよね、なんで怒ってんの、雰囲気変わったよ。

「あの、その……」

「宿題を手伝うなら条件があるわ」

何も言っていないのに通じたよ。流石は恋人、まあ、その前から何か心の中ってなかったんだけどね。

「可能な範囲ならなんでも」

「泊まりを週五回に増やして」

「うつ……………」

ほぼ毎日家にいる美々だが、泊まりは現在週四日、いくら双方の父親にオッケーを貰ったからと言っても俺達は未成年、その辺の分別はつけないで、そう考えている藤谷だが、今回はどうも形成が悪すぎる。

「いいじゃない、いずれは夫婦になるんだし、アイだって一緒に住んでるんだから」

「アイは家族だよ、むう」

悩みに悩む藤谷だが、今回は白旗を上げるしかなさそうだ。来年美々を先輩と呼びたくない。

十一話 4

夏休み残り三日。

藤谷は必死。

香里は、

「むーむー、ぶーぶー」

何かを発しながらむくれていた。なぜか、アイも一緒になって香里の後に続いている。

「それと、いい加減美々を定着させて、いい？」

念を押されてしまった。つい、癖で香里と呼んでしまう。美々ね、美々、慣れねえ。

「アイはアイだよ」

聞いてない。

「うっ、とうやが冷たい。ヒエヒエだよ夏なのに」

うん、なんか皆心の中で考えても反応してくれる。もう喉なんていらないや、潰すか。

藤谷が少し荒れてるのはもちろんアレである。学生为天敵夏の課題、もちろん『課題』という言葉が真の敵、ラスボスに違いない。

「藤谷、いい加減休む？ そろそろ頭が駄目になってんじゃない？」

「それじゃあ駄目なんだ。終わらすんだ………負けられない！ 負けられないんだああ！」

意味もなく吠えてみる。蝉の鳴き声だけがただ虚しく帰ってきた。ついでに叫んだ事により汗も出た気がする。

アイは見てるのに飽きたらしく、汗を流すためにお風呂に入ってくるそうです。

「そんなに無理しなくても、間に合うでしょ？ 三日あるんだし」

現在午後三時、朝起きてからずっとやっている。もちろん昼に休憩は挟んだが。解るところだけ少しずつ進めていたので、そこまで大した量ではないが、それでも二日は掛る。

「いや、なんとかして一日空けたくてさ。二人で出かけてないだろう？ だからさ、最終日くらいは二人きりで出かけたいなって」

「っ！！」

美々は口に手を当てて驚いた顔している。久々に態とらしい。

「ごめんなさい。凄く嬉しい、少し泣いていい？」

『ごめんなさい』から言われたから、誘いを断られるのかと思ってこっちが驚いてしまった。

「泣かんでくれ、どこか行きたい所とかあるか？」

「藤谷とならどこでも行きたいよ。ちょっと言ってみたかったのこの言葉」

快活に美々が笑う。その笑顔に引き込まれる、それくらい可愛らしい笑顔だ。そんな言い訳をしながら体を寄せ、顔を寄せていく。美々もそれに気付いたのか顔を寄せて応じてくれる。

「とうや！ さっぱりだよ」

突如現れた白い女の子Aの衝撃により、藤谷と美々は磁石のように弾かれ、藤谷は課題へと戻った。不自然極まりないが、アイは首を傾げるだけで終わった。

とうやさっぱりだよ。と言われると自分がよく解らない人みたいに言われてるような、とそんな感じの突っ込みを入れたかったが、そんな余裕はなく、態とらしく「ここの公式が……こうなって……」
としか言えなかった。現代文の課題だが。

それから二時間ほど課題を進め、休憩を取る事にした。美々がお茶を用意して、態々部屋まで持ってきてくれた……。のでこの有り様です。

「……………んう……………そこ……………いいねえ、旦那様にやってもらうつてえ……………」

「頼むから変な声を出さんでくれ」

誤解しないようにすぐに説明する。まあ、誤解しないかもしれないが肩を揉んでるだけだ。美々は肩凝りが酷いらしい、都市伝説じゃなかったのか、あの胸の大きい人は肩が凝るというのは。

「まあ、実際は私は凝ってるし、家事も結構やってるし」

またまた言うつとですね、つか言っていないですよむしろ。なんにも喋っていないですよ。

「だって顔に書いてあるもん」

だから、肩を揉んでるんだってば、正面から面と向かって揉むものじゃあないでしょ？もちろん後ろに居るんだよ俺は

「私くらい藤谷が好きだとそれぐらい造作もないのよ」

もういいです。俺にはプライバシーがないんです。

「そっぴやアイは？」

気を取り直して、声に出して聞いてみる。一瞬空気が固まって吸えなくなつたような錯覚を感じたが、すぐに戻って冷たく返答された。

「お昼寝だそうよ。お昼はとっくに過ぎましたけどね」

「そっか、なら遠慮なく」

確実に機嫌が悪くなっているの、黒。舞先輩から昨日聞いた緊急機嫌復活プランを試してみる。

某先輩は何故か昨日電話がきて、俺と美々の話を聞かれた。美々とは頻繁に連絡取ってるみたいなのに、なぜ急に俺に聞いてきたのだろう、変に疑問が残る。

遠回りしたが、美々緊急攻略プラン、さっきと名称が違うのは置いといて、それを実行する。

どうするかって簡単、今藤谷は美々の後ろにいる状態なので、後ろから腕を回し抱きすくめるだけ。言ってしまうえば藤谷もやりたいからっていう簡単な理由と簡単な手法がプラン。

「ひゃっ、と、藤谷……………うん……………」

「俺だって……………み、み美々が好きだから」

言い慣れない名前なんで噛んでしまったが、言いたい事は言えた。小さな充実感が……………ってなんか小さな充実って矛盾してるな。語彙足らん、つまり、ふわふわ、温かい感じ、そう温かい暖かい、そんな感じがするんだ美々に触れてると、これが俺の好きって気持ちの具現なのかな。

悟りを開きそうな藤谷は美々の言葉で現実に戻る。

「うん……………あんまり藤谷は言葉にしてくれないよね」

そう言つて美々は回した藤谷の手を取り、愛しそうに指を絡めていく。

「あんまり言い過ぎると言葉が軽くなる気がして、たまに言うから良くなつて」

「そう、そういう考えなら……でも、たまには言つてね、言葉にしてくれないと寂しいから」

ああ、と辛うじて返事をしたが、かすれてしまつて上手く言えなかった。心臓がロックバンドのドラムのように鳴っている。蝉の鳴き声が小さく聞こえるくらいだ。

「藤谷心臓凄いいね。私のも凄いいんだよ」

その言葉の後に何か柔らかい物に触れる、というか沈む自分の手、何が始めてるのか一ミリも理解できない。いや、理解してるが、脳が追い付いて来ない、きつと普段使つてない、人間の力を超えた部分を使つて今感じてる柔らかさを理解してるのだろうが、普段使つてる部分はまだその情報を解析できてない。つまり、混乱してる。

「ふふ、私のも大きくなりすぎてわからないや。背中から伝わるの貴方の鼓動なのか、私のなのか」

夏だからではない、それも加速の一因かもしれないが、藤谷の汗は沢山一杯とても吹き出ている。ああ、俺の汗線大放出、つまり、要は藤宮藤谷は混乱してる。

「藤谷、私もね——」

美々の言葉は最後まで紡がれる事はなく遮られた。怒りの日に。

「うつ……………本当にタイミング悪い、見てるのかしら」

「ちょっと確認する」

藤谷は机の上にある携帯を取ろうとしたが、手を動かせない、無論藤谷がこの膨らみから動きたくないわけではなく、美々がそれを離さないからだ。立って移動しなきゃ届かないから、どう頑張っても取れはしない。

「今は私だけを考えて、いつも私だけ考えて欲しいけど、せめて……………今だけ」

手が更に強く握られる。十秒を越えた。電話らしい、いくら緊急でも今だけは藤谷も離れたくはなかった。

「じゃあ後で謝る。今は俺もこうしていたい、奥さんだし、ね」

照れ隠しのつもりで付け足したセリフも、余計顔を熱くさせるだけだった。

十一話 5

「もしもし、藤谷かい？」

「俺の携帯からだからな。俺だよ」

「いやあ、美々さ、いや、失敬、香里さんがかけてくる可能性もあるからね」

あんのかよ。あるな。うん、何か美々は透の事が氣にくわないみたいだし。

主に美々の氣が済むまであの体勢を続けた後、すぐに掛け直している。

その美々さんは俺の反対で電話の裏面に耳を当てて会話を聞いている。

「それで？ 今日はどうかしたか？」

「ん？ まあ、どうもしないんだけど、今日こそ食事に行かないかい？」

「別に構わんが、この間みたいのは勘弁してくれ。もっと庶民に優しいのがいい」

この間、食事に誘われた時、二人だと思ってたら、例の恋人さんまで連れて三人で食事をしたが、テーブルマナーやらなんやら、藤谷の背には全く合わなかった。

「あはは、そうだね、その辺はちゃんとするよ。今日は香里さんはいるのかい？」

「ああ、いるよ」

「ならそっちは三人で………いいのかな？」

「ああ、って事は恋人さんも？」

「恋人さんはよしてくれってさ。名字は僕と一緒にいるから、詩織と呼べってさ」

向こうで小さく女性の声も聞こえる。うん、間違いなく一緒にいるな。

「それじゃあ向かうから家で待っててくれよ」

そう言っただけの挨拶をして電話は切れた。

携帯を閉じて、隣を見ると半目でこちらを睨んでる俺の愛しい人香里美々、流石氷の女王と言われていただけの事はある。全く体が動かない、蛇に睨まれた蛙を細胞レベル理解した。

あの諺は、今俺の状況に置き換えると、何も悪いことをしていない、それでも睨まれると本能が警笛を鳴らし体は動くという考えを忘れるらしい、らしいというか今そう悟った。理屈ではなく本能がそうさせているんだ。

「今日から藤谷の晩御飯は熱いチゲ鍋、シチュー唐辛子入り、唐辛

子の天ぷら、唐辛子の唐揚げ――」

「ちょっと待ってくれ、二番目から明らかにおかしい。夏場にそんなもの食いたくないよ」

なぜこんなに怒ってるんだ。今さっきプランにより機嫌はよくなっただじゃないか。

「冗談よ。良いこと思い付いたしね。私もやらなければいけないことがあるみたいね」

嫌な予感しかさせない笑い（無表情）を浮かべながら、美々は藤谷の部屋を出ていった。

説明するまでもないし、説明するのを完璧に忘れていた男が一人、父親だ。アレはやっぱり、世界に羽ばたいて行った以上。

彼の最後の言葉は「俺は今度こそ新しい部族に出会う」目的地を絞り込めそうな台詞を残していったが、興味は全くないんで、とりあえず頑張ってくださいとしか言えなかった。

十一話 6

それから程なくして透達がやって来た。

普通の乗用車で。

いやね、総勢五人は狭いかなと思う前に、御曹司設定を考えるともう少し……………

「んで、なんでこんな配置？」

早速全員乗り込んで出発したわけだが、前に二人、後ろに三人で乗ってるのだが、何故か透の恋人さんを差し置いて藤谷が助手席に座っていた。

「あら、男の肩幅いれたら狭いじゃない。こうした方が効率的よ」

外行き用の顔ですよ。口癖が出る時は冷たい口調になるし。

「息ピッタリね二人共、流石は夫婦？」

今のは詩織さん、いつもニコニコ笑顔の女性、のイメージが強い。透の隣に立つには似合いすぎるぐらいの人だ。

美々とは違ってやっぱり大人の色気が――

「みみふあんふういまふえんふえひふあ」

引き千切られるんじゃないかという強さで頬を引っ張られてる。

あつ、なんか頬から嫌な音が聞こえてくる。

「本当に藤谷と美々さ、香里さんは仲が良いね」

「ふぉんほうにふぉうみふえる？」

補足するとさっきのはただ謝ってます。今は『本当にそう見える？』と言ったつもりなんだが。

意外にギャグっぽく見えるが、頬がヤバい、俺の頬がそろそろヤバい。

さっきからアイの声が聞こえてこないな。

振り返ろ……うにも頬が固定されてるので、口に出してみようかと思うと返答がくる。

「アイなら寝てるわ。着いたら起こす。だから貴方は安心して」

「いつひゃいなにふぉ！？」

もう補足するのも面倒なんで、もう止めてください。

藤谷が泣いてると、もう一組のカップルは二人で微笑んでいた。藤谷はその世界が恐ろしく遠く見えて涙が止まらなかった。

「これなら藤谷も文句ないだろ？」

「まあ、これならな」

高温の鉄板、ヘラ、直で言っちゃえばお好み焼きなんですがね。

こんだけ普通なら何も文句はないな。

アイなんて金属のヘラ見て自分の顔が写るのに驚いてるし、目がい切り見開かれて興味津々といった様子で。

家からあまり遠くないお好み焼き屋、多分調べてくれたんだろう。こういうところ透は気を遣いすぎなんだよ。

「透、ありがとな」

「ああ、僕達は友達だろ？」

二人で笑いあう。

「透さん、はい、あーん」

「藤谷さん、はい、あーん」

「あつ、とうや、あーん」

二人の前に箸で切り分けられたお好み焼きが現れる。藤谷の前には

それプラスヘラの上に載ったお好み焼きが差し出される。

アイ、そのヘラはさ、さっきまでお好み焼き作るのに使ってたよな。すんごく熱そうだ。

そして、最近美々の真似するのに嵌ってるのか？

香里美々は考える。

基本的によく考えるのが習慣であり、趣味みたいなものだったりする。

ただ簡単な事を深く考えたり、色々と言説を立てたりするのが好きだ。

そして、

「ようやく二人きりになれたね」

「そうですね。お手洗いで二人きりなんて情緒溢れ過ぎて泣きそうです」

美々と詩織は対峙していた。

「なんだか藤谷君みたいねその口調」

うふふ、と態とらしく詩織は笑う。

そう、態とらしく、だ。

きつと藤谷は気付かないだろう。笑い方が態とらしいんだこの人は。

私の笑い方なんかよりよっぽど。

「私も貴方もお互い聞きたい事があるんじゃないですか？」

「うん、あるわね。では年上の私から聞こうかしら」

「ええ、どうぞ」

備え付けの鏡で自分の顔を確認する。

うん、問題ない。怖がってない。

実を言つと美々はあまり人と話すのが好きではない。実を言わなくても、か。

藤谷もきつとよく分かっている。分かってくれている。藤谷は私の本当を引き出してくれるから安心できる。だから、きつと好きなんだ。

「君は、透さんとくつついたら藤谷君をどうするつもりだった？」

美々が幸せな考えに逃げていると、詩織からの質問が始まった。

この聞方、美々が藤谷を絶対に放っておかないと確信があるのだろう。

「そうですね。どんな権力を行使してでも彼を手元に置きます。首輪をするぐらいに」

「そっか、やっぱりね」

ニコニコな女性の姿はない。猛禽類にも似た鋭い眼光を持つ女性の姿へと変貌していた。

「貴方も、透さんを諦める気はなかったんでしょう？ 愛人でもなんでも」

「ええ、結局私達の利害は一致してたのね。嬉しいわ」

猛禽類の視線のまま笑われても、ちっとも気は抜けない。張る一方だ。

「少しでも私の透さんに想いがあつたらそれを断ち切ろうと思っててね。でも、おあいこかな。私、藤谷君可愛いと思っちゃったもん」

詩織は妖艶に微笑みながら唇を人指し指でなぞった。

「そうですね。私は藤谷以外の男には興味ないので」

「もちろん私もよ。藤谷君は弟みたいな感じ？」

「そうですね」

「そしたらアナタは妹ね」

顔を寄せてくる詩織、美々は腰を後ろに少し倒し引いてしまう。

その動作ときつと驚いた表情が笑えたらしく詩織は高笑いをあげた。

「よかったよかった。アナタも結構気に入ったからね。仲良くなれ
そうで」

「ええ」

女達の対談は、藤谷達の知らないところで密かに始まり、終わった。

十二話

悲鳴、轟音、目を瞑りたい。閉じていたい、開きたくない。

恐怖だけが頭の中を支配していく。

閉じていたい目は言うことを聞きはしなかった。目は見開からたまま、惨状を見ていた。

ああ、これは夢なんだ。見たくはないけど記憶に焼き付いている記憶。

でも、忘れたくない。忘れちゃいけない。母との最後の記憶。

「執行」

「はい！」

「ちっ」

藤宮藤谷の朝は舌打ちから始まる。

いや、決していつもこんな最悪な寝覚めをしてるわけではない。何時もは『朝だよ。早く起きなきゃキスしちゃうよ』みたいな甘い起こされ方をします。本当です。

決して肩に噛みつかれてるからこんな事を言っているわけではない。ありません。

「美々さん？　痛いんです。肩が痛いんです、泣いてしまう、俺が泣いてしまう」

「藤谷が中々起きてくれないから。それで今日は一体どこへ連れてつてくれるのかな？」

ようやく噛むのを止めてくれた美々は立ち上がって、俺の着替を差し出しながら言った。

着替も用意してくれたり、起きたら朝ご飯が用意されてたり、掃除もしてくれたり。

『家政婦みたい』だどこの生徒会長に言われました。

とても反省してる。いつも考えている。してもらってばかりなので、何か返せないかと、いつも考えている。

一度美々にも言った。

『私は貴方が大好き、何でもしたいの。貴方に出来ること何でも』
そう言って会話が終わる。

これでは支えあつてない。支えてもらつてるだけ、情けない。

「うつ……………こんな筈じゃ」

最初に言っておくぞ。これは俺、藤宮藤谷じゃない。香里美々の言葉だ。

「さあ、休んでないでやるぞ」

「もう許してください。コーチ」

「駄目だ」

今いるのは最近なんだか縁がある、格式高そうなホテルだ。

実は透と食事した時に頼み込んで例の『りぞーとすぱ』のチケットを譲り受けた。

つか、チケット一つ見せただけで凄く待遇が良かったぞ。『予約の柏原様が』とか聞こえてきたし、あのチケット実は紙で、力は別の所にあるんじゃないか、と思う。まあ、気のせいだよな、忘れよう。

つまり、プールにいるわけだ。もちろん美々が泳げないのは覚えて

いる。皆さんは覚えていますでしょうか？

って誰に聞いてんだろうか俺は。

だからこそ。

「うっ………らぶらぶな感じがない」

「何を言っている。らぶらぶ過ぎる位だろ」

「うっ………絶対に仕返してやる………」

「そうか、ならもつとハードにして反撃出来ないくらいにしないと
な」

「うぴゃっ!」

うぴゃっ？

理解不能な擬音と共に美々はプールの中へと沈んだ。

と、思ったら宇宙に飛び発つロケットの様に出てきた。

「水怖い………水怖い………水怖い………」

じゃあやるなよ。

「……………」

美々はどこかで見たことあるボクサーの様に燃え付いている。

泳ぐのが余程嫌いなんだな。

「違う！ あんなスパルタ教育されたら誰だってこうなる！」

犬歯を出して怒る美々さん。

藤谷はその発言に対して返答代わりに首を傾げた。

「二時間泳いだくらいで何を言ってる。俺が親父にアマゾンの奥地に住む部族のテンニャラフポンポン秘拳を教わった時は朝から晩までやってたぞ」

藤谷は心から真面目に答えたが、美々はゆっくりと目尻に涙を溜め、鼻をすすって泣き出した。

「藤谷がおかしくなったあ…………アマゾンってなに……………うええん」

そっぴや昔に幼馴染みにもそれを言ったら泣かれたな。

「いや、おかしいのは分かってる。あの時は子供だったから親父を疑う事がなかったんだ。だから、何かの練習と言つと朝から日が落

ちるまで基本だと思って……」

「ぐすつ、本当に大丈夫？ テンニヤラフポンポンとか使わない？」
「使わない使わない。怪しすぎる技だからな。機会があっても使わない」

泣き出してしまった美々をようやくなだめ、練習を再開しようとする
と聞き慣れた声に声をかけられた。

「なにかトラブルかい？」

爽やかな声に振り返ると、やっぱり爽やかに歯を見せてついでに六
つに割れた腹筋も見せ付けている男、柏原透の姿があった。

隣にはその恋人の詩織さん。青の水着と白い肌がとても美麗だ。

水着の感想がシンプルだが、シンプルな感想しか出ないくらい美しい。

そして、シンプル以上に描写すると、

「……………」

背中に突き刺さる視線が痛すぎる。虫眼鏡を通した日光の様だ、ジ
リジリ背中が焼けてる気がする。

「どうかな？ 藤谷君私の水着どう？ 少し思い切ってみただけ

ど」

そう言つて姿勢を少し変えて、ボディラインを強調する詩織さん。

藤宮藤谷、残念ながら普通に健康でノーマルで、平凡な少年だ。目がいけないわけがない。強調される胸や、すっきりした腹、おしりを目で追つてしまう。

ハッとなつた時にはもう遅い。

「……………嫌い」

「い、いや、美々？ 美々さーん……………美々さんってばー」

ヤバイ、今回ばかりは普通に怒つてる。何時もはちよつと冗談混じりだが今回は初めて「嫌い」とまで言われた。

本気でマズイ、折角泣き止んだのに目尻に涙が溜り出してる。唇まで嚙んで声を出して泣くのを我慢してるのが目に見える。

「あらあ、藤谷君は年上の方が好みだったか、悪いことしちゃったなあ……………」

あれ？気のせいかな。今詩織さんが凄く嫌な笑い方した気がする。そんなわけないか、今は本当に困つた顔で美々の心配してるし。

「詩織まで取られちゃつたら流石に僕は立つ瀬が無さすぎるなあ」

ははは、と高笑いする透、やだあ、と続いて笑う詩織さん。

明、暗が完璧に分かれた。

暗カッブルの藤谷はこの現状を逆転出来る手立てを考えていた。

「そっぴや、なんで透達がいるんだ？」

ずっと聞きそびれていた事を藤谷は聞いた。少し言葉に刺があるのは容赦して欲しい、大事な彼女が機嫌を損ねてしまった理由が相手なのだから。

完全な罪の擦り付けなのも無視してほしい。

「えっ？ 藤谷達が来るみたいだったからね。久々に休みを取ってしまったよ。あはは」

「そうか、それはそれは。このプールの件を頼みはしたが、流石に今回は二人きりにしてくれ」

「私は藤谷君と美々ちゃんと遊びたかったんだけどなあ……」

本当に残念そうに言われても今回ばかりは引けない。引く気もない。

「ちょっとここには嫌な思い出がありましたね。それを払拭したいんです」

「ああ、もちろん親友の恋路は邪魔しないよ。それじゃ後で食事は一緒しよう。上で予約取ってるから」

「それも遠慮する。今日は二人で居たいんだ」

「……………藤谷」

「そうか、残念だよ。折角休みを取ったのに」

「残念、振られちゃったね。今日は二人で楽しみましょ」

詩織さんは透の肩に手を乗せて笑いかけている。本当にこの二人はお似合いだと思う。

大人のカップルはこういうものだと思う。

俺達もいつかは、なんて思ったが、俺達は俺達らしいカップルになればいい、それが恋人同士だと思う。

恥ずかしくて絶対に口には出せないが。

「まあ、また誘ってくれ」

「もちろんさ。香里さんに怒られない程度にはね」

そう言っただけをすくめて去っていく透、そしてそれに従う詩織さん、今詩織さんが振り返ってとっても嫌な目で笑ってた気がするんだが、気のせいだよな。

「いい加減機嫌を直してくれないかな？」

どうやら美々はうるうる期から、頬を膨らませるぶんぶん期に移行したらしい。さっきからプールに半身つかってるだけで、泳ぐうとは全くしてくれない。

「藤谷はさ。やっぱりここであつた事嫌だつた。私が柏原さんを紹介した時の事」

「…………聞くまでもないだろ。家で泣いてたんだぜ俺」

ぶんぶん期を忘れたのか、驚いて目を見開いてる美々、何か言いたげだが、上手く言葉が紡げないようだ。

「でもさ、やっぱり諦め切れなくて追って来たんだぞ。それで今はすつごく幸せだ。毎日起こしてもらって飯作ってもらって、もらってばかりでなんか返したいと常々思ってたんだけど、結局ここも透に頼っちゃったし、だから、夜ご飯は今日は俺が作る。美々ほど美味くはないが我慢してくれ」

言いたい事、やってあげたい事、やってみたい事、好きだからこそ、美々だからこそ、一緒に歩める喜びを、生きるって喜びを。

「二人で生きたいんだ。生きるって事を二人で知りたいんだ」

言葉にすると凄く不格好で、不細工だが、でも、知って欲しかった。何をしたいかなんて曖昧だけど、不確かだけど、一緒に歩みたいって事を言いたかった。

一度ここで失いそうになった物だからだろうか、なんか言わなきゃと思つた。

「すっごい恥ずかしい。ごめん、ちょっと意味分かんかったよな。忘れて、もっと格好よく再編集するから」

美々は転びそうになりながら、むしろ、最後の一步で転びながら俺の胸に飛込む。いや、転がり込むか？

「ダメ、絶対に忘れてあげない」

そう言っ て美々は藤谷を見上げ、唇を差し出すように目を瞑った。

「……………えっ？ まじすか……………」

藤谷は辺りをキョロキョロと見回す。人が居ないわけではない。だが、こっちを見てる人は……………居ないだろう、多分、きっと、恥のかきついでだ。

そつと唇を重ねた。

「青春だねえ」

ちよつと上から聞こえた声に反応して美々と額をぶつけあった。

「と、とと透！ いつからそこにいた！？」

「うん？ どっからって……………聞かない方がいいんじゃない？」

初めから居たな。こんちくしょう。

このプールには階段で昇った先にもプールがある。ウォータースライダーもあるのだが、どうやら透は上にあるプールで遊んでたようで、プールとプールを繋ぐ橋の上から見下ろしていた。詩織さんも一緒に。

「ちょっと待ってるこんちくしょう！ テンニヤラフポンポン秘拳で葬ってやる！」

十三話

熱い、痛い、誰かに抱えられて怒号を駆け抜ける。

さっきまで手を繋いでいたお母さんの姿は今はない。

手も傷だらけだ。握ると痛い。

「……………お母さん……………」

少女の呟きは悲鳴にかき消された。

「本当に良いの？ アイは」

「大丈夫、夜ご飯まで用意してあるし、お金も持たしてるし、心配は心配だがな。その、今日位はさ」

只今、美々の家の前、家と言っても綺麗すぎるマンションの一室だが、綺麗すぎる。

ドアの間隔も広い広い、一部屋どんだけ。

「そつえば上がるのは初めてよね。とりあえずお茶出すから……
…私の部屋に居て」

そう言い残してパタパタとフローリングの廊下を駆けて行く美々。

えっ？俺はこの玄関で待機ですか？

どうすればいいのかわからない藤谷は玄関で立ち尽くしている。

すると藤谷から見て廊下奥の扉が開きひよっこりと美々が顔を出した。

「その右の部屋、私の部屋だから適当にして待ってて」

言い終わると扉が閉まる。なんか鳩時計みたい、なんて事を考えながら藤谷は若干の抵抗を覚えつつドアノブを回した。

まずは明かりのスイッチを探し、壁のスイッチを入れる。電気は紐を引いてつける藤谷にとってはかっこいいと思う、このスイッチ。

昔幼馴染みの家に言ってこれを見た時、我を忘れてカチカチしたっけなあ。

なんて回想に浸っているとリモコンがある。スイッチの下部に書いてるメーカーと一緒にある。

ボタンだけのシンプルなりモコン、リモコンとすらちょっと藤谷としては解るのに時間が掛ったりリモコン、赤外線が出るところがなか

つたらきつと解らなかっただろう。

ちよつとドキドキしながら押してみる。

「……………」

なんと！なんと電気が消えた。

堪らずもう一度押す。

電気がついた。

感動に身を震わせながらももう一度押す。

電気が消えた。

「す……………凄い」

もう一度押して明かりを取り戻し、リモコンを見つめながら藤谷は
呟いた。

技術の改新というか、進歩というか、このリモコンは人間の無限の
可能性を示した物なのではないだろうか。

「藤谷？ 一体リモコンに握り締めてなにやってるの？ テレビの
じゃないよそれ」

ハツとなり、振り返るとお盆にクッキーとティーカップを載せて立
っている美々が怪訝な顔で見ていた。

「い、いや、このリモコン凄いな。電気が、便利で、寝てても、あれで……………」

なんかいけないところを見られた気がして上手く舌が回らない。

美々の怪訝な顔は更に深まった。

「まあいいんだけど……………」

「いや、その、ああ！ お茶、お茶を頂こう」

なんとか話を本筋に戻そうとわたたと身振り手振りを加え、更にタップダンスを混ぜるくらい頑張って戻そうとする。

美々の顔が怪しむを通り越して、哀れむような表情に、そして慈しむような、聖母様のような笑顔に。

「……………すみません。気が動転してたとかその辺の理由で今の数分全てなかった事にしてください」

陳謝。

「こうして見ても……………結構整理してんだな部屋」

「…………あら、奥さんに部屋を掃除させてどっかの誰かが、その奥さんに向かって言うセリフとは思えないわね」

「すみません、すみません、すみません」

全面降伏。

「むしろ、私のような奥さんを持って全面幸福ってところかしら？」

「ちょっと上手いから嫌だ」

そう言いながら美々が用意してくれたミルクティーをすする。

出された座布団も凄く良い布使ってるな。うん？座布団でいいのか？洋風だから…………クッション？

「座布団で良いわよ。貴方と二人で住むなら和式の家は今決めたわ」
半ば諦めたように溜め息を吐き、美々は半眼で言った。

やっぱり言うておくが、今のは声に出してないからね。

「でさ、ちょっと気になった事があるんだが良いか？」

「……………ベッドの上の熊さん事？べ、別に良いでしょ？一人じゃ寂しいんだから」

態とらしく唇を尖らせ、態とらしく頬を染め、態とらしくそつぱを向く香里美々。

藤宮藤谷はそんな所に着眼したのではない。いや、熊さんには着眼したのだが、内容に差異が生じている。

「あの、熊さんとやらのシャツさ。俺のじゃない？」

静寂。

「さて、晩御飯の支度でも……………」

「待て待て！ 閑話休題して話を終わらそうとすんな。あのシャツは二人で出掛けた時に貸したやつだよな。すっかり忘れてた」

そういえばあれ返してもらってなかった。

まさか熊の縫いぐるみが着てるとは、あの縫いぐるみ、なんかシャツのサイズにピッタリ過ぎる気がするし。

「にや、にやはあ……………」

「可愛く笑っても駄目」

「ええ！ ええそうよ！ 一人で寝るのが寂しいからあの熊さんにV2藤谷と名付けて夜は一緒に寝てるんだから！」

「開き直んなよっ！ V2を前に持つてくのかよ！」

あれ？俺の突っ込みもなんかズレてないか？

「だって……… 良いじゃない好きなんだから！」

更に、完璧に、完膚なきまでに開き直りやがった。

「そ、その発言はひ、卑怯だ」

「でも、そろそろシャツ替えたい。藤谷の匂いしなくなった………」

普通に、客観で聞くと変態っぽいのが、惚れた弱味というやつか、伏し目がちな美々は恐ろしく可愛く見える。

惚れた弱味、愛とは凄まじい魔力を持つ物だ。

「…………… 分かった。俺も白状しよう」

藤谷は黙って携帯を開いて、液晶を美々に見せる。

何も操作が行われていない携帯電話がどうなっているか。そう、待受画面が展開されている。

「これ、私だよな？」

「寝てる時に撮った。なんか、その、すまん」

「なんだか待受にしたいって言うのも恥ずかしいというか、なんと
いうかだよな。私もほら」

美々は俺のフォローをしてくれつつ自分の携帯電話の液晶を見せてくる。

実は美々の携帯の色はピンクだったりする。

美々は基本的に黒の服を着たりすることが多く、黒がイメージカラーとして半分以上定着しているのだが、どちらかと言えば美々の好みは暖色である。

話が逸れたが、液晶を藤谷は確認する。

「うーん。俺ら馬鹿っぽいな」

藤谷は自分自身の横顔を見ながら言った。

目線を美々に移すと美々も微笑んでる。

その後、俺達はツーショットで写真を撮った。当然仲良くそれを待受画面に設定した。

「ねえ、藤谷？」

いつも通りに呼ばれた風だが少し違う。少しトーンが低いというか

言いにくい事を言おうとしている感じ。

美々の事少しずつ解ってきてるんだな俺は、なんて感心する反面藤谷は嫌な予感を拭いきれない。

「あ、あー。悪い、悪かった！　悪いところは直す、だからもう少し待ってくれ。えと、あれか！？　料理をもっと手伝えば………いや、寧ろこれからは俺が作る。朝もしゃっきりと起きるし、家事ももっと手伝う。デートだってもっと――」

「藤谷！」

「はい！」

藤谷は言葉を中断され、反射的に返事をしてしまう。ビシッと気を付けの体勢を座りながらとってしまうほど。

「違うよ。藤谷とさよならなんかないよ。あんな辛い的一生に一回で十分」

「じゃあ………」

なら何をあんなに言いにくそうにしていたんだ。

藤谷は頭をフルに回転させた。あんまり効率よく使われていない頭が悲鳴をあげだしたが、今はそんな時じゃない。

「その写真見てほしいの」

そっと指差された先を目で追う。藤谷の真後ろ、振り返る形になる。

学習机だろう。机の上には何もなく、備え付けの本棚にはビッシリと本が埋まっている。中に少女漫画があっただのは流す。

美々が言うのはこれの事だろう。机の上の隅に飾ってある写真、暖色の写真立てに飾られている写真。

三人、背景は大きな木、銀杏だろうか色がとても綺麗だ。

三人の内一人は見覚えがある。その一人というのは美々の父さん、今よりずっと若い。

ということは、この真ん中のピンクの女の子は美々だろう。

そしてもう一人、いつか美々が着た服を着て、小さい美々と手を繋いで微笑んでる。つか、本気で美人さんだな。

「お母さんに嫉妬させないで」

しまった読まれた。

ちょっとシリアスな話をしようとしてるのにぶち壊しである。

「やっぱりお母さんだよなあ……………」

藤谷は写真を眺めながら染々呟く。

似すぎ、美々が大人になったらきつところなるだろう。

「それでね、私ばかり藤谷の家庭事情知ってるでしょ？ だから

藤谷にももつと私の事知って欲しくて」

そういえばそうだった。なんか調べた、と言って俺の家庭事情やら何やらを殆んど覚えてるんだっけ。

ついでに美々は記憶力が馬鹿みたいにいし、全部覚えてるんだろ
うな。

「たしかに美々の事は沢山知りたいが、あまり言いたくないことなんだろ？　なら無理することないよ」

いくらなんでもある程度予想はついてる。

今まで美々の母親には会った事ない。多分、母親絡みの事なのだろう。

「うっん、言いたい。知ってほしいの」

「……………分かった。聞くよ」

「なら、側に行ってもいい？」

「ああ」

俺は写真を眺めるのをやめて、座りなおした。

横に座った美々がピッタリと寄り添ってくる。何だか美々に密着されるのそろそろ慣れて……………きてないな、駄目だ。案の定心臓は快速運行している。

藤谷は待った。美々が口を開くのを待った。

美々は深く息を吸い込んで言葉を吐き出した。

「毎週水曜日はね。駅前のデパートに行くのが日課だったの。理由は分からないけど、それが私とお母さんの二人の日課だった」

藤谷は適度に相槌を打ち、しっかりと聞いた。

「……………ある時ね、火事があったの。一つのデパートが全焼する程の火事、その時店内には584名いて、死者は3名……………周りの人は……………まわ、ま……………」

最初は鼻をすするだけだったが、もう喋ることもままならないくらい泣いている。

もういい、もういいよ。

そう言っでやろうとした自分を藤谷は寸で止める。

美々は覚悟を持って今の話をしてる筈なのに、自分が、藤宮藤谷がそれを止めてどうする。

自分の大切な人が泣いているのに何も出来ない苛立ちで藤谷は拳を強く握り締め、思い切り歯を食い縛った。

歯は折れそうになり、拳から爪で皮膚を切るんじゃないかというくらいに悔しい。

責めても、責めてもと、美々の頭をゆっくりと鋤くように撫でてや

った。

「み…皆、言っただ…良かった、助かった…でも、当事者じゃないから、助かったから…」

「だから、分からなかったんだな。分かってくれなかったんだな」

美々は頷いた。

「お母さん、助けてくれたの…階段で、でね、藤谷も助けてくれた…階段で」

記憶力がいいというのも考え物だ。美々は多分鮮明に覚えてるのだろう、母の最後の日の事を。

「始まりはね。そんな理由…藤谷がお母さんみたいに助けてくれて、藤谷の事を追い回して、気付いたら好きになってた」

美々は、はにかんだ。

無理して笑ってる筈なのに、その笑顔藤谷にとってはとても愛しいものだった。

説明も甘いし、不十分な点はいくつもあったが、美々の辛そうな顔を見て追究できる奴がいるのなら、是非俺がぶん殴ってやろう、そ

う藤谷は思う。

きつと、またいつか俺達が大人になれたらまた話そうと思う。

それから美々が落ち着いてから一緒に食事を取って、アイの事が心配だったので早目に帰った。

美々が帰り際に恨めしそうに見てたが、仕方ない。仕方ないと言わないとやってらんない。

十四話前編

藤宮藤谷、あだ名はフジフジ、トウトウなんて呼ばれたり、みやたにと呼ばれた事もあった。名前ネタが尽きない男である。

そんな彼の目覚めは遅い。前日に明日は学校だから、確りと起きよう。そう思った筈なのに、目覚ましはかけてはいない。

可愛いと言うより見た目的には美人で、そして、女性として体がとても発達している自慢の恋人が藤谷にはいるからだ。

他の男共からは「この勝ち組め！」だとか「非国民！」とか、きつと色々の中傷されるだろうが、そんな雑言を藤谷は軽い気持ちで流す事が出来るだろう。

「ちょっと！ 藤谷、起きなさいよっ！」
ん？

なんか違う。間違え探しを見ていて違和感に気付くが、何が間違いなのか見破れない。そんな違和感。

夢と現実の狭間でゆらゆら揺れている藤谷の脳には、この違和感が見破れない。

少しずつ現実に戻ってきている頭が一つ違和感を解き明かした。

揺すられている。

ゆさゆさと、なんか新妻が寝ている旦那様を起こすときみたいに揺

すられている。

藤谷の恋人である女性なら、そろそろ起きない藤谷に痺を切らし「執行」の一言共に「愛と義の為に戦い、狭間で揺り動く騎士の像」を落としてくる筈だ。

ちなみにこの「愛と義の為に戦い、狭間で揺り動く騎士の像」にやんとらふひは鉾石できているらしく、重さは二十キログラムに達する。ただの石を削っただけに見えるが気のせいらしい。

ちよつと話が逸れたが、つまり「執行」がいつまで経っても執行されない。

「もう、本当にアンタは私がないと……仕方ないわねえ……」

おっ、くるか。そろそろ腹にくるはずだ。

藤谷はくるはずの衝撃に備えて少し腹筋に力を入れる。

ぐにー

「なに！？　なんだなんだ？　像は！？　ぐあっ！」

頬を引っ張られるという予想外、予定外、有り得ない起こしかたをされた藤谷は一瞬で覚醒し、飛び起きた。

そして、上半身を思い切り起こし、何かに頭突きをしたらしい。おでこが痛む。

「つう……なんなんだよ。今日はそういう予想外な起こし方をす

る日なのか……あれ？」

藤谷を起こした女性が尻餅をついておでこを撫でている。どうやらおでことおでこがぶつかっただけらしい。

じゃなくて、いい加減言うまでもないが、目の前で尻を床につけて膝を少し上げている女性は美々ではない。

そう、白だ。

いや、違う違う。

スカートの中身の話ではなく。

「穂村………？」

「痛い………なによおもう」

「いや、本当に穂村か？」

藤谷の小さな記憶力の中で、態々部屋に入って来て自分を起こしに来るような女性の知り合いは美々を除いて、穂村希ほむらのぞみその人以外はいない。

「そうよ。穂村希ちゃん」

そう言っただけで平な胸を張る希。

「えっ？ いや、マジで穂村なのか？ だってロンドンだかオーストラリアに行ったんじゃない……」

「イギリス！　つか、ロンドンとオーストラリア全然違うわよ。本当にアンタ頭悪いわね」

「なっ、なんだと！　これでも進学校にだな」

「はいはい。たまたま、偶然、奇跡よ奇跡」

手をあっち行けみたいにヒラヒラと振る希。

「この格好見てみなさいよ」

また平野の様な胸を張る希、そんな失礼な事を思いながら上から下まで眺めてみる。

「うちの学校の制服？　まさか！？」

「そう、そのまさかよ」

「盗んだのか！？」

「なんでよ！　どこからよ！？」

美々が家に置いてある制服を盗ったのかと思ったが、よく考えるとそれは違っただろう。胸が山脈と平野じゃ大きく違う。

「なんだか失礼な事を考えているようね」

「ソナナコトハナイデスヨ」

希は額に手を当てやれやれと頭を振った。

「まあいいわ。久々の会えたのになんかないわけ？」

なんか？

藤谷は小さな脳を回して思考する。

ベッドから降りて携帯を開いて中身を確認、

「ああ、久しぶりだな穂村」

メールが一件、美々からだ。

『今日はちよつと遅くなるの。でもギリギリなんとか起こす事は出来るから大丈夫。朝御飯は歩きながら食べられるのにするから、おにぎりかパンにする予定だから』

成程、こういう時に限って……いや、ラッキーか。俺の寝ている間に二人を出会わせていたら……怖いな、美々は嫉妬深いし。

「っんのー！」

ぐにー。

また頬を引つ張られた。

「だから痛いって！ 何をするんだよ」

およそ五秒程頬をつねられ、解放された藤谷は頬を押さえながら希を睨みつけた。

「何をする？ 何をするのはアンタの方よ！ 折角幼馴染みとの再会なのに何よその態度！ 四年よ、四年も間が空いた再会よ？ なんでなんでそんな適当な態度なの！？ お別れの日アンタが流した涙は嘘だったの！？」

流れ落ちる滝のように言葉を紡ぎ出し続ける希、もうあれは紡ぐという吐き出しているマーライオンもビックリだ。

そして、補足するとあの日泣いていたのには理由がある。普段料理なんてしない希が急に『お礼がしたい』と言い出し、俺と仲のよかった数人の女子を交えてケーキをご馳走になった。

……………辛かったんだ。景色がぐにやぐにやに歪んで見えるくらい辛かった。そのままお別れという流れの時は皆揃って苦しみの涙に明け暮れたものだ。

ようやく脳が正常運転を始めた。

何か家が隣だったということもあって、こいつの両親とうちの親父は仲が良くて、よく一緒にされて遊んでたけど、この我が儘姫様には随分困らされた記憶が……………大量にある。

「穂村、そっぴやお前なんで家にいるんだ？」

聞き忘れていた。確かに幼馴染みだが、なぜこの娘は俺の部屋にいるのだろうか。しかも両腰に手を当てて威張るようなポーズで。ない胸張って。

「今失礼な事考えてた」

なにいい!? こいつも俺の心が読めるのか?

「私が部屋にいるのはお父さんに許可もらったからよ」

「そうか、親父に……………ん? いるのか親父が?」

「え、ええ、お父さんが居ちゃおかしいの?」

まあ普通はおかしくないな。普通の仕事をしてたらいってもおかしくない。いないとしても、もう出勤してるかどうかという感じだ。

だがしかし、残念ながら普通の職業ではなく、夢とロマンに溢れたところか、夢とロマンだけで形成された職業についている父上は、ついこの間日本を出ていったばかりだ。

希はまだ親父が冒険家として復帰する前に遊んでいたからな。結構家にいるイメージがあるのだろう。

「まあいい、着替えるから出てけ。学校への道が分かんないなら送って……………やるよ。仕方ない」

美々と会わせる事になるが、仕方ない。多分これからも顔をあわせる事になるだろうから、早い内に済ました方がいいだろう。

「なんか冷たくない? もう少し温かい反応してもいいじゃない…

……………」

唇を尖らして渋々外に出ていく希、残された藤谷は着替を始める。

何か久しぶりに会ったのに順応してるなあ。

少し回想する。

穂村希、子供の頃から小学校六年の卒業式の一週間後まで付き合っていた幼馴染み。

面倒くさがりで、男勝りで、何だか女性としての繊細さに欠ける幼馴染み。

四年経てば流石に女性らしく変わるもんだな。

ポニーテールとツリ目と細いのは変わらんが。

寝惚けもまだ残る頭で少し回想すると、良い思い出が出てこない。そんな時、扉が強く開け放たれた。

「とうや！ 大変だよ大変だよ！ みみと……………馬の尻尾の人がけんかしてる！」

馬の尻尾の人？

ああ、ポニーテールとはよく言ったもんだな。

「……………ってケンカしてるだも！？」

未だに半分寝惚けていた頭が急激に覚醒する。

頭の中で警鐘、警報、アラートが頭が破裂する勢いで鳴り出した。

本来なら藤谷が間に入って希の事を紹介するのがベストプランだったが、もう遅い。

「直ぐに行く！」

藤谷は部屋を飛び出し、階段を無視するように跳びながら下りる。

「だから、アンタの勘違いよそれ。アイツは誰でも助けちゃう悪癖があつて、それでアンタが勘違いしてるだけで……」

「貴方は一体何？ 急に人の家から出てきたと思ったら藤谷の事何を知ってるっていうの？」

その瞬間藤谷は終了した。

断頭台に頭を預けた所か、全身を固定され、四肢各々にもギロチンが用意された気分だった。

まだ刑が執行されるまで猶予がある。ある筈だ。あるといいな。

だから、今は動く。

「や、やあ、これはこれは。奇遇だね、僕の家の前で二人に出会えるなんてさ。H A H A H A」

高笑いまでして誤魔化してみたが二人の間に流れる空気はより悪くなった。

「ねえ藤谷、この人は誰？」

と美々さん。

「アンタね。人助けが趣味つてのも考え物よ。もう少し相手を考えて……………」

「まあ待て穂村」

ここで誤解しないで頂きたい。俺が好きなのは美々であって、穂村は単なる幼馴染み、だから、美々の機嫌が悪くなるのが恐いだけで、彼女に気を配る必要はな……………くもないな。

「なによ」

やっぱリムツとしてらっしやる。昔からそうだ。誰にでも高圧的なんだよこいつは、まあ、良いところもその分知ってるから嫌いにはなれないが。

「紹介するよ。彼女は俺の——」

その時藤谷の頭に選択肢が浮かぶ。

一、紹介するよ。彼女は俺の恋人なんだ。

二、紹介するよ。彼女は俺の奥さんなんだ。

三、紹介するよ。彼女は俺の婚約者なんだ。

……………うーん。とりあえず事実の範囲内の選択肢を並べてみたんだが、どれがいいかな？

「ワクワク」

不味い、左横に口で言っちゃう程ワクワクしてる人がある。

「恋人なんだ！」

藤宮藤谷、無難に生きてしまう男だった。

左横から視線の槍が飛んでくる。二か三ならもう少し良い反応が期待できただろうに、でも恥ずかしいものは恥ずかしい。

対して希の表情は酷い。

きつとツチノコを発見したら、こんな顔になるんだろっていうくらい驚いた顔をしてる。驚愕とはこの事、顎の関節が駄目になっちゃうんじゃないか、あれ。

「ちょっと待ちなさいよ。おかしいでしょ！　なんでアンタに彼女がいんのよ！？」

「彼女くらいいてもいいだろ！　お前に迷惑かかるわけじゃないし！」

「だって、私達許嫁でしょ！？」

まさか数十秒後に自分が驚愕するとは思わなんだ。

十四話後編

拳で殴られ、足で蹴られ、鉄パイプで叩かれる。

藤宮藤谷は頭から血を流しながら考えた。

なんでこんな事してんだろう？

血を流し、流させながら、なんでこんな不良漫画みたいな展開に自分が興じているのか。

頭部からの流血で少し冷静になってきた。痛みが自分を確かにする。

「もういい！ もういいから……………」

悲痛な叫びが聞こえる。声も震えてる。多分泣いてんだろうな。泣かしたくないのに、誰にも自分の為に泣いてほしくなんかないのに！

「黙ってろよっ！！！！ 絶対助ける」

周りの男達の罵倒が聞こえる。だがそれも一枚板を張ったようによく聞こえない。目も滲んでぼやけて霞んでる。

最後に聞いたのは罵りの言葉、後振り下ろされる鉄パイプを眺めながら時間がゆっくりと流れるのを感じていた。

朝に遡る。

気まずい。つつか空気が重すぎる。

鉛が混ざったみたいな空気を吸っては吐きながら藤谷は泣きそうになる。

両手に花、なんて冗談でも言えそうにない。

「とうやとうや、お昼は私が作ったからね」

「ああ、ありがとうアイ……………っ!？」

アイがいる。何か同じ制服着て、いつの間にか希との間に割って入って腕まで取られてる。

驚きで一杯の藤谷は今日二度目の愕然。

「聞いてなかったの？ 今日から通うそうよ。お義父様が帰ってきたのもその為だって」

「えっ？　なんで俺も知らない情報を当然の様に知ってるんだマイハニー」

「朝にお義父様が言ってたからよマイダーリン、因みに、口を大きく開きながら藤谷も隣に立ってわ」

『義』の字については置いておこう。ついでにノリで『マイハニー』

と言って、明らかに機嫌の悪くなった希も置いておこう。

藤谷は朝の記憶を巻き戻してみるが、希との再会とアノ発言しか思い出せない。希はあれから何か考えてるようで全く口を開かない。

「ふー……………ん？」

あれ？何かおかしい。何かが抜けている。

思考しろ、思案しろ、何を考えから抜かしている？なんだなんだなんだなんだ。

「アイ！？ お前どうやって編入試験合格したんだ？ 学年は？ やっぱ一年か？」

何だか今日の藤谷の頭はよく動かない。油が切れたか随分察しが悪い、悪すぎる。

自分でそんな突っ込みを心の中で自分に入れてへこんでる最中に、その質問に美々が答えてくれた。

「今朝お義父様が電話してたんだけど、国家のなんとか、特別措置がどうとか言ってたけど……………」

藤谷と美々が顔を見合わせ、ゆっくりと空に手を伸ばしてきやつきやと跳び跳ねてる少女に目をやる。

「やっぱりそういうことなんだろうな。もうアイの事は置いておく」

うん、なんか恐い事に首を突っ込むのはいくない。

そんな悟りを開いた藤谷は、アイに倣って空を仰いだ。まだ夏の陽気が残る日射しが目に痛かった。

「あのさ……………」

そんな時横を静かに歩いていた希が遠慮がちに口を開いた。

「どうした？」

「あのアイって子の事は君のお父さんにいくらか聞いたけど、本当にただ住んでるだけなの？ あつ、あの、他意はあんまりないんだけど…………その、なんだかあなたにべつたり過ぎな気がして」

一回に喋る量が多いのは相変わらずだが、なんだか遠慮してるみたいだ。口調もおかしい、『アンタ』って言わないところが特に。

「……………変なところだけ鋭いんだから……………」

美々が何かを呟いた気がするが、小さすぎてよく聞こえなかった。

「うーん、兄弟みたいに思ってたけど、なんかべつたりなんだよな。なんで？」

疑問のままにしないでアイに向き直って聞いてみる。

「ふみや？ アイがとうやの事好きだからだよ」

その発言の直後激怒した美々に噛みつかれたのは言うまでもない。

「藤宮アイですよろしくお願いします！」

そう言つてアイは元気にお辞儀した。

「穂村希です。日本から離れててちょっとズレちゃってるかもしれませんが、よろしくお願いします」

続いてお辞儀、実は挨拶はまだある。

「リサ・フィールです。入院してしまった山吉先生の代わりです、頑張ります」

……………誰だよ。

山吉先生とはあの中年の現国教師だ。美々との出会いのきっかけになった意外に重要な人物だったのだが、まさか病気で入院してしまうとは。

リサ先生は名前の通り日本の方ではなく、その後に続いた自己紹介を聞く限りでは寒い地方の方らしい。

「これで朝のHRを終わります、えと……………号令を」

日直が号令をかけて、皆席を立ち二人の転校生の元へと寄って行く。まるで動物園の人気の動物の檻だな。そんな事を藤谷が机に頬杖つきながら見ていると声をかけられた。

「フジミヤ、話が、アリマス。少し時間ください」

いつの間にか席の真横に立っていたリサ先生が上手くない日本語で話し掛けてきた。

「は、はあ……………」

二人は大丈夫かなあ。まあ、アイは明るいし取っ付き安いし人見知りはないから大丈夫だろうけど、希は……………大丈夫か、あいつなんだかねで容量良いし。

窓の外を見ながら藤谷が空に思いはせていると、自分に用がある人が入室してきた。

「お待たせしました。話をしましょう」

リサ先生は机を挟んだ反対側に座ると何枚かのプリントを机に置いた。

「先生、意見する気はないんですが、なんで態々生徒指導室でこんな会話するんすか？ 悪いことした気分ですよ」

「失礼、でも他の部屋は使用中との事なので。次の授業もアリマス、これを読んでください」

リサ先生は三枚の紙をこっちに寄せてきた。藤谷はその三枚を手に取り読み出した。

三枚ある内の一枚は英語ではない何処かの国の言葉だと思われる字で書かれていて読めないが、一枚目は日本語で尚且アイの写真まで貼ってあるのだから分かる。

こいつら、アイで実験してた奴らだ。

親父に聞いた話を思い出す。『あの子がいた施設は子供達を投薬や頭の中いじくって実験する所だった』

そんな場所から救い出した親父は正しい事をしたと思う、いや確信する。

そうなると敵意しか持てない藤谷は、目元をきつくして対応する。

「アンタらなんだよ？ アイは普通の女の子だ。返せって言われたって返してやらないぞ」

「それは勘違い、フジミヤ、私はアイの味方です。アイを学校に行かせてあげたい。それを補佐するためにやってキマシタ」

「本当ですか？」

「ハイ」

騙されやすい藤谷だ、恋人の美々の嘘だつて見破れる自信がないくらい嘘に弱い、でも、勘違いかもしれないが、リサ先生の目は真摯に藤谷を見ていた。

……負けだ。信用しなくなつた、内容もこの人の事も。

「分かりました。それで何で俺を呼んだんですか？」

「このちよつと手を加えた書類をあなたに保管してもらつ事と、あなたから見てアイが幸せかどうかを聞くためデス」

『ちよつと手を加えた』と仰ってるが、多分、『ちよつと』の度は軽くこえてるんだろうなあ。

「幸せかどうかなんて本人に聞かなきゃ分かりませんが、少なくとも不幸にはなつてないと思います。願望かも知れませんが」

「いえ、アイはきつと幸せですよ。思ってくれる人がいるだけで、人は幸せになれるんです。本当にフジミヤさん達には感謝しています」

ここにはいない父親にも感謝してるようで、リサ先生は何か考えるように天井を見上げ、そしてゆっくりと表情を崩し笑った。

正直、一番の立役者は親父だ。俺は特に何もしてない。

どっからか救い出すこともしてなければ、新しい家を提供したのも俺ではない。でも、家族には多分、いや、絶対になってやれる。俺と親父がそうなのだから。

「あなたは本当にいい人です」

藤谷の考える顔を見てか、そんな言葉を口にしたリサ・フィール、対して藤宮藤谷はそれに怪訝な表情で返した。

「私の持論ですが、人間の価値は自分では決められないんですよ」

そうリサ先生は言い切ったところでタイミング良くチャイムが鳴った。

「さあ、授業ですよフジミヤ」

先生、普通はチャイムが鳴ったら開始なんです。ここにいるって事は問題ありませんよ。

張り切って部屋の扉へ歩いて行くリサ先生の背中を追いながら藤谷は心の中でそんな呟きを漏らした。

リサ先生の初授業は言うまでもない、五分程短縮授業となった。それどころか、リサ先生が教室に入った時点で皆授業の準備を済ませ、静かに着席してすることに先生感心してた。

素性は謎で、アイの関係者であることぐらいしか分からないが、ちよっとズレてるって事は十分に分かった。

藤谷の密度の高い長い長い一日はまだ終わらなかった。出来ればこのまま一日をフェードアウトしたかったが、運命を司ってる神様は藤谷の事が嫌いらしい。

放課後『買い物に行くけど藤谷は絶対に来ては駄目』と、美々とアイに念を押され、寂しくとぼとぼと家に歩いて帰る藤谷、きつと今自分の背中を見た人はあまりの寂しさオーラに驚く事だろう。

「藤谷！」

後数歩で校門を出ようという所で、聞き覚えのある声に呼ばれた。

藤谷が振り返ると、駆け寄って来る希、何故かは解らないが逃げ出したい衝動にかられたが、なんとかそれを自制する。

「どうした？ 何か……用は沢山あるよな」

『許嫁』、この言葉が頭の中で重く残る。

俺は会ってないが、親父はいるらしいから思い切り問ただしてやる。
拳や蹴りも含めて。

「そ、そこまで用があるってわけじゃないんだけど……その……
そう！ 商店街に行きたいんだけど、様子だって大分変わってるみ
たいだから案内を……してくれたらなあ、なんて」

美々という存在がいるからだろうか、随分希は藤谷に対して遠慮し
ている。昔の男子より前に、誰よりも前にいて、自分を巻き込んで
いた台風のような少女がまさかこんな風になるとは。

そんな小さな感動を覚えつつ、藤谷は出来る限り優しいトーンで答
えた。

「ちょうど暇だったんだ。案内くらいなら俺でよければ引き受ける
よ」

「ほ、本当に？ じゃあ早速行きましょ！」

そして現在。

別に軽々しく引き受けなければ良かったなんて思っていない。実を言っちゃえば自分で引き起こした問題だ。

思い出話をしながら商店街を目指し、昔に『ここには魔物が住んでいる』なんて今考えたなら悶えて倒れそうになる思い出がある路地に入ったら、なんか偶々恐喝の現場に出会しちゃって、他校の制服を着た眼鏡の男子が三人の男に囲まれてるのを藤谷がいつも通りに放っておけなくて助けに入り、眼鏡の男は逃げて、希も逃げただろうと思ったら死角から、どこから持ってきたか分からない鉄パイプで襲いかかるうとしているのを見張りをしていたのだろう四人目にあっさり捕まり、ナイフを首に当てられ捕縛された。

余りにも上手くいきすぎて、運命を司ってる神様に菓子折りを持って行ってどうにかこの事態が好転しないかお願いしようかと本気で考えてみている。

以上、ダイジェストで振り返ってみたが、ダイジェストにしたって特に何も変わらないな。痛いのも全く消えないし、うん。

頭がぼーっとする……………右腕が動かないし、多分折れてんなこりゃ。

余りの情けなさに笑えてきて小さく笑おうとしたが、体が痛くて笑うことも出来はしない。

「がつ！」

背中を思い切り踏みつけられ何か理解できない言葉を吐いてる男A、

鉄パイプで頭をぶつ叩いてくれたのはコイツだ。

「さあて、カッコつけて失敗しちゃった彼氏のお仕置きは済んだし、次は彼女、いつてみようか」

四人は揃って下卑た笑い方をする。

希の顔は真っ青、これから何かされるかもしれない恐怖からか、それとも幼馴染みが血だらけでコンクリートにへばりついてるからか。

「まったく、恐いなら逃げりゃいいのに……でも、その辺変わってなくて嬉しいな。」

目の前にピンチの女の子がいる。なら、男なら、男の子ならそれを見過ごしちゃあいけない。

「……………へへっ、オイオイ……………まだそんなんじゃあ倒れらんないよ……………やるならもっとしっかりやれよ」

強がりもいいところ、強がりの中の強がり、手と足を使えるだけ使って産まれたての小鹿のようになんとか立ち上がる。立ち上がってるといっつていいか微妙な状況だが、膝はついてない。

またなんか理解できない言葉を吐きながら四人共寄って来る。

つか、この男達は恐喝を邪魔しただけでここまですんのかよ。

そんな負け惜しみが出てくるようじゃ、格好悪いなあ……………

男A（鉄パイプ装備）が奇声を上げながら寄ってくる。鉄パイプを

振り上げて、振り下ろす。

至極単純な動作、あれ喰らったら流石の藤谷も持たないだろう。

藤谷は目を瞑り、自分の終わる時を待った。

……………その時は何時まで経ってもやってこない。

「……………ん？」

恐る恐る目を開く、目を開くと言っても、右目は血が流れてて開かないから左目だけ。

最初に目についたのは男Aの驚愕の顔、同様にBCDも、ちょっと笑えるくらいに驚愕してる。

男A鉄パイプは握ってる。その鉄パイプをゆっくりと視線を上に移していくと、手があった。

岩を削って作られた様にゴツゴツしている。その岩の手は確りと鉄パイプを握り締め、これ以上藤谷に近付くのを止めている。

「オイ、息子、なにやってんだ？」

低く、響く声でそう問われた。

「すま、ん」

謝るしか出来なかった。格好悪くて仕方ない、こんな姿絶対に美々にだけは見られたくない。

親父が来てくれて安心して自分がいるのが情なくて仕方ない。自分で勝手に助けに入って、拳句女の子一人救えず、父親に頼ろうとしている。

今からでも体に一喝入れて、希を任せて四人の相手をしたいが、体が言うことを聞きそうにない。

悔しい、悔しい、本当に悔しい、悔しいの一言に尽きる。

「むんっ！」

親父は左手で鉄パイプを握り締めたまま、男Aの腹部に思い切り蹴りを入れた。

蹴りを受けた男Aは地から足が離れ、少しの間自己の意思とは関係なく飛ばされる。

浮いた男Aに親父は追撃の右ストレート。

それを顔面で受けた男Aは見事なまでに吹っ飛び、積まれたビールケースに突っ込んで、ビールケースの下に埋もれて動かなくなった。

「わりいな。俺も親なんでな。息子を痛めつけられると怒っちまうらしい」

そっからは酷いものだ。藤谷は立ってるだけ、倒れるにも体は動かず、ただ止まってるだけしか出来ない藤谷は見ていた。

人が宙を舞い、地面に落ちる前に更に一撃を受け、格闘ゲームみた

いなコンボを受ける様を。

あつ、という間に四人は地に倒れ、啞然としてる希と反応も出来ない藤谷と、まだ格好をつけて立っている親父が残った。

「全く、お前にはもう少し教える事があるな藤谷」

まだ俺に教える事があるのが嬉しいのだろう。親父は豪快に笑いながら近付いてくる。

藤谷はまだ倒れない。倒れるわけにはいかない。まだ、まだやり残した事がある。

笑顔で近付いてくる親父に狙いを絞り、藤谷は倒れる気で、その力も上乘せし、最後の力を左拳に乗せて、親父の顔を撃ち抜いた。

「んのつバカ野郎っつ！！ 許嫁ってなんなんだぁーっつっ！！！」

多分今の一撃、藤宮藤谷史上最強最大の一撃になったに違いない。

心から満足した藤谷はそのままコンクリートを抱き締めに逝った。

穂村希の目には『これ以上何かされたら死んじゃう』ってぐらい重傷の幼馴染みが映っていた筈なのだが、助けに来てくれた父親に倒れながらも『ゴキッ』なんて擬音が聞こえるパンチを顔面に見舞って、満足した顔で倒れていく様だった。

希はあの満足した顔を見て、幼馴染みを亡くしたとちよっぴり確信したのだった。

十五話

ジャリ…………ジャリ…………

不快な金属音が耳に入ってくる。長時間聞いてると狂ってしまう気がするくらい不快な音、黒板をキーツ、より違ったベクトルで不快、ずっと聞き続けられるが聞いているにはいけないって本能が警笛を鳴らしてる。

ぼやけていた視界がようやく鮮明に見えてきた頃、この金属音の正体が解る。

手錠か、いや、違うな。鎖だ。

そう、鎖がグルグル巻きで両腕を固定し、天井に繋がれている。

今更だが足が地についていない。鎖で両腕を縛られ、宙に浮かされている。

もがけばもがく程両腕の鎖が食い込んで痛い。

「はう、藤谷可愛い……………痛いんだね？ 苦しいんだね？ でもね、直ぐに良くなるから」

更に更に今更だが、周囲は霧に包まれていてよく見えない。鮮明に見えるのは鎖と自分の体だけ、霧の中からよく知っている声が聞こえてくる。

「大丈夫……………恐くないよ。私がいるから……………」

藤谷は感じた。

自分は気が狂ったらしい、この愛しい声が『大丈夫』と言っただけで何だか安心感を覚えている。

「ちょっと待ちなさいよ。私だって藤谷が欲しいんだから」

あれ？この声は……

また聞き覚えのある声、最近また聞くようになった懐かしい声。

「だーめ、藤谷は私の」

「嫌、私にも分けて！」

「……………うーん、少しだけだよ？」

「うん、やったあ！」

なんだ？なんの会話が展開してるんだ？

背筋に冷たさと、本能の警笛か、腕や足がガタガタと震えている。

「じゃあ藤谷……………少しだけ我慢ね……………」

諭すような優しい口調で発せられたその言葉の後直ぐに、あまり聞いた事のない機械の駆動音、それが木を伐るための道具だと気付いたのは全貌が見えてから。

「さあ、イクヨ？」

チェーンソーを持った美々が綺麗で可愛くて愛しい笑顔で霧の中から歩み寄ってきた。

「はいまたかいっ!!」

藤谷は飛び起きた。

「ぐう……………がぁ……………」

飛び起きた事により、全身に苦痛が走る、走り続ける。特に右腕なんて痛すぎて気がおかしくなりそう。

「藤谷!」

痛みと藤谷が戦っていると、誰かが抱きついてくる。

「ぬぎゃぁ!」

「あつ、ああ……………ごめんなさい」

抱きつかれて、痛みの軍勢が勢力を拡大し、藤谷に一斉攻撃を仕掛

けてくる。

気絶しそうになりながらも、むしろ気絶してしまいたいくらいの痛みに襲われながらも、藤谷は出来るだけ自然に笑い、自分の平気さをアピールした。

人って突然痛みに襲われると『ぬぎゃあ』って行っちゃうんだ、と感心しながら藤谷は口を開いた。

「ここはどこ？ 私は藤宮、貴方美々」

「……………結構駄目なようね。素直に謝るわ香里さん」

そう言ったのは希さんだ。美々の隣に座っていた。今気付いた、ちよつとびっくり。

痛みで無理矢理覚醒出来たらしい、ちよつと頭の回転も頭自体も重い、今が病院のベッドだって事は理解できた。しかも個室で凄く大きい、ソファーまである始末だ。

「ううん、仕方ないの。藤谷は人助けしないと死んじゃう生き物だから……………う……………う」

何故か二人揃って泣き出した。態と、すんごく、とても、滅茶苦茶態とらしく。

いつの間に仲良くなつてんだこいつら、とか藤谷が思いながら辺りが真っ暗なのに気付く。日も完璧に落ちてるし、街の光があんなに遠くに……………ん？ここ何階？街が遠い、下に広がる街が遠いよ。

「多分疑問に思ってるだろうから答えるけど、今は藤谷が倒れてから約四時間後、貴方のお父さん、いえ、私達のお義父さんは警察、ちよっとやりすぎでね。そして、ここは貴方の大事な大事な親友様がここに押し込んだ。以上」

滝の様に言われた気がする。頭打たれたせいで理解が追い付かないのか、まあ、自分が生きてて、右腕が完璧に折れてるって事だけは理解した。

「あんだけ叩かれて腕以外は軽い怪我ってどんだけ丈夫なのよアンタ」

と希さん。無い胸張って仰ってるが、少しは君にも責任あるんだぞ。

「たく、誰のせいでここまでボロボロにされたと思ってんだ………」

助けに入っただのは藤谷で、親父は問題なく希を助けてるわけだから、それが出来ないどころか体がこのザマじゃ、格好悪い極みだ。

それでも少しくらいは悪態もつきたくなくなってしまう。

「悪かったわよ………その怪我は私のせいだわ、ごめんなさい」

しおらしい態度を取りながら、頭まで下げてきた。

こう返されてしまうと、藤谷も上手く対応出来ない。

「いや、その、別に気にすんなよ。俺がもっと上手く立ち回れば良かったんだし、それに、助けに入っただのは俺だぜ？」

何だか気付けばフォロー入れてる俺、駄目だ、こう素直に返されたら負け、お手上げ、手はあげられないけど。

「香里さんがいなければ私がアンタの世話、するところなんだけどね……………」

そんな恐ろしい事を呟く希、その発言がキーになってか古い記憶が呼び起こされた。

あれは藤谷が熱を出して学校を休んだその日の事だ。昔から丈夫さと痩せ我慢が取り柄の藤谷が学校を休むというのは余程だ。

混濁した意識の中で記憶してるのは『私に任せておけば大丈夫』、天使様の慈悲の言葉に思える言葉も、今になっては悪魔の暴言だった。

……………

「ビタミンは沢山取れば良いってもんじゃないいいつつ……！」

過去の記憶にトリップしていた藤谷は、一番ショックな記憶と共に現代に帰還した。

目の前にいる二人の女性は酷く驚いた表情をしている。そりゃいきなり叫べば驚くか、そんな冷静な考えに行き着けるなら大丈夫だ。嫌な汗が止まんないし、呼吸も荒いがきつと大丈夫、流石は穂村希さん、記憶を掘り起こしただけでこれとは。

「大丈夫、いや、本当に大丈夫、ちょっと混乱してるだけだ。んで、俺はいつこつから出られんの？」

「……………今よ」

「いま？」

「そう、腕以外は転んだのと変わらないそうだからすぐに帰れるわよ。頭も異常なかったみたいだし」

淡々と返してくる美々、自分はきつとはにわみたいに間抜けな顔をしていることだろう。

だってビクリするじゃないか、鉄パイプで殴打されてんだよ？すつごく痛かったんだよ？

それが今直ぐに帰れるって、実は死んでいて、ここは俺の最後の妄想だって言われても信じるよ。

「そろそろ貴方の大親友が迎えに来る頃だわ、血相変えて」

その発言が終わると同時に真っ白な鉄製の引き戸が開いた。破壊する気でやりましたってくらい強烈に。

「とおおおおとうううやあああああつつつつ！！！！」

破壊されそうになった引き戸から、他人の鼓膜と自分の喉を破壊する気で現れた柏原さん家の透くん。

背が高く、爽やかで素敵な笑顔が特徴的な彼だが、爽やかさの欠片すら残ってない。フルマラソンを終えた選手でもこんな辛そうで、顔の血管が切れて出血しそうな表情はしてないだろう。

「だい、だい……………はあっ、大丈夫かい？」

寧ろお前が大丈夫か、と思う。

藤谷が自分の無事を伝えようと、ちょっと透に呆れながら言おうとすると、スツと美々が椅子から立ち上がった。そして、引き戸に手をかけて、なんとか立っている透の目の前に行き、恭しく一礼、

「この度は私の夫に手厚い——」

「いらんっ！ お前のその貞淑な奥様みたいなノリはいらない！」

恭しく、という言葉は訂正、何時もの通り態とらしくだわ。

「あら、奥様だなんて……………ポッ」

『ポッ』って自分で言うなよ。頬に手を当てて恥ずかしがってんじやねえよ。

「藤谷のツンデレ久しぶり、やっぱりデレばかりじゃなくてツンもいるわね、うん」

なにかを悟り、納得している美々、さっきの必死さはどこへやら、苦笑いしている透、希は……………

「穂村、あんまし気にすんなって。俺は大丈夫だし、さあて、腹も

減ったしそろそろ帰りたい。透、家まで頼むよ」

「ああ、本当に心配したよ。あんまり無茶しないでくれよ」

ようやく中に入ってきた透には悪いが、これ以上ここにいると希が泣き出しそうだ。

痛む体に鞭打って、ベッドから下りて、美々が用意してくれた靴を履く、立った瞬間、止まる寸前のコマの上にいるようなぐらつきを覚えたが、なんとか踏ん張る。

危ない、だが、少し体は揺れてしまったらしい、希が心配そうに見ているし、支えようとしてか両手がこっちに伸ばされている。

「大丈夫だから気にすんな。しっかり助けてやれなくて悪かった」

何だか放っておけなくて、使える左手で少し乱暴に頭を撫でてやった。

希はその左手を取って、何かを確かめるように触っている。

「大きくなったね、大人の手だ。男の人の手」

愛しそうに手を撫でられた。くすぐったくて、手を引っ込める。『あっ』と名残惜しそうに引っ込める手を追って自分の手を伸ばす希が何だか可愛く見えた。

……その隣から、視線のビームが飛んできている。頬辺りが本当に焼けてんじゃないかってくらい痛い、熱い、泣きそう。

だるい、吐気がする。腕は痛い、体中が古い木造建築のようにミシミシする。

「只のパイプで殴られたぐらいで情けない！」

そう言つて警察のお世話になっていた髭面のオッサンは豪快に笑つた。

「鉄な！ 鉄だよ、鉄だから」

ベッドから起き上がつて無理矢理突っ込みを入れてみるが、頭がグラグラして直ぐにベッドに倒れる。

頭を打たれたからだろう、目眩と吐気が治まらない。おまけにあちこち体は痛いし、右腕は折れてるし。

帰宅後、虚勢を張り切つて、無事をアピールしながら食事を取り、残りがる二人（主に香里さん）を無理矢理帰宅させ、髭のオッサンに看病されるっていうちょっとへこむ状況となっている。

因みに透は忙しい中抜け出して来てくれたようで、俺を送ったら早々に帰ってしまった。更に更に因みに、髭のオッサンは警察で名を名乗ったら帰されたそうだ『さっちゃん』という言葉が絡んでるらしい。もうこの男自体よく分からないので突っ込みは無しにする。

そんな適当な扱いをしてはいるが、息子の部屋のベッドの前に上蔵を置いて座っているこの男は、息子を心配して居てくれるのだから、息子としては感謝していたりする。

「そうだ。親父、希が許嫁って何の話？」

寝ながら、少し寝返りをうって、天井を眺めながら聞いてみる。

「ああ、それはな」

「ああ」

「俺も分らない」

体が本調子ならここで手か足か『世界を掴み取る為に努力し続ける挑戦者の像』を投げつけていた所だ。うん、この像だけは何だか趣きが違いすぎるよね。もういいや、この男の土産なんてまともな物は無いし。

「オーケー、穏便に平和的に行こう。俺も父親をまた殴りたいとは思わないからな」

話し込む体制を取る為に、藤谷は半身起こした。父親は難しい顔して唸ってる。

「向こうの親父さんと飲んだ次の日から妙に奥さんと親父さんが藤谷の面倒見てくれるようになったんだよねあ」

『不思議だよなあ』とか言ってる馬鹿、許嫁って設定が出来たのは

どうやらその時だ。つか、許嫁とか凄いい言葉使ってるけど中身下らねー。

呆れかえった藤谷は、もう相手にする気も失せたのでそのままベツドに落ちた。

泣いていた。

誰がつて？

恥ずかしながら藤宮藤谷君だ。ちょっと違うのは今よりずっと幼い事だ。まだ自分の事を『僕』と言っていた時代、膝を抱えて泣いていた。

場所がいまいちはつきりしない。周りが白くぼやけてて、この場所が何処なのか思い出せない。

小さくなって泣いている藤谷に一人の女の子が駆け寄って来た。見た目は男の子に近い女の子、髪も短ければあちこちに絆創膏を貼って、女の子の遊びをしているようには見えない女の子、ただ服装、もっと言えばスカートだけが性別の判別材料になっていた。

駆け寄り、直ぐにその女の子が藤谷の頭を一発叩いた、結構優しく。

「なんで泣いてんの？ 藤谷くん強いのになんでやり返さないの？」

藤谷少年は何も答えない。

返答が返ってこないことに痺を切らしたのか、声を震わせてもう一回、

「私、藤谷くんの事好き、でも、弱い藤谷くんとは一緒にいたくない」

今思えばどこまでも幼稚な発言だ。子供だから、と言えばそれで終りだが、女の子の心を汲み取ると、ただ何もせず傷付く藤谷が嫌だったのだろう。この時の藤谷の捉え方はこうだ。

「僕、強くないよ。でも、希ちゃんを守る強さだけはあるんだ……
……父さんとそれだけは約束したんだ……」

幼い藤谷はゆっくりと顔をあげてそう言った。

「じゃあ、ずっと守ってくれる？」

「うん！」

「じゃあ約束、私を守れるだけ強かったらお嫁さんになってあげる」

「うん！」

再度藤谷がハッキリと頷いた時、世界が一気に真っ白に染まった。

「……嘘だろ……約束、してんじゃない……」

気付けば朝になっている。時計を見る気にもなれないが、きっと美々が起こしにくるまでには少し余裕があるだろう。

藤谷は言い様のない虚脱感と、沸々と湧き出る自責の言葉に溺れそうになっていた。

藤宮藤谷は約束は破らない主義だ。これは父からの幼少からの教え、後は人助け、この二つは藤宮藤谷の支柱と言ってもいい。

藤谷は空いた左手で頭を抱えた。

考えをまとめようにも、後から後から湧き出る自責が邪魔をして、なんとも言い難い精神状況になっている。

「……………俺、馬鹿だ……………」

その日の事は全く覚えてない。朝はあの後に美々が起こしにきて『あれ？起こしにくる前に起きてる』と言われた事しか覚えてない。

家を見ても希の姿はなく、学校でようやく希に会って朝の挨拶を交したただけにして、藤谷はずっと席に座って呆然としていたと思う。

怪我についても、適当に返した気がする。皆は『頭をやられておかしくなった』と勝手な判断をしていたが、今の藤谷はそれどころじゃない。

そして、あつという間に昼休み。あつ、という間なんて言ったが嘘だ、長くて、思い返せば内容の薄い時間を過ごした。

「……………俺は本当になにやってんだ……………」

屋上に上がって、更に貯水タンクの上に隠れるようにして座っている自分が哀れで、憎くて仕方ない。

昼御飯も食べる気にはなれず、チャイムが鳴った瞬間に素早く出ていったので、美々やアイも、もちろん希もついてきてはいない。

浮かぶのは自責、それと美々の顔、その二つがグルグル回ってる。

客観判断すれば、小さい頃の約束だし、向こうも『許嫁』と言った以上は親同士の決め事で忘れてる可能性だってある。

この客観判断は、小さい頃の約束とはいえ、あの時の藤谷の気持ちと希の気持ちは近い筈だったし、希がその約束を忘れてる可能性はゼロだ。幼馴染みとしての確証と言える。

後から付け足すようだが、もちろん、今藤谷が愛してるのは香里美々だ、断言出来る。

それでも、きつと美々と恋人になっている自分の姿を見た希は傷付いた筈だ。それが藤谷にとっては許せない。

「藤谷」

「……………美々」

貯水タンクに背を預けている藤谷が首を回して声の方を見ると笑顔の美々が立っていた。美々の笑顔が少し痛い、後ろめたい気持ちで藤谷は目を反らしてしまう。

「私の愛する藤谷の悩みを聞こうかな？ それとも本当に頭を叩かれた後遺症？」

美々は藤谷の隣に体を押し込むように座ってきた。そして、体重を預けるように寄り添ってくる。そこに態とらしさはなく、素直な美々の気持ち伝わってくる気がした。

藤谷は弱かった。弱っていた。だから、一番信頼していて、一番大切で、一番格好をつけたい相手に少しずつ口を開いてしまった。

「俺、約束破っちゃったんだ。大切だった約束」

「そっか、でも、だった約束なんだよね？」

美々の顔は見れない。正面を向いて美々の顔は視界にいれないようにしている。

「それでもさ、今が大切だけど……………上手く言えないけど、約束を破ったからきつとその人を傷付けたと思うんだ……………」

「藤谷、私と言えるのは二つだよ」

「ああ」

「一つは謝る。傷を癒せないかもしれないけど、貴方の気は済まないかもしれないけど、謝るんだよ。二つ目は、謝ってもきかないような問題なら、背負う、どんなに辛くてもそれを背負うんだ。私も一緒にいるから、支えるから」

左膝の上に乗せていた左手にそつと美々の小さな手が重ねられた。

「うん……………藤谷は本当に無器用で真っ直ぐだ。真っ直ぐ馬鹿……………でも、そんな所が好きな私はもつと馬鹿、えへへ」

やっと美々の顔を見た。そう言つて、照れながら笑つた美々の顔は藤谷の美々メモリーに深く刻み込まれる程綺麗だった。

少し心が軽くなった気がするな。そんな事を藤谷が思っていると、美々は話を変えようと……………さて』と言つた。

「藤谷は、右手が使えないよね……………じゃあ、このお弁当はアレだよね」

美々が態とらしくニヤニヤしている。三日間何も食べてないライオンが目の前に捌いて、食べる準備万端の肉があつてもこんな嬉しそうな顔はしないだろう。

「珍しく比喻表現をしようとしたみたいだけど、滅茶苦茶だし、ライオンには表情ないよ」

……………すいません、言うまでもないけど、口には出していません。

美々曰く『アレ』とは、恋人同士ならやるのは当たり前で、やらないという選択をするのは、注意書きに書かれるくらいやってはいけないことらしい。

まあ、そんな甘いイベントをこなしてか、少し心が軽くなった気がする藤谷は、放課後にある場所を目指していた。ある場所というのが全く思い出せないのだが。

美々には『どうしても行かなければいけないから、今日は夜にまた会おう』と言って教室を出た。教室には希と何故かアイの姿もなく、とりあえず昇降口へ向かう。

藤谷が行きたくて、行かなきゃならない場所、それは藤谷が希と約束したあの場所だ。

しかし、全く思い出せない。あの頃は落ち込むとよく行っていた場所だった気がするのだが、思い出せない。

考え込みながら階段を降りていく。ちょうど、二階から一階を繋ぐ踊り場に見知った人間がいた。

白い少女、着ている制服以外は白しか連想させない少女、髪も肌も白、純白、その少女は待ち構えていたように踊り場の手摺に背中を預け、優しく微笑みながらこちらを見ていた。

「アイ、どこにいたんだ？ 心配したぞ」

いつもの自分の目線より少し低い位置にいる少女にそう問掛けた。

「ちょっとね。藤谷はどこに行きたいのかな？」

一段、一段、と近付くにつれて、いつものアイの雰囲気が異質な事に気付いた。どこが？、と問われると上手く答えられる自信がないのだが、アイがアイでない何かに感じた。

幽幻、幻想、何だか吹いたら消えてしまう靄のようにアイの存在が稀薄で、そして儚く感じた。

一段、一段、確実に歩を進めてる筈なのにいつまでもアイに辿り着けない。

「最後の最後、私、藤宮アイが占ってあげるよ」

それでもアイの声は聞こえてくる。もう藤谷は足を進めているのか、止めているのか分からない。

甘い虚脱感、自分を全く違う視点から眺めているような、アイの声は耳に深く届くのだが、それ以外が何もかもあやふやな世界に藤谷はいる。

「いつものように商店街に行けばいいよ。今の藤谷なら大丈夫。あーあ、時間切れ、それじゃあね藤谷」

自分の頬にアイの唇が触れるのを横から見ていた藤谷は、何もすること、出来ることもなく走り去るアイを止める事も出来なかった。

暫くして藤谷は校門を出た。さっきのアイは一体なんだったのか、一体誰だったのか。

唇を寄せられた頬を撫でながら考える。

横から見ていたように頭は動いてなかったのに、唇の感触だけはやけにはつきり残っている。

ただ今は、アイの占い通りに商店街に向かうしかなかった。

とぼとぼ確実に歩いて行くと何か引つ掛かりを覚える。小さな刺のような引つ掛かりが、歩けば歩くほど大きくなる。

そう、こんなごちゃごちゃ、ぐちゃぐちゃな気持ちの時に行ったんだ、あの場所に。

そして辿り着いたのは昨日の鉄パイプ乱闘現場、違和感を頼りにその奥へ奥へと歩む。

道幅は直ぐに狭くなり、もう両手は横に伸ばせそうもない。そんな道を歩いていくと、遂に抜けた。

目の前を横に一本道が走り、その向かいには古ぼけた赤い鳥居。

「……………あ、あ……………」

小さく声が溢れた。

ここだ。

この神社だ。

軽くなった足取りで鳥居を抜けて、階段を駆けるように昇った。

昇った先は小さな境内、記憶を頼りに神社の横を通り抜けて社の裏へ。

「……………待ったか？」

先に着いてここで待っていた人に尋ねる。

「……………ええ、待って待って、それでも待ち続けたよ。もう疲れちゃうくらい」

「そっか、悪いな本当に」

「うん、悪いよ。本当は許さないとこだけど、今は凄く嬉しくて怒れないよ」

なら泣かないでくれよ。

「本当にごめん、約束も守れそうにない」

謝るという行為がこんなに痛いのは初めてだ。

「馬鹿ね、結局昨日だって私を助けてくれたのはお父さんじゃない。アンタはなんにもやってないわ。私を守る約束をそこから破ってるわけ、だから、結婚なんて絶対してあげない」

ああ、そういえばそうか。守れてないじゃんか。

藤谷は会話の区切りで空を見上げた。

「私がここでも言いたかったのはそれだけ、約束破りの藤谷君に文句を言えたから私が待つのは終わり。私は買物があるから、じゃあね」

去っていく気配、なんだか放っておけない。でも、追う事も、触れる事もきつと出来ない。

「希！」

見上げるのを止めて去っていく希の背中に投げ掛けた。

「なに？」

振り返った希の顔は笑っている。

「……………あ、あの、荷物持ちくらいなら手伝うぞ？」

我ながら情けない。罪悪感とか色々が邪魔をして上手く舌が回らない藤谷は、拳動不審になりながら必死で聞いてみた。

「いらない。片腕使えない男の子より、両手使える女の子の方が役立つもん」

そう言って希は悪戯っぽく笑って、再度藤谷に背を向け歩き出すのだった。

藤谷は離れていく背中を眺め、いつまでも動けないでいた。

私はここに居た。ずっとずっとここに居て、ずっとずっと待っていた。

辛かった。辛くないわけなかった。でも、いつか、いつか再会して、素敵な恋が出来るって確証なく信じていた私が馬鹿だったんだ。夢見てたのがいけなかったんだ。

胸は痛いし涙は止まらない。きっとこの心に降る雨は当分やまないだろうし、胸の傷は消えてはくれないかもしれない。

我慢できないで先に日本に帰って、大人に近付いた彼の寝顔がそう
ぞうしてたより格好良くて、ドキドキして、何度も整えた髪や服を
何度も直して、勿体ないって思いながら彼を起こして、それで、そ
れで……………

責めて私との約束を思い出させて文句を言っただけでやろうと思ったのに、
ケンカなんかしちゃって、あんなに傷付いて。

それでも、私はああ言ったが、彼は私を守るって約束はしっかりと
守った。

だって、打たれながらも気にしていたのは私の事だけだった。何を
されながらも私だけを彼は見ていた。

どんなことになるうとも、私は危害を受ける事はなかったと断言出
来る。

私は駄目な人間だ。

彼を待ち続けて、そして今日、ついに彼が来てくれた。文句を言お
うにも口は動かず、嬉しさ、どこかが満たされる感覚に支配されて
しまった。

私は漸く本当に彼を愛してるんだ。そう気付いてしまった。

……………でも、諦めなきゃいけない。こんなに悲しい事があるだろ
うか、こんなに悔しい事があるだろうか、こんなにこんなにこんな
に！

狂ってしまえば何れ程楽だろう。頭の中でそんな事を考えながら

私は必死に自分を誤魔化した。

多分直ぐには進めないだろう。でも、いつかきつと変わる日はやってくると思う。

最後に最後の愚痴を、

「……………本当、最後にアレはないわよ。最後の……………最後に名前
で……………呼ぶなんて……………」

まだ秋になりきれてない空を見ながら、希は涙混じりにそう呟いた。

十六話

「ふふつ、ボクと一緒に不満かな？」

人差し指を立てて微笑む女性が自分と向かい合って座っている。

私、藤宮藤谷は恐怖ばかり感じつつ、引き攣った愛想笑いをしていた。

「うーん、やっぱり美々が気になるかな？」

なぜ藤谷が黒崎舞さんと喫茶店で向かい合って、珈琲なんかを飲んでいるのかと言えば。

「ちょっと藤谷君！ お姉ちゃんとのりぞーとすぱの約束はどうなつたの!？」

この乱暴な一言から始まった訳だ。

藤谷が感じたのは、結局誰が言ってもりぞーとすぱは平仮名なんだと言っことと、この子が一瞬誰だったか出て来なかった事だ。確か夏前？うん？美々と付き合いだす前だから、なんか大分昔の事だよ

うに思える。

黒崎椎子、眼鏡の長髪麗人から、コンタクトのボーイッシュ短髪麗人にクラスチェンジした我が学校の生徒会長黒崎舞さんの妹だ。

確かアイの日用品を買ったために訪れたショッピングモールが初見だったか。姉の会長とは違って威圧的な感じが印象的な子、姉譲りなのは容姿が可愛い方の部類に入ることだ。

「いや、そういやすっかり忘れてたが、もう秋だし、俺の腕ほら」

俺がようやく返答したところで場所の説明をしよう。場所は校門、時は放課後、恐らくはこの椎子さんは藤谷を待伏せていたのだろう。そして藤谷は、折れている腕を強調するように言ってみる。

「そういやどうしたの？ 階段から落ちた？」

言い様は酷いが藤谷の身を案じる気持ちが見えている。きつい言い方もするし、目付きも釣り上がってきつい印象を受けるが、なんだかんだで優しい良い子だ。彼女の姉さんの自慢通り。

「まあそんなとこ、にしても確かに約束を破るのはよくないな。よし、なんか飯でも奢るか」

「そうそうそれよ。良いじゃない藤谷君」

うんうんと頷くと椎子のトレードマークのツインテールも一緒に揺れる。少し可愛い、なんか愛玩動物を見ている気分、少し癒されている自分がいる。目付きと口調が悪くても可愛い部類に入る子だからかな。

「そうだな、会長も今日暇だといいんだがなあ……………」

「はあ！？」

すっごい攻撃的な対応された。あまり敬意は払わなくて良いとは言ったが、年上にそれはないんじゃないだろうか、いや駄目だろ。この子のこれからの為にもここはガツンと叱らなくては、

「あんな椎子よ——」

「ああ！ うつさいうつさい！ アンタさ、本当に本気でアホ？ いや、アホだわ。もう救いようがないアホ」

マズイ、これ以上言われたら心が駄目になる。

普段美々の攻撃、いや口撃に耐えている藤谷だが、これはきつい。年下にここまで言われたら流石に泣きそうだ。

「だから、私が何を言いたいのかと言えば、って聞してる？ 何校門に縋り付いて泣きそうになってんのよ」

君がやったんだろ。

藤谷はそう言い返したかったが、声が震えて情けない事になりそうだから止めておく。

「話戻すよ。だから、お姉ちゃんを休日使ってデートに誘えって言うてんの！！」

「……………は？ 俺が会長を？」

「そうよ、他に誰がいんのよアホ」

また言ったな、二度どころか三度四度と言いやがった！親父にも言われたことないのに！

あの親父に「アホ」とか言われたら「テメエがアホだろ！このアホ親父がああ！」って拳をいれるな、うん間違いないよ。

「いや、飯奢るならいつでも良いじゃん。なんか今日は俺の彼女さんとか『女達の会合』と称してどっか行っちゃって夜ご飯どうするか考えてたんだよ。あつ、椎子も来るか？」

そう藤谷が言うと、椎子は額に手を当ててなんかピクピクと震えている。

なんだ、食事奢りがそんな嬉しいか、所詮は中学生よな、かっかっか。

と謎の優越感に藤谷が浸りまくってキャラまで崩していると、椎子の震えが最高潮に達した。

「アホーーーーっつっ！！！」

鼓膜とか色々が破れんじやないかってくらい叫んで、椎子は走り去って行った。

残されたのは中学生に散々罵倒されて、なんか立ち尽くしている俺藤宮藤谷、周りを見ると下校していく生徒視線を集めまくっていた。罵倒され過ぎて流石に凹んだ藤谷はトボトボと独りの帰路につくのだった。

女達の会合の為、アイもおらず、完璧に独りの藤谷は家の居間の机に手紙があるのを発見して、中身を開けてみる。

『藤谷へ

夜ご飯はカレーを鍋に用意しておきました。温めて食べてください。

マイスweetダーリン、今日は寂しくても我慢してね。美々より』

「流石は美々だな。きっと良い嫁さんになるよ。俺のだけどな」

こんな傲慢な台詞を言えば大抵の女の子は引くかもしれないが、そこんところうちの美々さんは違うんです。きっと多分絶対に褒め言葉と解釈して照れるんですよあの娘は。自慢の彼女であり、大切な奥さんだから、自慢したって良いだろう。

「……………俺が良い気分で色々浸ってんのに貴様は何をやってる？」

「おう！ 本当に嬢ちゃん料理上手いな！ 腹一杯だ！」

台所で冷蔵庫に背中を預けて爪楊枝で口の中弄っているこの男が父親だとは誰が認めたいだろうか、藤谷は全く認めたくなかった。

そして藤谷は気付く、気付いてしまった。藤谷の側にいないから藤谷の腕の事まで気にしてスプーンで食えるように配慮してくれた美々のカレーが、カレーの鍋が、

「空じゃねえか……………」

「おう、すまんな美味くて」

「執行！」

この日藤谷は知った。

片手でも人って簡単に倒せるんだって、そう知って父を倒した。

重要なのはその後、流石に腹が減ったのでコンビニに向かった時の事だ。

本当に偶然というのは恐い、この恐くて作為の感じる偶然こそ運命というものなのだろう。

「おや、こんなところで会えるとは運命だね」

短髪、秋といっても寒くなってきたので肌の露出のない完全防備の私服、概要だけ聞くと少年のような女性、放課後のツインテール罵倒中学生の姉舞さんとコンビで鉢合わせた。

「あれ？ 美々達と出掛けなかったんですか？ 美々の事だから誘

いがかかったでしょう?」

「ああ、女達の会合だね。ボクももう受験生だからね、あの会合の議題にはのれないんだよ」

そう言つて苦笑いした会長、藤谷が引つ掛かつてるのはまだ黒崎舞は生徒会長なのか、と会合つて本当になに話してるんだって事、絶対飯食いながらだべるだけだと思つてた。

「そうなんですか、いや今日椎子に会長をデートに誘えつて言われまして、食事にでも誘おうかと思つたんですけど、忙しそうで止めという良かつたですよ」

愛想笑いをする藤谷、間を持たせる為の愛想笑いも会長が考え込んだ為にも言えない居づらさが生まれる。

「ねえ藤谷君」

「はい!?!」

この空気の中急に名前を呼ばれて藤谷は声を裏返しながら返す。

「私とデートして頂けませんか?」

「……………はい?」

「たしかりぞーとすばの約束残つてたよね。美々と二人で行つたんだ私とも行つたつていいよね?」

なに言つてるんだ?

彼女は藤谷には結婚前提の恋人がいて、そしてその子の友達であり、超がつくほど嫉妬深いと知ってる筈だ。なんでそんな頼み事をコンビニでしてきて、なんかいつもと雰囲気が違うんだ？

初めて、会長が手の届くところの女性と感じた。

「もちろん美々には了解をとるよ。だって、分かってるから、でもデートしよう」

「い、いや、恋人のいる身でデートと銘打ったお出かけは………ちよっと」

「なら遊びに行こう、二人きりになっちゃうけど仕方ないよね」

なんで二人きりになって、どうして仕方ないか全く解らない。

藤谷はそのまま美々に任せるという事で飯も買わずに脱兎の如く逃げ出すしかなかった。

一体なんだったのだろう。黒崎舞先輩の様子は明らかにおかしかった。確かに元からよく解らないし、掴み所のない雲のような霧のような人で、でも強い責任感からか人望は大したもの………
……藤谷は一体黒崎舞の事をなんだと思ってたんだ。

藤宮藤谷は考える。電気もつけてない自室の天井を眺めて寝転がりながら。

生徒会長、先輩、だが、さっきの彼女はどれにも当て嵌まらないだろう。手が届かない、掴めるわけない霧が、あの時は触れると確かに感じたのだから。

「くそ、なんだってんだ……………」

とりあえず溜まっていた言葉を吐いてみた。問いでもなく、誰かに聞いたわけでもない言葉、答えも出なけりゃ返答だってありはしない。

今ほど美々に会いたいと思った事が最近あったろうか……………あったな、父親に飯を食われた件で。

頭の中で茶番としか言えない今日の出来事を思い出し小さく藤谷は吹き出した。笑った事によってか少し張り詰めたモノが萎んだ気がする。落ち着いた所で舞の行動は説明出来はしないが。

美々も帰って来ないし、腹は減ったが飯を用意する気にもなれない、こんなときは寝てしまうに限る。寝てしまっしか選択肢がないなんて事はない。ある筈ない。

私は最低で、卑怯で、なんて惨めか。

「ボク」なんて言って漫画のキャラのように自分を演出してるのが
どれだけ惨めか。

言い訳をすれば、私は好きだったんだ。藤宮藤谷君の事を私が知り、
私が思う以上に、彼を愛していた。

愛してしまっていた。悔しいし、情けないし、それでいて誇らしい。

この気持ちを一体どうすればいいんだろう？さっきは彼の約束を破
れない信念を利用して気付けば無理矢理に迫っていた。今振り返れ
ば目も当てられないほどに何をやってるか信じられない。

だけど、この愛という衝動は人をここまで墮とすのか、落ちて墮ち
て、私はボクらしくないことをした。でも、いくら反省したって、
彼に恋人がいたって私は彼に抱きしめられたい、彼の側に居たい、
もうこんな感情捨てた筈なのに、抑えられない、私を抑えられない。

捨てた、これも嘘、彼を見続けた私は彼への想いをただひたすらに
育んだ。美々の事も頭にいれつつ育んだんだ。

頭の中でいくら言葉を紡いでも、吐いても答えが出ない。

私は彼を愛していて、ボクは彼女を羨ましく思っている。

ボクはこんなこと止めると言うが、私は止まればしない。

「藤宮藤谷君」

愛しい人の名を口に出す、もう私は満足出来はしない。
ボクはどこまでも黒崎舞を最低だと思った。

「それにしてもいい天気だね？ 素敵な秋晴れだ」

「え、ええ」

「やっぱりつまらないかな？」

そう言つて会つてから一度も笑顔を崩さない先輩は人差し指を立てた。

出掛ける事は決まつた。なんか美々が「行つてらっしゃい」とだけ言つて着替えを渡してきた。それが今日の朝、日曜の朝の出来事。

先輩は一体どんな魔法を使つて美々を説得したのだろうか。

というわけで、駅前で待ち合わせて喫茶店でこれからを決めるに至つた。日曜の昼間に喫茶店に入つて休憩なんてほとんどした事ない藤谷は客層が気になつてあつち見たりこつち見たり忙しい。

「さて、どこに行こつか？」

藤谷は泳がせていた視線を先輩に固定する。

「いや、全くなんにも考えてませんでした」

「ふふつ、美々が了承すると思わなかったからだね。ボクもやるもんでしょ？　ちょっと卑怯な手法を取っちゃったけどね」

そう言つて先輩は舌を出して人差し指を立てて微笑んだ。

上手く言えないんだが何か違う。黒崎舞に違和感ばかり覚える。何がズレてるか解らないズレ、ズレている事しか解らない。

「ん？　ボクの顔なんかおかしい？　少しだけど化粧してみたんだけど」

「えっ？　いつもはしないんですか？」

「うん？　その発言はどう捉えたらいいのかな？　喜ぶべきか、悲しむべきか、将又怒るべきか」

最後の部分の漢字難しいな、まあでも、ここは喜んでもらうところかな。化粧なしでの肌のとか、目元とか可愛くバランス取れてるんだからやっぱり凄いよなこの姉妹。

「化粧してなくても努力はしてないわけじゃないよ？」

あるえー、また俺は口に出してないんだけどなあ……………

「それはほら、やっぱり藤谷君はわかりやすいから」

……………もう無心になる。無の境地、悟りを開いてやる。

「それはきつと藤谷君には無理かな」

「うん、デートだね。デートっばいね！」

本当に本気で元気ですね。なんかこの後に言われたりやられたりすること考えると藤谷は目の前ではしゃいでる先輩についていけそうになかった。

もちろん藤谷が頭を抱えて考えているのは美々だ。美々が恐い、こんな簡単に二人で出掛けるのを許した美々も、これから帰ってなにかをしてくる筈の美々も、もう全ての美々が恐い、もう帰りたくないくらい、でも帰らないともっと恐い。

じゃあなんで俺はこんな場所に来てんだろう？わざわざ電車で揺られて水族館なんかに来てるんだよ。美々とだって来たことはないのに。

もちろん美々以外を恋人として好きになることはまず、ない。じゃあ、じゃあどうして先輩と二人で出掛けているんだ？無理矢理嫌だと言えばなんとでもなった筈なのに、どうしてだ？

「藤谷君？　今はさ、私の事を見てくらないかな？　私を、私だけを」

いつの間にか目の前に立っていた先輩の瞳に藤谷はくぎづけになった。動けなかった、目を離せなかった。口も、あまり上手く動かない。

なんだろうか、この間のコンビニから先輩が希薄になったような気がする。最近どこかでも同じように誰かの存在が希薄で吹いたら消えてしまうように感じた事があった筈だ。それが誰だったか思い出せないが、今目の前で深く深い瞳で藤谷を射抜いてる彼女ではない。

やっこの思いで藤谷は口を開いた。

「俺は、俺が心の底から愛して見てるのは美々だけです。あなたを俺は見続けられない、大事な友人としてなら、あなたを見れる」

その時、藤谷の両肩を舞は掴んだ。ぎりぎりと握力で締め上げる。藤谷は顔を歪める事もなく、ただ顔を崩さず真摯な思いで、真摯な瞳で目の前の女性を見ることしか出来ない。

暗い水族館の中だ、周りから見てもカップルがじゃれあってるようにしか見えないだろう。こんな、悲痛な表情をしている女性と見方によつては無関心な顔をしている男の顔を確認する人はいないだろう。唯一の救いだろうか。

「なんでよ……………なんで？　なんでなんでなんで！？　私のどこが不満！？　私は、私は美々に劣ってる点なんて全然ない！　確かにあんなに記憶力よくないし、髪だつてあんなに綺麗じゃない、体つきだつて……………あれ？　そんな……………あはは、

私、駄目じゃん……………なにが勝ってるのよ……………なにが……

……………あはははあは、うう」

藤谷は言葉を返せなかった。何を言えばいいのか藤谷には分からない、沈黙しか彼女には返せない。

「ボクの方が美々より先に君を見てたのに。一杯、一杯一杯、何度も何度も！　ずっとずっとずっとずっと！　どうして？　どうして？　どうして、ボクを、私を見てくれないの！？　見てよ、見なさいよ……………もう嫌だよ……………寂しいよ」

終には舞は藤谷の胸の中に倒れ込んで、嗚咽でも何も言えなくなるぐらい泣き出した。

藤谷は避けるわけにもいかず、ただ胸を貸してる事しか出来ない。こんな所を美々に見られたらなって、思うくらいやっぱり自分は美々が好きだった。分かってるけど、別に綺麗事を言うわけじゃないけど、自分のせいでこんなに女の子を泣かしてるのは気分が悪かった。周囲の目が彼女に叫びによって集まっても、黙って藤谷はそのままの体勢を続けた。

届くわけがないと思ってた。見上げるしかないと思っていた。近づこうと努力しかできないと思ってた。でも、今はこんなに近くにいます。

きつと、藤宮藤谷は黒崎舞に惹かれていた。いつか恋愛感情になるかもしれない意志で憧れていた。やっぱり、舞さんもまた一人の女の子で、一つしか年齢の変わらない、大人に成り切れてない大人って事か。だから言わなくちゃいけない、藤宮藤谷の意志を、藤宮藤谷の今を、言わなくては。

「その、舞さん、今は舞さんって呼ばせて下さい。俺は美々が好き

です。どこまでいっても愛してるのは美々なんです。だから、舞さんの思いは受け取れません」

「……………ばか……………なら、撫でないよ」

「ごめんなさい、でもずっと俺は舞さんが凄いと思ってました。いや、今も思ってます。でも、やっぱり女の子は女の子ですね、結構小さいや」

「ふん……………胸は流石に美々に負けるけどないわけじゃないもん……………」

「ちょっと待った！ 胸の話はしてませんってば、肩幅とか、ほら、小さいなって」

ひどい、俺最低だろ、こんな時に胸の話なんかしたら、流石にそんな人間じゃないって、いや人間性が疑われるって。

「うん、私、やっぱり君が好き、しょうがない今は引くけど、これから美々が君を離すような事があればさらっちゃうからね」

半歩引いて藤谷から距離を取った舞は人差し指を立てて笑顔でそう言った。その笑顔は間違いなく藤宮藤谷が憧れた笑顔で、やっぱり可憐な女性の黒崎舞をより確かに感じた。

それから『お詫びに食事に行こう。お姉さんの奢りだぞ』舞先輩の提案で食事だけ一緒に、藤谷達は帰路についた。

そして現在、藤谷はとぼと寂しく一人で孤独に駅からの帰り道を歩いていた。もちろん日は暮れかかっていたので送ると進言したが、昔からよく聞いた『ボク意外と強いから大丈夫』の一言で一蹴され、藤谷は帰っていた。気付けば空は藍色、日も少しずつ短くなつていくのを過ごしやすくなつていく肌で感じていた。

「あら、偶然ね。どうだったかしらデートは？」

藤谷は微笑ましくて、なんだか胸が暖かくて、彼女の姿を視界にいらただけで笑ってしまった。

藤谷がよく使う帰り道、この先に分岐もなく、一本道で我が家というところで彼女は立っていた。いや、待っていた。

「友達思いなんだな。マイハニー」

「あら、惚れ直した？ マイダーリン」

「いや、余計惚れた」

多分、端から見たら相当バカっぽい会話、いや、バカなんだろう。バカでいられる事がすごく暖かい、彼女といられる事がすごく心地良い。

彼女がそつと俺に近付いて俺の手を取る。俺はそれに手を握り返す事で応える。

「ねえ藤谷？ 私は、貴方を愛してる。貴方も私を愛してくれていい。でもね、怖いんだ」

「怖い？」

「貴方はね、貴方が思う以上に素敵な人よ。私なんかじゃ霞んで釣り合わないくらい、だから」

「だから、黒崎舞先輩に俺を渡してもいいかななんて思ったのか？」

藤谷は立ち止まった。手を繋いでる彼女も当然に止まる。

「なあ、それ、凄くないぞ。俺の愛する人は君だ。だから、そんな事するな……………俺、愛想尽かされたかと思ったんだから」

そう言つて藤谷は美々の額を指で弾いた。

「そうね、後悔した。貴方が舞と楽しそうにデートしてる姿を思い浮かべて泣きもした。まだ自分に自信がもてないのね私」

「そっか、俺は最近自信過剰なぐらいなんだがな。こんな美人でなんでも出来る嫁さん貰ったからな。生んでくれた両親に自慢しに行こうかと画策するぐらいにな」

「藤谷……………私も貴方に関しては自慢よ。愛想尽かされたらどうしようかビクビクするぐらいにね」

「そんな事出来るわけないな。美々がいなけりゃ俺は二日以内に遺体になる」

そう藤谷は一笑いして歩き出した。美々の手をしっかりと握って。

十七話

嘘だろ？いや、嘘だよなあ。これ実はドッキリですって誰か看板持って現れてくれ、ネタバラししてくれ。

「結構あなたの事好きでしたよフジミヤ、飼い犬にならないならさよならです」

トンネルのような廊下、明かりは頭の上にある電灯だけ、それすらも点滅して心許ない明かりの中、いつもの特徴あるイントネーションではなく、流暢に日本語喋っている女性はそれの引き金に指を掛けた。

引き金、黒い、鉄、丸い穴、あまりに無骨であまりに流麗なそれは、普通に拳銃と呼ばれる物だ。

「だから、比喻がおかしいのよ貴方、いえ、あ・な・た、うふ……」

更に銃口をこちらに向けた女性の後から、更に銃を持った美しい黒髪の美女が現れる。

そして黒髪の美女よ、自分の台詞で悦に浸ってないでくれ。一瞬の油断で俺は死んでしまうから。

「コオリ、中々に格好のいい登場ですがっ！」

女性は振り返りながらハイキックを放つ、美々は避ける事もなくその右足を左腕でガードする。そして美々は躊躇う事なく引き金を引き発砲、銃弾は女性に当たる事はなく藤谷の耳元を通りすぎていつ

た。

藤谷は余計にその場から動けなくなる。

ちよつ、まじ！？美々の持つてるの本物なの！？ねえ、モノホン？
ほんもの？ほんものが美々で美々が本物で死ねば本望？

藤谷は酷く混乱した。もう色々なモノが混ざって乱れるところでは
すまない、美々と女性の格闘劇を見てる余裕しか……………いや、
見てる場合じゃないだろう。

藤谷は駆けて一気に二人に迫る。その間も二人は蹴りを繰り出し、
受けては拳を突き出し、蹴り返す、あまりに二人の格闘劇が美しく
てちよつと魅入りたい気分にもなりそうだが、冷静に美々の援護に
向かわなきやならない。つか、あんまり明るくないのにあの二人よ
くあんなに動けるな。

「チイっ！」

と、もう隠す必要も伏せる必要もないだろう。リサ・フィールの舌
打ちが聞こえる。そりゃ、美々一人でリサは手一杯足一杯だったの
に、ここに藤谷を加える余裕はないだろう。

一瞬、その一瞬だ。

一瞬だけ余裕を持った。その一瞬が藤谷の間違いであり、藤谷の破
滅であった。

「うつつつっ！？」

腹部に衝撃、最初に感じたのはノーガードでドッジボールを腹に喰

らった感覚、あれ無駄に凄い体育会系の球は痛いんだよね。痛いを通り越すんだよね。

あはは、あは。

前に進むために前傾姿勢を取っていた筈なのに、今は体をくの字に折ってゆっくり後ろに倒れていつてる。

嘘だよなあ。

藤谷が確認したのは、間抜けに驚いてる美々の顔とリサが握っていた銃からたつ硝煙だった。

そして目の前の扉がしまった。扉というか、シャッターかな。火災用か、非常隔壁って感じの……。さ……。美々とリサ先生どこいったんだ？……。あら……。……

藤谷の意識はゆっくりと確実に白で塗り潰されていった。

そんなサスペンスでアクションな話が展開される朝に戻ってみる。

藤宮藤谷はいつも通りに目覚めた。

「執行！」

「べぶうるっ！」

強制的に睡眠から覚醒にシフトされた藤谷は、腹部への衝撃で体を一度くの字に折って、もう一度ベッドに沈む。そして目を開くと、

「ぐっもーにん、お目覚めのキスはいかが？」

「頂こうか」

ここで寝ぼけながら頂く、という選択を出来る藤宮藤谷を俺は讃えたい。うん、断る理由ないもん、誰も見てないもん。

よくわからない寝ぼけ理論を打ち立てて、腹部に重みを感じてるがあえて無視して愛する人の唇を餌をねだる雛鳥のように藤谷は待った。

そして額に柔らかく愛しい感触、

「今日は目覚めよかったみたいだから特別だからね」

出て行き際にウイंकを残して美々は部屋を出ていった。

やべえ、めちゃくちゃ可愛い。

あまりの感情の高ぶりに身もだえる藤谷は腹の上にまだ鎮座していた「死を超える筋肉質の男の象」に額を打った。

「……………つう、くそ、この土産シリーズどんだけあるんだよ」

まだまだ増える謎の鉱石で出来た象達、物置を飛び出して猫の額ほどの庭が埋めつくされるのは近いな。対処しないと。

そんな朝を終わり、いつも通りに登校して、いつも通りに授業を受ける。

まあ、最近のいつも通りに少し違いがあるとしたら、朝は穂村が一緒に登校するようになった事と、お昼も穂村が加わったということ、言うまでもないだろう。アイもちろん一緒だ。

そして報告しわすれていたが、ようやく腕のギプスが外れた。外れたといってもまだまだ無理は出来ないそうだが、なんか白く見える腕が今はとても愛しい。

それを思うとアイ達が転入してきてもう一月になるんだな。月日が過ぎるのは早いもんだ。更に補足しておくか、いや、する必要もないか。

父旅に出た。たった五文字で説明を終えられる分かりやすい男であ

る。

「ごちゃごちゃしてきたから閑話休題。

最近藤谷には違和感がある。

アイの事だ。

アイ、白い少女、家族、天真爛漫、頭の中がお花畑のような大切に、大事な少女。見る限りでは頭に挙げたアイの特徴は一つも抜けちゃいない。今一緒にいるのもアイであって、今ミートボールを藤谷の弁当箱から強奪したのもアイだ。

「ってなにやってんだ！ アイ！ 俺のミイイトボールを返せ！」

「えーと、ご馳走様でした」

そう言っ隣に座っているアイは礼儀正しくこちらに頭を下げた。

「よし、よく言えま………したじゃすまさないよおお！ 喰らえ、つむじサイクロンハリケーンタイフーン！」

説明せねばなるまい。つむじサイクロンハリケーンタイフーンとは、頭にあるつむじに人差し指と親指の爪を当ててグリグリと回しながら押し込む事だ！ 良い子は絶対に真似するなよ、お兄さんとの約束だ。

「あにやーっ！ こら！ とつやだめ！ 私おかしくなっちゃう！
らめえーっ！」

「超執行」

藤谷の逆隣に座っていた美々さん（機嫌悪い）に藤谷が機能停止させられるという形で勝負はついた。

……… 本当、ミートボールを口に撃ち込まれて後頭部で床に激突するってさ、どんな威力をたたき出してんの？ しかも道具は箸一つときたもんだ。本当に私の奥さんは素敵過ぎる。

そして多分今日の出来事で一番最悪で、一番日常から離れていて、一番あつてはいけなかった出来事。

最後の授業が始まるまでの休憩時間、というか準備時間、移動教室の為に移動を開始したが、アイの姿が見当たらない。

「トイレと言ったきりよ。ちょっと遅いわね。迷ってるのかしら？」

これも説明する必要ないかな、横を歩く美々には全く話し掛けてません、口を開いてません。

藤谷が怪訝な表情で美々を見つめた。

「あら、なにかしら？ 私可愛い？………藤谷？」

「美々、絶対に関わるなよ！！」

そう言い残して藤谷は駆け出した。

見えてしまった。いや、見えてよかった。

動かないアイがりサ先生に米俵のように抱えられて車に押し込まれた。そんな有り得ないシーンを目撃してしまった。美々を見つめた視線の先、大体の場所から死角になる教職員用の駐車場で起こった出来事。

現在二階、藤谷は段飛ばしどころではなく、踊り場まで跳んで一気に下りる。教科書なんかも持つてる場合じゃない、その辺に適当に投げて、駆ける。

同時に考える。

アイはどうした？なぜ抵抗しなかった？眠らされていた？くそ！

なぜりサ先生はアイを車に押し込んだ？なんで？如何なる理由であんなに乱暴に、無理矢理？誘拐としか考えられない。

もし仕方ない理由があるならいくらでも後で謝ってやる。だけど、胸に残る言いようのない胸騒ぎが止まらない。

「くそ！ くそ！ ちくしょう！」

いくら悪態を吐いてもなにも状況は変わらない。

走った、駆けた、走り抜け駆け抜けた。

どうにか間に合った。

裏門を出る直前に車の前に立てた。両手を広げて前に立つ、ここでアクセルを踏まれたら大惨事だが、リサ先生は止まってくれた。

「どうしたのデスか？ そんなに慌てて」

リサ先生は車から降りて、ツカツカとヒールの音をたてて藤谷に近付いて来る。

「後部座席のアイはどうしたんですか？」

「いえ、少し体調が悪いようなので」

「そうですか、俺が病院に連れてくから降ろしてくださいアイを」

「変なところで鋭い男は嫌いですよ」

なんか違和感がある。リサ先生の日本語が流暢になっていると気付いた時には体中に電気が走っていた。

「……………ん……………ん」

恐ろしく頭が重い、一体何があったのだろうか、頭が重すぎて全然働かない。

「お目覚め？」

藤谷はその声でハツとなる。

慌てて体を起こすが上手く起き上がれない。両手が縛られている。しかも手錠だ。

玩具の警察ごっこの手錠では、やっぱりないようで冷たいし、ズッシリと重みを感じる。とてもじゃないがひきちぎれそうにもない。

「ふうん、まずは状況より体の自由を考えるんだ？」

「先生、これはなんのつもり？ S Mなら勘弁、年増にや興味ない」

そこで藤谷はようやく憎い相手を睨みつける事にした。

ソファーに座って後ろで手を結ばれている藤谷をゴミのように見下ろしてる女、藤谷がかつて先生だと思ってた女性、今はその顔に張り手五発打ち込んでもこの気持ちは晴れそうにない。

「年増ね……………先生傷付くわ。それでもあなたと同一年なのに……………」

「……………なに？」

なに言っただコイツ？

「ふふっ、説明は後でしてあげる。私、あなた気に入ってるの。飼ってあげるから、今は少しお預け、ね」

「おい！ どこ行くんだ！？ アイをどうした！？」

「フジミヤ、賢く生きなさい。あなたはペットなの、ペットはペットラしくご主人様に尻尾振ってなさい」

脇腹を踏まれてるんだろう。痛いし、腹立つ。つか、ヒールで踏まれんのこんな痛いんだな。

「船が出るわ。アイはまた実験動物に逆戻り、ちょっと出て来るからお利口さんにしてなさい」

まだ違和感の残る流暢な日本語で、リサは部屋を出ていった……………
…んだと思う、ドアの音が聞こえたから。

まず落ち着いて、

「船が出る？ そういうことが」

そういうことが、なんてちょっとカッコつけたが、腹の下に響くエンジン音となにか物が動き出した揺れで、船らしい物が動き出した事しか分かん。

くそ、手は縛られてるし……………今気付いた。首輪までしてやがったのかあのSM変態女。

悪態を吐くのは止まりそうにない。

「動けない、アイを助けなきゃ、なんとかせねば……………くそ、体の自由が」

体の自由さえなんとかなれば、いや、ちがうな。まずは、体の自由だけをなんとかしなきゃいけないんだよな。

冷静に、冷静にならなきゃいけないのに。

駄目だ、焦りと怒りで沸騰しそうだくしょう。

「お困りですか？」

お困りですか？だって？困って困って仕方ないよ。情けない話自分じゃなんとも出来ん。

こうしてる間にもアイはなにされてるかわからないのに。

藤谷は思い切り歯を食い縛る。腕に力を込め、この手錠を、手錠を繋いでいる鎖を引きちぎるイメージをつくる。

「無駄ですよ」

無駄？ふざけんな、やってみなくちゃ、やらなくちゃいけないんだ。アイが、アイが。

ん？誰だこの女の声？にしても凄い綺麗な声だな。

「……………ども、元気ですか？」

藤谷は目があった。しゃがんでこちらを覗き込んでる少女と目が合った。落ち着いた印象を受ける、一つ大きな問題があるとしたら、恐ろしくアイに似ている。だが似ているだけで、全然の別人なのは見ればわかる。そもそも家族を見間違っう筈がない。

「……………助けてくれたりする？」

さつきから頭の中が異常にごちゃごちゃしていた藤谷だが、急な少女の来襲によって一気にクリアになっていた。

そこから出された発言今のこれである。クリアになりすぎである。

「構いませんが、私の……………その、容姿については触れないんですか？」

「アイに似ているが関係は？」

「取って付けた様でなんか嫌ですね。助けるの止めましょうか」

「いや、是非助けてください」

土下座どころか土下寝で懇願する情けない男藤谷、それでも将来を約束した奥さんがいる。

「助けますよ。貴方とは利害が一致しますからね。私はHです。貴方の言うIとは双子です」

「……………Hって変態さんなのか君は？」

「短い付き合いでしたさようなら藤宮藤谷さん」

「すみません、ごめんなさい許してくださいちょっとしたお茶目です」

土下寝状態継続、流石は藤宮藤谷、謝るのだけは上手くなっていく、これ、自慢だからね。

「名前……………と言ったらなんですが、Hとしか呼ばれた事ありません。IもIですし」

……………藤谷の小さい小さい脳が一つ答えを導きだした。

「君のイニシャルがHなんだね？」

「……………っ！」

「っえっ！」

踏まれた、背中思いつ切り踏まれた。

「馬鹿だ馬鹿だとは知ってましたが、まさかこんなにも馬鹿とは」

「あんまり馬鹿馬鹿言つなよ。意外と、気にしてんだぜ」

少し格好をつけた語調で言ってみた。

凄い怪訝な顔が返ってきた。藤宮藤谷は傷付いた。

しかもため息までつかれる始末、藤谷の精神はもう駄目かもしれない！

「嘘だ。知ってるよ。あの時に会ったアイだる君」

『あの時』それで理解してくれたらしく、また目の前でしゃがみ込んでこちらを覗く体勢をとっていた少女の顔に反応が伺えた。

「気付いていたのですか、美々がよく言う変なところは鋭いとはこういうところですかね」

「にしても口調も全然違うな、あの時と」

「ええ、あれはIの影響が強かったですから仕方なしです」

彼女の『アイ』という発音に先程から小さな違和感を覚えていた。小さな疑問は沸々と沸き上がり、答えとも言えそうな大きな疑問にたどり着いた。

「なあ？ Hと『アイ』ってアルファベットの事か？」

またも返答は怪訝な表情、つうか『うわあ、こいつ本当に馬鹿だな』って顔しないで！

「うわつ、本当に貴方馬鹿ですね」

……皆さん、今のポイント説明しなくちゃいけませんね。伊達に美々に馬鹿にされ続けてないこの僕藤宮藤谷が説明しなきゃいけませんね。

私が前に提示した『うわあ』と『うわっ』では後ろにつくちっちゃいの違いますよね？そのちっちゃいのにちっちゃいけど大きな違いと問題があります。先に『あ』の方では染みるように深く、そして慈しみを持って俺を馬鹿にしていますね？後に『っ』になると汚い物に触れてしまったような、見ちゃいけないものを見てしまったような、明らかにそこに慈しみと優しさはありません。

よって！彼女は酷い。

「藤谷、いい加減にしとかないと私も怒りますよ？ いえ怒りました」

もう一度背中に回った少女、そして聞こえてくるなにかの駆動音、そう、映画なんかでよく聞くチェンソーのような。

すぐさま藤谷は振り返って彼女が動かしたであろうものを確認しようとするが、なにかに首を固定されていて動かない。

なんでなんで、と疑問符を浮かべまくっているころには、駆動音がなにかにぶつかって金属音の悲鳴をあげていた。

藤谷も一緒に悲鳴をあげた。怖くて後ろは最後まで振り返れなかった。後、火花と思われるものは熱かった。

「はい、おしまいです」

その言葉をどれだけ思っただろうか、永遠ともいえる苦しみを乗り越えた藤谷は気分がよかった。勢いよく立ち上がって体を伸ばす。

「ほら、さつさと首輪を外してください。Iを助けるんでしょう？」

スイッチを切り替える。随分頭は冷えた。これなら無茶して失敗の確率も減るだろう。しかし、一刻も早く助けに行かねば、アイが泣いてるかもしれない。

そう思うと藤谷の胸の中の炉が燃えだすのを感じた。

「サンキューな雛子、んじゃあ助けに行くぞ」

「えっ？」

藤谷が雛子と呼んだ少女は着衣を整えながら驚いてるようだ。一体この手錠の鎖を切ったブツはどこへやったのだろう。

「それとIはカタカナで『アイ』だからな。間違えんなよ」

「ちょ、ちよつと待ってください！」

「なんだよ雛子。急ぐんだから手短に」

「手短にさせなかったのは誰ですか！？ だから、その、『ひなこ』ってなんです！？」

「ん？ Hだから雛子、鳥の雛の雛に子供の子で雛子。お前の名前だ、藤宮雛子、うん悪くない」

満足感が胸一杯に広がってる藤谷は、調子にのって雛子の頭を撫で回した。ムツゴロウさんくらい。

「……………本当に、藤宮親子はネーミングセンスを疑います」

「なにい！？ 親父と一緒にすんなよ！ 雛子、アイの双子ならもちろんお前も俺達の家族だ」

「……………だから、今は力を貸せて事ですか？」

「……………家族は助け合うもんだからな。だけどやっぱお前が危ない目にあつのやだな、うん嫌だ。よし、安全な所に隠れてろ」

藤谷がそう納得してうんうんと頷いていると頬を引つ張られた。しかも両方、しかも頬がぶちぶちと何かちぎれる音がするぐらい。

「名前をつけました。双子であるアイにかけてくるかと思えば、全く関係ない捻りのない名前を私につけました。責任は取ってもらいます。それにアイは私の妹です。助けない道理なしです」

藤谷は頬が駄目になってるっぽいのでもう涙すら出ない。美々のと違って愛が足りないからこんなに痛いんだよなきつと。

今更だけど意外に気に入ってないよね。名前なんてやっぱり格好つけてつけるべきじゃなかったか。

「そんなことはありません！ センスはたしかにあれですが、気に入ってますから」

そう言つてそつぽを向く雛子、ああ、こうしてると凄く可愛いじゃん。あれ？そついや俺喋つてないや、気付くの遅くなつてきたつて事は慣れちゃつたのか、嫌だな慣れつてさ。

藤谷は余裕を持つてでそんなことを考えてるが、頬を離してくれないとそろそろヤバイのは気付きたくない。

「早く助けにいきましょう。それでいつまで首輪してんですか？」

気を取り直してくれたのは良いけど、早く手も離してほしい。

「ああつ、手錠も外しときましょう」

思い出したように雛子がどこからか出現させたのは一本の鍵、藤谷は頬を押さえて本日二度目のやつと解放された喜びを噛み締めていた。

そしてその鍵は藤谷の両腕に装備されている鎖の切れた手錠の鍵穴に吸い込まれていった。そして、カチャツ、といい音をたてて手錠は床に落ちた。ついでに首輪も外してその辺に放り投げる。これに鎖とかついてて完璧に犬みたいにされてたら一生の恥だったな、首輪された時点で遅いけどさ。

「じゃなくて、なんで態鎖を切つたのかな？」

「藤谷が私のパンツ見たから」

よし、今更だが説明しよう。さつきから雛子が持ち物をどっかから出したり消したりしてるかわからない。それはなんの収納スペースもない真っ白なワンピースを着てるだけだからだ。どこに消してるかは置いておくとしても、ワンピースが顔を覗き込むようにしゃが

めばどうなるか、言うまでもないだろう。

そして、藤谷にも言い分はある。

「縛られてたんだよ！ 無理でしょ！？」

「目を瞑れましたよね？」

「すみませんでした。出来心です」

なんか理不尽な気がする。目の前に……………やめよう、これ以上なんか言ったら好感度がただ下がりだ。

「さあ行きますよ。藤谷」

藤谷は雛子に引っ張られるように部屋を飛び出した。

「暗い、怖い……………」

藤谷は一人で歩いていった。暗い廊下を歩き続けていった。雛子に教えてもらった道の通りに歩く。明かりは頭上にある点滅する蛍光灯のみ、蛍光灯と蛍光灯の間は長いし、点滅までしてるので洞窟探検してる気分だった。

さて、なぜ愛する家族の雛子ちゃん、通称ヒナちゃんがいないかと言え、

『この先を真っ直ぐ行ったらレフト、次を左、その次は左折して、左に折れると見せかけて右に行ってください。この船、京都みたいに碁盤のような道になってるんでわかりやすいと思います』

『ヒナはどうするんだ？』

『愛称までつけてきやがりましたか、私はアイを救うための手順を踏みます。説明した所で貴方にはわからないでしょうから指示に従って移動してくださいそれでは健闘を祈ります』

『あつ、おい！ 行っちゃったよ』

つてな展開がありやがりまして、仕方ないから指示された道のりを歩いている次第であります。

指示された道はどっちだったかなあ、と思いながら十字路の中心に立ってあちらこちらをキョロキョロと見回していると、自分がどっちから来たかもわからなくなってしまった。

冗談抜きで廊下の造りに違いが見られなくて、自分の位置を全く把握出来なくなってしまった。

……でも、雛子の奴俺が迷う事前提で話してた気がする。いや、気がしてきた。

藤谷は雛子が自分を迷わせた事によって生じる利点があるのかどうかを考えていた。

そんな時だ。そう、そんな時藤谷の右手側の通路からカツカツと何かが近付いてくる。

「Hがこそこそ動いてると思ったら、あなただったの」

暗闇の洞から現れたのは、銃口をこちらに向けたリサ・フィールだった。

そして時は現在に戻る。

美々は閉まっていくシャッターに手を伸ばしたが間に合う事はなく、無情にも撃たれた藤谷と分断されてしまった。

叫んでしまいたかった。藤谷の方に行くためになにか手を講じたかった。

だが、今は冷静さを欠いてはいけない。藤谷は無事だ、藤谷は無事だと自分に言い聞かせて目の前女と対峙する。

「へえ、恋仲と聞いてたのに意外に冷静ね？ 冷めてるのかしら関係が」

右手の銃を弄びながらリサが言う、美々は荒くなってしまった呼吸を整える。銃口はもちろんリサに狙いをつけたまま。

「にしてもあなた、どこでそんな格闘技を？」

流暢な日本語でリサが更に聞いてくる。美々としては黙って向かってきてほしい。

美々の技術は、自衛である。あまり自分から攻めたくない、ただ昔覚えた護身術にたまたま読んだ本の格闘技を織り交ぜただけなのだから。

それでもこれだけ出来ている事に美々は小さな手応えを感じる。手応えは右手の銃にもあるが、これはあまり使いたくはない。

「さつさと終わらせましょう。貴方ヒールでどこまでやれるのかしらね」

先刻からの格闘技を放っていたリサの足元は明らかに戦いに適していないハイヒールだ。もし、リサの靴がもう少し戦闘向きだったらと思うと体の芯が冷える感触を覚えた。

破顔一笑、美々が警戒を怠ったわけじゃない。隙があったわけでもない。美々がなにかするよりも速くりサはなにかを投げた。

どこかから取り出す動作はなかった事から、袖あたりに隠していたんだろう。それは小さな球体のように見えたとし、確認する前には爆発していた。

その爆発により引き起こされたのは、美々な視界を完璧に奪う煙、白煙、視界が真っ白に染められた美々は素早く廊下の壁に背をつけた。百八十度攻撃をなくしただけで、視界はないのだから大きな意味は持たないが、何もしないよりずっとマシに思えた。

そして美々が聞いたのは足音、ハイヒールが生み出すカツカツという音がシャッターとは反対側の廊下を駆けて行った。

「あら、逃げるのね。さてと藤谷をなんとかしないと」
美々は見上げた。煙が徐々に晴れてく中で、その煙を吸い込んでいる口を見上げる。

ここにいたらあの女の応援が来て、美々の形勢は明らかに不利だ。今は一刻も早くこの場を離れ、尚且つ、敵に見付からずに敵より先に藤谷の元へ向かわなければならぬ。

そして美々は迷わず頭の上に空いている口の留め金に銃弾を叩き込むのだった。

十七話中編

一体あの男は何を考えているのだろうか？

疑問に思ふことはない、答えは出ている。何も考えていないんだ。

何も考えずに当たり前として私に名を付けて、当たり前に私を家族だと言った。

本当に馬鹿だ。あの男の父親も馬鹿だと思ったが、あの男も同じ、いや、それ以上に馬鹿だ。

でも今、私は満たされている。足取りも恐ろしく軽い、重力がなくなってしまうように軽くて心地良い。

私は彼に危険を冒して欲しくなくて態と、この時間が誰も通らないだろう道の方へと向かわせたが、きつと彼は迷ってるだろう。だが、迷っていたとしても、彼のいるエリアは少なくとも警備が薄い方だから、彼ならば上手く逃げおおせるだろう。

この船、この規模の割に割かれている人員は少ない。「エ」をそれほど重要視してないからだろう。付け入る隙はある、私一人ですべて妹を救い彼の手にまで行けるように逃がしてやるくらいできる。

やらなくちゃいけない。家族と呼んでくれた彼の為にも。

そんな時に聞こえたのは銃声。

雛子は振り返った。凄く嫌な予感がした。この中で銃声が聞こえる

ということは味方ではない、敵を撃ったということだ。敵とは、すなわち藤谷しかない。

血液が全て冷たい物に変わった。冷えきった体を引きずりながら銃声の聞こえた方へと駆けていく。

安全な筈だ。綿密に調べたのだから、絶対と言えなくてもまさか撃たれるような状況になるはずがない。そう心の中で断言したが、それを打ち消す言葉が急浮上してきた。

……リサ、検体名は「L」、雛子もアイも会ったことのない私達を研究していた場所の長に会ったことのある唯一の検体、長のカリスマに惹かれて手となり足となっている女、彼女なら雛子がシステムに入り込んで見張りの動きを調べた事を知られてる可能性がある。

嫌な予感が止まらない。嫌な想像は勝手に肥大化して爆発してしまいそうだ。

想定していた筈だ。リサの存在は想定していた。まさかアイの防御ではなく藤谷に向かうなんて、雛子が体を取り戻して裏切ったのはもう知られてる。

しくじった。藤谷と別れて行動すべきではなかった。

「……………藤谷？」

たどり着いた。銃声はここで間違いないようだ。だって、藤谷が閉められたシャッターの前で倒れているのだから。

美々は狭い狭い通風用のダクトを進んでいた。

大した移動距離ではない。隔壁一枚分越えるだけで藤谷にたどり着く。信じて這う、「信」と「這」って似てる。そんな事を考えて美々は一人でにやけてみた。でも、駄目だった。

たった一枚が永遠に感じる。3メートルもないのに、凄く長い。

気丈に振る舞ってみたが怖かった。藤谷が死んでしまいかもしれない。それだけ考えると泣き出して、叫び出してしまいたかった。

これを越えた先に、降りた先に、その先に藤谷の死が待っていたら、美々は狂ってしまうだろう。

藤谷は大丈夫、そう信じて願って縋って美々は進む。恐怖を噛み殺しながら。

たどり着いた。一枚分越えた先で見付けた口に再度銃弾を撃ち込んで廊下に降り立つ。

ここに来る途中の誰かの部屋にあって拝借してきたこの銃も弾がな

くなってしまった。

「藤谷？」

「あ、ああ美々、無事だったかよかった」

藤宮美々、もとい香里美々は後悔した。

なんで私は弾を撃ちきってしまったのだろう。右手の銃にはもちろん弾は入ってないが構えた。狙いは藤谷、絶対に外さない距離だ。

「今回の執行は、痛いわよ」

藤谷もようやく自分の置かれた状況が分かったらしい。慌てて起き上がって、立ち上がって首が取れる勢いで首を振っている。

「ち、違う、違います違うんです！ ほら、ほら、ほらほら」

呼吸すら出来てないようでテンパった藤谷は必死で今まで藤谷に膝枕していた少女を両手で示した。

パツと見た時はアイに見えた少女は、明らかにアイとは違う少女、強い白のイメージを受けるといふ点では変わらないけれど。

「なにかしら？ どうしたら藤谷が膝枕で気持ち良さそうにしながら私の心配なんかしてくださりやがってくれるのかしら？」

銃口は尚も藤谷を狙ったまま、そろそろ止めようかと美々が思ったところで正座したままだった少女が口を開いた。

「美々、お叱りは後で藤谷が深く染み込むように受けますから、今

「はここから逃げましょう。アイは……………私がなんとかしますから」

「あら、そんなこと藤谷が認めないわきつと。それで、貴方は誰？」

藤谷がそこに割って入ってくる。

「そうだ、帰るなら皆でだろ。アイの場所まで案内してくれ雛子」

「……………美々、私は藤宮雛子です。ずっとアイの中にいました。詳しい話は後にしてここを動きましょう。藤谷も大丈夫そうですね」

藤谷の発言に難しい顔をしてから、雛子と名乗った少女は立ち上がって提案をしてきた。

まだ彼女が何者か、味方が敵かも分からないが、彼女提案は尤もだった。

「そうね。藤谷はなんで助かったのかしら？」

今安心感が深く深く身を包んでいて少し張り詰めたものが緩んでいた美々だが、徐々に感覚を戻していく。そのための時間稼ぎもかねての質問、

「これだよ」

藤谷はややげっそりとしながら制服の内ポケットからなにかを取り出した。

「あら、お義父様に渡されたお守り、いれといてよかったわ」

軽い調子で言っではいるが、美々は心底安心していた。

そして藤谷の手に持つているそれは『どんな困難も破って壊す。そんな名目で生きる初老の男性の像』だ。美々はこの像にはもう突っ込みをいれない事になっていた。

その像の頭部に減り込んでいる弾丸、謎の鉱石、あの像の硬さは一体なんなのだろう。だが今は藤谷が無事だったことに安心しよう。

「そろそろ移動しましょう。これ以上留まるのは危険です」

雛子の言葉と共に警報が鳴り出した。映画でしかこんな警報聞かないと思っただのにまさか自分がその警報の対象になるとは、人生わからないものである。

「移動には賛成するけどこの船に果たして安全な場所があるかしら？」

「なら目的を果たして帰ります」

目的、美々の目的は藤谷を連れて帰ること、会ってから聞こうと思っていたがどうして藤谷はこの船に乗ったのだろう。

藤谷が走り出したところしか見てない美々には全く分からないが、アイに瓜二つの少女、結局見付からなかったアイの状況を考えてとアイが関係してる可能性が非常に高いと見た。

「じゃあ目的はアイを連れて帰る事ね」

「そついや美々はどうやってここに？　アイが誘拐されるところ見たのか？」

藤谷が答え合わせをしてくれた。美々がこの船まで来れた理由は簡単、

「藤谷、貴方の制服にはね。発信機が仕込んであるのよ。浮気防止用にね」

あつ、藤谷が固まった。

藤谷の事は信用してるが、藤谷は優しいし、格好いいし、暖かいし、安心するし、言ったらきりがなくらい良い男なんだもん。仕方ないよね。

「なあ、その発信機、外せないの？」

「外すの？」

態と泣き真似をしてみる。やっぱり藤谷は藤谷だ、これだけでうなだれてなにも言ってこなくなってしまうた。

大勝利！

「お二人、よくまあこの警報の中で余裕でいられますね。というかよく会話できますね！」

雛子に怒られた。怒られたというより、呆れ七割、怒り二割、愛が一割ってところだろうか、とうんうん頷きながら藤谷は考える。

「もっと緊迫感を持ってください！ 後、一割の所はありません！」

……………雛子のは超能力なんだよな！？そうだよな！？

「いえ、あなたが藤宮藤谷だから分かるんです」

もう嫌だ。誰か俺にプライバシーとか、人権とか心中の自由を下さない。

そんな漫才を三人でやってると黒服とサングラスで全く違いのない男達が駆けて来るのが見えた。

藤谷は二人を見た。美々はつまらなさそうに狭い通路で何人列んで駆けてきてるのか分からない男達を見ている。雛子はやれやれと言った感じに首を振っていた。雛子は率先して動こうとしなかった。藤谷は雛子がアイの居場所を知らないと見当をつけた。だから、知ってるであろう人間に登場してもらう事にしていた。

やっぱり美々が傍に居てくれるのは心強いようだ。藤谷の精神は静かな湖面のように安定している。

どうやってアイの居場所を聞き出さなんて頭を使うことは二人に

任せて、藤谷は三人以上並行してこれてない黒服達を見つめる。

三人ワンセット、右腕も本調子じゃない藤谷が一体どこまでやれるか、あの男達が一体どれくらい列を作ってるか。

難しいことは適材適所、俺は目の前の黒服達と喧嘩（分かりやすい事）だ。

目の前は十字路、後ろはシャッター、つまり行き止まりだ。あの集団が十字路まで来るのはまずい、十字路では三人しか並べなかったのが変わるからだ、下手をすれば包囲される。

それを避けるために藤谷は駆け出す。船内の碁盤状の構造を考える
と十字路の左右から迂回されて包囲も有り得る。だから真っ直ぐだ、
あわよくば正面突破、そのままアイを救い出す。

藤谷が駆け出す。

「藤谷！」

美々が後ろで名前を呼んでくる。それが静止の言葉だと気付いた時には人影だろう物体が右の道から藤谷目掛けて突進してきていた。

避ける事も、もちろん反撃も出来ずにタックルで吹き飛ばされる。

「フジミヤ、やっぱり頭は弱いですね」

睨むように藤谷が見上げるとさっきとは全く違う格好のリサが立ち
はだかっている。教師の格好から体の線出まくりのライダースーツ

を着てる。

「このっ！」

藤谷は立ち上がり、目目のリサだけを目指すが、いつの間にか後ろに迂回してきたであろう黒服三人に捕縛された。

「クソッ！ クソッ！」

もがくがまるでびくともしない。三人掛かりの上に押さえ方が明らかに違う、確実に柔道のような格闘技に精通しているこの黒服達は。

「フジミヤ、それとコオリ、動くのはオススメしないわ」

藤谷からでは十字路であるために美々と雛子の姿は見えないが、きつと美々が動こうとしたのだろう、それを美々はリサの銃によって制されている。

十字路の内、美々と雛子のいるシャッターが閉まっている通路以外は黒服で埋まってしまった。

何人いるんだよチクショウ、万事休すか……………

「フジミヤ、君は当初の予定通りに飼ってあげる。調教してその性格も矯正してね」

嫌らしくリサが笑う。藤谷は背筋がヒヤリとして気持ち悪くて仕方ない。

「あら、藤谷は私の旦那様よ。冗談でもそんな事言われるのは腹立

つわ」

ああ、見えなくても藤谷には見える。きっと美々は挑発的に笑ってる、笑ってるだろうとかではなく断言出来る。

藤谷も少しだけ冷静になっってきた。やらなきゃいけない、万事休すでも雛子と美々、そしてアイは守らなきゃいけない。美々が挑発的な態度なのもきつと自分を信じての事だ。

考える、いや、探せ、見付けるんだ逆転の一手を。

「コオリ、君の処分は……………ふふ、言うまでもないわね。後H、あなたは姉妹揃ってモルモットよ。どうせ船から逃げれるわけないのになにやってんだか、Iももう心はないかもね。随分酷い有様だったし、ヒヒヒ」

……………

藤谷の中で何かが引きちぎれていく、加速度的に体が熱くなっていく、目の前がよく見えなくなっていく、頭の中がクリアになっていく。

自分が今まで体験した事ない位怒ってるんだと気付いた時には体は自由になっていた。押さえ付けていた黒服達は壁に寄り掛かって寝ている。

「……………テメエ、後もつかい喋ってみろ！ もう許せないのに、絶対に許してやれなくなる！」

ゆっくりと歩いていったんだ、更に後ろに待機していた黒服に再度捕縛されるのは当然だったが、その黒服達も腕を振るだけで吹き飛ばす。

一歩、一歩、リサの焦った顔が近付いてくる。いや、近付いていつてるのか、どうでもいい！

リサを覆うように展開してきた黒服達を拳一つ見舞う度に一人ずつ排除していく。狭い通路なので何人が踏んでしまってるが仕方ない。

「フジミヤ！ 恋人がどうなっ！」

既に藤谷はリサの目の前にいた。銃を持った手首を折れてもおかしくない握力で掴み、更に空いた手でリサの首を締め付ける。

「俺の大事なものは絶対に傷付けさせない、アイを返しやがれ」

「……………ぐあ、ふざけないで、Iを連れて帰らないと私が殺される」

「ならそいつを俺がぶっ飛ばす。だからアイを返してくれ」

「……………い・や・だ」

腹部に衝撃、藤谷が腹を見るために見下ろすとリサの膝が減り込んでいる。

だが、藤谷はリサを掴む事を止めない。体が、血が、全部熱湯のようになってる藤谷にはもう痛みを感じる事もない。

「そっか、なら力付くだ！」

リサを放し、突き飛ばして美々と雛子を守るように立つ。

後ろの二人は死んだって守らなきゃいけない、沸騰しきった頭でそれだけを頭に置く、でも、そんな時に純白の少女の真っさらな笑顔が思い浮かんだ。

……………二人から離れるわけにもいかない、でも守りだけじゃアイを救えない。

残った黒服達が一様に銃を構えた。今すぐにも突撃をかけなきゃいけないのに後ろの二人が気にかかって動きが一瞬止まる。その一瞬が文字通り命取りになった。

藤谷はしっかりと見た。アドレナリンが出まくって時間すらゆっくりに感じる藤谷ははつきりと黒服達が引き金に指をかけるのを見た。もう間に合わない。クソ、チクショウ、俺はまた中途半端に迷って大事なモノを失うのかよ。俺の命だけじゃこの失敗は払いきれない。

藤谷が諦めかけたその時、並んで銃を構えていた黒服達が吹き飛んだ。つまり、藤谷達から見ると黒服の後ろで爆発が起こり藤谷に倒されて寝ていた黒服達さえも爆発で目の前に落ちてくる。その瓦礫のようになった黒服の奥から一人の男が現れた。

「……………本当に美味しいところばかり持っていきやがって」

藤谷は悪態を吐いた。もちろんこんな良いときに現れるのはあの男である。

「ガハハハッ、祭だ祭だ。藤宮最強、藤宮最高、ふじぶおっ！」

あまりにウザいので、爆発で転がってきた瓦礫を投げつけてやった。先に言っておくがこの爆発、恐らくは火薬を一切使っていないだろう。あの男の人為的なものだ。

藤宮藤谷の父にして、藤宮一家の大黒柱……………訂正、大黒柱が根無し草は洒落にならないので……………駄目だ、あの人をどう頑張っても格好良い呼び方出来ない。

瓦礫を顔面に喰らっても平然と高笑いしながら親父は歩み寄ってきた。よく見るとリサも逃げ出したようで無事に動ける黒服はいないようだ。

「親父、ありがと、お礼ついでに頼みが二つある」

「ん？　なんだ？」

この馬鹿親父のお陰で藤谷も大分落ち着いた。だが、まだ落ち着ききつてはいけない、大仕事はこれからだ。

「えと、こいつ藤宮雛子、一緒に帰るから、後、家族、だから」

雛子の肩を持って親父の前に差し出し、上手く言えず片言になりながら言い切る。

親父は雛子の顔をジッと見つめた。

「あ、あの……………私雛子で……………」

「そうか、よろしくなヒナ」

豪快に笑って親父は雛子の髪をくしゃくしゃになるまで撫で回した。

「……………いやまて！ 親父止める！ そこは優しく雛子がくすぐったそうに目をつぶる程度だろ！？ 取れる取れる！ 首が取れちまうよ！」

「おっ、そうかすまねえなガハハハッ」

「雛子大丈夫か？」

「……………きゅ〜」

あっ、目回してるよ。

藤谷はそっと雛子を寝かしてやる。親父には言いたいことがやまほどあるが、まずは二つ目のお願いだ。

「親父、俺はアイを助けに行く。だから、俺の命より大事な二人を頼む」

真摯な気持ち、それをぶつける。親父もこの言葉の意味を読み取ってくれるだろう。

きつと親父の事だから俺達を安全な場所に逃がしてから、アイを救いに行くはずだ。それでも、俺はそれを譲れない、譲ってもらわなきゃいけない。責任は俺にあるし、何より、俺がそうしないと気が済まない。

「ほう、なら任せたぞ」

軽っ！

まあいいや、なら気合いを入れて行くとしますか、怒りで暴れんじやなくて、心からアイと雛子と美々、家族で家に帰る事を願って戦うんだ。

「んじゃ、こつちも任せたからな」

藤谷は進む、親父とすれ違い、更に進む。アイの居場所は適当な奴を殴ってでも聞いてやる。

「覚えておけ藤谷、お前も俺の命より大事なモノの一つだからな。もちろんアイもヒナも美々の嬢ちゃんもだ。それと上に船をつけてる、アイと上に上がってこい」

「ああ」

……………船は一体どうやってこのでかい船につけてるか、とかその船は誰が操縦して今は誰が見張ってるか、とか懸案事項だらけだったが藤谷は炉の火をもう一度燃やす。燻って今にも消えてしまいきそうだったが、今はアイの事だけを考えてこれを燃やす。

やっぱりなんだかんだで頼りになりやがるなあ馬鹿親父め。

進む藤谷を背後から何者かが肩を押さえ付けてきた。

藤谷が振り返ると、

「んっ!？」

いきなり口を塞がれた。目の前に広がっているのは美しい漆黒、嗅覚は優しい香に占領され、背中に手を回された。

さっきから美々に唇を奪われてるって分かっている、分かっているんだが、中々離してくれない。

肩を掴んで押して、距離を取ろうとするがしっかりと押さえ付けられていて引きはがせない。

なんて膂力だ！

そしてどれだけの時間が経っただろうか、うつとりした美々の顔の全体が見えるようになった。

「本当、銃とかなんとか、どうしてこんな事になったか分からないけど、待つのもいい女のステータスだからね。だけど、貴方を思う私の心は連れてって」

まずい、心底惚れ直した。つか、可愛すぎる、ええい、化け物か!？

思わず、反射的に、意思をするよりも早く既に結果が出ていた。美々を強く強く抱きしめた。

「ああ、待っててな。帰ったら美味しい飯を沢山頼むよ」

「うん、絶対に帰ってきてよ。帰って来なかったから………どこだって連れ戻しにいつてやるんだから」

名残惜しい、名残惜しいではすまないくらいの名残惜しさを感じながら美々と離れる。

「んじゃ行ってくるよ」

「はい、行ってらっしゃいアナタ」

藤谷は緩ませていた頬を引き上げて、反転、走り出した。

十七話後編

思い出せる一番古い記憶は、雪。

深深と降る雪、それをただ眺めていた。もう冷たいや痛いなんて感覚を通り越して、ただ、眺める。

何人か人が流れていくが、一人も私達に気を止める事はなく流れていく。

私達、私と同じ容姿をした姉が私を強く抱いている。その温もりだけが私のたった一つの絶対。

次に思い出せる二番目に古い記憶は、何も着ないで冷たい椅子に座らされて、重くて痛くて冷たい輪を頭につけられた記憶。私が泣いても叫んでも、どうなったって止めてはくれない。

毎日、毎日、毎日、ずっと真っ白が続く。私はなんでここにいるのか？私は誰なのか？私は………生きてるのか？

疑問だけは浮かんでくるが答えは一つも出て来ない。

そんな時に私の頭に過ぎった映像があった。

暖かい、凄く暖かい光景。私もお姉ちゃんも笑ってる。美味しいもの一杯食べて、一杯笑ってる姿。私には覚えのある感覚、これは未来にいつかくる映像だ。

私の世界に色がついた。真っ白な世界が鮮やかになった。

それから幸せだった。痛いのも苦しいのも消えはしないが、堪える事が出来た。夜寝るときが幸せだった。そんな幸せな夢をずっと見れたから、毎日夜が楽しみになった。

……………そんな幸せな時からどれ程経つたろうか。

私は寒かった。

気付けば独りだった。一体いつからお姉ちゃんと別れてしまったのか、私は独りで堪えていた。夢も見なくなった。

あれは嘘だったんだ。暖かい世界になんて行けるわけなかったんだ、私の……………考えた夢だったんだ。

「くそ、はあつ、はあ……………」

大きく深呼吸、着いた。着いてやった。

藤谷は適当に黒服を捕まえてこの場所を聞き出した。規模の分からない船だが、その船の中心部に位置するらしいこの研究室と船に無

さそうな部屋に辿り着いた。

部屋はかなり広く、中心にはコードが何本も繋がっている筒のような物がある。まるで木だ。コードで出来た枝に、中心筒が幹にあたる。

その筒の中にいた。

頭になにかよくわからない輪をつけられたアイの姿があった。藤谷は駆けた。

一秒でも、一瞬、刹那、なんでもいいから速く、速く行きたい。

たった数十メートルの距離が永遠に感じられた。そして目の前までやってきた。

「アイ！ アイ！ 今こんな所から出してやるからな」

筒から出すためにどうしたら良いか筒の周囲を見渡して何かを探す。最悪こんな筒割ってしまえばいい、中のアイにガラスが当たるのが恐いからこれは最終手段だ。

「それは止めた方がよいよ。色んな意味でね、藤宮藤谷君」

藤谷は声のした方へ振り返る。

少年が立っていた。日本人ではないが流暢な日本語、そして金髪、海を渡ればどこにでもいるような少年、少年といっても藤谷とあまり変わらないだろう少年だ。そんな少年が藤谷を見下したような言葉遣いと見下したような目をして立っていた。

藤谷が違和感を覚えるのは、少年の容姿ではなく、少年がいつの間
にこの部屋に入ったか、だ。いくら広い部屋でも、部屋を一周見渡
した藤谷が金髪の少年を見落とすわけがない。

藤谷は警戒心を解かない。こんな所に普通の少年がいるわけない、
藤谷は如何なる理由があつても倒れるわけにはいかない。アイを救
わなきゃいけないし、美々との約束も、親父との約束も、雛子に美
味いもの食わしてもやりたい。

あれ？なんで俺はこんな事考えてる？まるでこれから死ぬみたいじ
やないか。

死亡フラグを立てた気がして我に帰ると少年が嘲笑を浮かべていた。
嫌な汗がどんどん出て来る。不安が恐怖を呼び、藤谷の体と心を侵
食していく。

人の形をして、少年を象った化け物がそこにいる。藤谷は全身が恐
怖に縛られて動けなかった。

「さあ、HとIを置いて帰るんだ。君を生かしてやろう」

そうだ。帰らなきゃ、帰って美々の飯を食うんだ。そうだ、帰ろう
船に乗って家に帰ろう。

.....

藤谷はアイから離れていく。アイに背を向けて、出口に向かって歩
いていく。

突如右頬に衝撃。

なんだ、と思つて自分の右側を見ると握り拳が見えた。自分の握り拳だ。

叫びだしたいくらい泣きそうになった藤谷はもう一度その拳で右頬を力一杯殴る。

「クソッ！　ざけんな！　俺は、俺はなにやってんだ！」

もう一度、少年を見る。睨みつける。

「へえ、流石に彼の子供か。彼はね、唯一僕が出し抜かれた人間でね。借りを返せると思つて楽しみにしてたんだが」

彼とは親父の事だろう。

でもそんな瑣末な事はどうだっていい、怖くてもなんでもコイツを倒して家に帰るんだ。

藤谷は駆け出す。一気に肉薄、走つた勢いを殺さずに生かして右拳を打ち出す。前に倒れる気で打つた拳は少年に届く事はなく止まつた。

何故？何故止まる？

力を入れても前には進まない。右手が完璧に固まっている。動かない。違う、動けないんだ。

「駄目だなあ……………君のお父さんなら僕に一撃いれてたよ？ 既に二撃目に入ってたしね」

手首が掴まれて動けない。それになんて握力だろうか、いや、なんて力なんだこの化け物は。

「そうか、君は彼のような獣じゃなくて人なんだね。ちゃんと恐怖を感じてるだから動けないんだよ」

「っけんな……………アイを返せよ」

「そんな悔しそうな顔したって無駄さ。君はただの人間、特別な存在とは違うんだ。僕やI達のようなね」

「うるさい……………俺はアイを連れて帰る」

「無理だよ君には」

さつきから藤谷は強がり言うだけで全く体が動いてない。本能的な恐怖に身を完璧に奪われているだけだ。

悔しい、悔しくて悔しくて、どうすればいいんだよ。

「助けを呼ぶかい？ 君のお父さんに借りを返したいからね。呼びなよ」

さつきからコイツの言うことが妙に染み込んでくる。コイツの話を聞かなきゃいけない気になっている。

「I達は必要なんだよ。優しく甲斐甲斐しく世話しようじゃないか、

「ははは」

「アイをどうする気だよ!？」

なんとか振り絞って叫ぶ、少しでも精神に喝を入れるために。

「うん？ それはね、僕の寿命を延ばすためだよ」

は？ 寿命？ なんだよそれ、アイや雛子となんの関係があるんだよ。

「信じられないって顔してるね。それでも僕は君のお父さんより歳上だよ。それにし、あありサだったっけ？ あれも君達と同じ歳だしね」

そういえばこの船に押し込まれた時にリサが言っていた。

「だがリサももうだめだね。この任務は本来僕が手を貸さずに終わる予定だったのに、起きてこなきゃいけなくなった。まだアイの心は喰えてないってのにさ」

「なんだよ!？ わけわかんねえよっ!」

「そうだね、君は利口じゃないみたいだからね。だから言ってあげるよ、僕は人の中身を喰らって生きるんだ」

その瞬間全て停止した。

情報の点と点が線で繋がり、爆発的に断片しかなかった情報に解答

が出されていく。

「がああああああ！」

全てが繋がった瞬間、藤谷の感情は破裂した。

自分が何をしたかは分からない。無理矢理恐怖という鎖を引きちぎって体が動かされただけが分かった事だ。

そして藤谷は床を転がっている。すぐに立ち上がって反撃を、と行動に移すより先に腹を踏まれる。今日はよく虐げられる日だ。

いくらもがいても足はびくともしない。寧ろ強く減り込んできて呼吸が出来ない。両手でなんとかしようと足を掴んで動かそうとしても駄目、殴りつけても自分の手が傷付いていくだけだ。

「ふーん、やっぱり蛙の子は蛙なんだね。君も獣でしかなかったか」

見下ろされてる。

アイを傷付け、雛子を傷付け、リサも、その他にもコイツは……
……

憎い、憎いよ。コイツが憎い、なにも出来ない自分が情けない、親父が来て助けてくれる映像ばかり思い浮かべてる自分が情けない。

畜生………畜生………

「本当に、愚かな獣だ」

藤谷が抵抗する気を失った事を察した少年は足退けて、右手で藤谷の首を掴み、軽々と片手で藤谷を持ち上げた。

腹の次は首、首を締め付けられて藤谷は息が出来ない。腹より確実に呼吸を制限されてる。

「さて、君をどうしようか。殺すのは簡単だし、だけど、君の父上に対しての人質もいいな」

年相応、いや、外見相応の無邪気な笑い方をする少年、藤谷は閉じゆく意識の中であるモノが目に入った。

「まあ、死体を見せただけでもいいか。君のような汚らしい獣はさつさと処分だな」

方針を決めたらしく首への力が強まった。

藤谷は息をしてなかった。息をするより先に、藤谷は視線の先の純白に釘付けだった。

視界も真っ白に染まっていく中、藤谷は純白を見続けた。

藤宮美々もとい、香里美々は信じている。

私以外の女の為だなんてちょっと妬けるけど、アイは家族だ。家族はノーカウント、浮気じゃない、藤谷は浮気なんてしない。……………さつきから胸の中に巣くった小さな不安が暴れている。暴れて暴れて、大きくなっていく。

藤谷がいなくなってしまう。

私は今一体何を考えた！？有り得ない、そんな事あるわけない。藤谷は約束を必ず守る。なんたって私の旦那様なんだから。

「嬢ちゃん、藤谷が心配かい？」

ちよつと前を歩く藤宮宗二が問い掛けてきた。

因みに雛子となづけられた少女は宗二の背中では寝ている。さっきの撫で回し以外に、きつと疲れていたんだろう。何をしても起きそうにない。

「心配なんてしてません。また誰かの為に怪我したりしてきたらお仕置きですけど」

嘘だった。精一杯強がった。

「そうか、俺もな心配してねえんだ。寧ろ安心して。それと少し寂しいな」

歩きながらこつちに振り返ってお義父さんは豪快に笑った。

美々はこの言葉がなにを意味するか解らず投げられた言葉のボールを返せないでいる。

「昔な、自慢じゃないが俺はケンカで負けた事はなかったんだ。だけど、ある日俺より弱いと思ってた奴とある理由からケンカした。どうなったと思う？」

「そう聞くと事は負けたんですよ」

多分その相手とは藤谷を産んだ方の父親だろう。

「ああ。それが笑っちゃう。手も足も、なんにも出なかった。一方的に動けなくなるまでやられた。理由は、俺がやられるって分かってるケンカに向かおうとしたからだ。それで俺をぶっ飛ばすのはねえよなガハハハ」

確かに、それでは本末転倒じゃないか。でも、藤谷の父親って感じがする話だ。馬鹿っぽい所が特に。

耐え切れず美々はクスクスと笑った。

「続きがまだあるんだ。それでな、ソイツは一人で罨にかかりに行って全員やつちまいやがった。俺は驚いたよ。満身創痍の体引きずって行ったら、ソイツ以外は皆寝てんだからよ」

「それで、その話と藤谷に関係は？」

待ちきれなかった。失礼と分かりながら話の腰を折って聞いてしまった。

「ああ、藤谷がな。してたんだよ、アイツと同じ目をさ。何かを守る時の目をさ」

そう言つて嬉しそうに笑つたお義父さん、私は嫌な予感にかられて歩いてきた道を振り返つてしまった。

藤谷、必ず歸つて来るよね？

血が巡る。熱い血が、体中を廻り、巡る。

今日、藤宮藤谷は死んだ。

「……………ぐっ、やってくれるね。大人しく死ねば苦しまないのに」

藤谷の体は勝手に動いていた。気づけば右拳を少年の顔に見舞っている。朦朧とした頭でそれを第三者のように見ていた。

もう敵わないし、どうしようもない、誰か助けてくれ、なんて馬鹿の中でも許せない馬鹿な事を考えていた藤谷は死んだ。

「アイを泣かした！ 雛子を傷付けた！ 俺の大事な家族を傷付けたお前だけは、お前は俺がぶっ飛ばす」

今、藤谷は完全に戻った。こっからが藤宮藤谷の本調子だ。

藤谷はアイの方を見る。

あの時アイは泣いていた。焦点の定まらない光のない瞳で泣いていた。そして、あの時、藤谷が意識を失いかけた時、アイは言った。音は聞こえなかったけど口が動いたんだ。「とうや」って動いた。

じゃあ、俺がやらなきゃ、俺に助けを求めてんだ。アイが、家族が、藤宮藤谷は戦わなきゃいけない、家族を取り返して家に帰るためにも。

「おい、晩飯までの軽い運動だ。お前を泣かして改心させてやるよ」
ビシッと格好をつけて少年を指差す、もう藤谷には弱気はない、あ
るの是一本通った強い願いだだけだ。

「お前のせいだからな。お前がいなけりゃ美々との約束を破らずに
済んだのに」

「ん〜？ 一体なんの事かな？ 小さい獣君」

相変わらず上からの喋り方の少年、年齢的には少年じゃないんだっ
けか、まあそんな事はどうだっていい。

「後悔しろ、テンニヤラフポンポン秘拳だ！」

美々との約束、破るのは本当に心苦しいが、仕方ない。

テンニヤラフポンポン秘拳、毒蛇の沼。

テンニヤラフポンポン秘拳666個あると言われる技の一つ。

独特の構えから、腰を落とし、にじり寄る。

「ふふふ、獣風情が」

「小さい獣に噛まれたって死ぬときは死ぬだよ」

完璧に射程に入った。藤谷は指を全て伸ばした状態にする。ここから繰り出すのは突き、相手を突く事にだけ集中する。集中する位置が重要だ。

藤谷の集中が極限まで高まった一瞬、瞬きを終えて目を開いた時には少年の拳が腹に減り込んでいた。

「ぐうっ！」

藤谷は堪らず呻いた。顔に嘲笑を浮かべたままの少年は、そのままハイキックで藤谷の左側頭部を蹴り飛ばした。

大したガードも出来なくてそれに直撃してしまった藤谷は、ふらつきながら何歩か後ずさる。

極度の興奮によって、なんとかボロボロガス欠の体を奮い立たせてる藤谷だが、そろそろ本当に限界らしい、目が霞んできてる。

それでも、そんな体でも、なんとか地面に立つ。倒れはしない、負けはしない、勝って必ず帰るんだ。

「全く、紛れのラッキーヒットか。彼とは比べものにならないくらい君は弱い……………!？」

やっと体の異変に気付いてくれたらしい、テンニヤラフポンポン秘拳、毒蛇の沼にかかった事に。

毒蛇の沼、その名の通りに毒蛇に噛まれた者は否応なく毒に飲まれ、命を終える。藤谷の突きは完璧に少年の両足を捉え噛み付いた。

ガードを捨ててでも打ち込んだんだ。ある程度の結果はなくては割に合わない。

「畜生！　なんだこれはこの！」

必死になって足を叩く少年、藤谷はそれにゆっくり近づいていく。

「ひいっ！」

さっきまでの嘲笑はどこへやら、上半身は動くわけだし、男ならシヤンとしてろっての。

いくら超能力者でも、体の構造からは逃れられないらしいな。

ふと、藤谷の目の前をなにかが過る。

「……………」

藤谷を射抜く双眸の矢、藤谷の足が止まる。リサが藤谷と少年の間に割って入って、少年を背に藤谷の前に立ちはだかっている。

「フジミヤ……………」

藤谷の名を呼んでリサは押し黙る。

「ははっ、しか、いいところに来たじゃないか。少し時間を稼げ」

「主様、もう止めましょう。アイを返すんです」

リサは振り返らず、背中を向けたまま会話をする。

「なにを言ってる。人形が僕に意見するな！ 僕の為に動けばいいんだっ！」

「こんな事が主様の為にはなるとは思いません！」

「このお、出来損ないがあっ！ あのIは優性な種なんだ。あれも成熟した。それを喰らおうという時にいびっ！」

藤谷はもう我慢してられなかった。リサの横を抜けて気付けば馬鹿野郎の顔を殴っていた。

正直言つてこれ以上は無理だって、ただでさえ加減する余裕なんかないのに、

「お前もう喋んな。この馬鹿野郎！」

「フジミヤ！」

「君もっ！ もうやめろよ」

藤谷は絶句した。リサが泣いている。

泣いている？なんで？畜生、あんな最低な奴のどこに泣く要素がある。

やっぱり女性が、人が泣くのは見たくない。燃え上がっていた炉の火が少し弱まった。

「お願いフジミヤ、アイは返すから、これ以上彼を……………」

「俺は、アイを返してくればなんにも言わない」

もう藤谷の炉は静まりきっていた。

「ええ、少しま」

「え？」

なんだよ、なんでだよ、どうして、なんで、わかんないよ。

「リサあああああつつつ！！！！」

藤谷は駆け寄った。倒れてしまったリサを抱き起こす。べつとりと手に血がついた。体が一気に冷える。

「見ないで……………見ないで……………」

顔を手で覆って彼女は譫言のように呻いていた。撃たれた。少年が持っていた銃で彼女は撃たれたんだ。どうして、リサなんだよ。

「なんで俺を撃たねえんだよ!!」

「安心しろ次は君だ」

全く、今日は何回銃口むけられんだよ。

「フジミヤ……………見ないでえ……………」

そいうことかよ。

藤谷は心の中で一言吐いて、上着をかけてやる。やっぱり女の子なんだろう、腹の痛みより顔を見せたがらないなんて。

「リサ、ちょっと待ってる。絶対死ぬなよ」

「死なないよ。ちょっとしたお仕置きさ。僕のいうこぶっ!？」

藤谷は既に肉薄して、蹴りを見舞っている。

「もう喋んなって言ったろうが」

テンニヤラフポンポン秘拳、獅子乱舞。

右手で少年の首を掴む。そこから右手の腕力だけで持ち上げて、床に頭からたたき付ける。持ち上げる、たたき付ける、持ち上げる、たたき付ける。

「これはテメエの為に傷付いた人達に分だ!」

テンニヤラフポンポン秘拳、餓狼の牙。

「リサの分っ！」

たたき付けるのを止めて、最後に壁にたたき付けて無理矢理寄り掛からせて立たせる。

そこから、右手の拳を振りかぶって打ち込む、次は反動を利用して左手、右手、左手、右手、左手、速度を上げて打ち込み続ける。

テンニヤラフ……………こっから藤宮家の怒りだ。

「雛子の分っ！ アイの分っ！ 分、分だああああっっ！！」

更に蹴りも交えて右、左、と順に打ち込み続けた。

止めた時には少年は白目を剥いて、口を開いたまま、糸が切れた人形のように崩れた。

「うしっ！」

大きな達成感に藤谷は包まれていた。見上げるとなんか心地好くてこのまま後ろ向きに倒れてしまいそうだった。だが、まだ倒れられない。

よろよろとおぼつかない足取りでまずはリサの元へ、

「大丈夫か？　すぐに医者に連れてってやるからな」

船に医者ぐらいはいらるだろう。朦朧とする頭で、彼女を抱き上げる。服は血でべったり、水と違って嫌な湿り気があって気持ち悪い。

「傷は、塞がってる……………私、そういう生き物だから」

さっきの少年の台詞を思い出す。何故か藤谷もリサが大丈夫だと理由のない確信があった。あの時のリサは傷ではなくその後を訪れる体の変貌を気にしていたから。本当に傷口も塞がってるのか、これ以上血が出る感触はないな。

ああ……………駄目だ。……………アイはどっちだ……………霞んでよく見えないぞ。

「フジミヤ、アイの所まで行ってくれる？ 装置から出してあげるわ」

「ああ……………アイはどこだ？」

「……………そのまま真っ直ぐ歩いて」

藤谷の状態を察してくれたらしく、リサは優しい声音で誘導してくれる。

ようやく藤谷の目でも確認できる純白が見えた。

酷く眠いような状態だ。目を瞑って倒れてしまいたい、さっさとこんな船からおさらばしたい。

「ちょっとそこで待ってなさい」

藤谷の腕からすると抜けて、リサは上着を頭の上から被った状態

で、なにやら台のような物を操作している。

その後、駆動音が聞こえ、アイを覆っていたガラスの筒が上に上がっていく。

藤谷はそれを見て、また必死に足を動かしてアイに向かう。

「アイ？ 待たせたな。怖かったろ？ 帰って美々のご飯食べよう……………」

藤谷はアイを抱きしめ、そのまま意識は白に包まれた。

とうや。

藤宮藤谷。

私は、家族は、アイは。

「とうや、とうや」

アイは気付けば泣いていた。藤谷を抱きしめて、アイは泣いていた。どうしてこんな所で泣いているのか、どうして心がこんなに溢れるのか、分からないけど泣いている。

とうやのおかげだ。とうやが嬉しい時にも泣けるって教えてくれたんだと思う。だから今は嬉しくて、寂しいのが吹き飛んだのが嬉しくて泣いている。

「アイ、生きなさい。私の分まで生きてね」

アイは知っている。目の前に立っている彼女を知っている。とても強く輝く人だ。忘れるわけない、姿は変わっていても心がそう伝えてくれている。

「アイは、アイのためにしか生きられないよ」

「そうね、その通り。だから、時間の話よ。私は老い先短そうだからね、私の分まで時間を生きて」

「ううん、時間じゃないよ」

「あらら、随分言っわねアイの癖に」

そう言っ彼女はアイの鼻を指で叩いた。昔からそうだ、彼女は。

「私は行くわね。彼の事、やっぱり好きだから。惚れた者負けね」

そう言っ特徴ある笑い方をした彼女の姿は、昔アイ見た姿だった。

惚れた者負け。いつか美々に聞いた。

「アイも負けだあ……………」

藤谷が次に目覚めたのは病院、しかも、つい最近お世話になったばかりの病院だ。

今回は透の差し金ではなく、にいぐちとなえ新倉早苗さんという妙齡の女性の処置らしい。

そしてこの新倉さん、なんだか初めて会った気がしない。それに、なんだか早苗って名前に引っかけかりを覚える。

「流石は藤宮君の息子ね。まさか体をここまでズタボロにしてもケンカするなんて」

ケンカじゃありません。必死でした。

「まあ、大した事はねえんだろ？ 良かったじゃねえか」

と豪快に笑う父親、結局藤谷とアイを船内から出してくれたのはこの男らしい、気を失った藤谷は知らないが、詰めをミスるとはなんとも情けない話だ。

「それじゃあ、藤谷君またね」

そう言って白衣の女性は出ていった。なんか恐ろしく意味深だ。『またね』とか、この病院の正式な先生じゃないらしい所とか。

あの後、少年とリサはいなくなっていたらしい。やっぱり、リサは少年の事を……………誰かに大事に思って貰えるのって幸せな事だよな。でも、罪は償うべきなのに。

「あゝ、三人様、私めの腹の上でケンカは止めてください」

「ごろにゃん」

「わふわふ」

「にゃん」

雛子、アイ、美々がベッドの、というより藤谷の上を占領していた。

さっきまでは、新倉さんがいるまではおとなしくしてたのに。

「それにヒナ、なんだよそのキャラは？」

「いえ、ノリが良くないと家族関係に輝が入りかねないので。にゃん」

思った四十倍くらいたくましいので、この子は心配ないだろう。

とりあえず、今日は色々ありすぎた。本当に、非常識で非現実的で非日常的だった。もうこんなことは懲り懲りだ。

藤谷は平穏な明日を迎えるために眠る事にした。

十八話

「藤谷、朝ですよ」

「ああ、雛子か。さんきゅ、すぐに起きるよって……………なにこれ？」

「はい？ 首輪ですよ。それと鎖、そんなこともわからないんですか。やれやれですね」

態とらしく嘆息してる所悪いが、確かに最近鎖で繋がれたりしたが、何故自分の首に首輪が巻いてあつて鎖で繋がれてるんだという事実を聞いている。

「首、だけですか？」

雛子の口が半月を作る。そこから雛子の顔が影絵のように口と目が光るだけにしか見えなくなった。もう人の顔ではない。小さい頃に教育テレビで見た影絵の魔女となんら遜色ない。

そう、純然たる恐怖だ。そしてようやく雛子の言っている意味が理解出来る。

「ああ……………」

「もう我慢出来ません。美味しそうで美味しそうで……………頂きます」

手足を鎖で固定された藤谷は、文字通り手も足も足もなくて、される

がままに……………

「もういいでしょこれっ!!」

藤宮藤谷、なんとも爽やかな目覚めである。冷たい朝の空気が心から爽やかな、気持ちのいい朝を迎えさせてくれる。

「ありや、寝起きは悪いと思ったのに。朝ご飯もう出来るから、早くおりてらっしゃい。って言っても私が作ったわけじゃないけどね」

そう言って舌を出すお茶目な女性。

藤谷の思考は静止している。

さっきまでの夢の事も、この朝の空気の冷たさも昔の事にしか思えない。藤谷の意識はこの町内を越え、もうそろそろ成層圏を越える所まで飛んでいる。

「あつ、そっか。新倉早苗、これからは藤宮早苗ってなるから。貴方のお母さんになります！ よろしく！」

一瞬にして自分の体まで意識を叩き戻された藤谷は、

「は、はいいいいつつ!？」

これがあの、アイ誘拐事件から一週間後の出来事である。

「と、いうわけだ。俺の奥さんだ。そしてお前らのお母さんだぞ」

「なあにが! というわけだ、だよ! 一体いつの間に!?! つうか急過ぎるだろ」

「わーいおかあさん」

「母親……………」

「よろしく願いますねお義母様」

……………なんてたくましいのでしょうか、うちの女性陣は。

「藤谷君は、やっぱり嫌かな? 急じゃなかったら良い?」

あまりに真摯な目で、藤谷もこれ以上は言えなくなった。

新倉早苗さん、この間病院で知り合ったばかりの謎の女性。雛子曰く帰りの船にも乗ってたらしく、全く何者か分からない。

「いや、そのまずは貴方の自己紹介をしっかりして欲しいです」

「うん、新倉早苗、名字は藤宮予定の三十九歳、お仕事はお国の為にえんやつこら。の、可愛い貴方のママだよ」

頭が痛くなってきた。

ここは我が自慢にして、可愛くて美人のブレインにご登場頂くしかない。

「そこまで言われちゃ協力しないわけにはいかないわね」

まだなんも言っていないんですけどね。

「分かりやすいのよ旦那様」

んで、どう思う？あの人の事。

「不思議な人だけどお義父様が好きなのは本当ね。断言するわ」

なんか凄く説得力あるな。後、皆様気づきでしょうが、私、藤宮藤谷は全く声を出しておりません。凄くて、便利で、理解不能だよこの会話、むしろ会話の定義を守れてんのかな。

「って三十九歳！？ 嘘だろ！？ 嘘だっ！」

今更驚く藤谷。あまりに普通に言われたので突っ込みが遅れたが、早苗さんの容姿、明らかに二十代、しかも絶対に前半だ。だからこそ、うちのオッサンなにしてくれたんだよ、と思ってたのに年齢的には問題ないじゃん。

「愛しい奥様との会話は終わったかしら？ 藤谷君分かりやすいからなに言ってたかなんとなくわかるんだけどね」

……………あれ？なんかおかしいな。

アイを見ても、雛子を見ても、親父を見ても、早苗さんを見ても、美々を見ても、自分がおかしい事が分かる。

「あの、ごめんなさい。気が動転してました。その、別に反対とかはしてなくて、むしろ賛成なんです。だから……………ごめんなさい」

藤谷は堪らず部屋から逃げ出した。それで後悔した。驚いていただけだ、だけなんだ。

身を削って、人生を削ってまで俺を育ててくれた親父が結婚する。なに反対してるみたいな事言ってたんだよ。真っ先に祝福するのが俺の役目だろ……………ああ、恥ずかしいな。

部屋で布団被ってうんうん唸っていた。偶の休日こんな情けない高校生いるだろうか、いやいない、いる筈ない。

「別に藤谷は悪くないよ。急に結婚、なんて言われたらそりゃ誰でも抵抗を感じるって」

まずい、こんな時に優しくされると我慢出来ずに抱きしめてしまいたいそう。

「自重しましょうね」

うげっ、なんか体の上に乗ってる。おそらくは雛子だ。雛子の奴、
なんでか知らんが俺と美々がいちやつくと邪魔してくるんだよな。

「アイもー！」

にぎやっ、言わずもがな。

「あら、奥さんの目の前で女の子に乘られてるなんて良い度胸ね？」

あれ？おかしいな、明らかに一部始終見てるのに悪いの俺なんだ。

布団から顔を出す藤谷。予想通り、体の上で飛び跳ねてる二人の白い少女達と、半眼の愛しい人、ニコニコの早苗さん。

「藤谷君、少し二人で話そうよ。外に車あるから、待ってるね」

返事も聞かずに早苗さんはそそくさと出ていってしまう。

藤谷は流れていく景色を眺めていた。自分のよく知る町並みを抜けて、記憶にない景色になってきた。それでも口を開けない。謝らなきゃいけない、祝福しなきゃいけない、『でも』。

『でも？』何がでもなんだ？俺は何が不満なんだ。

いや、不満なんかない、『でも』。

また『でも』か？

ワカンナイ。

「……………藤谷君、私ね。貴方のお父さんとお母さんの友達だったんだ」

早苗さんが口を開いた。お父さんとお母さん、ということは藤谷を産んだ二人の方だ。

「そつ、なんですか……………」

違つ、こんなことを言いたいんじゃない、俺は謝りたいんだ。

思ふ言葉が口を出ず、苦苦しい気持ちになる。自分がとても小さな人間のようだ。

「それでね、その、ずっと好きだったんだ宗ちゃんのこと……………」

「宗ちゃん？」

明らかに空気の読めてない返答をした藤谷。

「えつ、あ、あのお父さんよ貴方の、育ての」

慌てて弁明する早苗さん、別にそんな焦らなくてもいいのに、とそんな事を考えながら藤谷ゆつくりと視線を右に移して早苗さんの顔を車が走り出してから初めて確認する。

藤谷のもやもやは全て吹き飛んだ瞬間だった。

「あの、さっきはごめんなさい！ 俺、すぐには貴方を母さんなんて呼べないかもしれないけど、アイもヒナも、それに美々だって凄い良い子達です。俺の自慢です。だから、俺達と……………家族に……！」

藤谷も自分が何を言ってるかよくわからなかった。とりあえず早苗さんに言いたい事、言わなきゃいけない事を思い付く限り言った。こつちを見た早苗さんはすぐさま車を路肩に停車させた。

「藤谷君！」

「は、はい！？」

声裏返った。恥ずかし。

「私、立派なママになる！」

「は、はい……………」

燃えていた。

藤谷の手を取って、本当に華奢な女性かと思えないくらいの力で握られた手に痛みを感じながら、藤谷は燃える早苗さんの瞳を見続けた。

早苗さんの事はよく知らないけど、あんまし張り切って欲しくないなあ、と一週間後の藤谷は思うことになる。

そして、その一週間後。

「朝だよ！ ウェイクアップ！」

震度七。

藤谷の現在の状況を表すのにこれ以上適した言葉ないだろう。

一週間毎日定時にこの地震に襲われていた。アイだってこんなには揺らさないぞ。

「……………起きた、起きました。大丈夫です……………」

「うん、朝ご飯出来てるからね」

そう言い残して早苗さんは部屋を出て行った。藤谷は半身を起こして頭を掻いた。

これはまだ序の口。

「はい！ ハンカチ！ ティッシュ！ お弁当！ 行ってらっしゃいのチューー」

「お義母様！ 最後のは絶対に認められません！」

「あはは、ごめんごめん」

「じゃあアイとちゅー」

「あらあ、アイちゃんもヒナちゃんもいい子ね」

こんな寸劇が毎日行われる出掛け。

「ぐす……………汚された……………私、汚されました……………」

ヒナ、ドンマイ。

心の中で合掌しつつ、藤谷は鞆を持って家を出る。

「にやははっ、いい感じで死んでるねフジちゃん」

嗚呼、なんか最近忙しくてまともに話すがかなり久しぶりな人に話し掛けられてるけど、体がいうことを聞かない。

「あっ、あーちゃん、なっちゃん、私もやる」

さて、「あーちゃん」「なっちゃん」が誰を指してるか解るでしょ

うか？

流石は篠山、久々だけど濃いキャラだ。

正解を言っと。

「だあああああつ！ やめんか！ アイとヒナ逃げんな、こつちへ来い」

「嫌です」

「いやでーす」

「行ったらつむじサイクロントルネードハリケーンドラゴンをくらいます」

よくわかってるじゃねえか。

「アイ」だから「あーちゃん」「雛子」だから真ん中の字を取って「なっちゃん」本当に流石のネーミング。

「ったく、ヒナ、お前はお姉さんなんだからしつかりと妹を見てなきや駄目だろう？。」

机に突っ伏して寝ていたのに、朝のように揺らされて無理矢理起こされた藤谷の機嫌は悪い。肉体的には疲れなんて全然ないんだが、精神的にはかなりきている。

「そうです。だから弟分である藤谷の遊びを相手を仕方なくやってあげてるのですよ」

「お前が姉かよっ!？」

そんな時、藤谷の肩にポンと手を置く人物がいた。

「フジフジ、お前黄金率でも手に入れたのか？ 最近女にまみれてるじゃないか」

.....

振り返ってその人物を視認した藤谷は素直で、今感じている言葉をそのまま出した。

「.....どなた？」

「.....」

沈黙。

静寂。

「マジで言ってないよね？」

半泣きになりながら彼は聞いてきた。

申し訳ないが、やっぱり思い出せない。いや、思い出せないという言葉は間違いなんじゃないか、記憶に存在しない可能性もあるわけだし。

藤谷は小さな脳をフル回転させて記憶の海を漁る。

「人違いでは……………」

彼は全泣きしてなにか名前を叫びながら走り去って行った。うん、
なんだか面白い人だな。

力の抜けた藤谷は再度椅子に戻って寝る事にする。その日は誰も藤
谷にちよっかいを出すことはなかった。

なんだろうこの足取りの重さは……………家が遠い、帰りたいと
思えないや。

その日藤谷は珍しくゲームセンターに寄った。

何をしようかと店内を見回す。ビデオゲームでもやるか――

「ここはシールを作ってぬいぐるみキャッチャーね」

「……………よし、何をしようか美々さん」

最初に言っておきます。藤宮藤谷君はゲームセンターに入るまで一
人の寂しい帰宅をしておりました。「あら、ちよつと私は今日のツ
ンデレのツンだから一人で帰って」と意味の分からない言葉と共に
突き放された筈なんだが。

「そしてこれからがデレよ」

やべえ、なんかどつと疲れた。でも美々すげえ可愛いな。

あつ、まだなんも言っていないのに頬を押さえて照れてる。この仕種も可愛いぜ。

「それでバカツプル、いつまでそんな茶番劇を繰り広げやがる気ですか？」

「ちゃ、い、う、う……………気ですか！？」

アイさんよそんなに長い台詞でもないぞ。そしてヒナさん、なんか最近その睨み顔ばかりだな。

「んへ？　はんへひひはんはおへをふへっへるほはな？」

言う必要もないかもしれないけど、敢えて、敢えて、言わして下さい。理由は分からないけど美々さんは何故か怒って頬を膨らませながら、藤谷の頬を抓ってる。

頬を膨らませてる顔が恐ろしくなるぐらい美麗で可憐なので見惚れて頬の痛みを感じなかったりする。

というわけで、出来ればもちろん美々と二人きりが良かったが、かといって家族を蔑ろにも出来ない。とりあえずの記念ということでプリントシールを作りに行くことにする。

それでその前に着いたところで不意に肩に手を置かれた。

振り返る。

もう一度逆を向く。

振り返る。

藤谷の人間としての機能の大半がストップする。

わずかに残った脳の働き藤谷は考える。慣れている筈だった。さつきから美々も白双子も藤谷の不意について現れた、なのにこの事態には対処できない。

「あらあら、まさか可愛い女の子を侍らせて、ゲームセンターに寄る不良さんがまさか藤谷君だなんて」

早苗さんがいた。隣には親父っぽい人もいた。

早苗は婦警さんの格好をしている。このコスプレを見ながら美々がこの格好したらどうなるかなあ、とか考えていた藤谷はやっぱ脳がしっかり働いてないのだろう。そして隣の親父っぽい人が問題だ。

「それで早苗さん、その隣の方は？」

「ん？ 宗ちゃんだよ？」

「やだなあ、いくら俺でもそんな嘘は引つ掛かりたくありませんって」

「引つ掛かりたく、なんですね……………」

ボソツとヒナの突っ込みが聞こえるがスルー。だってあんなナイスミドルな親父を認めたら負けだろう。息子として、男として。

「えへへ、ちょっと私好みに改造してみました」

改造……………」

これでもか、ってくらい伸びた髪を切り。そこまでか、ってくらいウザい髭を剃っただけで人間ここまで変わるのか。

「……………」ちよつと素敵かも……………」

マズイ！いや、洒落にならない、美々が親父を見て少しときめいている！？な、ななななんとかせぬえぶあ！

「「ぱぷ」」

「おつ、なんか娘達に囲まれるのも良いもんだな」

父に歩み寄ろうとしている美々を泣きながら押さえる藤谷、双子に抱き着かれて喜ぶ父、それを慈しむように見ている早苗さん。

藤谷としてはカオスな状況がゲームセンターで広がっていた。

閑話休題、紆余曲折、なぜか警察官のコスプレをしてる大人二人を交えて写真を撮って、その帰り道。

早苗さんの運転するステーションワゴンに全員で乗って移動中である。

一体どこへ向かってるんだろうか。二人は着替えて私服に変わったし、つか、さっきの格好は一体何だったんだ？出オチか？

そして、この口も開けない重苦しい空気はなんだろう。騒がしい双子すら藤谷の後ろで、静かに座ってる。美々は落ち着いた表情で座って、いや、訂正、美々も少しこの空気にやられて緊張している。

車を出してから三十分程が経過した辺りで、藤谷は目的地が解った。車は少しずつ山道に入り、ビル代わりに山が、電柱の代わりに竹が、それでも道路は舗装されている静かな場所へと入っていく。山門から入って十分程度車を走らせて目的地に到着した。

「藤谷、ここは？」

雛子が重苦しい空気の中でようやく口を開いた。

「墓地、俺の父さんと母さんが眠ってる。最近、来てなかったな…

「……………」

なんだろう。か。お盆に行っただけ、そう、藤谷としては墓参りは形式的なのだ。実感、それがまるでない、言い方はうまくないが、墓石がそこにあるだけ。

きつと、両親の記憶がないからだろう。少し、胸が重い。

「美々？」

「……………」何かしら？」

「大丈夫か？ 調子悪そうだが」

「大丈夫。心配しないで……………少し……………ね」

美々はそう言ったきり俯いて何も言わなくなってしまう。追及しても言ってくれそうにはない。

美々の事は心配だが、とりあえず親父達について行く。

墓石の前に六人で立つ。いつの間にか親父が持っていた花を添える。

「久しぶりだな。つってもお前はなんも答えちゃくくんないがな。やっぱり俺を恨むかい？ 俺だけ生きて、藤谷の成長を見て、家族はこんなにいるし、更に嫁さん貰おうとしてんだからよ」

親父が墓石に語りかける。簡単に見破れる苦笑いを浮かべて、昔の事でも思い出してるのだろうか、ゆっくりと言葉を紡いでいく。もちろん、親父の言葉に何も返答はない。

「奈穂さんも、羨ましいでしょう？ 藤谷は良い男に育ちましたよ。嫁さんも貰って、後は孫の顔を待つだけだ。二人とも、俺は立派にやれたかな？」

親父の言葉は続く。藤谷達の事を忘れたかのように親父を墓石に語り続ける。藤谷は我慢できなかった。いや、藤谷は我慢し続けていたんだ。今までの人生でずっと我慢してきた。もうその我慢は今日、やめることにする。

「親父はよくやったよ。俺のために好きな事を止めて、俺のために時間を割いて、もう、いいんだ。後は、早苗さ……………母さんを幸せにする事を考えてくれよ」

藤谷がずっと言いたかった言葉。

言えなかった言葉。

いつか大人になって言おうと思っていたお礼。

過去の鎖にがんじがらめにされて、自分の幸せを探せない父のための言葉。

「……………っ!？」

殴られた。

唐突に、思い切り石の床を転がる藤谷、真っ青な顔した美々が駆け寄って来る。藤谷が再度親父を見た時親父は――

「バカヤロウが……………まるで俺がお前を育てんの苦痛だったみたいない方しやがって！ たしかに、人一人育てんのは楽じゃねえ。わかんない事だらけだった！ でもよ、俺は一度もお前を苦痛に感じた事はない。親だからな」

泣いていた。

藤谷は歯を食いしばった。

間違えた。言葉を間違えた。伝えたい事はこうじゃない、違うんだ。

そう思った藤谷の体は動いていた。

拳に力を入れたわけじゃない、拳に想いのせて、父親への愛を伝える。

「んだつたら！ なに遠慮してんだ！？ 幸せになる権利は誰にだつてある！ だから、アイも雛子も俺も、親父の子供なんだよ……………」

親父は遠慮、という言葉では表しきれないが、早苗さんとの結婚に気後れのようなものをしてる。藤谷達の顔色を窺って、自分の幸せを、早苗さんの幸せを無くそうとしている。

そんなのは駄目だ。

「早苗さんを幸せにする自信がないなら……………それなら俺は反対だ。でも、俺の、俺達の親父はすっげえ格好良いんだ！ いつも笑って家族全員気付いたら親父と一緒に笑ってたんだ。すっげえんだ……」

……だから……だか……」

あれ？上手く喋れない。呼吸が乱れる。前も見えない。

「……………頑張ったね」

泣いていた。俺も泣いていた。美々に抱きしめられて、俺はもう涙を止められなかった。

「美々、さっき調子悪そうだったけど大丈夫か？」

「ん？ ちょっとお墓見たらお母さんの事思い出しちゃって……」

「そうか……………寂しいか？」

「そりゃもちろん、でも、藤谷が側にいてくれれば私は寂しくなんてないわ」

藤谷の部屋、どうしてもさっきの美々の様子が気になって、眠れそ

うになかったので聞いた。なんか今日逆らえず、美々の添い寝イベントが実行されている。少し、感情をさらけ出したからか、あまり一人でいたくなかったから良かったと言えば良かったが。

「ええい！ 母さん、親父！ さつさと部屋に戻れよ！ 部屋の前でなにしてんだよ！？」

戸が開いて母さんと親父が現れる。

「孫の顔が見たくて…………… ちょっと藤谷君を応援しようかと」

「孫はまだか！？」

ヤバい、頭痛いや。暗いのに顔がなんとなく想像出来るし。

「藤谷、期待には応えなきゃ！ でも、流石に見られてたんじゃ恥ずかしいかな？」

止めて！美々さんに本気で迫られたら、私の理性が瓦解する。

「むうゝ！ アイもとうやと寝る！」

「そうですね。日本には川の字というものがありますし、家族は全員一緒に寝ても問題ない筈です」

いや、大有り！

「皆出てけ！ 狭い部屋にこんなに人が入れるかよ！」

「藤谷、愛してる……………」

なんで！？美々さんはなんで今のタイミングでそういつこと言うんだ！？

後は家族全員思い思いの発言をして、藤谷の部屋に六人で寝る事になりましたとさ。

おまけ前編

ふじもとゆうや
藤本裕谷。あだ名裕谷。ゲシユタルト谷崩壊。

そんな良い感じに貶められる男である。中肉中背、成績は下へ向かって真ん中から数えた方が早く、運動は真ん中から上へ向かって数えた方が早いくらい。本気で本当に普通な男。

これだけは負けない、というものはなく。何かが苦手だ、ということもない。

ゲームの主人公ってこんな感じではないだろうか？

都合の良い格好をつけた言い方をすればオールマイティで、皆の足も引つ張らずにそれなりに出来る。残念な話をすれば、僕裕谷は主人公のように特別な何かがないため、万年脇キャラなのだが。

こんな居ても居なくても変わらない僕の人生を変えるイベントはないだろうか。脇から一気にスポットライトを浴びる存在に変わる何かはないだろうか？

答えはあるわけない。

そう思っていた裕谷の人生は5分前に終わった。

「あれ？ えと、藤……………どっちかな？ ごめんなさい！ 悪気があって忘れたわけじゃないの、友達がね、よく藤宮君の話をしてるんだけど、君と彼がどっちがどっちか分からないんだ。気を悪く……………するよね、当たり前だよねごめんなさい……………」

言葉の大津波。のまれて何も言えなくなりそうだったが、ぺこぺこ
と頭を何度も下げて、その小さな頭が取れてしまっんじゃないか、
という心配をしながら裕谷はなんとか切り返す。

「ああ、宗の事ですね。でも、僕よりはあいつ目立つでしょ？ 目
立たないほうが藤本、目立つのが藤宮って覚えて下さい」

言って悲しくなるが事実。

裕谷には昔からの付き合いで、色気のない幼馴染みの藤宮宗二とい
う親友がいる。体を鍛えるだけが趣味のような男で、夢はアマゾン
の奥地で不老不死の薬を見付ける事、なんてほざく馬鹿だ。正真正
銘の。

「うーん、たしかに彼は目立つけど。私は藤本君も中々に特徴ある
と思うよ。あつ、さっきまで忘れた私が言うことじゃないかな」

彼女は笑うと凄く可愛い。素直にそんな感想しか出て来ない。

放課後の図書室、二人きりの図書室で憧れて憧れてやまない女性と
二人きり、大事な事だから三度言う二人きり。そんなイベントは、
この目立たない僕には奇跡で、一発人生大逆転のイベントだ。

「——君？」

「あつ、ごめんなさい、ついボーツとしちゃって」

何と言う失態だ。こんなに幸せなイベントなのに話を聞いてないな
んで、彼女は退屈してないだろうか。いや、「もうこんな目立たな

いカスの相手やだなあ、早く帰ってくんないかな？」とか思われてないだろうか？不安で潰れてしまいそうだ。

「ふふつ、藤本君って意外に面白いんだね。同じクラスなのにあんまり話した事ないんだもん。ねえ、私と友達になってくれないかな？」

何と言う日だ。これは夢か、夢なら納得して、へこんで、また明日へ行こうとするんだが、この出された小さな手の平は本物だ。裕谷は深い感動に身を震わせていた。

この手を取っていいのだろうか？これを取れば、彼女の友人となり、今日から僕は脇キヤラ脱を果たすだろう。しかし、こんなに細くて綺麗な手に触っていいのだろうか？汚れないだろうか？アルコールで殺菌したり、煮沸消毒したり、行程を済ませずに触っていいのか？

「あつ、やっぱり、話した事もあるのにどっちか分からなくなるような失礼な私じゃ駄目だよな？ 本当にごめんね。友達になれなくても、もう二度と忘れないから大丈夫………って何が大丈夫なんだろう、あはは」

そう言っつて引つ込めようとした手を裕谷は素早く取った。細くて、冬だからか冷え切っている。気付いたら両手でその右手を挟んで温めようとしている変態行動を取る自分がいた。だが、この手を離す事が出来ない。

「あつ——」

振り払うような感じで手が引つ込められた。流石にやり過ぎた、と
またも死に切れないくらいの後悔をしている裕谷。

「あの！ 違うの！ 嫌だったとかじゃなくてね。その、急に両手だったから恥ずかしくて、思ったより男の人の手が遅しくて……だから、そのごめんね。こんな手で良かったら、いくらでも握っていいから」

裕谷の崩壊気味の精神は一周回って少し正常になってきたらしい。これ以上は反射的に変態行動することはなかった。

「その、僕もごめん。調子に乗りすぎた。だから、よろしく」

右手でその手を優しく握った。

「えへ、じゃあ友達だね」

そう言うてはにかんだ彼女は、今まで見てきたものの中で一番愛らしかった。

それが藤本裕谷と真中奈穂の大事な思い出の始まり。

真中奈穂、肩までかかる栗色の髪が特徴の女の子。皆は可愛い顔だと言うが、裕谷にとってそれは邪道。やっぱり女性髪は髪。

成績は上の方、運動神経も良い、故に先生からの信頼も厚く、気さくな性格は誰からも好かれいつも輪の中心、真逆である裕谷が惹かれるのは当然だった。

話す事もありえないのに、友達になれるだなんて、本当人生解らないものだな。

「んでよお前はいつまで付き纏うんだよ!？」

「えゝ、宗ちゃんが、私を恋人にしてくれるまでに決まってるんじゃない」

藤宮宗二、裕谷の幼馴染みであり親友、そして相棒のような間柄だ。またこの男馬鹿であり、

中学まで成績の良かったら裕谷と宗二はなんの因果か、学力の高い高校を受けて受かってしまい、今では馬鹿野郎達ということでセツトで少し浮いている。

また藤宮宗二の問題は言っていたらきりが無いが、一つだけ言わせてもらいたいのがその容姿である。体を鍛えるのだけが趣味のこの馬鹿野郎は、体つきが良くなり過ぎて、気付いたら柄の悪い方に絡まれている。ただ、ガタイが良いだけでは絡まれない、目元や、髪型、なんか全てがマイナスになってそういう方に絡まれるんだろう。

お利口さんだらけの学校だと、それが余計に目立ってしまう。それに付き合っ一緒に絡まれたりした日はもう泣きたくなくなるくらい最悪だ。

「んで！　いつまで僕の後ろでいちゃいちゃしてんのかな!？」

いい加減我慢の限界だった。

新倉早苗。宗二と新倉の親は、親だけに親友らしく、裕谷とは全く繋がりはなかったが、宗二と付き合っていれば嫌でも新倉の行動理念が分かる。分かりやすい行動理念、

「宗ちゃん大好きだよ。だから結婚しよう」

愛、解りやすく奥深い行動理念だ、と思う。色恋を理解してない裕谷が言えた事ではないので、そこに関しては全く突っ込みをいれる気はないのだが、なんで態態恋人のいない裕谷の後ろでいちゃつくのだろつかと問いたい。

「いや、俺はお前と遊びに行きたくてな」

「私はそれについていつてるだけ」

「僕は宗と遊んでる暇はない！ だからどっか行つて勝手にいちゃつけ！」

いや、なんで宗は本気で落ち込んだ顔をしてんだよ。お前の遊びつて、ただの筋トレじゃん。公園の木で懸垂したりするだけじゃん。インドア派の僕にそんな事出来るわけないだろ。

「じゃあ今回はダブルデートにしよう！」

何か変な電波を受信したらしい新倉は、意味不明な事を言い出した。そっちは二人としたって、裕谷は一人だ。脳内で彼女作って、それを相手にダブルデートしようってか。そりゃ変人とカップルの怪し

い三人組じゃないか、怪しいのは裕谷ただ一人なわけだが。

「またボーツと考え事かな？」

裕谷の体は弾かれたように飛び上がった。妄想の螺旋に入り込んでいて、戻って来たら目の前に女の子の顔があつたら誰でも驚くだろう。それが気になっている女性なら尚更だ。

「ま、ま真中ちゃん！？ いや、真中さん。どうしてここに？」

「ふふつ、本当に藤本君は面白いねえ。私、真中奈穂が藤本君のダブルデートのお相手です！ どうか？ 役不足？」

敬礼して、小首を傾げる真中さんは動物の赤ちゃんの三倍くらい愛らしい、愛くるしい。

「いや、いやいや、嫌味じゃないよね？ 役不足なのは僕の方でしょ？」

「じゃあ決まりだね。でも、これだけは言っておくけど君は私が見るにはとても素敵な人だよ」

なんだか、胸が少し軽くなった。

「それじゃあレッツゴー！」

新倉の掛け声と共に遊ぶ場所に困らないだろう駅前に向かう事にした。

「俺は筋トレしたかったんだが……………」

宗は最後までそんな文句を言っていたが、裕谷の足取りは軽くて仕方なかった。今日はきつと重力が大安売りなんだろう、月面を歩いている気分だった。

「はぁーっ、楽しかったぁ！」

新倉の一言が全てを語る。駅前に着した僕達はカラオケに行ったりと遊べる限り遊び尽くした。新倉は宗にピッタリくっついて、座る時には必ず隣を陣取る気合いの入りがかった。

僕はそのせいか、いや、その恩恵で真中さんの隣に常時座れた。最近つきが回ってきたのだろうか、絶好調だ。

真中さんも笑ってくれてるし、新倉のダブルデートとやら大成功だ。本当に気分が良い。

「——藤本君？」

「えっ？」

あれ？また耽ちまっていたのか？

「ごめんごめん、またやつちやったまいたい」

「もう。結構大事な事話してたのに」

頬を膨らますのも可愛いな。普通だったら、なにぶりっ子してんだよキモい、となりそうなのに彼女がやると可愛い、なんて不思議な事象だろうか。

「あれ？ 宗や新倉は？」

「帰りましたよ。誰かがどこかへ旅立つてる間にね」

「あれ？ それで真中さんはこっちの方なの？」

あれ？

三度目の「あれ？」。裕谷は今自分の位置を確認して、歩いている方向を考えると、家とは逆方向に歩いている事が分かった。そりゃそうだ。宗とは家は隣同士だし、たしか新倉も家は近い。

「もう。さなちゃん私が私を送ってあげたらって言ったら、藤本君が『ああ、そうだね』って言ったんじゃない」

今僕の真似したんだろうか。これでもかってくらい似てなかったぞ。でも愛らしいな。さなちゃんってのは新倉の事だよな。

そろそろまた変態的思考に入りそうだったので、頭を振ってなんとか頭を落ち着かせる。

日が暮れて、街灯の明かりを頼りに道に行く。何と言つか、情緒あ

るというか、ロマンチックというか、これはきたんじゃないか。

「だから名前！」

「名前？」

途中から聞いていたので思わずおうむ返ししてしまう。それで真中さんは更に頬を膨らました。

いけない、そろそろ真中さんの頬が破裂してしまう。

「なんで藤本君は私のさん付けで、さなちゃんと呼び捨てなのかな？ クラスの女の子でも大体呼び捨てじゃない。私だけだよね？
なんで？ 最近は結構仲良くなってきたと思ったのに」

また返す暇なく言葉の豪雨だ。

「じゃあ真中」

だいぶ気恥ずかしいが、とりあえず要望には応えておこう。

なのだが、真中さんの頬は萎まない。

「な・ま・え！」

「なまえ？」

何と無く彼女の意図は解る。解った。しかし、それは、流石に問題ある。

「奈、穂！」

確かに彼女の口から今一番聞きたくない言葉が聞こえてくるのは時間の問題だったが、それだけはマズイ。

女の子の名前を呼び捨てしたことなんて裕谷にはない、全くない。しかもそれが気になる女の子、有り得ないだろ。

そこで裕谷の中で二つの意見が生まれた。よくある表現をすると天使と悪魔が現れた。でもあれは実は天使と天使が現れるらしい。

少し脱線したが『気になる女の子が名前で呼んでくれって言うてんだろ？ これはチャンスだって！ このまま畳み掛けちまえ！』『気がなきや名前なんて呼んでと言わない。もう脇役人生には戻れないでしょ？ これを足掛かりにじっくり攻めましょう』

あれ？なんか二つ意見を合わせても今やることが一緒じゃないか。

「な、な、奈穂さん」

「えっ？ にゃ、にゃんだか恥ずかしいねえ。藤本君の事だからきつと断られると思ったのに」

「ちよつと、僕だけなんてずるいんじゃないかな？」

「なっ！？ 裕、君」

「っ！！！！」

凄いな。これは凄い！

名前どころか、ニックネームのように呼ばれてしまった。体中になにか良いものが流れていったような感覚、アルプスの雪解け水のよ
うな清涼感、もう最高だ！

奈穂さんなんて耳まで真っ赤だ。きっと僕もそうだろうな。でも、
嫌な感じは全くしない、結構良い気分だ。同じ気持ちを共有してる
ような、きっと共感してる。

「さ、さて！ 帰りましょうか！」

気付いたら立ち止まっていた裕谷達、どうやら熱中していたらしい。
奈穂さん恥ずかしさを紛らわすようにスタスタと先を行ってしまう。

裕谷はそれを慌てて追いかけた。

「うつそー……………でけー」

「そ、そうかな？ やっぱりそうだよな？ でも、でもでも私はあ
んまり好きじゃないんだよ。昔よくお嬢様、なんて周りからよく呼
ばれたけど、本当に嫌だったんだから。私は普通で普通なんだもん。
でも、お父さんもお母さんにも感謝してるから、そのえとあの」

とりあえず、奈穂さんが最後の方に自分何と言いたいのか解らなくなつて絡まつた事は解つた。後は早口過ぎて何を言つてるかよくわからなかつた。

「ふふふ、とりあえず落ち着いて下さいお嬢様」

態とらしく畏まつた態度を取る。

「あつ！ あーっ！ 裕君酷いよ！ 私、お嬢様じゃないもん」

そう言つてそつばを向いてしまふ奈穂さん。もう形容できない愛くるしさだ。

「さて、僕はもう行くよ。明日も学校あるし、補導されたくないしさ」

「あつ、うん、ごめんね。送ってもらつちゃって」

「気にしないで、僕は送れてよかったから」

そう言つて裕谷は歩き出す。

「また明日学校でねー！」

彼女はいつまでも大きく手を振っていた。

「ただいま……………」と」

さっきまでの明るいきろが嘘だったように静まり返った家に着いた。裕谷は特にやることもなく居間のソファ―に崩れ落ちた。

幸せだった。奈穂さんと一緒にいれること、奈穂さんの笑顔を思い出しても幸せだ。凄く胸が暖かい。

でも、この家の空虚さを奈穂さんで埋めてる自分が汚く思えた。

このまま、そう、このまま空虚にまみれ、暖かみを覚えた中で眠ってしまおう。

そんな日に僕は夢を見た。見てしまった。

最悪な夢だ、最低な夢だ。

朝起きたら、お母さんが料理とお弁当を作っている。お父さんは新聞を読んで朝食を待っている。僕は、朝食の催促をして、身支度を済ませる。

漫画なんかでよくある朝の風景、実際にだってあつてほしい風景、僕がもう二度と見ることはない風景。

そして僕は起きた。冷たい空気を肺が取り込んで無理矢理に頭が覚

醒していく。凄く嫌な気分だ。昨日の出来事を反芻してなんとか頭の中のドロドロを掻き出す。

シャワーを浴びて気を取り直す事にした。

「……………えへへ、来ちゃった」

僕は開けた家の扉を閉めた。

そして一拍もう一度開けた。

「ん？」

「どうしてここに？」

自分でも驚く程冷静だった。

「だから、来ちゃった」

「どうしてこの場所が？」

まだまだ冷静だ。クールに、スタイリッシュ（？）に。

「さなちゃんに聞いたのさ。藤宮君の家の隣だっというから二分の一に、後は表札を見て解答にたどり着いたわけだよ」

「は、はあ……………」

探偵っぽく気取って手振りまで付け加えてる奈穂さん。裕谷はげんなりするしかなかった。

「お、おはよう！」

「あ、宗か。おはよう、なんだか、走った後みたいだな」

宗を見ると慌てた様子で、肩で息をして、制服もいつもより着崩してる感じた。

それに宗はもつと登校は遅いはずだ。かく言う裕谷も宗と一緒に登校するのだが、今日はチャイムを鳴らされて大分早い。

「学校、行くんだろ？ 行こうぜ」

おお、宗が学校に行きたがっている！？明日は多分コロニーかなんかが落ちてくるなこりゃ。

「う、うん。じゃあ皆で行こうか」

奈穂さん何だか機嫌が悪そうだな。どうしたんだろうか？ああ、さては宗が苦手なんだな。たしかに見た目だけだとちょっとガラ悪めだし、やっぱりお嬢様にはきついよな。宗は良い奴だし、ここは上

手くフォローいれとかないな。

……駄目だ。語彙が足りない。とりあえず、後にでもなんとかしようかな。

「んじゃあ行こうか」

そして、あんまり仲良くななく三人で登校と相成った。

そんな事があつた日の放課後。

裕谷は寒さに身を縮こまらせながら学校からの帰り道のスーパーを目指していた。クリスマスも近いということで商店街は賑わって……別にクリスマス関係ないか、たしかにクリスマスの装飾はあるけど、商店街はいつもの賑わいだろう。クリスマス当日でもない限り変わるわけではないか。

道の端っこを人に当たらない様に進む裕谷、ごった返す程人がいるわけじゃないが、また悪い癖でボーッとしかねない。故の端っこ歩きだ。

「きやつー！」

気をつけてるのにやってしまった。

「あつ、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

慌てて手を出す裕谷。また考え事をして横から出てくる人に気づかなかっただけらしい。

と、言うより、慌てても女の子に手を出せるようになった自分に驚きだ。

いや、違う。女の子に裕谷が手を差し出せるわけがないんだ。目の前で尻餅をついてる女の子が綺麗すぎるからだ。

人形。それが第一印象。長い黒髪、整った顔立ち、本当に整ってる、整い過ぎてるから人形だ。その人形が制服に包まれている。真っ黒なコートを着てるためにあまり制服度は高くないが。

「あら、私も注意不足だったから貴方が謝る必要はないわ」

第二印象というべきか、少し乱れた長髪の黒髪を直し裕谷の手を取って立ち上がった彼女。人形に血が通い、表情を作った時ここまで言葉にならなくなるのだろうか、息ができなくなるのだろうか、目が離せなくなるのだろうか。

「あら？ どうしたの？ 変なところ打った？」

冷たい細い指が裕谷の頬に触れている。覗き込むような仕種が美しい、美し過ぎる。

「あ、あの！ だい、大丈夫ですから！」

逃げた。走って逃げ出した。きっとキャパを超えたんだ。もう限界だったんだ。

その後に裕谷はスーパーに寄って何を作るのか自分でもよく解らない適当な材料を買って、足早に店を出たが。

「二度目は流石に運命かしら？」

またぶつかった、そしてまた手を差し出している。

「ごめんなさい……………」

「うふふ、悪いと思うならそこで紅茶でもご馳走になろうかしら？
少し待ち合わせまで時間があって退屈してるの、どう？」

「アイスティー、なんですね」

「あら、そんなに可笑しいかしら？ 私、熱いの嫌いな、だから
大体アイスよ」

そんな言葉を発した小さな唇はストローを含んで、小さな喉が揺れ

た。

煽情的、でも涼しげで冷ややかで静かなイメージを受ける。きっと彼女がアイステイーを飲んでる姿を見ただけで芸術家は絵を描けて、音楽を作り、小説家はお話を一つ書けるくらいのインスピレーションを手に入れるだろう。

煽情的といえば、彼女の異様に発達した胸部に注目が行ってしまう。華奢な印象を受けるのに、そこだけが異質となっていた。店内に入りコートを脱いだ時に現れたそれは、裕谷が素直に対面するのを拒否しようかと思つた程だ。冬場の結構着込む制服の下でもこれだけ自己主張激しいとは――

話を戻す。なんと言っても戻す。スーパー最寄りのあまり大きな喫茶店の中が僕の現在地。時間帯からか周りに客は少ない、しかし、この子が先陣をきつて店内に入った時店員含め男性の視線は一点に集まつた。そんな彼女と一緒に座る謎の優越感に浸りながら、ホットコーヒーを啜る僕。

「なにか？ あんまりジロジロ見ないでくれる？ 私、そんなにかしいかしら？」

「いえいえ、その、かなりあなたが綺麗だから、つい」

擬音を出すと、ボンツ、人形さんの顔が真っ赤に染まつた。

まさかと思うが照れてるのか、こんな容姿を持つてるんだから絶対にこんな言葉聞き飽きてるだろう。

「あ、あまりそういうのは軽々しく口にするものではないわ。言葉が軽くなってしまうもの」

「そうですか、でもやっぱり言うべき時は言わないと」

「それが今だったってわけ？」

「いえ、今は、結構自然に。意識しなくても意識してしまう程にあなたが綺麗だなんて僕は思ったんだと思います」

あれ？どうして僕はこんなに饒舌なんだ。やっぱり彼女が綺麗過ぎるからか、だからこんなに女の子と意識しないのか。

「意外にナンパ男なのね。もう少し穏やかな男性だと思ったのに」
そう言つてそっぽを向く彼女。

「いや、ナンパなんて一度もしたことありませんよ。女の子と二人で喫茶店なんて初めてだし」

「私も初めて、ついでに男性をナンパしたのも初めて」
頬を染めながら彼女は喋る。そんな彼女への印象のベクトルが少し変わる。

綺麗から可愛いへ。

優雅な仕種が、よく目を凝らして見ると可憐さが見つかる。少しずつ印象が変わる。きっと彼女も僕の印象を見直しながら、距離を考えているのだろう。

「それで、なんでお茶に僕を誘うんですか？」

「あら、さつきも言ったわ。待ち合わせまでの時間潰しよ。後は貴方に良い印象を受けたから、二回もぶつかる運命もね」

彼女は態とらしく微笑を浮かべた。態とらしく、さつきから気付いた事だ。見方を変えてから気付いた。

「そうですか」

「ええ、後敬語は良いわ。貴方とは同じ年みたいだしね、留年してなきゃ」

「えっ？　なんで歳が解ったみたいな言い方を？」

彼女はトントンと人差し指で首を叩く。

首？

学ランの襟しかないのだが。ああ！それが！

「よく知ってたし……………知ってたね。でも飛び級した可能性とかは……………？」

「あら、結構つまらない冗談を言うのね」

我が学校は学ランの襟に長方形のプレートがついてるのだが。色分けがされていて、数は三色、三学年がローションで使っていて、二年の裕谷は赤である。

「その制服どっかで見たことある気がするんだよね……………どこだ

ろっ?」

「隣の駅の山奥の学校よ。別に気にしなくていいわ」

隣の駅、山奥、キーワード二つで一件が、裕谷検索エンジンに引っ掛かった。

「って！ あのお嬢様学校！？ 駅からバスで終点までの」

「そうよ。普通は寮に住むような学校。私はそんな監禁みたいなのが嫌だから自宅通学だけ」

名前は出て来ないけど由緒がありまくる名門女子校の筈だ。政界やら色んな方面に優秀な人材を出すという話の。

「じゃあ君も結構凄い人？」

「あら、良い学校で皆が皆凄いわけじゃないわ。貴方だってそれに学力のある学校でしょ？ まあ、人の良し悪しは勉強が出来る出来ない、運動が出来る出来ないじゃないもの。私は貴方結構いい人だと思ってるわ、私の男性を見る目はたしかなのよ。男性経験ないけど」

なんじゃそりゃ――

「あら、もうこんな時間。そろそろ行くわ」

右腕についている小さな腕時計を確認して、彼女は上着を着て、身支度を整えだした。

「そっか。退屈は潰せた？」

「ぼちぼちね」

「こりゃ手厳しいな」

「それじゃあ行くわ」

「うん」

「また、ね」

彼女が立つて、彼女の綺麗な黒髪が接近してくるのまでは知覚した。そして最後に裕谷が見たのは彼女の丰满な胸部、そして、額に残る柔らかな感触だった。

彼女は跳ねるように店内を後にした。残された裕谷は呆然と額を押さえた。

裕谷は額を押さえながら歩く。家までの帰り道を歩く。

額に残る彼女の感触、彼女の髪から香った匂い、彼女が僕を征服していた。

って！僕は何を考えてるんだよ！？僕には憧れの真中奈穂さんがいるんだぞ。最近モテ期だからって調子に乗りすぎだ、一兎を追う者は一兎をも得ず、だ！

「——く、ん？」

「えっ？　うわぁっ！」

「どうして……そんなに驚くの？」

あれ？なんだこの違和感？

また思考の螺旋に吞まれているところに奈穂さんに声をかけられた。またやらかしたらしい。

でも、なんだろうか。違和感がある。奈穂さんの口調がいつもと違う、なんだか責められてるような感じた。どうしてだろうか。

「どうして……どうして？」

「奈穂さんこそどうしてここに？　奈穂さんの家って反対側だよね？」

周りを見渡すともう夜の帳はおりている。

場所は裕谷の家の近くだ。こんな時間にこんな場所にいたら家に着く頃には結構経ってしまう。

「ねえ！　なんでよ！？」

奈穂さんが掴みかかってきた。右手が襟を掴んで少し呼吸がしにくい、左手は胸を掴んで少し痛い。

「なんで？　なんでなんでなんでなんでなんで」

泣いている？

奈穂さんが泣いている。

「あの、奈穂さん？　落ち着いてよ」

「私、私は……………嫌……………嫌だよ……………取らないでよ……………」

僕の胸に顔を埋めた奈穂さんはずっと何かを呟いている。僕にはそれがよく聞き取れなかった。そんな時、彼女の涙に呼応したように雨が降り出したんだ。その時の僕はどうしたら良いのか解らないから、彼女の手を取って走り出したんだ。

おまけ後編

僕は一体何をしでかしてんだろうか。今から土下座とかしたら許してくれるだろうか？いや、一体誰に土下座すればいいんだよ。いやいやいや、誰が許してくれるんだ！？

先程から、見えない妖精と会話しながら見えない誰かに怯えつつ、裕谷は居間と台所を無駄に行ったり来たりしていた。今、裕谷が望むのはどんな手法でも良いからそれを用いて気絶したかった。

まさか、この家に女の子を連れ込み、しかもその女の子が憧れの女の子で、更にその女の子がこの家のお風呂に入っているというのだから裕谷が正常でいられるわけがない。

ああ〜っ、うう〜、本気で本当にどうすりゃ良いんだよ！？どうしてこうなるかなあ……………

今、一匹の雄が理性やら本能やら、外聞やらと戦って……………つて危ない！多勢に無勢だ、このままでは僕は人間ではなくなる！よし、えーと、こんな時は……………腹筋だ！腹筋しよう！

テンパった裕谷は体を動かす事によって何とか悪い考えを潰そうと画策、腹筋を始めた。

腹筋が30回を数えたところで、突如電気が消えた。

「停電！？雷も鳴ってるし、落ちちまったか……………ブレーカー……………ブレーカー……………」

いつも生活している我が家だ。真っ暗になっても何となくで歩ける。このドアを出て、後は廊下を真っ直ぐ行ったら玄関にブレーカーがある。ブレーカーなんて一人暮らしじゃ使い過ぎる事もないから、あんまり位置に自信はないが、近付けば何と無くで分かるだろう、分かるはずだ。

だが、裕谷はドアを越える事なく躓いた。

「え？」

何かにぶつかった。

そして『それ』をそのまま押し倒した。

自分の触覚がカンジテイルノは柔らかく、紛れも無い人間の感触。

裕谷は『それ』が何か理解し、慌てて立ち上がろうとするが、立つために突っ張った腕を『それ』に掴まれて立ち上がる事に失敗した。

それでは終わらず、その腕を引っ張られた。暗闇で、しかも『それ』を押し倒してあまり触れないようにしてる裕谷にはその力に抗いようがなかった。簡単に裕谷は膝や、手を滑らせて『それ』の上に体を投げ出すような形になってしまった。

「うわ、流石に重いねえ。男の子だ」

ちょうど耳元で言われた。

裕谷は直ぐさま、もう一度立ち上がろうとする。が、背中に腕を回されてしまった。

「ねえ、私は、君の事、裕君の事を愛してるよ」

妙に区切って聞こえてくる言葉。

ああ、こうやって喋ったり抑揚をつけたりすると人間は無意識に聴き入ってしまうらしいが本当だ。五感で一番強い視覚をほとんど無くした状態の裕谷、その残った少しの視覚も彼女に奪われている。事実、結果、裕谷の五感のほぼ全てを彼女に掌握されていた。

触覚は言わずもがな、意識とは裏腹に彼女の体温を感じようと強くなっている。

嗅覚は、お風呂上がりの彼女の香りを無意識に取り込もうとしている。

聴覚は、彼女の声、彼女の吐息まで聞いている。

視覚は……………あれ？どうして彼女が照らされている？

光源がある。首を何とか動かす。油が全く足りない機械のように首がゆっくりと動く。

「ああ」

とりあえず声を出してみた。

懐中電灯。

それが裕谷を、裕谷達を照らしてる。

「見ちゃだめ」

気付けば、停電で心配したからだろう宗がいた。ついでに新倉も、そしてその新倉さんが、宗の目に手を当てて見えないように………
…いや、見えた。あれは減り込んでる。だから宗がギャーギャー喚いてるんだ。

ようやく感覚に自由が戻ってきた。

「見て良いんだよ」

「え？」

声がした方を振り向いたら、

世界が停止した。

一瞬の出来事が永遠になった。

死が目の前にきた時の走馬灯は、集中力が異様に異常に高まるからと聞いた。なら裕谷の集中力は死を超えている。何よりも生きる力は強いという事か。

今まさに、唇に感じている感触が裕谷の全てだった、全てになっていた。

「おしまい、えへへ」

永遠の終止符はこれだった。

「とりあえず、服を着て欲しいかな」

また一周、いや、七周くらいしたのだろうか、逆に裕谷は冷静な言葉を出した。

「えっちな。着てるじゃない」

「タオルだけを服とは言わない」

「服がないんだ……………えへへ、裕君も早くお風呂入りなよ、だ
いぶちべたいへくちゅっ！」

うわあ、こんな可愛いくしゃみ、有史以来あったのだろうか？否、
絶対ない、断言してやる。

「というわけでごめんなさい」

奈穂さんがぺこりと頭を下げた。裕谷が今日会った、今パツと思い付いた彼女の特徴が胸の大きい子……………なんか最低な覚え方だったが、彼女との関係をしつこく奈穂さんに聞かれて、怪訝な表情をされながらなんとか分かって貰えた、そしてこの奈穂さんの謝罪。

はて？さっき奈穂さんに何かすんごく重要な事を言われた気がする……………ああ！

「そうだ奈穂さん！？ さっきの……………さっきのアレは……………？」

「アレ？ なんのことかなあ？」

奈穂さんが見た事のない悪戯っぽい笑い方をする。

やっぱり気のせいかな。僕の妄想が加速しただけかもしれないし。

そこで新倉が手をパンと叩いた。

「まあまあ、藤本君が奈穂を押し倒すような度胸があったって事でよしと——」

「しねえよ！ 押し倒してるように見えただろうが、押し倒されたようなもんだったぞあれは！」

そうだ、僕は加害者じゃない、被害者だ。

「でも、利益は得たでしょ？」

利益。その言葉で頭の中に先ほどの奈穂さんの姿が浮かび上がる。

「参りました」

新倉の癖に、新倉なのにまともな理論できやがって。さっきから何故か知らんが宗がふて腐れてるし、なんでだろうか？

というわけで、気付けば裕谷の家に四人集まっている。奈穂さんには裕谷のパジャマを着て貰っていた。だばだばがな。

「さて！ 皆集まったし今夜はパーティーだあ！」

「おー！」

騒ぐ新倉、それに乗る奈穂さん。今日のこの家は大分騒がしい事になりそうだった。

「なあ、起きてるか？」

居間のソファアの上でそう投げかけられた。宗に。ギャグっぽい。

パーティーという名の馬鹿騒ぎは深夜にまで及び、女子二人をいろんな面で心配だが、掃除がしっかり行き届いている部屋が裕谷の部屋にしかなかったため、裕谷の部屋で寝てもらっている。本当、色々心配だ。

「まだ起きてるぞ」

そして男二人は、裕谷はソファア、宗は布団を敷いて、居間で二人で寝ているわけだ。なんとか客用の布団が三組あってよかった。流石に女子に裕谷がいつも使ってる布団で寝てもらうわけにはいけない。

宗は、別に帰ってくればよかったのだが、何故か居たがるので仕方ないから客用の布団を出してやった。

自分用の布団が余ってるのに何故裕谷がソファアに寝てるかといえはただの趣味だ。

「あの、な。俺さ、俺は」

腹立つくらいに宗の齒切れが悪い。

「なんだよ？ なにか言いづらい事か？」

「俺は真中さんが好きなんだ」

え。

宗が、宗が奈穂さんを？宗が……………あの宗が……………

「に、新倉はどうすんだよ！？」

裕谷はたまらず半身を起こして、宗を見下ろすようにそつちを向いた。

「あいつは、好いてくれるのは嬉しいが、やっぱり真中さんが好きなんだ」

宗は真つ直ぐな男だ。強くて、一本通った男だ。

裕谷はどうかしていた。裕谷はその時おかしかった。親友の宗の事を奈穂さんへのこの想いより強く考えてしまった。

「そつか、お前は良い男だもんな。あんまり理解されないが、その、頑張れよ」

——なに言ってるんだよ。僕は、僕は、奈穂さんの事を。

好きなのか？

本気で好きなのか？愛せるのか？

もし、彼女が自分を好きになっても釣り合っのか？守っていただけるのか？

「……………おっ」

宗が小さく答えた。それが今夜の最後の会話だったが、裕谷の頭の中はごちゃごちゃで結局寝られなかった。

頭が重い、体が重い、自分の手足を客観的に見ている気がする。

寝られなかった憂さ晴らしに朝食を全員分、少し手間をかけて作っている。インスタントに始まり、インスタントに終わる裕谷の食事が、今日は味噌汁までしっかり作っている。豆腐まで入っている始末だ。

薬味は葱、油揚げまで入れてしまったぜ。

……………やべ、味噌汁しか作ってねえや。あら？ご飯もスイッチ入れ忘れてら。

火を止めて洗面所に行く。顔を洗う事にした。少しは目を覚まさない、人間として、頭も体も使い物にならない。

「僕は大丈夫。僕は、なにしてんのかな？」

顔をいくら洗ってもこの頭の中に蔓延るモヤモヤまでは追い出せなかった。

台所に行くために居間を通ると珍しい、宗がまだ寝ている。いくら日曜といっても宗の起床はいつも朝六時ジャスト、それから筋トレを始めるのに、今はもう六時を十五分も回っている。

昨日の宗の言葉が頭の中で再生された。

頭を振って逃げ出すように台所に移動する。今度こそ朝御飯を作らねば、もう簡単でいいよな。

それから朝食を済ませて……………なにしたっけかな。なんにも覚えてない。

頭の中を回るのは宗と奈穂さんの事。

藤宮宗二、幼馴染みであり、兄弟にして相棒、裕谷とはいつもワンセットであり、裕谷が誰よりも素晴らしい男だと思う人物。そう、自分なんかよりも。

真中奈穂さん、裕谷がずっと憧れを秘めていた少女。ただ眺めていただけの存在が今は手が届く距離にいる。それは幸せな事だ。それだけで幸せなんだ。

何度も言い聞かせた。自分に、この思いに、恋慕ってやつに言い聞かせたんだ。

でも、駄目なんだ。

最初は憧れだった。でも近くで見て、勝手に膨らませていた彼女の像は現実の等身大に打ちのめされた。だけど全然良い気分だった。心地好くて、飛び回ってはしゃぎたいくらい嬉しかった。彼女を知れた事、憧れの女性じゃなくて自分と同じ大きさの彼女を知れた事、これがどんなに期待させたか、これから彼女と歩める道を妄想してしまっただくらいだ。

だからこそ、もう一度憧れに戻すべきなんじゃないか？宗は最高に格好いい男だ。裕谷じゃ比べものにならない、なにも誇れるものがない、なんと情けない事か。だからこそ、奈穂さんは諦めるべきなんだ。

それからどれくらい経ったか、もうクリスマスは三日前、今日で学校も冬休みに入る。成績の悪い裕谷は先生から点数にプラスして、なんとか進級できるかもよ、と言われた課題を山ほど抱えて教室を

出た。

靴を履きかえ、校門の前で声をかけられた。

「裕君」

声の主が分かっただけに振り返りたくなかった。

重い体を無理矢理後ろを向かせる。

見えたのは、宗と奈穂さん。それを見て裕谷の心臓が跳ねた。嫌な気持ちの中心から外側へ広がっていくのが分かる。

「なに？」

意識せずに少しづつきらばうになってしまつ。ここ数日はずっとそうだ。奈穂さんと上手く話せない。話そうとすると頭に宗の顔が浮かぶ。そうすると思った言葉は出ず、自然体もとれず、荒い対応しか出来ない。

「あ、あの、さ」

奈穂さんもそんな裕谷に遠慮がちになっている。

胸が痛む。痛む胸に、これでいい、と言い訳を押し付け、それを誤魔化す。

「これから藤宮君とお出かけするんだ。さなちゃんはどうしてもお家に帰らなきゃいけないみたいでねそれ——」

「僕も忙しいから！」

逃げた。

両手が課題で塞がってる驚く程不格好だった裕谷は逃げた。走って、走って、振り切って逃げた。

これでいい。

これでいいんだよ！

これが起因だった。この起因ってのは偶々で偶然で態とじゃないんだ。

だからクリスマスイブに裕谷の家の前で土下座している宗を許してやろうと思った。だけど、裕谷の心は裕谷が思うより何倍も狭くて小さかったらしい。

「ふざけんなよ！ 分かってんのか！？ ごめんなさいじゃすまねえよ！ お前……………」

土下座していた宗は身を立たせた。

「すまない。まさかアイツ等が真中さんに手を出すなんて」

そう、そうなんだ。流石に有り得ないだろ、と思うくらい古風な話だが、二日前の奈穂さんと宗のお出かけを宗がちょっと前にケンカした連中が見ていたらしい、その結果は古風にわかりやすくさらわれた。そのケンカというのも、公園にたむろしていた連中に宗が迷惑だから、と注意し、宗がそれを撃退してしまったせいからなる。

なんと安直で馬鹿馬鹿しい！

沸騰していく頭は抑えられない。そんな事で人を誘拐？犯罪じゃないか、悪いことをしたらどうなるかなんて小学生でも分かるというに。

だが、問題はコイツの土下座の内容だ。

「だから、助け出すのを手伝ってくれ！」

「ふざけんなよ、なんでそうなるんだよ。そんなこと警察に任せるべきだ。何度も言ってるだろ、僕らガキがしゃしゃり出てったところで、どうせ良い結果なんて得られるわけないだろ！？」

焦りか、怒りか、苛立ちか、語気が自然と荒くなる。

ヒロイズムは結構だが、そんな漫画みたいに上手くいくわけない。相手は何人いるかわからないのに、こっちは二人きりだ。そして裕谷は弱い。もう目も当てられない程に弱い。頭も弱けりゃケンカも弱い、が自慢の裕谷にはどうしようもない。

「真中さんの事を知らせにきた奴らの仲間、おかしかったんだ」

「そりゃおかしいよ！ 人攫いして正気でいるやつなんているかよ」

「違う！ 落ち着け！ おかしかったんだよ。殴っても殴ってもヘラヘラ笑って、あれは……………」

その宗の沈黙が裕谷の脳に冷たい液体を流した。頭が冴えるとはこういうことか、妄想が空想が想像が一気に膨れ上がる。

「そ、そんな、もしそうなら尚更——」

「警察を呼べばどうなるか分からんだろ！」

宗の強い言葉に裕谷はたじろぐ。想像してしまったんだ、奈穂さんの事を。

「だけどさ、警察の方が俺達より絶対に上手くやつてくれるって」

どんどん気が小さくなり、怒りの炎は弱くなる。弱い心が裕谷の体を蛇のように締め上げる。一度覚えた恐怖。目の前に恐怖の対象なんかないのに自分の想像する恐怖に裕谷は押し潰されそうだった。

「そうかもな」

「だろ？ そうだろ？」

自分が情けなかった。惨めだった。宗が賛同してくれそうなのがこんなにも嬉しいなんて、

「お前には頼まない」

宗は踵を返した。

「え？」

アイツどこへむかうんだ？奈穂さんのところか？馬鹿じゃないのか？僕は場所を聞いてないぞ？通報出来ないじゃないか！

走り出した宗を必死で追い掛けた。

「待てよ宗！」

宗に追い付いたのは公園だった。商店街の裏通りにある公園。商店街の通りと平行してのびる公園だ。

公園と言っても並木道に近いが、点々と遊具が置いてあるからなんとか公園としての体裁を保っている。

日が落ちるのが早くなった夕方、もう夜の帳がおり始めている。放課後に奈穂さんは誘拐されたとして……………焦燥感が心を焼いている。

「なんだ？ やってくれる気になったのか？」

「だから！ 二人でどうすんだよ！？」

言い切った瞬間裕谷の視界が回った。抗いようのない衝撃に尻餅をつき、後から左頬の痛みを感じた。

見上げる。目線の先には宗の握られた拳があつた。あれを頬に突き出された。

——殴られたんだ。宗は間違つた人しか殴らない。それが信条だと昔言っていた。

無性に腹が立つた。頬の熱に比例して裕谷の心の奥から熱が沸き上がってくる。立ち上がった。熱の力で立ち上がった。

「んだよ……………僕達が争ってどうすんだよ……………悪いのはお前と僕だろ！？」

「お前は悪くない。殴つたのもすまん。だから力を貸してくれ」

意味が解らない。解らない、理解出来ないから解らない。

今この馬鹿宗は言いたい事と、してほしい事をただ言い切っただけだ。なんて不遜な奴だよ。

「二人でどうしようってんだよ」

「俺が正面から入って囨になる。その隙に頼む」

簡素な物言いだ。

「囨って……………まさか殴られるつもりか？」

何と無く宗の考えている事が分かる。そのイカレた奴らが考えているのは、奈穂さんの前で宗を叩く事だ。だから、宗は敢えてやられ、隙を作ると言ってるのだ。

間違っている人間を殴るって信条、それを借りる事にした。

「……………ぐっ、何をする」

口調は全く動じてなさそうだが、裕谷が殴った事により起こった状況は裕谷と一緒にだ。裕谷は宗を見下ろしている。

「バツツカじゃねえの！？ 僕は、僕は嫌なんだよ！ お前が怪我すんのも、奈穂さんが傷付くのも！ 全部嫌なんだよ」

立ち上がるうとする宗の頭がちょうどいい点に達した時、思い切り蹴りをいれる。これでは宗はビクともしないのは分かっている裕谷は素早く蹴った足の膝を腹まで引き、足の裏を宗の顔面に叩き込む。

そのままマウント、と思えば宗に足を掴まれ腕一本で背中を地面に強打させられる。

宗は掴んだ足を放さず立ち上がると、もう一本足を掴み俺をジャイアントスイングして投げ飛ばした。

ゴロゴロ転がって、家に帰ってから着替えてなかった制服に砂をつけていく。

素早く立ち上がる。その時宗の延長線上、その先の道に黒い人形が見えた。

——そうだ。

胸が高揚する。凄く心地好い胸の高鳴り。

「悪いな宗。残念ながら僕には勝利の女神が冷たく見下ろしてくれてるんだ。だから、やっぱお前をここで寝かせて警察呼ぶなり、一人で助けるなりする」

「一人で助けると思うなら俺も連れてけ！」

宗の距離を詰めてのタックル。それを真つ直ぐ胸で受け止めて、左手は宗の髪を掴んで、右手は顎に打ち込んだ。

「君、なにやってんの?」

「なんだろうね？」

クリスマスイブに並木道を歩く二人。片方が頬を腫らして、制服を真っ白にしてなければどれ程格好がついたか。

そんな考えが頭を過ぎるが、駄目だ。

「やっぱ君は可愛いし、綺麗だね。本当、こんな軟派なセリフ、君にしか言えないよ」

「あら、本当に軟派ね。でも、貴方に言われると少し気分が良いわ。これ、私の素直な気持ちよ」

隣の黒い少女は答えた。そう、あの運命を感じる程ぶつかった、胸部異様発達の少女だ。

「それで、仲良く友情を確かめ合って、その友人をベンチに捨ててきた今日はどこへ向かうのかしら？」

「そりゃデートさ。町外れの情緒溢れるボーリング場に」

宗からやっこの思いで聞き出せたのは町外れの、外れ過ぎて潰れてしまったボーリング場だ。全く、たまり場ってそういうのって相場が決まってるんだろうか。

「どうしてさつきは友情を確かめ合っていたのかしら？　そしてその友人をベンチに捨ててきたのはなにかしら？」

黒い少女が見つめてくるのが分かる。裕谷は少女に視線は返さず前

を見て、

「別に、ちょっとアイツがムカついただけ。僕の好きな人を守れないで、偉そうにしてたからさ。僕もそんなアイツに好きな人を任せて自己嫌悪してる」

少女から直ぐに返事がない。一拍置いて、彼女からの返事。

「そう。ちょっと我が儘になろうとしてるのね？」

「うん、それでついでに格好つけようかって」

「そうね。そんな漫画みたいな展開実際にあつたら大体の女の子は惚れてしまうわ」

一歩、一歩と歩くほど心臓が高鳴っていく。同時に、傷付いた体から少しずつ痛みが引いていく。

「僕、君が好きだ。もちろん、女性として」

「私もよ」

自分は一体なにを言っているんだ、と勝手に体から出た言葉に異議を唱えようとすると彼女から驚く程速く返答がきた。

「貴方に会ってから今日まで毎日通ったのよ。貴方と会った場所、ぶつかった場所を毎日」

横を向けば頬を染めながら微笑んでいる女の子がいる。ドキドキした。このまま彼女を抱きしめてしまいたかった。

「でも、駄目みたいね。私と貴方は出会うのが遅かったみたい」

「うん、奈穂さんがいなければ君が運命の人だったのは絶対だよ」

「あら、私もよ。それじゃ、格好良くやってきなさいな」

トン、と背中を押された。枷が鎖が全てなくなっていく。さっきまでの弱虫は捨てて、宗には格好いいところなんてやらないと意地を張り、好きな人に好きと伝える勇氣を持つ。

本当、奈穂さんがいなければあの胸は僕のものだったのに。

軽口を自分の中でたたき、軽すぎる足で駆けていった。

アドレナリンが出まくっているのだろう。ドキドキに比例して体から痛みが引き、重さがなくなっていく。止まっちゃいけない、そのまま一気に駆け抜ける。

目的地、正面の入口、自動ドアだったんだろうが今はただのガラス戸と成り下がっている物を指をいれて無理矢理開く。

中に入れば受付、もう動いてないだろう自販機、壁の落書きがお出迎えだ。

その奥に行けばレールがある。そこに目的がいた。

「裕君！」

「奈穂さん、無事かな？」

思った他恐怖を感じない。

椅子に紐で縛られている奈穂さんを見ても、奈穂の肩を抱いて嫌らしそうに微笑むロン毛を見ても心が騒がない。

周りには見事に十二、三人。

「お前が藤宮か？」

「いや、藤本」

「ああ？ 藤宮に俺の仲間がやられたって言うから俺があっ！」

え？

時の流れが一瞬おかしくなった。速くなったり遅くなったりが分からないが、おかしくなった。

裕谷の後方から次々と鉄パイプが飛来してくる。最初に奈穂さんの横ロン毛の頭部辺りに接触し、二人、三人とイカレ野郎達の数が減

つていく。

「私としたことがクリスマスプレゼントを忘れてしまっただけ」

振り返れば運命の彼女、まさかあの別れからこんなすぐに会えるとは、ときめきを感じずにはいられない。

「裕君！」

振り返ったのがまずかった。声のした方を向けば鉄パイプを上段で思い切り振りかぶったスキンヘッドさん。奇声と共に振り下ろされた鉄パイプは思い切り床を叩いた。

裕谷は避けた。避けたには避けたが、顔が恐ろしく、物凄く、なまら凄く、てげ凄く、もう恐怖しか感じないくらい柔らかいものに包まれている。鼻腔に吸わずとも入ってくる匂いは素晴らしい。素晴らしいの一言。

「あら、油断は駄目よダーリン」

顔がなにに埋まってるのか分かった裕谷は非常に名残惜しいが、それから身を離し……………また飛び込みたい衝動に――

「裕君？」

三度目の奈穂さんからの呼び出しだが、今回は凄い。振り返らなくても背中に走る嫌な感覚で、奈穂さんの顔も気持ちも手に取るように分かる。

「はいこれ、商店街の福引きで！ 当たったの！ 箱から出して電

池は入ってるわ」

ハニーの胸から離れた裕谷がまず最初に見たのはスキンヘッドさんが倒れているの。そして、『福引きで』の辺りで一人倒れ『当たったの』辺りで文字通り額に飛来する鉄パイプをくらった一人が倒れた。

残りは気づけば五人。彼女も裕谷を助けるために接近したため、鉄パイプはもう持っていない。そして向こうは、仲間に当たった鉄パイプを拾って全員鉄パイプ装備。そして、裕谷の手元には――

「速く！ 変身しなさい！」

変身ベルト。

「……………」

これなら後ろに下がって瓦礫の山から鉄パイプとか拾ってきた方が……………

「ベルトを巻いてその両腰のボタンを同時に押すの！」

いや、違う。そんなことを聞いてるんじゃない。

変身ベルト、アレだ。マスク被った二輪車乗りが、怪人と戦う子供達に大人気の番組だ。裕谷だって幼少の頃は見ていた記憶がある。

「えとさ、あの、さ」

「速くしなさい！」

「はい！」

ついに睨みつけられ、もう自棄になった裕谷はベルトを腰に巻いた。なんだかよく分からない安心感を覚えた。

アレだ。ナイフやらバットやら『簡単に人を傷付けられる物』を手にすると人間は気が大きくなる。確かに武器を持てば人間はある程度強くなる。強くはなるが、素人が武器を持てば、プロに対した時逆にそれが不利になる、ということもあるらしいが。ちよつと話が脱線したが、今裕谷が腰に巻いてるベルトには安心感がある。武器なんてなりえはしないのに、これがあれば、と勇気に似た奮い立つ衝動すら起こる。

「変身！」

ヒーロー気取って女の子救いにきた裕谷には全く見えてはいない。相対するイカレ野郎達が、今の自分を見た冷静な時の裕谷がするだろう表情をしていることに。

だが、興奮状態の裕谷、なにも気付かず、感じず、ただ先程より軽く感じる体を前に出す。

向こうは鉄パイプ装備だ危ないぞ、と冷静な判断を下す頭に、だからどうした、と返して進む。黒い少女の横を通り抜け駆ける。

五人は固まっている。一人なんとかしたとしても残りに殺到されたら終わりだ。やっぱり冷静な判断を下す頭の意見を一蹴して、なんの考えもない体を走らせる。

「うおおおっ!!」

声が裏返る程大絶叫。気恥ずかしさなど微塵も感じず、むしろ体は、精神は高揚する。

呆気にとられてる一番前の一人に肉薄した裕谷、慌てて振り下ろされる鉄パイプを避け、隙だらけの顔に一発拳を見舞って、素早く相手の両肩を掴んで膝を叩き込む。

あまりに上手く行き過ぎて笑ってしまった。頬が緩んでだらし無い顔をしてるだらう裕谷が見たのは鉄パイプ。

視界がスパークする。白と黒の爆発が目の中で起こり、後から額に痛みがついてくる。床に倒れた、と気付いた裕谷、頭が瞬時に働き、これから殺到するであろう鉄パイプの痛みを想像し、体を動かそうとする。反応したのは指先がピクリと反応した程度。

ヤバイ、死ぬって、アウトな薬とかやってるかもしれない奴らなんだぞ。加減なんてしてくれるのかよ。

これからくる筈の痛みを、苦しみを想像して動けない裕谷、だが、いつまで経ってもその時がやってこない。

重い、感じた事ないくらい重い頭を持ち上げた。

「……………おい」

背中があつた。見覚えのある背中、所々白くなった男子制服、その男に四本の鉄パイプが張り付いている。

——ああ、代わりに殴られたのか。

冷めていった。早鐘のようになっていた心臓が途端にゆっくりになる。

冷めていった。ゆっくりと立ち上がり、ぼやける視界を正すために頭を振った。

冷めていった。次は宗が床に倒れた。

覚めきつた。目が、頭が冴え、冷めて覚めた。

「なにやってんだよ？ 相棒」

「言ったる、囃になってやるって相棒」

「そこは格好良く全員倒せよ相棒」

「悪いな相棒」

最後のぶつきらばうな感じは実に宗らしい、額から鼻を伝って流れてくる液体、それで視界が悪くなるのが嫌で、それを額から拭う。

結局流れてくる。

内心で舌打ちして、四人を見据える。

「はいダーリン！」

その声に振り返るとなにか飛来した。裕谷を呼んだって事は鉄パイプを投げ付けてきたわけじゃあるまい。身構えてしまいそうだった体を律し、片手で飛来物を受け取る。

.....

「それじゃ、次の運命でまた逢いましょ」

最高に綺麗な笑顔を残して黒い少女は立ち去っていく。

.....え？

裕谷に残ったのは、胸の小さな寂しさと手元の.....

「よっしゃこい！」

あっちは鉄パイプで四人、こっちは一人、しかも玩具の剣。恐らくベルトのセットの二輪車乗りの武器だろう。

さっきまでは頭に血が上りきってたから恥ずかしくなかったのだ。今は大分冷静だ。冷静になっちまった。めちゃくちゃ恥ずかしいし、自分が場違い過ぎて全部放り投げて、出来たら奈穂さんを連れて逃げ去りたい。ついでに宗も。

それに反応して奇声を上げながら四人が走ってくる。途中二人がコケた。寝ている宗の上を踏みながら歩いていった四人の中の二人が宗に足を掴まれたからだ。

でも、鉄パイプで武装した男二人が向かってくる。

冷静に、クールに、聞いた話では、ケンカはビビったら負けだ。筋肉が硬直して、いつもの半分の力も出せなくなるそうだ。だから、冷静に、見極めて、この玩具を……………あれ？この玩具の剣の装飾の一部が外れたぞ。

自然とベルトの小さな穴を見付けた。とりあえず、そこに差し込んでみた。

「おおー！」

突然ベルトが発光、なんか発音の良い英語がなにかを言い切り、言い切り、言い切り……………？

「ダメだどちくしょう！」

反転、裕谷は全力で駆け出した。

追ってくる二人、足場が悪い中転びそうになりながら走る。

———なんか良い方法を。

頭の中で漫画で得た知識や映画で見た情景が思い浮かぶ。全然上手くいく気はしないが、奈穂さんが———そう、奈穂さんがいるんだ。裕谷はクルリと反転、腰を落としてかなり体勢を低くして突撃する。狙うのは追ってくる勢いがなくならない内にこっちの力を上乘せること。

裕谷の右手は玩具を握ったまま一人の鳩尾を的確に打ち抜いた。

後一人、後は根性論だ。こっちは変身後、あっちは鉄パイプ。後は、根性が強い方が勝つ。

「よう、相棒」

「ああ、相棒」

あの後に腰に一発貫ってしまいズキズキ痛む腰に手を当てながら、寝ている二人の上に立つ宗の下へ戻った。

「裕君！」

最初に倒れていたロン毛が奈穂さんを押さえ込み、ナイフを首に当てていた。

「あはは、奈穂さんさっきから裕君しか言っていないよ」

ロン毛がなにかを喚びてる。まあ、こいつがどうなってもいいのか、みたいな常套句だろう。

「相棒、仕上げだ」

「こっちはボロボロなのに」

「はは、凄いな。一人で全部やっちまうとは」

「……………まあ、そういうことにしとく」

また何か喚いてる。やめろ、近付くな、とかそんなところかな。こっちは奈穂さんに近づいて行ってるし。

やっぱりイカレてた。ナイフを引いて、思い切り奈穂さんに突き立てようとしやがった。

「裕君!？」

「だから、僕の名前呼びすぎ……………やっと捕まえた」

咄嗟だった。もう無意識に裕谷は左腕を突き出し、ナイフと奈穂さんの間に割って入った。

鋭い痛みで腕が一杯になるが、残った右腕で奈穂さんを抱きしめた。

「っ!」

後は簡単だ。宗の拳が、蹴りが、何発も何発も打ち込まれていく。

「奈穂さん……………ごめん。格好つけすぎたかな？」

「うん……………うん……………格好、良すぎるよ」

「でしょ？ あの女の子格好良かったでしょ？」

一番の立役者を思い出して言ってみた。

「あのおっぱい大きい子が誰か後でよく聞くからね」

胸の中で泣いているが、奈穂さんの泣きながらもジト目が想像出来て笑ってしまう。

「僕の運命だった人さ。きっと、大好きになれた奈穂さんがいなきゃね」

「……………15点、低得点の告白だね」

「大好きだ。僕と結婚しよう」

「……………満点だよ……………」

こんな状況でどうかと思うが、僕達はそつと口づけをした。

「——と、言うことがあったんだよ藤谷」

「もう、奈穂は何回その話を物心ついてない子供に言うのかな。っ

て藤谷も嬉しそうだし」

「えっへへ、私と裕君の子供だからね。私の気持ちを汲み取ってくれるのさ」

「はいはい」

あれから早いもので六年が経った。私はお母さんになり、裕君はお父さん、さなちゃんと宗君は残念ながら進展なし、でもさなちゃんは諦めてないみたい。

「そういえば、おじさんとおばさん、やっぱり二人の事認めてくれないの？」

「あはは、まだ、ね」

裕君との結婚は、私の親族には全く祝福されなかった。

でも、裕君にも家族はいなかったけど、でも、さなちゃんや宗君の家族が皆が私達を祝福してくれた。

「でも、藤谷を連れて今度行くんだ。そしたら藤谷の可愛さにパパもママもメロメロだよ」

私の両親は私と裕君が高校を出てすぐに一緒になった事を怒ってるんだ。大学に行く約束を破って、強引に裕君の家に私が住んで、結婚生活を始めて。流石に最初は裕君の稼ぎだけじゃ生活出来なくて私もバイトしたりでなんとか生活を支え、今となってはそんな事を笑い話に出来るだけの生活力は身についた。

だからこそ、二人には私と裕君、それに藤谷を認めて貰いたい。

「ただいまぁー」

私の愛しい人が帰ってきた。

「……………うう、また宗君と一緒にだ。なんか奥さんよりも宗君と一緒にのほうが長いじゃん」

「いや、それは仕方ないでしょ。宗と僕の職場一緒だし」

「おつ、藤谷、元気だったか？」

「ってコラ宗！　なんで僕の息子と仲よさ気にしてんだよ。なんで僕より先に藤谷は宗に向かうんだ？」

「あれ？　藤谷、パパは隣だよ」

宗君の足にしがみついて裕君を不機嫌な顔で見る藤谷。そんな表情もとても可愛いけど、

「と、藤谷ぁ！　パパだよパパ！　ほら、ボール、あー、人形、なんでも遊ぼう！」

皆笑ってた。幸せだった。明日も明後日もこんな幸せが続いて、裕君と藤谷と家族で笑ったり、泣いたり、怒ってケンカしたり、でも、幸せな毎日がこれからもくるんだ。

ようやく、ようやくここまで。

高校を卒業して、親友であり相棒と同じ職場に入って、金を貯め、ついに俺はここまでの安定に辿り着いた。

最初はぶっつけ本番で、言葉も装備もなく未開のジャングルに踏み入り、死ぬかと思ったが。今では言葉の壁もなくなり、装備や仲間も充実していた。後は回数と地道に少しずつ進んで未開を切り開く。

なんて心が躍る仕事だろうか。

久々に親友や家族の顔が見たくて日本に帰る事にした。親父も大分前に死んじまって、元気がなくなるか、と思いきや、一人で力が衰えない母が一人家にいるが。あの力強さがなけりゃ俺は家族を放つてこんな馬鹿はやれなかった。

「おう、早苗か？」

『……………宗ちゃん？』

おかしい、なんだか早苗の声に全く覇気がない。

いつもなら煩いくらい自分の事と、俺の事を聞いてくる筈なのに。

でも、帰国一番に早苗にかけるとは……………やっぱり俺もどっかで早苗に安心を覚えてるんだろうな。

『……………藤本君と……………奈穂が……………』

「ん？ 二人がどうしたって？」

どうせこんな言い回しをしてドッキリだろう。第二子出産とかそんなところだろう。

男かな？女かな？

『死んじゃった』

「……………あ？」

……………今、早苗はなんて言った？

『交通事故……………で……………藤谷の誕生日に……………』

「……………藤谷は？」

俺の思考はもうおかしかった。いや、正しいのか。いや、もうわからない。

「藤谷はどうしたんだ！」

『藤谷は家で預かってる。奈穂の両親は引き取ってくれないし、藤本君には家族いないし……………なんで？ 宗ちゃんなんで藤谷しか気にしないの？』

「わかんねえよ！ でも、小さな子を、あいつなら息子は死んだって守ると思ったから！」

『藤谷の誕生日プレゼントを買いだつて……………驚かせるんだって二人は車で……………』

……………埒が明かない。

「早苗！ 藤谷は！？」

タクシーや自分の足やらで、自分でも驚く速さで空港から早苗の家までたどり着いた。

「宗ちゃん、ほら藤谷、挨拶しなよ」

藤谷を見てどこかホツとした。実はあの二人は生きていて、その陰から驚かせてくるんじゃないかと思ったがそんな事はなかった。

少し大きくなつた藤谷が一人積木で遊んでいる。早苗はそれに近づいて行って――

「返事しなさいよ！」

積木を蹴り飛ばし、あろうことか藤谷の肩を掴んで揺らした。強く、強く。

「なにやってんだよ早苗！」

夢中で早苗を突き飛ばし、藤谷を抱きしめた。

「馬鹿やってんじゃねえよ！ 藤谷をなんだと……………」

「なんでよ……………なんでよ……………私悪くないのに……………悪くないのに……………」

泣いている早苗を見て罪悪感が強く襲ってくる。藤谷も俺の胸で泣いている。

まだ間に合う。

藤谷は優しい心無くしてない。こうやって傷付き、傷付いた人を見たら泣けるんだ。

このままじゃ駄目だ。

ここにいれば早苗の両親だって面倒みてくれる。でもそんなんじゃ駄目だ。

「藤谷は俺が育てる。お前はもう藤谷に近付くな」

「な！ 私が、そうだよ。二人で育てよ。結婚して、藤谷のパパとママになるの！」

「駄目だ。お前は藤谷を見ちゃいない」

「そんな！」

「駄目だ！俺だけで育てる」

それから泣き崩れる早苗を置いて、早苗の両親に頭を下げられ、下げながら、早苗の家を後にした。もちろん、この小さな手は離さずだ。

自分だって生半可じゃないと思ってる。辛いと分かってる。まだ二人の墓もみてないのに、実感もないのに無茶苦茶してる。

でも、藤谷は必ず、必ず幸せにする。ならなきゃならない、しなきゃならないんだ。唯一の救いは、お袋は藤谷を連れ帰った俺を手放しで褒めた事だ。

十九話

寒い、風が冷たいむしろ痛いくらい、そんな寒い冬の帰り道。藤宮藤谷は一人歩いてた。

決して誤解しないで頂きたい。美々やアイ、それにヒナに見捨てられたから一人で歩いてるわけじゃない。

あの三人プラス倉科で買い物に行くそうだから、藤谷は寂しく帰路についてるんだ。仕方ないんだ。と、誰かに言い訳してみる。

なんか最近美々と二人きりの時間が取れてないな。うまく隙を見付けてなんとかしないと、愛想を尽かされてしまう。

「あら？」

別に美々の口癖を真似たわけではない。ぼーっと最近の出来事を頭の中で整理しながら歩いてたら、全く知らない町並みに変わっている。

町は不思議だ。いつも通る道を一本逸れただけで、町はその様相を変えてしまう。

格好をつけても迷子である事実は変わらない。

「あにゃ？ フジちゃん？」

意外な人物に出会った。

篠山蓮、藤谷のクラスメートで奇抜なネーミングセンスと天真爛漫が印象に強い少女、だけど今の彼女にはいつもと大きな違いがある。

「うーん、あんまりこの格好で会いたくなかったにやあ、にやはは」

そう言つて快活に笑う様はいつもの彼女なのだが、彼女の今大きな違いは、和服。そう、和服である。

和服一つで変わるものだ。いつも犬歯を出して笑つてゐる彼女に影が落ちたというか、太陽のようにはしゃいでゐる彼女が今は月のように静かに見える。本当に、和服一つで変わるものだ。

「どしたの？ フジちゃん黙つてさ」

「いや、和服いいなあって」

しまった。つい本音がそのまま出てしまった。

「にやはは、フジちゃん和服フェチだったんだ。みーみんな着て貰ったら？ きつと似合うよ私なんかより」

「ああ、美々のは是非とも見たいが、お前も似合つてゐる。というか、慣れてるつて感じが？」

「意外なところは鋭い、みーみんなの言つた通りだねフジちゃんはさ」
違つ、違つた。

彼女に影が見えたのは和服のせいで落ち着いた雰囲気を出してるからじゃない。実際になにかあつたんだ、表情が硬いじゃないか。

さて、なんて切り出せばいいんだ。あんまり直接聞くと嫌がられてしまうかもしれない。

「フジちゃん、あんまり私に踏み込まないで。そういうのはいらない」

完全な拒絶。壁で遮られて彼女が完全に見えなくなるような拒絶。

さっきまでの、いつもの彼女の笑いはどこにいった？太陽みたいに快活に笑う彼女はどこいった？

「俺は――」

「藤宮君！」

いつもと違う呼び方だから、理由はわからないけれど、藤谷は口を開けなくなっていた。

「今日の事は忘れてください。私、この後少し忙しいのです。申し訳ありません……………」

それだけ言っただけで彼女はそそくさと立ち去ってしまった。

藤谷はただ立ち尽くした。

「……………ふうん」

素っ気ない返事がきた。

あれから家になんとかたどり着いて、母さんが作ってくれた食事を取って自室に戻ってきた。アイとヒナは新しく与えられた二人兼用の部屋に戻り、美々は今日の前で藤谷を半眼で睨んでいる。

睨んでいる理由は言うまでもなく、今日あった出来事を言った事による反応だ。女子であり、篠山の友達の美々ならなにか知ってるかと思っただけ聞いてみたが結果はこれだ。

「意外に気になるんだ。あいつ、なんか抱えてんじゃないかって」

本心から心配して言うと言計に美々の機嫌が悪くなった。

それでもやっぱり彼女のあの目、あの表情、あの言葉が気になる。困り事があるなら助けてやりたい、彼女と倉科は孤立していた美々に真っ先に手を差し延べてくれた。借りを返す、というとおかしいから、単純に友達であり、世話になったからお礼がしたい。

「はあ……………本当に藤谷は趣味人助けね。損得を勘定出来ないんだもんね、そんなところ好きになった私の負けだけど」

溜息を吐いて美々は自己完結するために頭の中を整理しているよう

だった。

藤谷は静かに美々の言葉を待った。

「最近二人の時間少ないから週末はデート、それが条件」

「了解した」

「明日倉科さんと時間をつくるわ。彼女が篠山さんと一番仲が良いから」

「仲が良いみたい」とかじゃなくて言い切るのが美々の格好良い所だ。

「ああ、分かった」

「本当に私は貴方が好きなんだな」

それだけ言って美々が擦り寄ってきた。

「うーん、賛成しかねるかな」

藤谷にとっては辛辣な言葉、その言葉より言った人間が重要だ。倉科遥子、藤谷達のクラスメイトにして、藤谷が考えるに篠山と一番仲が良い人間。その彼女に反対意見を出されてしまうと少々手詰ま

り感がある。

「だって、あの子は家にちょっと事情があるし、私も少し理由があってこの間彼女を怒ったんだけど、返ってきたのは『あまり家の事には口を出さないでくれるかな。大事な友達に報告したかっただけだから』って」

更に悩む。

その倉科を怒らせた理由というのが一番引つ掛かるが、彼女が伏せたということは聞いてはいけないことだろう。

「藤宮君はどうして蓮の事を気にするの？」

「ちょっと気になったんだあいつの目が」

倉科に加えて美々も怪訝な表情をする。

「本当に美々は苦労しそうね。今もこれからも」

「あら、それは承知の上よ」

美々と倉科は顔を見合わせて嫌らしく笑いあった。藤谷は全く二人の笑いが何を意味するか解らない。

「……………ふう、ちょっと急ぎでね私帰るから。それと、蓮の事本気で心配なら、踏み込んであげて。それも覚悟して、ね」

そう言って倉科は放課後の教室から去って行った。

藤谷は何の気無しに窓の外を見た。

『ハハハッ、どうした？ 友達がいないらしいじゃねえか？』

回想の中で品のない笑い方をする父親が俺の隣にドカッと腰掛けた。あの頃はまだ父親に遠慮していたし、心を開けてもいなかった。ようやく父親との距離を埋めて、『親父』と呼べるようになったのも最近だし、美々のお陰だ。

あの時も夕方だった。藤宮藤谷を今の姿に変えた言葉を受けたのは夕方、まだ小学校に上がって間もない頃だ。

『友達なんていない……………』

あの頃の事はよく覚えていないが、友達はいらないと本心から思っていたわけない、それだけは覚えている。

『そうか、俺も今はいらねえや。俺にはお前がいる。お前はきっと生きていくのに俺が必要だから、お前には俺がいる』

『……………』

『だがな、藤谷、お前は俺の、俺達の子供の藤谷だ。忘れんな、誰にも必要とされないのは本当に辛い、だから俺はお前と一緒にいる。忘れんな、俺とお前は繋がりを持って支え合っている。それが人間だ』

『難しいよ、僕は分かんないよ』

幼少の藤谷は更に俯いた。膝を抱えて座っていた藤谷は外界からの接触を断った。これ以上自分に外界は必要ないと思ったからだ。

『分かんないか、分かんないな。あーっ……………くそ、お前に何を教えてやればいいのか分かんない……………畜生、藤谷、辛かったら辛いで良い、俺は絶対にお前の味方だ。それだけでいい、それだけは覚えていてくれ』

喋り下手な親父が一生懸命自分の為に言葉を投げかけてくれた。藤谷は悔しかった。

あの頃の藤谷はまだ父親に遠慮していたし、裏側で人間として男として尊敬していた。この大事な言葉達をよく理解しないまま次の日に学校へ行った藤谷に転機が訪れた。

簡単な事だった、掃除の時間に机を動かせなかった女の子のかわりに机を動かしただけ。

それでもその子から貰った『ありがとう』が嬉しかった。今、自分が必要とされた。

その時に父親の事も思い出した。父親と自分は関係ない、父親は自分のせいでやりたいこともやれない、大変、沢山の言葉を聞いて少しずつ飲み込んで理解していった藤谷は、父親に『ありがとう』をあげたくなった。そして昨日の言葉をまた少しずつ理解していく。

人は、人が必要、僕の片手は自分に使う。空いた片手は誰かのために使う。

それが幼い藤谷の出した憧れの男の真似の結論だった。

「美々、俺にはお前が必要だ。美々には俺が必要かな？」

「愚問ね、愚問どころか今更なんの質問されてるのかしら私って感じ」

放課後教室、藤谷は夕日で真っ赤に照らされた美々を眺める。美しい。一言、美しいという言葉に終わる。この方が自分の恋人だというのだから、もう鼻高々じゃ済まない。

と、話が脱線した。

「俺さ、篠山に必要とされたいんだ」

がぶり。

「痛い痛い、痛い………一番は勿論美々だが、篠山は多分見失ってるんだ。誰かが自分を必要としてるって事、誰かを必要としないで無理矢理立ってるんだ。だから手を差し出したい」

がぶがぶ。

「勿論美々が一番、週末はデート、今晚は添い寝まで有り、分かった。分かった、ご飯はあーんで食べる」

ここまで言つてようやく美々の顎から解放された。学校というのも気にせずに襲い掛かつてくる美々の歯がここまで痛いとは。

「藤谷、私はかなり、かゝなり嫉妬してるわ。最近それが積もってきてる事を忘れないで、その内爆発するわ」

爆発？まさかと思うがそれが爆発したら……………？

「張り付くわ。四六時中、授業中以外の時間全て貴方に触れているわ」

ヤバイ、美々さん目がマジだ。もうマジどころか本気だ。

なんで想像しやすいんだ。寝るときも、食事のときも、お風呂さえ美々が傍にいるのが容易に想像出来るじゃないか。授業中だけは離れている彼女の愛だろう。しかし、授業中視線はきつと俺に向いている事だろう。

「藤谷、私は貴方が好き、今日だけ、今日だけだから。今日だけは我慢するから……………最近、なんか我慢してばかり……………」

美々の表情に愁いが浮かぶ。藤谷は感じた事のない痛みを受けた。困ってる篠山を助ける。そんなヒーローみたいな事を考えてる藤谷、それを悲しむ美々、藤谷には無理だった。

「やめる」

「え？」

藤谷は美々の手を握る。細くて、綺麗で、あんなに家事をこなしている手には思えない。

「やめる。俺は美々が一番だ。美々が泣いてるのにそれを無視できるかよ」

藤谷の行動理念の中心はとくに美々になっている。行動理念どころか、藤宮藤谷という男の人生の根幹が美々だ。

美々が悲しむ選択なんて取らない。取るわけない。

「ダメよ。私が好きになった藤谷は私のヒーローだもの。最後は私に帰ってくると信じてるから大丈夫。人助けしない藤谷は、藤谷じゃないもの」

流暢な日本語を常とする美々の言葉がたどたどしい。胸が痛い。

やめたかった。篠山の暗い顔が頭を過ぎるが、そんな事より、目の前の美々が、放っておけないおきたくない。

「美々が折角辛い選択してるんですからさっさと行ったらどうですか？」

振り返ると雛子に見下ろされていた。

見下ろされてるの、藤谷が座って雛子が立っているからだが、なんかちっこいイメージを受ける雛子に見下ろされるのもあれだな。

「美々は私が見てますから、さっさとしろ、です」

恐ろしく刺のある言葉。

元々雛子は辛辣な口調だが、最近はそこに愛があるのを感じ取れるようになってきていた。だが、今の雛子に愛はなく、刺百パーセントだ。

それもそうだ。自分でもなにやってんだろ、と思うこととして美々を傷付けなきゃいけない状況を態態自分で作り出し、自分も態態傷付いてんだから。雛子が怒るのも当然だ。

「分かった。行ってくる。後は頼むな」

雛子の頭をポンと叩いて藤谷は教室を出た。

「後悔してますか？」

雛子がそう問い掛けてくる。藤谷が退いた椅子に座り対面するようになってる。

「してるわ。前から随分我慢してたんだけどね。やっぱり私、藤谷の事どんどん好きになってるみたい、嫉妬なんて言葉じゃ表せないくらい汚いドロドロが頭の中にいる」

「それは……………今から私少し酷い事言います」

俯いていた美々は、その言葉に反応して雛子の顔を見る。いつも通りの無表情だが、今はそれに敵意を感じられた。

酷い事、簡単だ。藤谷の事に決まっている。藤宮雛子、と藤宮の名を名乗ってはいるが、藤谷への思いは本物だ。藤谷は鈍感だから彼女の思いが家族に向けられてるものと勘違いしてるが、彼女は本当に藤谷を好きでいる。

「私は藤谷が好きです。ご存知でしょうけど」

「ええ」

「でも、美々が一番藤谷を愛しています。そして、美々が一番藤谷に愛されている。

だから、その嫉妬は当然なんです、それくらい藤谷を好きじゃなきゃ私は貴女を許しません」

「それが酷い事？」

美々の顔が少し緩んだ。

なんだかんだ言って、雛子も藤谷と一緒にだ。

「本当はもう少し酷い事を言おうとしました……………でも、私は美々の事も好きです。この間は、センスがない私の洋服を選んでくれました。アイスと一緒に食べました。一緒に寝ました……………私は、美々も藤谷も皆好きなんです……………悔しいんです。好きなのに、好きだから、悔しい……………」

違うかな。藤谷に皆影響されてるんだ。きっと私も。

「ありがとう、私も貴方が大好きよ雛子」

「うう……………うあ……………」

雛子は声を出さないように泣いている。私は頭を撫でていたが、それだけでは気持ちが収まらず席を立てて彼女を抱きしめた。

本当、私も変わった。まさか、私が藤谷以外を好きになるなんて、でも、悪くない、うん、全然悪くない。

だが、美々にはまだ懸念してる事があった。自分と雛子と同じくらいに藤谷に好意を持った女の子がいる。藤谷に告白する前に藤谷の身辺を調べた時に知った事だ。だけど、彼女は動かなかった。動いた美々は結果を得た。それからどんな事が待ってるか、彼女がどう動くか、舞の存在よりずっと恐かった。でも、彼女は動かなかった。

それが余計に恐かった。藤谷がその彼女の元へ向かってしまった、本当に恐い。

ノリとか流れとか勢いとか、本当そういうのは恐ろしい。

あの後直ぐに倉科に電話し、色々と忠告を受けながら無理矢理篠山の家を聞いた。

そして、この門の前だ。木造で、門が開けば大人四人くらい横に並んで通れそうなくらい馬鹿でかい門。

「おや、家になにか御用でしょうか？」

ハツとなり振り返る藤谷、そこには小さな包みを手に下げた女性がいた。女性といっても髪は真っ白、腰は少しだけ曲がり、温厚そうな印象を受ける顔にはいくつもの皺が刻まれている。

「あつ、いえ、篠山……篠山蓮さんに用があつて！」

「蓮に？ 男性が？」

「え、ええ、テスト勉強をみてもらう約束がありまして……………」

実際冬休み前の期末テストが近い、美々も呆れ顔より、飽きた顔を乗り越し、諦めた顔で肩に手を乗せ『来年、後輩ね』と本気の目で言ってくる。もう冗談ではないらしい。

「それで、蓮さんが家に来いと？」

「い、いえ！ 皆俺……僕の勉強みるのに匙投げちゃって、篠山だけが諦めないでくれるからつい甘えちゃって」

……… すぎえ、こんなにスラスラ嘘が湧き出るなんて、藤宮藤谷史上初だよ。

小さな感動を藤谷が覚えていると、門の横、小さな戸が開いた。

「お、御祖母様！ 藤宮君は私が呼びました！ どうか、今日だけお許しを」

現れたのは和服の篠山蓮、酷く慌てた様子でお婆さんと藤谷の間に立った。

「全く、蓮さんは私をなんだと思ってるんですか？ そうやって友人を大切にするのは良いことです。貴女はもう御役目を果たさなくて良いんですから、普通に生きなさいと何度も」

「はい、分かりました！」

藤谷は慌てた篠山に手を引かれ門の内側の敷地へと入った。

……嘘だろ？なんだよこれ……

「藤宮君、なんで来たのかな？」

「……いや、それは……俺は……」

この異様な光景に全て吞まれてしまった。言葉も、考えも、体の自由さえ。

「馬鹿だなあ……… フジちゃんもみーみんな、馬鹿だよ」

「これは、何なんだよ」

その時藤谷は脳の処理出来るキャパを大きく超えて、もう何が何だか分からなくて、理解出来なさすぎた。

「ああ、コ・レ？ えへへ、大変だったんだ集めるの」

それを愛しそうに指先で撫でる篠山、藤谷の歯が意志とは関係なくガチガチと音を鳴らす。

「あれ？ 恐いの？ 恐くないよ。あたしはフジちゃん大好きだもん……… あっ、言っちゃった」

「ねえ、これ見てよ。この写真はフジちゃんがお弁当食べてるところだよ。隠し撮りだから角度悪いのが難点。このお弁当はみーみんなが作ったのじゃないね、みーみんなが来るより早起きしてフジちゃん……… うっん、藤谷君が作ったのかな？」

「コレはオススメだよ。体育のランニングの藤谷君、この時は夏だ

ったからね、薄着で藤谷君の体のラインがよく見えるよ。終わった後の汗の匂いはよかったなあ……………」

「それでこれは、海の時の写真！ これは楽しかったね。いっぱいあたしと喋ったもんね。ヒヒヤ」

「クフフ、これは、そうこれも、藤谷が寝てる時だ。藤谷は寝てる的可愛いよね。美々はこんなに可愛い顔を毎日のように見てるんだよね。本当、羨ましいなクヒュ」

「好き、寝てる藤谷君も走ってるフジちゃんも、良い匂いの藤谷も、皆私は……………あたしは大好きなの！」

「覚えてる？ 覚えてるよね。あたしと初めて会った日、初めて喋って触れ合った日を」

「あれは入学式の日、藤谷のお父さんが送れて入って来て『藤谷！ すまん、飛行機が遅くなった』って言ってそのまま来た感じの格好で、その時あたしは藤谷って誰だろうってね。それで俯いてる藤谷君を見付けたの、その時の顔がすごく可愛かったから覚えてるよ」

「それである日、藤谷君の性格じゃ覚えてないかな？ 美々さんの事も覚えてなかったみたいだから、くふふ、えひや、私が階段で転んだところを君が、助けてくれたんだ。あたしを抱きしめて、庇ってくれてさ。偶然だよな、運命かな、美々と全く一緒、同じ曜日、場所も一緒、特売があるからって君は行っちゃった」

「あの日だよ。あの日から私の二回目の人生が始まったの。この家でね『いない』って言われた蓮は藤谷のお陰で生き返れたの。あ

たしの名前、蓮っていうんだよ。変でしょ？ 蓮って男の名前だよ？ まあ、名前は自由だからアレだけど、あたしのお父さんとお母さんは生まれてすぐに死んじゃったの。二人が私につける筈だった名前を捨てて私は蓮になったの」

「あのばあさんが、篠山の血を絶やさないためにつて！ 私を男として、優秀な人間に育て上げたの！ それで高校入学前、血筋の男の子が生まれて、蓮はいらなくなったの！ だから階段から落ちた時、本当は死なないかなって思った。でも君が、藤谷が、私と同じ様に両親を亡くした寂しい男の子があたしを助けた。運命でしょ？ 運命だ、運命にちがいないって」

「本当は私の方が早かった。美々より先にあたしは藤谷を好きになったのに、美々は今藤谷君の彼女……………あたしは、我慢しようとしたのに、美々といるときの藤谷が幸せそうだから、諦めようとしたのに、なのに！ どうして君が来るのかな？ 関わるなって言ったのに、踏み込まないでほしかったのに、夏で止まった私の時間動かしているの！？ もう無理だよ、こんな近くで君の匂いが、感じた事ない温もりに手が届くのに我慢しろだなんて拷問だよ！ 私は――」

「ごめん」

何を言えば、何が言いたかったか、藤谷は分からなかった。ただ、自分の鈍感さや、考えの甘さ、人を助ければ良いと思う自分の未熟さ傲慢さがいけなかったんだ。それが今の彼女をつくってしまったんだ。

「なんで謝るのよ……………あたしは……………皆好きなの！ 嫌いになんてなりたくない！ なんで人を嫌わなきゃいけないの！？」

屋敷の中でも、庭の中にぽつんと立つ離れに住んでいるこの少女がどれだけ愛に餓えているか、どれだけ愛を誰かに与えたいか、窺い知る事は出来ないけど、藤谷は、

「俺、美々が好きなんだ。でも、家族だって友達だって、もちろん君だって好きなんだ。愛してる、の意味は違うけど、美々は特別だけど、こんな不器用に生きなくたって、君は十分魅力的な女性だ」

「……………あは、美々さんにもそんな言葉言つてあげればいいのに。喋り下手な藤谷君にしては及第点なセリフだよ。本当、なんで私は我慢したんだろ」

眼前にまで迫っていた顔をようやく篠山は離れた。

「好き、皆好き、篠山蓮はみーみんなも好きなんだ。あの子は綺麗だし、頭も良いし、運動も出来るし、フジちゃんにはちょっと勿体ないよね」

「それを言つなよ。ちょっと思ってるんだから」

「だから、私くらいがいいかなって、思っただけになあ……………でも、もうやめだね」

ちよつと胸に寂しさは残る。これからの彼女との関係は大きく変わるだろう。この部屋、藤谷の写真だらけの部屋は気味が悪いからこれだけはなんとかしてもらいたい。

「私、結婚するから」

「え？」

「結婚。あたしの存在の使い方、次は女ってとこかな？ 本当、報われない」

「なんだよそれ！」

「ほら、怒った。いらない世話だよ。もう、関係しないで」

これだ。彼女の陰はこれなんだ。いらない、とされた篠山は、女として必要とされた。ちよつと前の美々の事を思い出した。重なってしまった。

でも、いくら鈍感な藤谷でも、ここで手を差し出したらどうなるか、篠山がどう思うか、考えなくても分かることだった。

「藤谷君の写真は全部すっかり処分するわ。気持ち悪いもんね。藤谷君への気持ちも捨てる。だから、学校では友達、ね、フジちゃん」

……………駄目だ。

このままじゃ。

駄目なんだ。

「駄目だ。俺は、お前が結婚したそうには見えないよ」

「したくないに決まってるじゃん。したい相手じゃないし、お医者様かなんかは知らないけど八も年上、あたしの事を見る視線は気持ち悪いし、あつ、別にフジちゃんの同情を誘ってるわけじゃないよ

「？」

「でも、嫌なんだ。俺は――」

「やめなよ。大人になろうよ。あたしだってなったよ。君を諦めて、蓮を受け入れた。だから、もうやめよ？」

正しい。彼女は正しい。藤谷の下らない感情論だ。彼女の事を責任持てない子供で、彼女の事を愛せない藤谷じゃ、彼女の責任は負えない。その下らない感情論で救われ、それを支柱に生きてきた藤谷、彼女は絶対に救えない人だ。

いや、違う。藤谷の両手はもう一杯なんだ。幸せなんだ。藤谷は初めて気付いた。人を助けるのは幸せじゃ出来ない部分がある。不幸せ同士が身を寄せ合って、幸せになろうと手を取り合う人助けの形がある。藤谷にはそれが出来ない。藤谷は余裕がある分でしか、もう人を助けられない。

それが寂しいような、正しいような、悔しいような、でも後ろ向きじゃない、言い表せない感情にぶつかった。

「藤谷君、君が大好きな私の最後のプレゼントだ。絶対に救えない人、君が現実を知り、大人になるための人間になつてあげるよ、ごめんね、嫌味っぽくなっちゃったね。あげるよ、じゃなくなっちゃうね」

「……………いや、だから」

「やめなよ。もう言わないよ」

責任、現実、事実、力量、器量、色んな言葉が藤谷を抑制する。彼女は大人だ。彼女は正しい。彼女は、寂しい。

「俺は、嫌だ。下らないよ、しょうもないよ、ちっぽけだ。でも、蓮が傷付いてるのに、そんなの嫌だ」

言い切るか切らないか、首を掴まれた。両手で、力強く、呼吸が苦しくなる。

「もうやめましょ。蓮なんて、名前で呼ぶなんて、どれだけ残酷か分かってるのかしら？ 藤宮君は幸せ、私だって幸せになれるんです。お金もあるし………それぐらいしか今は思いつかないけど、いつか心だって満たします。結局、今を先送りにしたって、アナタじゃなければ同じ事なんですよ」

「でも——」

快音。

最初はそう感じた。彼女の右手がぶれた瞬間に鳴った音、自分の頬を叩かれるとこんな良い音するんだ、と客観視してる自分もいる。

無意識に頬を手で押さえた。

「もういい加減にしてよ！ 美々も藤谷も！ 私は、私なんだから！ 好きに生きたっていいじゃない！」

「好きに生きてるのか？ 俺、覚悟するから、差し延べた手は、戻さないから」

「そうやって私の覚悟を潰さないで、藤谷君が好きで、大好きで、好きで好きで好きで、好きで………しょうがないんだから私は………」

篠山が藤谷の胸に縋り付こうとする。しかし、篠山は泣き顔で後退り顔を押さえて崩れた。

「出てってよ！ もう何もしないから！ もう何もしてほしくないから！ 友達だから、美々だって好きだから！」

藤谷は、唇を強く噛んでその離れを後にした。

敗北、なんだろうか。

悔しい、無力さばかり痛感する。痛みを伴わなければ、こんな簡単な事に気付かなかった。自分が幸せであるが故の力不足、嬉しいのに、悔しい。

「藤谷！」

まただ、美々は待っていてくれた。帰り道、家の付近で待っていてくれた。胸にいる美々の温もりだけか確かで、藤谷はそれに縋るしかな

くて思い切り抱きしめる。

「ごめん、俺駄目だったよ……………ヒーローは難しいや」

「うん、うん」

「俺、半端だな。美々の事は半端でいたくないのに、こんな両手だけじゃ足りないよ」

「うん、良いんだよ。足りなかったら、私の手も使っていから」

「俺——」

弱音しか言わない口を美々の口で塞がれた。

「馬鹿ね。藤谷は格好良いわ。私との相性も抜群。だけど貴方は神様じゃない、ましてやなんでも出来る大人でもない。貴方の手、我が儘言えば私とだけ繋いでいてほしい。でも、救えるだけ、どう救うか、どれだけ力を渡せるか、しっかりと覚えておいて。きっと篠山さんにも貴方の思いは伝わったわ」

「俺は……………」

もう駄目だった。我慢出来なかった。情けないと分かってる。格好悪いと分かってる。しかし、堰を切った涙はもう止められなかった。

本当、いつになったら美々に釣り合えるのか。

「好きだ……………俺、美々が」

「知ってるわ。私も貴方が好きよ」

あやすように慰める美々の声がとても心地好かった。

「お節介さんその一どうも」

「あら、貴方も本性で話すと嫌味とか言えるのね」

「本性で話すと甘えてニヤンニヤン言っちゃう女の子よりは格好良いですよ」

「あら、大好きで信頼できる旦那様の前だものそれぐらい」

私は放課後に屋上呼び出された。相手はもちろん篠山蓮。いつもの無邪気さはなく、そこには邪気たつぷりの年相応の少女がいる。触発されてか私も少し口が悪い気がする。

「私、結婚やめたわ。家にまで来たお節介さんその三にも言つて」

「その二は……………ああ、倉科さんね」

「そうよ、アナタを安心させたくて一番に言ったの。そしたらやめる、だなんて、私の気持ち知ってるくせにそんなことして。おちよくってるのかと思っただわ」

「私だって旦那様に影響されて、よ」

全て篠山さんが言った通り、でも、篠山さんを動かしたのは紛れもなく。

「後、これ、私のコレクションの半分」

渡されたのは紙袋、中を覗けば、

「まだ半分持ってるのね」

「あげませんよ。私、藤宮君がまだ好きですもの。もしもの時は知りませんからね」

そう言って笑った彼女は、正直恐くなるくらい可愛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3153i/>

理解不能な彼女の純愛

2010年12月15日19時05分発行